

ポケデレ～不思議な生物とシンデレラガールズの日常～

葉隠 紅葉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ポケットモンスター

それは謎を秘めた不思議な生き物。

これは別の時空にいるはずの彼らが、ふとした事をきっかけに別世界へと訪れたお話。彼らがアイドル達と出会い、どのような体験をしていくのか。その日常を描く物語でもある。

【アイドルになる過去の話】

【アイドルとなった以降の話】

目次

第1章

【prologue 島村卯月とタマゴ】	1
【星輝子と未知の親友】	4
多田李衣菜と前川みくの日常	10
前川みくと猫カフェ	13
浜口あやめと虫ポケモン	17
【大原みちるとゴクリン】	20
【大原みちるとゴクリン2】	24

第2章

【渋谷凖と植物型ポケモン】	27
【渋谷凖と植物型ポケモン2】	32
城ヶ崎莉嘉のテレビ鑑賞	35
アナスタシアと氷ポケモン	39
アナスタシアと氷ポケモン2	43
【白坂小梅とジュペッタ】	48
【白坂小梅とジュペッタ2】	53
青木慶とマンキー	59

第3章

遊佐こずえとヤドン	63
神谷奈緒と捨てられた野良ポケモン	66
小日向美穂と白坂小梅	71
高垣楓と喫茶店	77
神谷奈緒と捨てられた野良ポケモン2	80
神谷奈緒と捨てられた野良ポケモン3	87

遊佐こずえとヤドン2

93

第4章

【星輝子とパラスと商店街】

97

【緒方智絵里と大切な友達】

103

【池袋晶葉とはがねタイプ】

110

渋谷凜と本田未央と島村卯月

114

【久川姉妹とカモネギ】

125

【島村卯月とタマゴ2】

133

神谷奈緒とライセンス制度

137

第5章

【黒崎ちとせと新しいペット】

145

多田李衣菜とポツチャマ

153

【黒崎ちとせと新しいペット2】

160

早坂美玲と悪タイプ

166

島村卯月と神谷奈緒とノーマルポケモン

175

島村卯月と神谷奈緒とノーマルポケモン2

183

二宮飛鳥と美玲とクロイツ

188

前川みくと和久井留美

195

第6章 前川みくとパートナー

的場梨沙と結城晴とメタグロス

201

アナスタシアと氷ポケモン3

208

みくとパートナー

212

みくとパートナー2

216

みくとパートナー3

219

【ギフトッドとポケモン】

223

池袋晶葉と電気タイプ同好会

エピソード 前川みく

第7章

櫻井桃華

前川みくと役所申請

【姫川友紀とサンド】

三人のアイドルとイーブイカフェ

【姫川友紀と朝の目覚め】

【川島瑞樹と地方テレビ局】

【星輝子と台風】

モンスターボールとアイドル

第8章

【久川颯とカモネギ】

神谷奈緒と冬將軍

神谷奈緒と冬將軍2

タイプ改定

タイプ改定2

プロデューサーとゴーストタイプ

プロデューサーとゴーストタイプII

【ガーディと少年】

星輝子とキャタピー

堀裕子とポケモンハント

最終話（前）

最終話（後）

318

314

305

298

294

291

288

284

280

278

274

270

266

262

258

255

252

248

244

242

236

228

第1章

【Prologue 島村卯月とタマゴ】

それは不思議な卵であった。島村卯月はその可愛らしい瞳を真ん丸に見開いてその物体に見入る。一体これは何なのだろう、幼い彼女は目前のそれを理解する事が出来ないでいた。穏やかに照りつける初春の日差しの元、一人の少女は深い眼差しでそれを見つめた。

大きさは40cm程度、全体が硬い殻で覆われたそれは彼女が見たこともない姿をした卵であった。所々に緑色の斑点のような物があつたのだ。卵自体は彼女もよく知っている。だが、スーパーで見かける卵は白いしもつと小さなものばかりだ。

その卵はあまりにも大きかった。小学5年生である自身にとつては顔よりも大きなその卵。小学校からの帰り道で見付けたその宝物に卯月は再度視線を送る。自身のランドセルをぎゅつと握ってそのナニカを詳しく観察し始めた。

「なんだろうこれ……タマゴだよな？」

ランドセルを背負った彼女は、しゃがみこんでその卵をつつく。そつと指先に伝わるその反応は、生物が持つ独特の温かみを卯月に伝えた。小さな手のひらを外殻に押し付ける。彼女はその卵の中身について考えてみた。

「テレビで見た事あるのよりおっきいなあ……」

過去にママと動物園へ出かけた時の事を思い出す。手を引かれ、色々なコーナーを周りながら、ゾウやキリンといった大きな動物をほしやいで見たものだ。その時に連れられた鳥類コーナーで独特な卵をいくつも見て驚いた事を彼女は覚えていた。

だがその時に見た動物の卵より、それはずっと大きなサイズをしていた。確かテレビで見たことがある、ダチョウの卵は世界で一番大きいらしい。ならばこれはダチョウの卵なのだろうか、と。

無論ダチョウの卵はこれほど大きくなどない。精々が20cm未

満程度であり、決してこれほど巨大で硬い外殻にも覆われてはいないのだ。しかし小学生である彼女が無知であった事はある意味仕方のない事なのかもしれない。

穏やかな春の日差し、桜が舞い散る下校の途中。普段通り慣れたその道筋で少女はそつと息を飲んだ。日常の中に訪れた非日常的な十二カ。少女はドキドキと自身の鼓動が高まっっていくのを感じる。

そつとお腹に抱えてみる。その小さなお腹にずしりと乗りかかる生命の重み。温かい鼓動のようなもの、生命が持つ力強い脈動を彼女は感じた。フリルのスカートの上で脈動するその卵を撫でながら彼女はほつりと呟いた。

「温かい……」

卵を抱えながら出た言葉はあまりに普遍的な言葉だった。周囲をキョロキョロと見渡してみる。ここは河川敷の橋下。当然周囲には人や民家なども存在しなかった。生い茂った草むらに隠れるように放置されていたそれを、下校途中の卯月が見付けたのだ。少しの間お腹に抱えた卵を見つめる少女。

「……えいつ！」

気が付けば卵を抱えたまま歩き出していた。他人から隠すようにして、ずんずんと自宅への道を辿っていく。キョロキョロと不安気に周囲を見渡す彼女。だが、その足取りはしっかりとて決意に溢れたものであった。

誰かの物かもしれない

そもそも何かもわからない

卵を抱えた所で育てようもない

大人ならば戸惑ってしまうだろう、そんな思考も小学生である彼女には思い付きもしなかった。額に汗を浮かべながら、その重い卵を運んでいく彼女。

可哀想だと思つたのだ

風に吹かれて捨てられたように放置されていたこの卵。このまま誰かに見付けられもしないまま一人で過ごすのはあんまりだと彼女は思つたのだ。同情というよりは慈愛に近いのかもしれない。ただこの卵を守りたいと、そう思つただけなのだから。

普段歩き慣れた帰路を駆け足で行く。まるでいけない事をしてしまったかのような言いような罪悪感をチクリと感じた。けれども足は止まらなかつた。それと同時に、彼女が好奇心を抱えていたのもまた事実だつたから。

もしもこのタマゴが孵つたら

もしもこの子と出会えたなら

「お友達になれるかも……っ！」

ギョツと抱きしめた卵に対して語りかける卯月。その表情は笑顔であつた。見る者を幸福にさせるような満面の笑みを浮かべて、彼女はスキップをしながら帰っていく。宿題をたんまりと詰め込んだ筈のランドセルの重さも、いつの間にか気にならなくなつていた。それは暖かい春の出来事であつた。

こうして彼女は生涯の友であり家族と呼べる存在に出会つたのである

ポケットモンスター。それは謎を秘めた不思議な生き物。これは別の世界にいる筈の彼らが、ふとした事をきっかけに別世界へと訪れるお話。彼らがアイドル達と出会い、どのような体験をしていくのか。その日常を描く物語でもある。

【星輝子と未知の親友】

星輝子はぼっちの子である。少なくとも自身はそう思っている。二年前に買って貰ったばかりの赤いランドセルをギョツと握りしめる。彼女はとぼとぼとした足取りでゆったりと帰路についていた。

「きのこーのこのこ……おさんぽきのこー」

輝子は歩いていった。灰色でつやつやとした髪を持つ彼女。けれど彼女は自身の目元を隠すようにしてその髪を伸ばしていた。衣服も体も、少女としておしやれを楽しもうという気概が感じられない。きっと彼女自身もあまりそういったことに関心を持ってはいなかったからだろう。

歌を口ずさむ彼女。放課後とは彼女にとって穏やかな時間であった。図書館で大好きなキノコの本を読んだり外へ出てキノコを探す毎日。だが、誰かと遊ぶという事をあまり彼女は好まなかった。同世代の子にはいまいち馴染めなかったからだ。

テレビがどうだ洋服がどうだと話に花を咲かせる少女達の間で、キノコについて語るような自身は確かに浮いた存在なのだろう。小学二年生にしてどこか冷めたような、そんな感覚を持ってしまったのも無理はない。

ただでさえ内向的な性格がもっと内気になってしまった彼女。そんな彼女は今日もまたボーと上の空な態度で授業を受け、放課後というこの時間を迎えるのであった。何も代わり映えのしない毎日、退屈な日常。

だが、ここ最近はその変わってきていた。それまではどこか空虚な時間を感じていた、この放課後の時間が、彼女にとって何よりも楽しい時間へと変わりつつあったのだ。

年相応の少女のように、はしゃぐその足取り。目元を覆ったその髪の間から滲み出すようにして、彼女の滅多に見られない笑顔が映えた。スニーカーで駆け足のまま目指して行く。そうして目的地である公園までやってきた。

「フヒツ……や、やつと着いた……」

座り込んで呼吸を整える星輝子。どうやら若い彼女にとって、かなり困難な道のりだったらしい。

地方の住宅地から離れたこの公園には、大きな森が隣接していた。広さは20ヘクタール。サッカーコートが幾つも入るようなこの森林公園は福島県で有数の自然地帯でもあった。大きな噴水、どこかの芸術家の彫刻といったものが自然の中にぽつんと立ち人々を見守っている。

公園の入り口に設けられた水飲み場から水を飲む彼女。そうしてごくごくと喉を鳴らしながら通い慣れたその公園を改めて見渡す。そうして彼女はさらに歩みを進める。10分ほど歩いたのち公園のクマをかたどった石像、その足元にしゃがみ込む。

「フヒ……ここでもいいかな……?」

周囲をきよろきよろと見渡す彼女。誰かに見られていないかと不安気に周囲を見回す。どうやら誰も見付からなかったらしい。彼女は公園の茂みに顔を突っ込むと、その周囲にいるであろう、自身の友達を探し始めた。

つい1週間ほど前に出会った大切な友達。生い茂る自然に服が汚れるのも気にせず、彼女は四つん這いになって友達を探す。やがてその生物を見付ける彼女。彼女の視線の先にはのそのそと動くナニカが居た。

「い、いた……よかった……」

それは人ではなかった。否、地球上の生物ですらなかった。何かに似ているといえばきつと虫に似ているのだろう。だがこんなに大きな虫がいるはずがない。

橙色をしたその生物は大きな瞳に巨大なハサミを持っていた。口はガシガシと左右に開きまるで異星のエイリアンのようで不気味さすら感じさせる。だが、その大きくてつぶらな瞳は可愛いと言えないこともなかった。その生物は自身を探しに来た彼女を見付けると嬉しそうに鳴きながら近寄って来た。

「も、持ってきてあげたぞ……親友」

懐から【富士山の恵み】と書かれた高級ミネラルウォーターを取り出す彼女。そうして彼女は眼前にのそのそと現れたその一匹を改めて見つめる。

「パラ〜」

それはキノコのような生物であった。全長は30cm前後、まるで虫のような外殻にカニのような大きな爪を持っていた。何よりも目を引くのはその頭部だろう。そこには赤く立派なキノコが二つ付いていたのだ。

赤くて立派な外見にぽつりぽつりと浮かぶ白い斑点。まるで毒キノコのような外見であった。しかしキノコに対する愛と知識は大人にだって負けないであろうキノコマニアである輝子自身が見たこともないキノコであった。

「最高級の水だぞ……コンビニのやつだけど……」

「パラ！パラ〜」

「フヒッ……親友に喜んでもらえて私も嬉しい……」

ランドセルからペット用の水皿を取り出した輝子はその器に水を満たした。ドボドボと注がれていくミネラルウォーターにその生物、パラスは全身で喜びを露わにする。大きなハサミを振り上げてはしゃぐ生物。

彼女から貰った水に口を付けて、ごくごくと飲み始めるパラス。実に美味しそうに水を堪能する親友の姿を見て輝子もまた笑みを浮かべた。

出会いは偶然であった。山の近隣に設置された公園でキノコを探していた彼女は未知のキノコを発見したのだ。それまで見たこともないキノコを見付けた彼女、逸る気持ちを抑えて、その茂みに飛び込み……そうしてこの生物と出会ったのだ。

『うぎやああああああああ?!?!?』

少女らしからぬ悲鳴、それも無理はないだろう。何せ茂みの中にいたのは、それまで見たこともない生物だったのだから。見た目は虫のようだが、その生物はあまりにも大きすぎた。30cmもの巨大虫が自身の顔面の前に突如現れれば誰だってこのような悲鳴を上げてしまうだろう。

だが、意外にもその悲鳴に誰よりも怯えたのはその生物の方であった。彼女の悲鳴に怯えて全力で後ずさる巨大虫。それを見て輝子は思わず謝ってしまう。

「ご、ごめん……ちよつと驚いただけなんだ」

怯えた表情をするその生物に対して、輝子は思わず謝罪の言葉を述べてしまう。木の陰からこちらを覗くその生物を見る。よく見るとその生物は可愛い顔をしていた。くりくりとした瞳と小柄な体を精一杯伸ばして、必死でこちらを威嚇していたのだ。

「か、かわいい……」

つぶらな瞳を浮かべてこちらを見上げる姿。上目遣いでこちらを見るその姿が少女としての琴線に触れる。何より見たこともないキノコという事実が輝子の恐怖を和らげ、好奇心を刺激したのであった。自身の感情が高ぶっていくのを感じる輝子。

触ってみたい

気がつくとは彼女は歩み出していた。ゆったりおずおずとしながらも、一歩一歩亀のようになつかりと歩んでいく。腰を低くして怯えさせないようにしながら歩く彼女。そんな彼女に対してその生物もまた同じような反応を返した。

おずおずとしながら、こちらににじみよる生物に対して星輝子もまたゆつくりと歩み寄る。そうして自身の手と、かの生物の伸びた爪とが……やがて一つに重ね合わされた。まるで某宇宙映画に出てくる握手のような、劇的な瞬間。

ぴとりと触れ合った瞬間、言いようのない感覚に震えた輝子。まるで難解なパズルが一瞬で組み合わさったような感覚。きつと相性がこの上なく良かったのだろう。一人と一匹は互いに頷き、この感動を味わったのだ。

「お、おお……ふおお……」

「パ、パラ……？」

「あ、うん……星輝子です」

「パラー」

ふと思いい出したように行う自己紹介。何とも言えない微妙なコミュニケーションを取ってしまう彼女。だが、そんな彼女に対してその生物、パラスはにっこりとしながら手を振って喜びを表現していた。

きつとそんな些細な事がきつかけになったのだろう。ふとしたことから、こうして一人と一匹は交友を深めるようになったのだ。放課後にお菓子や飲み物を持ってきて一緒に時間を過ごす。そんな誰しもが行うような当たり前で温かい時間を。

「フヒ……お、おいしいか親友？」

「パラパラー」

「気にしなくて良いぞ……お小遣いから出しただけだから」

「パラ〜」

「フヒ……親友はいいやつだな……」

どうやら水を持ってきたことを氣遣ったようだ。瞳を困らせて大丈夫かと言わんばかりにこちらを見上げてくる彼（彼女？）に星輝子は返答を行う。会話が行えるだけの知性があるのかもしれない、と気が付いたのはつい数日前のことである。

彼のことを親友と呼ぶのに時間はかからなかった。それだけ親しみを持てる存在であることもよく知っている。だが、気がかりなことがあるのもまた事実であった。

見たこともない巨大な生物が知性を持っているのだ。もしも誰かに知られたら良くない事が起こるだろう。幼い自身でもその事が簡単に予想できた。

そもそも親友は何者なんだろう。もしかして親友は宇宙人なのかも、だなんて事を考えてしまう輝子。自身もまたペットボトルに口を付け思考を深めていく。

家族や大人の人に見つかったらまずいだろうなあ、だなんて事を考える。とはいえ、彼女はかの親友が危険な生物にはどうしても思えなかった。木々に囲まれたその二人の空間に、照りつくような夏の日差しが降り注ぐ。そんな彼女の膝上に、かの生物がのそのそと這い上がって来た。

「し、親友……？？」

星輝子の言葉に返事もせずパラスは少女の膝の上に座る。そうして膝のぽつかりと空いた空間に綺麗に収まるパラス。ふふんと言わんばかりに達成感に満ちた声をあげる親友に、星輝子は心からの笑みを浮かべた。膝の上にいる生物の温かみを全身で感じる。

「あ、あったかい……」

「パラ？」

「うん、もうちよつとだけ……このままで」

自身の膝に抱きかかえる。まるでぬいぐるみを抱くようにして、その小柄な生物を抱きしめる星輝子。キノコの独特の香りに包まれないがら彼女は幸福な気持ちに浸る。

親友は何者かよくわからない

けどまあ良いか

そうして彼女は日向ぼっこをする。数ヶ月前には感じることもできなかつた温かなぬくもり。その確かなぬくもりに抱かれながら彼女は午後の眠りに落ちる。これは自身がアイドルとなる以前の記憶。大切な親友との温かい記憶であった。

多田李衣菜と前川みくの日常

『ご覧下さいー！ここ天川リゾートホテルでは多くの水ポケモン達が楽しそうに水浴びをしています。ではこのホテルの職員の方にお話をー』

テレビから音が聞こえる。その小さな画面の向こう側で中東の宮殿をイメージしたリゾートホテルが立派に鎮座していた。そのふもとに広がる巨大な湖では多くの人間達やポケモン達が楽しそうにはしゃいでいる。ワンルールの空間に楽しげな男女の声が響いた。

テレビを食い入るように見つめる一人のアイドルがいた。彼女は食事の最中の箸を止めその画面を食い入るように見つめている。そんな行儀の悪い彼女を、もう一人の少女がじととした瞳で咎めるように見つめていた。

『可愛いポケモン達ですねー！みなさん旅館に泊りにきた観光客のようです。では詳しいお話を伺いましょう！』

画面の中でおも中継を行う美人レポーター。彼女はそのホテルに泊まりにきた人間達にインタビューを行っていた。楽しげな様子の集団へと声をかける。10年前の異変の際には決してみられなかった光景がそこにはあった。

水着を着た若い女性がトサキントと共に優雅に泳いでいる。またその側では小麦色に焼けた逞しい男性がワニノコとビーチバレーを楽しんで居た。他にもカニのような存在が水をかけあっていたり大きな羽を持つペリカンもどきが日向ぼっこをしていたるのであった。とにかく見るものに爽快さと楽しさを伝えてくる映像なのであった。『このリゾートホテルでは10年前のポケモン大異変の際にいち早くポケモンとの共存を主張したS県が主体となつてー』

画面の中かから美人レポーターがはつらつとレポートを行なつて居た。その姿について目を奪われてしまう。なによりも水着を着た彼女が羨ましいのだ。こうしてレッスンを終えたばかりで汗を拭いただけの彼女達に取つてそれはあまりに刺激的な光景でもありー

『という訳で以上現場からリポートでしたー!』

「いいなー私もポケモン飼いたいなー」

「……」

「いいなあーいいーいなー」

「あーもううるさいにやああ!!」

ポケモンを飼いたいと駄々をこねる美少女、多田李衣菜。そんな彼女に対してこれまた可愛らしい美少女、前川みくは声を張り上げたのであった。鬱陶しいと言わんばかりの声に思わずびくりと身をすくめてしまう李衣菜。

「な、なにさちよつと良いかなーって言っただけじゃん!」

「もう何十回も同じ事を聞いているの! いい加減しつこいにや!」

「なあ!? そ、そんなことないし!」

狭い部屋の中で口論する二人のアイドル。ガーガーと回る扇風機が、この346プロダクションの女子寮ワンルームを冷やしていた。けれど関係ないと言わんばかりの美少女二人。互いに向かい合って行っていた食事の手を止める。そうして口論はさらに白熱していく。「何回も言ってるじゃん! ポケモンがいれば仕事にもつながるんじゃないかなーってさー!」

「この狭い部屋でどうやって飼う気にや! そもそもペット感覚で飼うものじゃないでしょ!」

互いに顔を突き合わせて口論する二人。どうやら李衣菜としてはポケモンを持っていた方がアイドルとしての仕事につながると主張しているようだ。結成したばかりのアイドルユニット「アスタリスク」をポケモンを連れたアイドルグループにしたいらしい。一方みくは育成費・手間、なにより育成する場所がないとのことで断固反対をしていた。

10年前の大異変によってこの世界の常識はがらりと変わっていた。ポケモンたちとの共存を行い、より充実した日々を送れるようになったのである。人間社会の一部はすでにポケモンとの共存関係を紡いでいた。

介護施設でお年寄りや認知症患者の相手をするノーマルポケモン
漁業の場では漁師の協力を行ってくれる水ポケモン

交通渋滞といった問題の劇的改善にてを貸してくれたひこうポケモンなど

例をあげればきりがないほど、ポケモン達は人々の暮らしに馴染んでしまっていたのだ。10年前の大異変、人間達のこの世の終わりか
と見まごう程のパニックやら暴動やらが起こっていた事を考えると
奇跡のような状況でもあった。

次々と発見される未知の生物や不可思議な災害に政府各国は大混
乱の極みに陥った。なんとかして法整備を整え社会の混乱が収まる
ようになるにはかなりの年月がかかったものだ。あれから十年、人々
はようやくこの現状になれつつあったのだ。

しかし人間の適応力とは凄まじいものである。彼女達のように年
若いものならばなおさらだ。現に今では、ポケモンと共にアイドル活
動を行うものだって多くいるのである。ここ346プロダクション
でもまたポケモンを連れたアイドルの光景がよく見られた。時代は
また大きく変化しつつあった。

「だからどうせ飼うならドラゴンとかロックだつて」

「どこで飼う気にああああ!?!」

このようにポケモン達の存在は大きくなっていった。が、必ずしも必
要なものではなかったし、また簡単に飼えるようなものでないことも
確かであった。

少なくとも、アイドルとして未熟な彼女達アスタリスクではポケモ
ンを飼えそうにはなかった。そうなるまではもう少し時間のかかる
話のようである。

前川みくと猫カフェ

「お疲れさまでしたー」

「お疲れ様でしたにゃ！」

汗をうかばせながら挨拶をする二人。そんなアイドルの言葉に顔をほころばせながらその店のマネージャーもまた返答をした。どうやらこの日の地方イベントは成功したようだ。前川みくは充実感を感しながらスタッフと談笑を交わすのであった。

この日は地方で行われたキャンディーのPRイベントに出かけていたのだ。「ミラクル抹茶ストロベリー極み味」という正直どうなんだろうと思わずにはいられない味のキャンディーを全力でPRした前川みく達。午後三時間を外で立ち続けた彼女達は全身に大きな汗を幾つも浮かばせていた。

その後待合室に入る二人。冷房のきいた部屋でクーラーのありがたみを全身から感じつつみくは自身のカバンからタオルを取り出した。猫がプリントされた可愛らしいタオル。そのタオルで汗をぬぐいながら相方である多田李衣菜と他愛もない雑談を行っていた。

「ねえこの後どうする？」

「どうって？」

「時間が余ったじゃん、この後どこか行こうよ！」

「うーん…そうだね、たまには良いかも」

「やったあ！」

笑顔で花柄のタオルを振り回す李衣菜。空き時間ができて嬉しいのだろう。はじけるような笑顔で荷物をバッグへとしまう彼女を見ながらみくはロックとは一体なんなのだろうと思案した。10分後彼女達はそろって神奈川駅の地方線のとある電車へと乗車していた。

どこへいこうかと尋ねる李衣菜に対してみくは突如はっと声をあげた。スマートフォンでとある店を調べる彼女。その後しづる相方をひっぱって彼女はとある店へと向かうのであった。

「はああああん、やっぱりかわいいにやあ〜」

蕩けるような甘い声をだすみく。その表情は心底から喜びをあらわにしていた。自身の目前でごろにやんとまたたび棒に顔をこすりつける猫を眺める彼女。そんな彼女に対して李衣菜はぶーと不満げな顔で文句を言った。

「せっかくできた空き時間に猫カフェー…?」

「い、いいでしょーかわいいんだから」

「せっかく神奈川まで来たのにさ…ここからなら中華街とか港公園だつて行けたんだよ?」

「この猫カフェは雑誌にものつてた有名なところなの!」

「私が言うまで忘れてた癖に…」

不満げな表情を崩さない李衣菜。しかし膝元にやってきた猫を眺めるとつい口元が緩んでしまうようだ。優しく胴体を撫でてやると甘えるように声を出す黒猫に対してえへへと彼女もまた笑い始めた。

ビルの中に設けられたカフェにたむろする7匹の猫達。黒猫や灰猫、ロシアンブルーやマンチカンといった実に様々な種族の彼ら。彼らはみながあくびを交えながらまったりと生を謳歌していた。おもいおもいに寛ぐ猫達の姿を眺めながらみくはにっこりと笑みを深めるのであった。

「なんだかんだ言つて李衣菜ちゃんも猫好きにや…でもまあやっぱり猫は最高にや」

カフェに入室する際に購入したアイスコーヒーをぐくぐくと飲む彼女。その氷が詰まったコップを傾けながらふと窓の外を眺める。3Fに設置されたその猫カフェの窓からは飛行タイプのポケモン達が何匹か飛んでいるのが見えた。

「……………」

眉をひそめてそれを眺める。確かあれはポツポといったか。テレビのニュースで見たことがある。鋭い嘴にとがった爪をもったその生物が空を闊歩する様を見てみるとしては複雑な表情でそれを眺めざるを得なかった、ため息をつきながらそのポツポを眺めた。

「やっぱりポケモンって怖いにや…」

ふと漏れ出す言葉。それはふと出た少女の本心からの言葉であった。ポケモンとは実に様々な種類がいる。体が大きなもの、小さなもの。岩のように硬い皮膚をもっていたりあるいは数十センチ程度の可愛らしいぬいぐるみのようなものもいる。

だがそのどれもが皆恐ろしい技を用いるというのだから溜まったものではない。口から粘液を飛ばしたり高速で移動したりと無茶苦茶な事を平気でしかす存在なのである。その多くが突如姿をかえる「進化」と呼ばれる現象を起こすのも、彼女の不安を強める要因の一つであった。みくは思わずぶるりと体が震えるのを止められなかった。

「みんなどうかしてるにゃ…ポケモンなんて怖いだけにゃ…」

10年前の大災害から大きく変わった現代社会。ポケモン達と否が応にも共存しなければならぬというのは彼女にもよくわかっていた。漁師は海の中では彼らを相棒同然に頼るし、病氣や怪我といったものも彼らが提供した技術や薬によってこの上なく進歩した。間違ひなく人間は彼らが出現する以前よりも格段に進歩することができたのだろう。不幸になる人間よりも多くの人間が幸福になったとも思われる。

だからこそ考えてしまうのだ

もしもそれが自身に向けられれば

もしもポケモンが人間を攻撃し始めたらと

そこまで考えて自身が不毛な事を考えているなど気がつき思わず苦笑してしまうみく。彼女はそこで思考を断ち切ると目前の不安を追い払うように頭をぶんぶんと降るのであった。

「悩むのはやめにゃ！今は猫ちゃん達と一緒に楽しもつと」

「んーみくちゃん？今、何か言ったー？」

「なんも言っていないにゃー！」

そうして再び猫に対して視線とスマートフォンを向けるみく。世界とかポケモンがどうなるうともやはり猫の可愛らしさとは不変の

ものであるらしい。改めて自身の信念に対して強く頷く彼女。そう
してみくは再度猫カフェという極上の天国を味わうのであった。

浜口あやめと虫ポケモン

「イトマルーお風呂上がりのご馳走ですよ！」

「イトー！」

ヘアドライヤーを用意しながら自らの相棒を見据える浜口あやめ。共に風呂につかった後の彼は窓際で夜風に当たるのを何よりも好んでいるのであった。どく・むしタイプのパokemon、イトマルは開いた窓の隙間から夜月を見上げるのをやめて彼女の元へとトコトコと歩むのであった。

それはかなり大きなクモ型ポケモンであった。全長は50cmで頭部と胴体をくつつけた姿をしていた。薄い緑色をした彼は頭部につんとのびた立派なツノを有していた。かなり…いや凄く人を選ぶ姿をしていると言っても良いだろう。

その彼は6本の足を器用に使いあやめの足元まで這い寄ってきた。大きな蜘蛛が床を這い回るといふ光景に対して彼女は一切動じることはない。彼女にとってはごくごく見慣れた日常的な風景なのだから。

「はい、お風呂上がりのコーヒー牛乳！」

「イトー！」

ありがとうと伝えてくる自身の相棒に対してにこりと微笑むあやめ。膝の上にかけてよって全身を預けてくる彼を抱きしめながら彼女は心地の良い感触に浸る。

ふさふさとした触覚毛の奥にはぷにぷにとした柔らかい皮膚がある事はあまり知られていない彼女だけの知識なのであった。全身からその独特の感触を肌を通して味わっていく彼女。アイドルとしての仕事の疲れが徐々に溶けていくのを感じる。ぷるぷると風呂上がりの髪を震わせながら彼女はため息をついた。

「ふう〜癒しの時間です…」

目をとろんとさせながら無意識的に相棒をなでるあやめ。どうかした？と言わんばかりに上目遣いでこちらをみるイトマルに対して

あやめはなんでもないですよと微笑とともに伝えた。ああなんて癒されるのだろう。

膝の上にはずしりとのつかる8kgの大型蜘蛛、と記すと嫌悪する女性もいることだろう。事実イトマルの姿を初見したものは皆苦笑するか遠巻きに距離を置こうとするものばかりなのもまた事実であった。

こんなにも可愛らしいのに、と思わずにはいられないあやめ。そうして自身の相棒を手ぬぐいできゅつきゅつと拭き始める彼女。その胴体の湿気や汚れををぬぐってあげるのが彼女の日課なのであった。『プロデューサー殿は可愛いと言ってくれました…つまり！いつかはイトマルの可愛さが全世界に広まるはずっ…！』

手ぬぐいを片手に決意を改めるあやめ。アイドルとしての願望。相棒が認められて欲しいという願い。色々なものが彼女の決意を深めてくれる。頑張るぞーと明日への活力を固めるあやめなのであった。

きつと心地よかったのだろう。彼女の行為に小さく鳴いて喜んでくれる彼。身をふるふると震わせる彼はなんとも愛らしいものであった。

「気持ち良いですかイトマル？」

「イトー！イトイトー！」

「ふふっなら良かったです！」

彼の背中に描かれた大きな顔の文様は彼のチャームポイントなのだ。汚れて見えないようになっては可哀想だろう。彼女は精一杯きゅつきゅつと磨いてあげるのであった。

そうして15分ほどかけて磨き終わる彼女。終わる頃にはイトマルの体はピカピカと輝くように綺麗になっている。そんな自身の体を見て喜ぶイトマル。ありがとうと伝える彼に対してあやめはにっこりと微笑んだ。

「さあイトマル！次は一緒にあれを見ましよう」

「イトー！」

わくわくと言わんばかりにこちらを見上げる彼。そうして彼はあ

やめが懐から取り出したDVDと一緒に眺め始めるのであった。彼女が撮りためたお気に入りの時代劇映画やドラマを見るのがなによりの娯楽なのであった。

友人から譲ってもらった旧式のDVDプレーヤー。その画面の中から侍や忍者といったあやめとイトマルがなによりも好むもの達が八面六臂の大活躍をする。その格好よさにイトマルは瞳を輝かせて見入るのであった。一人と一匹はこうして時代劇に夢中になって夜を過ごす。

小学生の頃に出会って以来、二人はこうして同じ時を過ごしてきたのだ。毒を持つ大きな蜘蛛という事で最初は色々な人から猛反対をされたものだ。いや、今でもされているようなものだが……。それでも敬愛する祖父の一声でイトマルは見事あやめと竹馬の友となったのであった。

すべてを終えると一人と一匹は就寝の準備にはいる。今日は楽しかったと伝えると片方がまたにっこりと微笑む。そんな穏やかな時間。こうしてあやめは今日もまた相棒と楽しい時間を過ごすのであった。

【大原みちるとゴクリン】

大原みちるは大のパン好きである。実家が「おおはらベーカリー」というパン屋を営んでいる事も関係しているのだろう。彼女はパンを見るのも作るのも、何より食べるのも大好きなのであった。

陽光が降りしきる午後3時。店の裏庭に設置された木製のベンチに腰掛ける彼女。彼女は今日もまたおやつ代わりのパンを堪能するのであった。懐に持っているバケツトにはお店の売れ残りのパンがぎっしりと詰まっていた。

大好物のフランスパンを眺める彼女。その腕に抱えたバケツトから取り出してはがぶりとそれにかじりつく。その濃厚な小麦の香りを口いっぱい堪能する。実家のパンはいつだって彼女を満足させてくれるのだ。

「フゴフゴ……もぐもぐ」

ベンチにこしかけたまま食事をする彼女。黙っていれば美人である大原みちる。その口元にはんくずをこさえながら少女は夢中でパンにかじりつく。そんな彼女の背後からのっそのっそと何かがやってくるのであった。

「……………」

それは不可思議な生物だった。薄い緑色をしたそれは明らかに地球の生物ではなかった。手足もなく、あるのは頭部の触角だけという摩訶不思議なフォルム。ぽによぽによと良く分からない音を立てながらその生物はみちるに近づいてくる。そうしてその不思議生物は彼女と目があった。

突如未知の生物と遭遇する美少女。悲鳴をあげるのか、或いは白目をむいて気絶するのか。少しばかりの間、お互いに見合う二人。やがて劇的で緊張の瞬間が……訪れるはずもなかった。

「フゴッ！フゴゴ？」

「……………」

「フーゴ、フゴッ」

パンにかじりついたまま彼女はその生物に対して語りかける。

よつと片手をあげて気軽に挨拶をする彼女。するとその球体生物もまたよつとその小さな手(らしきもの)を上げて答えた。どうやら既知の仲であつたらしい。こうして一人と一匹は今日もまたよくわからない逢瀬をするのであつた。

まるで親しい友人のように挨拶をする二人。そのままその生物は彼女のとなりに腰掛ける。するとみちるは懐から取り出した別のフランスパンをそつと差し出すのであつた。

「……………」

喜ぶ軟体生物。そのまん丸い体をぶによぶによと弾ませながらフランスパンにとびつく彼。するとその口を大きくあんがりと開けてかぶりつくではないか。

もっしや

もっしや

もぐもぐもぐもぐ

ほんの数口でペロリとフランスパンを食べて切ってしまう彼。するとみちるはまた別のフランスパンを取り出しそつと彼に対して差し出す。それを何回も何回も繰り返すのであつた。いつの間にか、このやり取りが互いにとつては当たり前前の行為となつていたのであつた。

店で売れ残つたパンを差し出す少女

そのパンを受け取りおいしそうに食べる未知の生物

そんな不可思議な関係が始まつたのは半年ほど前からである。ベンチに腰掛けたまま大原みちるは自身の過去について振り返つてみた

—————

『大変だみちるちゃん！お宅の店のゴミ捨て場にUMAがいるぞ!!』

常連客の悲鳴のような声が店内に響いた。大原みちるの実家でもあるここ大原ベーカーリー、その常連客でもあるおじさんの滅多に聞かないような声に思わず呆然としてしまったみちる。

なにごとかと集まる母やスタッフに対してその常連客はUMAを見たのだと語った。緑色でまん丸な生物がゴミ捨て場で食べ残しをあさっているとの事だった。その緑のまんまるは手足がなくつぶれた饅頭のような形をしていたのだと必死な形相で語るおじいさん。

当時小学生のみちるにとつては実にファンタジーに溢れる話ではあった。が、同時にそんなオカルトあり得ないだろうとも思ってしまった。案の定、与太話だと他の常連やスタッフに笑われてしまうおじいさん。

「本当に見たんだ！あれは宇宙生物に間違いない！」

なおも食い下がる彼に対して同情したのだろう。パンを陳列する手を止めるみちるの母。彼女は娘に対してゴミ捨て場の様子を見てきてほしいと述べた。母からのお願いにしぶしぶ承知するみちる。UMAだなんているはずがないだろう。そんな事を考えながら裏庭のドアノブに手をかけるみちる。そうして自身は運命的かよく分からない出会いを果たしたのであった。

「うわぁ……」

第一声がそれであった。みちるとして年頃の少女だ。アニメだとか絵本だとかもそれなりに見てきた。ファンタジーに憧れる気持ちも大いにあった。しかし実際にファンタジーに出くわすと、人はよくわからない言葉を口にだしてしまう物らしい。

それは確かに見た事もない生物であった。大きさは40cm程でつぶれたクッションのような丸みを帯びたフォルムをしている。薄い緑色のような色をしたそれは手足がなく、代わりに頭部に触覚のようなものを持っていた。黄色い触覚をピョコピョコと動かしながらゴミ箱に顔を突っ込む球体生物。

「ゴク…う」

うしろで呆然としていた少女の気配に気づいたのだろう。彼は食事をする手(手?)を止めてこちらを振り返った。口らしき所にソーヌやら全身にパンクズやらをつけてこちらをきよとんと見つめる彼。

その顔はどことなく能天気さをかんじさせるものであった。未知

の生物への恐怖とかあこがれやらが音を立てて崩れ去っていくのを感じる一人の少女。

とりあえずゴミ箱をあさるのはやめさせようと近づき彼を優しく抱きかかえるみちる。すると彼はおよ？とでも言いたげにこちらを見上げながらも素直に彼女の胸に抱かれるのであった。餅饅頭のよくなぷによぷによの感触を感じながら一人の少女は途方にくれた。これどうしよう。

結局彼を抱っこしたまま自身の母親に対してその生物を見せにいった彼女。その時の母の表情は終生忘れる事はできないだろう。顎が地につかんばかりに驚愕する常連客やアルバイトのおばさんの顔を見つめながら一人と一匹は途方にくれた。

その後が大変だった。写真を撮られたり指で突かれたりと散々な目にあう球体生物。彼は少しばかりするとみちるの背に隠れるように移動した。おんぶのような形で肩と背中の中のしかかる生物。

その10kg弱という少女にはあまりに過酷な重量に耐えながら目の前で繰り広げられる家族会議を眺めるみちる。常連客や一部スタッフを交えた会議は熾烈を極めた。

危険生物だから警察に連れて行こう派閥

UMAだからNASAに連絡しよう派閥

二択に絞られた親族会議。結局常連客のおじさんの一声もありUMAだからNASAに連れて行こう派閥が勝利したところで誰一人NASAの連絡先を知らないというあまりにトンチンカンな最後を迎えた時には一人と一匹はすやすやと昼寝を貪っているのであった。

よりそうようにしてソファで眠る彼女達の姿を見て暫定的に飼育することが決定したのはその後のことである。

【大原みちるとゴクリン2】

親族も交えた長きに渡る家族会議。それによつてかの生物はひとまずはここおおはらベーカリーで保護する事になったのである。とはいえペットのように、ではなく住居と食事を提供する半分野良犬状態でだが。

生態がわからない

食事の嗜好がわからない

そもそも何者なのかもわからない

とまあ分からない事尽くしで途方にくれたとも言える。しかし誰かが発した「彼がいれば売れ残りの処分の手間が省けるのでは？」という言葉がつるの一声となつた事は確かであろう。こうして彼はパン屋にて市民権を獲得することになつたのである。

ちなみに名前はペロリンと名付けられた。なんでもかんでもペロリンと食べてしまう底なしの食欲からいつしかそう呼ぶようになったのである。ちなみに第一発見者であるおじさんに飼わないんですか？と聞いて見たところ全力で拒否されたみちる。普通の人間にとつては確かに恐ろしい存在なのだろう。主に食費的な意味で。

与えられた犬用ハウスでぐっすりと眠るペロリン。彼は昼過ぎに起きると店に顔を出し売れ残りや常連からの差し入れを食すのである。午後は散歩に出かけ、夕方にハウスに戻つてはまたぐっすりと眠る毎日。悠々自適にもほどがある暮らしだろう。

彼の世話は主にみちるが行なつていた。といつてもパンを与えたりハウスに水を用意してやる程度だが。どうやら彼はその名の通り好き嫌いもしないようであった。肉や魚も勿論食べたしどんぐりやら生野菜やらももしかやと好んで食べるのである。世話のしがいがあるのか無いのかよく分からない生物であった。

「ペロンチョちゃんは良い子だねえ」

「おばあちゃん、その子の名前はペロリンです」

店に來た老婆が震える手でペロリンを撫でる。そんな老婆に対してみちるは静かに訂正をする。老婆はカートに載せたバッグから飴を取り出すと彼に対してたべさせるのであった。飴玉をコロコロと美味しそうに舐めるペロリンを見ながらみちるは掃除する手を止めて思考にふける。

改めて観察してみる

ペロリンは何者なのだろうと

第一発見者であるおじさんは差し入れをしながら「こいつはUMAに違いない、それが宇宙からの侵略者だ」と今でも強く主張している。それに頷く人間もいるが多くの否定的であった。みちる自身もまた懐疑的な目を向けざるをえなかった。こんなのほほんとした軟体生物が侵略者なのだろうか。

近所の野良猫に返り討ちにあう彼が宇宙生物であるとは到底思えないみちるなのであった。というか弱過ぎやしないだろうか。メスのミケ猫に泣かされて自身の胸元でわんわん泣いていたペロリンのことを思い出す。うん、宇宙生物ではなさそう。

とはいえ新種である可能性はありそう。彼女自身もネットやら図書館やらで散々探したが類似した生物すら見いだすことはできなかったのだ。ペロリンはなんらかの新生物である可能性は大いにある。もしもそうなら見つけた自身は有名人になれるのでは？いや見つけたのは常連のおじさんだが。

ちなみに一度だけ魔がさした事がある。この未確認生物をマスコミに報せれば有名になれるかもと考えたのだ。テレビに映ってレポートにちやほやされる想像をしながら悦にひたるみちる。小学生特有の甘い思考であったと言えるだろう。

その為にはこの生物について動物医に相談してみなければ！医者から新種であるとの太鼓判を押し貰うべきだと考えた彼女は一度遠縁の叔父が経営している動物病院に電話で聞いてみた事があったのである。興奮しながらダイヤルを押しみちる。その時の動物病院の回答が以下の通りであった。

Q. 歯も肺も心臓もない、ボール型スライムって診てもらえますか？

A. そんな生物は存在しません

なんという事だろう。有名な医科大学を出た動物医に名指しで存在を拒否されるペロリン。寝言は寝て言えとまで言われた時には泣きたくなくなってしまった。本当にいるのだと、今自身の膝上でぐーすと惰眠を貪ってる緑まんじゅうの写真をとって送りつけてやろうかと考えるみちる。結局は途中でやめたが。

このように混乱しつつも何だかんだ言って平和な毎日。商店街の住民と家族からの愛を一心に受けペロリンは健やかに育つのであった。

なんだかんだ言ってみちる自身もペロリンのことを気に入っているのであった。彼の世話をすることに嫌な気分はしなかったのだ。食事の度に自身にぽよんぽよんと駆け寄る姿が可愛いと言えないこともなかったし。

彼自身もまたみちるのことを気に入っているようだった。数日にいっぺんは寝室に来ては同じベッドで眠るのが習慣となっていた。また、お風呂にだって一緒にいる程度には仲がよくなった。彼もまたみちるの事を気に入っているのだろう。

とまあこんな具合になんだかんだ言って穏やかに暮らし始めたみちるとゴクリンなのであった。まさか彼女自身も、数年後に彼と共にアイドルになるとは夢にも思わなかった事であろう。

第2章

【渋谷凜と植物型ポケモン】

ふと目がさめる。渋谷凜はここ数年ほどでおきまりとなった音のため息をつきながらベッドからゆっくりと起き出した。すこしばかり伸びをする彼女。緩やかに寝癖のついた自身の黒髪をなでつけながら凜は自室から出て行った。

「おはようお母さん…うん、わかってる。行ってくるよ」

自身の母に対して朝の挨拶をする彼女。洗顔をし、そのクマ柄のパジャマを着替える。女子中学生である彼女は制服に着替えるとその上からエプロンを身につけた。そうして身支度を整えた彼女はゆっくりと裏庭にでるのであった。

両親が務める花屋。ここでは日々多くの花を育てては売っていた。都会に設けられた花屋という事もあり、芸能事務所のイベントやら地域の催事やらといった需要が大きかったのだ。こうして花を売っては利益を上げている渋谷家、彼らは穏やかな毎日を過ごしていた。しかし家族3人で慎ましく経営しているこの店では数年前からとある動物が居候するようになったのである。

時刻は午前6時、人々が起き始める時間帯に彼女はこっそりと倉庫へと移動する。そうして薄暗い倉庫の棚から一つの鍵を取り出すとかちやりとドアを解錠した。店の裏庭に設けられた広い空間、バックヤードへの扉である。そうして彼女はそつとドアノブに手をかけてその向こう側を覗き込む。そこにはお目当の生物たちがいた。

「ああやっぱり…」

呆れた表情をする凜。どうやら今日も彼らは問題を起こしたらしい。自身の目の前で植木鉢に顔を突っ込んだまま抜け出せないでいる三匹を見て、彼女は大きいため息をついた。

数年前から出現するようになったとある生物達。ポケモンと呼ば

れる存在はどうかやらここにもしいるらしい。花屋の一人娘である渋谷凜は後始末のことを考えては憂鬱そうに頭を抱えるのであった。

「どう考えてもあんた達では入らないでしょ…これで何度目なんだろう…」

『ナゾナゾ』

「ああもう…動かないですよ」

植木鉢の中からするくぐもった鳴き声。ここ数年で慣れてしまったその声をききながら凜は腕まくりをしつつその生物に近寄った。

植木鉢に突っ込んだまま身動きが取れないでいるその生物。足をジタバタとさせているその生物の胴体をつかみ、なんとかひっぱりだそうとする凜。渾身の力を込めてようやく「スポンっ」という子気味良い音と共にその生物は全貌を表した。

「ナゾっ!」

「はいはい、おはよう」

「ナゾ!ナゾ!」

「ひつつかないですよ…まだあと二匹分もひっこぬかなきゃいけないんだから…」

それは珍妙な生物だった。藍色の胴体に真赤の瞳をした生物。その小さく丸い胴体からは二本の足とふさふさの葉っぱが生えていた。まるで植物と動物をかけたあわせたような不思議な生物。

助け出された彼らは喜びをあらわにする。その小さな足と胴体を精一杯に伸ばしながらぴよんぴよんと小躍りをするのであった。植木鉢には君のサイズでは入りきらない、そう何度伝えても入りたがるのだ。学習能力があるのだろうか?凜は額に汗を浮かばせながら二匹目のひっこぬき作業にとりかかった。

彼らはナゾノクサと呼ばれる生物であった。くさ・どくタイプである彼らは雑草ポケモンとも呼ばれている。地方では比較的ポピュラーな生物でもあった。ここ渋谷凜の実家でも数年前から住み着く

ようになったのだ。

数年前、最初は彼らを追い出そうとした。父や地元の青年団が協力体制を敷き力づくでその生物達を追い払おうともがいたのだ。しかし彼らはびくともしなかつた。最後はバットやらシャベルやら、武器のような物すら持ち出したが無意味であった。息を切らしながら床に倒れこむ屈強な男性達。その目前で嘲笑うように小躍りする彼らの姿。当時小学生である凜はどこかホラーな心境で見ている事を彼女自身がよく覚えていた。

彼らは泣いたり怯えたりこそしたもののついで駆除しきる事はできなかつた。怪我をしようが次の日にはピンピンしているのだから溜まったものでは無い。こうして渋谷家の父は謎の球体草生物に敗北したのであつた。

当時は警察にも駆除を要請しようとした事がある。行政の手を借りようとした渋谷家であつたが、警察官からは「街の至る所で未確認生物が現れるようになった。その被害の対応で手一杯だ」といつて遠回しに断られたのである。これには父も頭を抱えるしかなかつた。当時はフラワーショップ最大の危機であつたと言えるかもしれない。

結局その後は紆余曲折の末に

彼らと共存関係を築く事になつた

彼等の存在が植物に良い影響を与えることが判明したのが最大の理由であろう。彼らが植物と接すると、その植物はまるで最上の栄養剤を与えられたかのようにすくすくと丈夫に育つたのである。見違えて美しく、立派に成長する花達を見ては腰をぬかさんばかりに驚いた父の姿。こうして渋谷家はこの謎の生物と奇妙な共存体制を築いたのであつた。

裏庭の一角に設けられた大型猫用のキャットハウス。ホームセンタ―で購入した三万円の豪邸が彼らの住居となつた。念願の住居を

手にして喜ぶ三びきのナゾノクサ。月明かりの元に三匹は毎夜、月下の踊りを堪能するのであった。

ナゾノクサ達は花屋の裏庭で生活をする。そこでは人間から餌という名の水をもらう毎日。代わりに植物の面倒を見てもらうという立派な共存関係。こうして渋谷家はその危機を脱出し見事な黒字経営を成し遂げたのであった。

ちなみに彼らは植木鉢に顔を突っ込むのが好きらしい。何度説明をしても植木鉢をひっくり返しては割っていた。こればかりは共存の弊害とも呼べるのかもしれない。主にその後始末は一人娘が引き受けていたが。

「うん、溜まってる」

裏庭の一角に設けられた茶色い醸造壺をながめる。大きさ数十センチ程度の茶色の磁器製の壺。そこにはたつぷりと何かの液体が入っていた。ふんわりと香る濃厚な香りを嗅がないように注意しながら、渋谷凛はマスクをつけたまま作業を開始する。

じつはこの液体、彼らの唾液なのである。彼らが口から発する唾液は植物に垂らすと最上級の植物栄養剤となる事が判明したのだ。人体に悪影響のないクリーンで極上の栄養剤は社会でも大きな話題となった。今では植物に携わる職業人にとっては欠かせない物となったのである。

「唾液をここに垂らして欲しいと」お願いをした所彼らは快く応じてくれたのだ。その見返りに最上級のミネラルウォーターを与えることになった。ある意味ギブアンドテイクな関係なのだろう。

ちなみにこの唾液は加熱すると特殊な蒸気のような香りを発する事も分かった。この蒸気は「あまいかおり」とも呼ばれ一部の人間やポケモン達に絶大な人気を得ているらしい。そのような線もあつてか花屋では副業としてこの唾液も販売するようになったのである。

経緯は理解している

その効能もよく分かっているつもりだ

しかし朝から唾液を集める女子中学生ってどうなのだろう。そう
思わずにはいられない渋谷凜。年頃の少女としては少しばかり嘆か
ざるをえなかった。しかしまあ疑問に思いながらも、これが現代の花
屋の宿命かと諦める彼女なのであった。

【渋谷凜と植物型ポケモン2】

チヨークを走らせる音がする。かつかつと子気味良い音を立てながらその男性教師は黒板に文字を羅列した。その文字に視線を走らせる生徒達。彼らはノートを開いてはその内容を板書するのであった。

授業をうける中学生集団。その集団の中に彼女、渋谷凜はいた。彼女もまたその美しいルックスを退屈そうに歪めてはぼんやりと授業を受けていたのであった。机の上に置かれたキャンパスノートには『道徳』と書かれている。

「転機となったのは5年前の11月に起きた東京タワー半壊事件だ。被害は甚大で重軽傷者は約7500名とされている。この事件をきっかけにそれまで未確認生物とされていた各地の生物達はポケモンと称されるようになりー」

教師による退屈な授業が行われる。それは道徳の授業の際に行われるようになったポケモンに関する授業であった。手元に渡されたプリントを眺めながら退屈な時間を過ごす渋谷凜。窓からそつと外を眺めるとツバメが気持ちよさそうに空を飛んでいた。

「すべてのポケモンは戦闘欲求を持つ。これがなぜだかわかる生徒はいるか？」

「えーと…より良い餌や住処を求めて戦ってきたからでしたっけ？」

「そうだ、生存競争が彼らの原点ともされている。彼らが強い力を持つのはその為だな。では次の項目へ移るぞ」

30代くらいの比較的若い男性教師。彼もまた手元のプリントといくつかの蔵書を片手に授業を行っていた。このようなポケモンに関する授業は現在多くの学校で行われていた。社会の変化に伴いこのような子供達が知識を身につける必要性が出来てきたからである。

政府指定の研究書から引用したプリント。そこにはポケモンに関するごく初歩的な知識がずらりと並んでいた。今ではインターネットでも見る事ができるようになったごく一般的な知識である。教師

はなおも声を張り上げた。

「敗北や戦闘での経験をもとにより自らを強靱な存在へと生まれ変わろうとする変化…これをなんとというか、分かる者は？」

「えーと確か…適応変化です！」

「そうだ、適応変化とよばれる性質を持つ。これを別名では進化とも呼ぶが…よしここから先はべつの生徒に読んでもらうか」

えーと嫌がる生徒の声を耳にしながら、渋谷凪は思考にふけた。ポケモンは強い力を持つ物らしい、それは理解できる。だが彼女にとってはどうにもイメージが湧きにくい事でもあった。あの植物もどきが強い存在であると、彼女には到底思えなかったからだ。

1日の大半を睡眠と日光浴で過ごす彼らの姿を思い出しながら退屈そうに板書を行う凪。さらさらとペンははしらせてはとりとめもない思考にふけるのであった。

「ポケモンかあ…」

ふとつぶやく凪。ポケモンは身近な存在になったとはいえ一般人にとってはまだまだ縁遠い存在でもあった。芸能人が可愛いポケモンを連れて踊ったり警察官や自衛隊員がたくましいポケモンを相棒にしている姿はテレビで何度も見た事がある。

しかし自宅で飼育している人というのはまだまだ少ないのが現状であった。彼女の自宅には三びきの謎植物ポケモンはいたのだがあれは色々な意味で例外である。猛火を吹く獣や竜に比べれば、強くて恐ろしい存在とはとても呼べないだろう。

選択する職業によつてはポケモンとの関係はいやでも持たざるをえないのが現代社会である。その為にはそのポケモンにふさわしい知識を身につけなければならない。或いは飼育する為には免許の取得だとかも必要になってくるのだ。やはり苦労やら手間やらはかかってしまうのも確かなことでありー

と、ここまでは考えた凪はペンを止めて考えるのであった。果たして自身のやりたい事とはなんなのだろうか、と。

「……」

実家の職業について考える。花は好きだ。花屋の娘として小さな頃から関わってきたし見るのも育てる事にも魅力は感じている。だがそれを生涯の仕事にしたいか、と問われると即答できない自分がいる事もまた確かであった。

「やりたい事かあ…」

そつと窓から外を眺める。先ほどのツバメとともに一匹のポツポが気持ちよさそうに空を泳いでいるのが見えた。翼をいっぱい広げて空を滑空する様はとても心地良さそうであり、それが今の彼女にとっては苦しい光景でもあった。

何かをなしたいが何をすればよいのか分からない。半端な気持ちではしたくないがそもそも自身が何を望んでいるのかわからない。そうしてジレンマに陥ってしまう彼女。ある意味では健全な年頃の子供らしい考えであった。

「……」

自分という存在を大空へと羽ばたかせている鳥達。そんな姿にあげがれをもちながら彼女はぼんやりと空を見つめ続けた。

いつの日か見つけてみたい

本当に自分が夢中になれることを

ペンを走らせながら彼女はまた退屈な授業へと戻っていく。倦怠感のようなものを感じながら今日もまた日々を過ごしていく彼女。彼女が本当に夢中になれる物にであうのはもう少しだけ先の話である。

城ヶ崎莉嘉のテレビ鑑賞

『ええうちのイワークはそりやもう勇敢で、なにせスピアーの群れにだってびくともしないんでさあ』

「す、すっごい！おっきい!!」

「カツコ良い〜」

テレビに夢中になる少女二人。まるで怪獣映画を見ているような気分で彼女達は歓声をあげた。テレビの中では大きなイワークがぶんぶん尻尾を景気良く振り回していた。城ヶ崎莉嘉はテレビに熱を込めて見入るのであった。

「今の見た、みりあちゃん!?すっごく大っきかったねー!」

「うんカツコ良かったねー」

テレビに夢中になつてはしゃぐ二人。どうやらレッスン終わりの事務所で共にテレビを鑑賞しているようだ。テレビでは今北海道のある農家が飼っている巨大なイワークについて特集していた。

大きさ8・8mという巨大な岩石ポケモン。そのゴツゴツとした岩肌は見るからに頑丈で威圧さを感じさせた。重量はなんと驚異の210kg。一般家庭ではまずお目にかかれないポケモンであろう。

どちらかといえば男の子が好みそうなポケモンではあるが、怪獣が好きな城ヶ崎莉嘉にとってはどうやらあこがれの対象になりうるらしい。スポーツドリンクを片手に彼女は食い入るように画面を見つめた。

「イワークってさ!きつと強いよね!あんなに体が怖そうなんだもん!」

「うん、きつとなんでもバリバリ食べちゃうね」

「食べちゃうぞ!ガオーー!」

「やーん怖いよー!」

大はしゃぎする二人。なんとも年相応でかましい姿である。その後二人でひとしきり笑い合うと再び画面に向き合った。もうイワーク特集は終わり、テレビ番組では次のコーナーの映像を流していた。都会で経営しているおしゃれカフェの映像を眺めながら城ヶ崎

莉嘉はため息をついた。

「あーあ私もポケモン欲しいなあ」

「良いよねー…みりあも欲しいなあ」

思わぬ独り言に対して同調してくれる友人。みりあの声に彼女もまた大喜びで声をかけた。

「みりあちゃんはさ、もし飼うとしたらどんな子が良いの！」

「うーん体が小さい子かな…大きな子はエサとかお世話大変そうだし」

妙なところでずれた感性を示すみりあ。彼女は下に妹を抱える姉であり、意外なところで家庭的な面を表すのである。むうーとばかりに頬をふくらませる莉嘉。

「そういう事も大事だけどさあ。やっぱり可愛いのか強いのかー」

「あつでもピカチュウは可愛いよね」

「そうそう！あのほっぺの所とかちよーカワイイよね!!」

「みりあは尻尾のところが好きだなあーって」

「それわかるー」

今度は年相応の女子トークを行う二人。その後もマリルやロコンといった可愛らしいポケモンを出しては感想を述べ合った二人。お菓子を片手にはしやぐ女子会トークに花を咲かせるのであった。

ちなみに小・中学生に人気のポケモンランキングではピカチュウは必ずと言ってよいほどランク入りする。彼ら電気ネズミはどの場所どの時代であつても不動の人気者であるらしい。

時刻は午後四時を示す。夕方に入りかける時刻ではあるがまだまだ少女たちのトークは終わらない。時間が経つてもなお、いやそれ以上白熱していくポケモン女子トーク。空になったジュースの容器をゴミ箱に投げ捨てながらみりあは問いかけた。

「莉嘉ちゃんはどんな子が良いの？もしも飼うとしたら」

「うーん沢山いるけどー」

顔に手を当てて考え込む莉嘉。飼いたいポケモンはたくさんいる。怪獣のように大きな物、特にドラゴンタイプにはこの上ない魅力を感じ

じてしまう。もしも巨大なドラゴンに乗って空を飛べたならきつと最高の気分になれるだろう。けれどやっぱり……

「やっぱりあの子だなあ……」

「あの子？」

「分かんないかなあ？じゃあヒントね！その子は虫タイプでーおつきなツノを持つてー」

「あー分かった！ヘラクロスだあ！」

「ピンポーン大正解！」

手を叩いて答えるみりあ。そんな彼女に対して莉嘉もまた満面の笑みで答えるのであった。

「ヘラクロス良いよね！カッコ良いし強そう！」

「そうそう、アタシ絶対ヘラクロス飼うんだ！」

「その時にはみりあにも触らせてね！」

「勿論だよーえへへ」

ヘラクロスを飼う時を想像してつい顔がほころんでしまう莉嘉。にまにまと巨大なカブトムシを抱きしめる自身の姿を想像しては悦に入る。そんな莉嘉を微笑ましげな表情でみりあは見つめた。

こんな微笑ましい光景が日々、346プロダクションでは行われている。このプロダクションでは現在多くのポケモンも存在する。が、それでも虫ポケモンや毒タイプといった一般人受けしないポケモンは数が少ないのが現状であった。テレビや雑誌に出てもよい評判が得られにくいのが理由の一つでもあったからだ。

虫ポケモンが大好きな莉嘉としては強く主張したかった。虫ポケモンとは決して嫌われるような存在ではないのだと。

虫ポケモンの魅力は成長の速さである。十年かかっても進化できないポケモンがいる中彼らは一年もあれば大抵は進化してしまう。早く、大量に繁殖するその生態は実に魅力に溢れているのだ。あと可愛しい。

飼育環境を選ばない点も魅力的である。彼らは望めば家でも寝室でも物置でもどこであろうとも繁殖できるのである。その異様なま

での生命力の強さは注目すべきものであろう。あと可愛いし。

とまあ心の中で大いに虫ポケモンの魅力について再確認する莉嘉。そういった繁殖力の高さが嫌われる要因の一つでもあるのだが。

くりつとした瞳のキヤタピー、スピアーの巨大針、巨大なハサミを持つカイロス。実に多くの魅力的な虫ポケモンたちについて思い返す莉嘉。その魅力を全て語っては時間がいくらあっても足りないだろう。莉嘉はお手製のノートに虫ポケモンたちのスナップ写真を貼ってはそれを眺めるのが好きであった。

いつの日か絶対に飼ってみせる

少女はすでに硬い決心をしていた。それはもうダイヤモンド並みの硬い決心であった。彼ら虫ポケモンに囲まれる生活してみたい、というのが今の彼女のささやかな夢の一つであるらしい。

ちなみにこのヘラクロス飼育計画は現在家族からの猛反対を受けている。なんとか家族を説得しようと試みているのだが芳しくない莉嘉なのであった。姉の城ヶ崎美嘉曰く「家に巨大な昆虫がいるのはマジで無理」とのことであった。

アナスタシアと氷ポケモン

そこは某県某所、とある市民会館であった。比較的大きなその会場には満員に近いほど多くの人間が集まっていた。声を枯さんばかりに張り上げる観客。そうしてライブは終わりの時間を迎えた。

「みなさーん今日はありがとうございましたー！」

「また来て欲しい、ですー」

拍手が鳴り止まない大喝采。その中を力一杯に手を振りながら降りていく二人のアイドル。そうして新田美波とアナスタシアは満面の笑みを携えて劇場から降りていくのであった。

彼女たちラブライカのCD発売記念イベントは大盛況のまま終わるのであった。ライブ直後ということもあり息をきらしては汗にまみれる二人。スタッフの人々に挨拶をかわしながら彼女たちは待合室へと歩いていく。

「美波、とっても良いステージでしたね！」

「うん最高のステージだったねアーニヤちゃん！」

興奮冷めやらぬ中ふたりはステージの感想を言い合った。ドリンドクを片手に彼女たちは白熱した会話を続ける。ここが良かった、次はああしようと具体的な改善点を交える所は生真面目な彼女たち独特の点であろう。

しかし議論に夢中で自らの汗を拭おうとしない彼女たち。そんな彼女に対して見かねたのだろうか。一匹のポケモンがトコトコとタオルを啜えて走り寄って来た。

「キュウウアー」

「あっそうでした…フェーヤありがとうございます！」

これで体をふいてと言わんばかりに注意をしてくるポケモン。彼は二人分のタオルを啜えたままペシペシと器用にアナスタシアの足を叩いた。その前足でペチペチと叩く仕草のなんと可愛らしい事か。無意識に行う動作は彼自身の見目も合わさって爆発的な愛嬌を生んでいた。

美波もまたそんな彼の愛らしい仕草に思わず見入ってしまう。

きゅんと高鳴る胸を押さえつつ彼女もまた件のポケモンに挨拶をした。その短いスカートのまま美波はしゃがみこんで彼に声をかけた。「フエーヤくんはお利口さんだね、ありがとう」

「キユウ」

尻尾をふって答える彼。気にするなどでも言わんばかりのそっけない気質はクールな性格である主人ゆずりなのかもしれない。そのそっけない態度もまた可愛らしかったが。

そのポケモンはグレイシアと呼ばれる種族であった。美しいライトブルーの身体にくるんとのびた耳。その愛嬌ある顔は実に可愛らしいものであった。体長は60cmと他の個体に比べて小さな身体なことも相まって実に魅力的な姿をしている。

フエーヤと名付けられた彼、そのオスのグレイシアは一心に寵愛を受けて育つのであった。ロシア語で妖精を意味する彼は愛しきご主人様にやんわりと抱かれた。全身をふかふかのベッドに包みこまれるような、そんな柔らかい感触に酔いしれるフエーヤ。

アナスタシアの胸に抱かれる彼。くんくと鼻を鳴らしては主人の匂いを堪能する。その花のように甘く優しい香りが彼は大好きなのであったのだ。ごろごろと喉を鳴らしながらご主人に甘える。そんな彼の姿にアナスタシアはにっこりと笑みを浮かべるのであった。

「あら仲良しさんだね」

「ふふっ、フエーヤは甘えん坊です」

「〜っ」

全身を使つて甘える彼の姿のなんと可愛らしい事か。美波もまたそんな彼の姿を大いに堪能する。ああライブでの疲れが癒されていくようだ。彼女は可愛らしい一匹のポケモンに見入るのであった。

「ひんやりしてて、気持ち良いです。フエーヤはやっぱり最高です！」

「うーん羨ましいなあ」

「あつごめんなさい美波！変な意味では…」

「ううん、分かっているから。大丈夫だよアーニヤちゃん」

苦笑する美波。実はこうして彼が甘えるのはアーニヤに対してだけなのである。彼はひかえめな性格な事もあり、他人には己の体に触

らせようとすらしらないからだ。他人が無理に触ろうとすると威嚇までしてくるのである。

ちなみに最近では美波の努力の甲斐もあり餌があつて機嫌が良い時には、ほんの少しだけ触れるようになった。彼自身すぐに離れていってしまうが。

そのふさふさでひんやりとした独特の感触を思い出しながら美波はタオルで自身の汗をぬぐった。与えられたステージ衣装をまくりながら汗をぬぐっていく彼女。彼女は汗をぬぐいながらアーニヤに對して声をかけた。

「ところでアーニヤちゃんは東京に帰った後は暇？」

「今日の夜ですか…？ちよつと買い物の用事、あります」

「ああーそつか、食事でもどうかなつて思つたんだけど…残念だね」
がつくりと気を落とす美波。どうやら東京に帰った後にアーニヤと食事できるかもと期待していたらしい。仕方ないかと着替えながら彼女は苦笑する。そんな美波に対してアーニヤはいいえと返事をした。

「用事の後、ならOKです。もし良いなら、美波も一緒に来ても大丈夫ですよ？」

「え、いいの？」

「はい、ちよつと退屈しちゃうかもですが」

小首を傾げてうかがうアーニヤ。銀色の髪、端正な顔つきを歪めてこちらを見上げる彼女はとてつもなく可愛らしかった。そんな仕草にほおをゆるめる美波。自身が手にしていたタオルをおきながら彼女は笑顔で返答をした。

「そんなことないよ、アーニヤちゃんとフェーヤ君が一緒だもん」

「スパシーバ、それはよかったです」

「ところで…買い物用の用事ってなにか？」

「はい、実はフェーヤのボールを…」

嬉しそうに買い物内容について語るアーニヤ。まるで幼い子供のようにはしゃぐアーニヤの姿に美波まで楽しくなつてきてしまう。そうして二人は後片付けと関係者スタッフへの挨拶回りを終えると

会場を後にするのであった。

新幹線に乗り帰宅していく二人。そうして彼女たちはボール職人の元へと向かうのであった。ちなみに道中フェーヤはずつとアーニヤの膝の上で睡眠をとっていたらしい。あくびをしながら寝ぼける姿を写真に収めようと、はしやぐ二人のアイドルの姿が某新幹線の中で見られたとか。

アナスタシアと氷ポケモン2

それはおしゃれな雑貨屋のような店だった。外観はまるで古い洋館のようでもある。シックなレンガ、ランプを模した灯などごとなく大正時代のような印象が伝わってくる。外壁には多くのツタが絡まっていた。

手書きの看板には可愛らしい文字で『モンスターボールの作成行なっており☒』と書かれていた。味わい深い喫茶店のような独特の雰囲気であった。

「失礼しまーす…うわ、本格的…」

店内へと入っていくアナスタシアとフェーヤ。そんな彼女たちの後をおい美波は店内へと入る。中もまた実に大正ロマン溢れるお店であった。

「いらっしやい、予約の方かしら」

それは美しい夫人であった。黄色いエプロンを身につけた彼女は年齢は40代手前と言ったところだろうか。滲み出る優しげな瞳から母性を匂わせる、そんな親しみやすい女性であった。

「あら、貴方は？」

「アナスタシアさんの友人でして…」

「ああそうなの。可愛らしい娘達だからびっくりしちやったわ」

ほおに手をあててうふふと微笑む夫人。どうやらかなりフレンドリーな女性らしい。その優しげな表情に思わずつられて微笑む美波。店内をじっくりと観察する彼女。

店内には金属製のアクセサリー、木製の小物や外国のポスターといった様々なものが陳列してあった。まさしく雑貨店といった様相である。しかし部屋の一角においてある大型の棚は違っていた。

縦2m、横幅5mのかなり大型の木製棚。ガラス戸の向こうにはぎっしりと詰められたボールがあったのだ。モンスターボールである。

真紅の色をした物

藍色に染められた物

月の装飾が施されたボール

ハートを催したピンク色のボール

とまあ実に様々なボールが美しく陳列されていたのであった。一つ一つが職人によって端正に作られたのだろう。そのどれもが美しく輝いているように見える。ライトアップされたそれらは、価値ある人間にとつてはまさしく宝石のような物であろう。

「とつてもおしやれなお店ですね！それにボールがいっぱいです…」

「そうね、全部旦那の手作りなのよ」

「わー素敵です」どれもおしやれですね」

「最近雑誌でも有名になってきた、です」

「そっかあだからアーニヤちゃんはこの店を選んだんだね！」

「ダー、大切な家族のおうち、ですから」

フエーヤを抱えたままにつこりと微笑むアナスタシア。どうやら注文したボールが待ちきれないらしい。そわそわとした様子で待ち続ける彼女に対して夫人はくすくすと笑いながら応じた。

実はこの店、主人の脱サラをきっかけに始めた雑貨屋らしい。定年退職も間際になって来た主人が第二の人生として始めた店なのである。当初は雑貨を輸入したり小物をつくって売ったりとほそぼそとした商売をつづけていたらしい。

しかし時代の変革に伴ったモンスターボールの需要が増えてきた事が切掛となり、こうしてボールを手作りで販売する事になったらしい。完全受注生産でのモンスターボールの販売は地方では大きな評判を呼んだようだ。最近では雑誌でも取り上げられるようになり、今では予約に3ヶ月もかかる人気店へと成長したのであった。

「良いボールを作るには良いぼんぐり、それとポケモンの情報が欠かせないの。だからうちではまず初回で店に来てもらうのよ」

「へーそうなんだ…」

「ポケモンに適したボールの方が怪我の回復だとかも早いなのよ？だからその子にあわせた特注のボールを作ってあげるのが一番なのよね」

「ボールってそんなに重要なんですか？」

ふと出た美波の疑問の言葉に苦笑する夫人。彼女自身ボールの販

売をするまではポケモンにとっていかにボールが大切な存在なのかを知らなかったからだ。

「縮小化にはそのポケモンに見合った環境を用意してあげる事が大切ななの」

「縮小化：体が小さくなる現象でしたっけ？」

「そうそう、その縮小化にはほんぐりの中が一番適しているのよ」

説明を行う夫人。そんな彼女の言葉に頷く美波は高校で行なっていた授業の事をぼんやりと思い出していった。

ポケモンは縮小化とよばれる特性を持つ。ダメージや疲労をおつた状態の時に自身の体を小さくする性質の事である。これにより彼らポケモンはどんなに大きなダメージを負っても決して死なずに復活をする性質を持つのである。故にこの状態を『ひんし』とも表現したりする。

この状態になった際、彼らは身近な物や空間の中へと身を潜めるようにして隠れるのである。そこで力を蓄えて再び体を増大化させる事でまた生活する事ができるようになるのだ。

「その気になればメガネケースにだって入れるけどね、やっぱりポケモンが一番落ち着いて縮小化できるのはほんぐりの中らしいのよ」

客に対して博識に知識を述べる夫人。彼女の言う通りほんぐりと呼ばれるきのみこそがポケモンにとって最高の環境である事は否めない。だからこそほんぐりを加工するボール職人と呼ばれる職業は大切な仕事でもあるのだ。

そんな会話を続ける二人。そんな彼女達に対して待ちきれないとばかりに話しかけるアーニヤ。フエーヤを抱えたまま彼女は問いかけた。

「あの：頼んでいたもの、できましたか？」

「ああ待たせてごめんなさいね」

「はやく見たい、です。待ちきれないです」

「勿論よ、さあこっちへ来て」

にこりと微笑むご婦人。そうして彼女は店の奥へと入っていく。カウンターの戸棚から一つの木箱を取り出して来た。大きさは数十

センチ程度の木箱でありスギの木を加工した一品らしい。実に美しい木面のその表面を愛おしげになでる彼女。

おずおずとアーニヤはそれを受け取った。手にのしかかるずしりとした重みに思わずぐくりと喉をならす。

「注文を受けてから1週間、旦那が丹精をこめて作ったからね」

嬉しそうにかたる夫人。そんな彼女の言葉に頷きながら視線を木箱から逸らそうとしないアナスタシア。木箱のふちにそつと手を添える。そうして彼女はゆっくりと蓋を開け始めた。その鍵のついた木箱に手をかけて、ゆっくりと開けていくと…

「…スパシーバ、素晴らしいです」

「わあきれい…」

感嘆の声が漏れるふたり。そこには実に美しい球体の工芸細工があつたのである。人のこぶしより少し大きいサイズをした小さな宝箱のようなそれに瞳をうばわれる。フェーヤもまたじつとそのボールを見つめ続けた。

そのボールはライトブルーの色をしていた。その淡い色使いはきつとグレイシアの色をイメージして施されたのだろう。球体は下部と上部の二箇所に分かれており、その上部には氷を催したガラスのパーツが埋められている。

なんともいってもその重厚感である。透き通るようなガラスの性質と肌さわりの良い加工木の特徴を組み合わせたそれはまさに芸術品であつた。美しく輝くそれを見つめては、熱のこもったため息をするアーニヤ。

「とつても、とつてもきれい、です」

「それはよかつたわ、さあ彼にも見せてあげて頂戴ね」

ふふつと嬉しそうに微笑む婦人。彼女からの言葉を受けてはつとするアナスタシア。彼女はボールを自身の足元で興味深そうにみつめるフェーヤへと向ける。ほんのすこしの戸惑いと共に、フェーヤはそのボールの中身へと収まった。

そう、収まったのである。まるで手品のように、その姿を消してしまつたのである。息を飲む美波。何度見てもポケモンが消える所は

すごいものだと、ポケモンを持たない彼女は別のところで驚いてしま
う。

やがてひとしきり満足をしたのかボールから出てくるフェーヤ。
その体を猫のように伸びをさせ、クワアとあくびをするフェーヤ。彼
の様子から察すると随分と居心地のよい場所であった事は確からし
い。

「どうでしたか、フェーヤ」

「キュウア！」

「ダー、それは良かったです！」

ただ2, 3つ言葉を交わしただけで通じ合う二人。ただそれだけで
理解しあったのだらう。やはりここで注文して良かった、そう思った
アナスタシアは夫人に対して向き合った。

「とっても素晴らしいです、ありがとうございます」

「気に入っていただけでなによりだわ」

心底からの笑みを浮かべるアナスタシア。そんな彼女の笑顔に二
人の女性もまたつられて微笑んでしまう。その後は3人の女性は姦
しくトークに華をさかせるのであった。ポケモンを通じたふとした
友情の芽生え。その後、その店がアナスタシアとフェーヤにとって一
番のお気に入りとなった事は言うまでもないだろう。

【白坂小梅とジュペッタ】

その人形はゴミ捨て場に捨てられていた。全身が擦り切れてボロボロになっていたその人形。彼の体は、血やら泥やらよくわからない汚れに塗れていた。それをじつとみつめる小学生の少女、白坂小梅。

「……」

ぼーと何かに魅入られるようにそれを見つめ続けてしまう。それはホラーが好きな彼女にとってあまりに魅力的に映ったのだ。

怖いのである。全身が1.1mとかなり大型なその人形（ぬいぐるみ？）は全体が薄汚れた灰色をしている。ずんぐりとした胴体からは尻尾が生えていた。何よりも特徴的なのはその頭部であろう。

血走ったような真紅の目玉がぎよろりとこちらを睨んでいるのだ。その口もまた怖い。金属製のジツパーのようなものがその大きな口に縫い付けられているのだ。怪奇映画に出てくる殺人鬼を彷彿とさせる顔でもあった。

正直言つて可愛くないデザインである。その証拠にこのゴミ捨て場は住宅街の通り道であるはずなのに誰一人その人形に注視しようとはしていないかった。道ゆく人々はそそくさと立ち去っていくし、その人形を見た小学生の少年少女達は、皆が悲鳴をあげて逃げ去っていくほどだった。

アニメキャラのグッズだと思われるのだろう。そのデザイン醜悪さに眉をひそめる人々。休日の貴重な時間を無駄にはしまいと人形を無視するかのよう帰宅していくのであった。ゴミ捨て場にその少女は佇んだ。

「……」

ふとその人形に近寄ってみる小梅。物凄く精巧につくられたその人形からは生命の息遣いが感じられた。まるで今にも動き出しそうな程の現実味を感じる。くんくんと匂いを嗅ぐと、その体からは錆びついた鉄くずと鮮血のような独特の匂いが感じられたのであった。

「……誰にも見られてないかな？」

周囲を見回す彼女。幸いこのゴミ捨て場は彼女の自宅からそう離

れてはいなかった。また今日は土曜日の半日授業が終わったばかり。時間も猶予もたっぷりであった。じりじりと照りつける午後の太陽の下、彼女は思わず長考してしまう。

「……いっ」

ぼつりとつぶやく小梅。そう、彼女はこの人形が欲しくて堪らなかったのである。この醜悪な血と呪いのオーラが、ホラー映画さながらの不気味なデザインが、堪らなく彼女の琴線に触れてしまったのだ。

白坂小梅は大のホラー好きである。それはもう愛してやまないと言っても過言ではないだろう。なにせ小学生にして趣味がホラー・スプラッタ映画鑑賞・心霊スポット巡りと言った筋金入りのホラーマニアなのだから。英才教育にもほどがあるだろう。

そんな彼女にとって眼前の存在はまさにファンタジーが飛び出してきたようなものである。鼻先ににんじんをぶら下げられた馬、ハリウッドスターを目前にしたOLのような物である。つまり、彼女は興奮していたのだ。

瞳をきらきらと輝かせる彼女。そつと人形に寄り添って抱きしめてみる。するとぷにゆりと名状しがたき感触が彼女を包み込んだ。生暖かい人肌の温度、同時に背筋をぞくりと刺激する恐怖の感覚。小梅はぞくぞくと己の体が反応する事を抑えられなかった。

「い、いいかな……本当にいいのかな……？」

他人のものを盗むのは良くない

でも…ゴミ捨て場にあったものだし良いのかも

当時小学生であった彼女。倫理観といった物をよく理解できていなかった彼女はつい誘惑にまけてしまう。その人形を抱きしめた彼女はいいそいと帰宅していくのであった。

いけないことをしている、という罪悪感をひしひしと感じながらもその人形を手放すことができなかつたのである。こうしてジュペッタと呼ばれるぬいぐるみポケモンは白坂小梅の自宅へと連れられていくのであった。

幸い何事もなく自宅に到着した小梅。ほっと息をついた彼女はそのままその人形を見下ろした。自身の体のように大きなそのボディは全身がぼろぼろであったし、なにより血と泥で汚れきっていたのである。フローリングに垂れていく汚れを見つめる小梅。

「まずはお洗濯…なのかなあ…?」

可愛らしい小顔をかしげて思案する彼女。血と泥にまみれた姿も素敵であったがやはり人形だ。清潔な方がこの人形も嬉しいだろう。そう考えた彼女は彼をお風呂場へと引きずっていった。

大きな浴槽の中に人形を押し込む小梅。そうして今だに寝ぼけたままでいたその人形に対してシャワーをかけ始めた。そのシャワーはゴミ捨て場で安らかに眠り続けていた彼にとつてこの上なくはげしいモーニングコールとなって降り注ぐ。そのぬいぐるみポケモンの第一声が浴場に木霊した。

「グゲエ!」

「うん…今何か声が出た…?」

お風呂場に響く悲鳴のような声。だがその小さな声はシャワーの水音によつて掻き消えてしまう。きつと空耳だろう、そう考えた彼女はその人形の顔面に向けてシャワーをかけるのであった。最大出力で、思い切りぶつかけた。

「~~~~っ?!?!」

「うん、キレイキレイ…」

徐々に綺麗になっていく身体に対してにつこりと微笑む小梅。その笑顔は100パーセントの善意から来る物であった。弾けるような笑顔であるのが尚更たちがわるかった。ぐぼぐぼと押し込まれていく激流に身動きがとれない人形。そんな彼の口に石鹼が突っ込まれた。

「っ!」

「お口も…綺麗に…」

ぐしぐしと無理やり押し込まれた石鹼に対して驚愕する人形。呆然としている間に泡立っていく己の口内、および全身の感覚に恐怖

していく。生涯で初めての感覚に思わず呆然と固まってしまふ。硬直した人形の身体を彼女は端正込めて洗っていくのであった。

その小さな手で丁寧に洗浄を続けていく彼女。やがて彼の体から血と泥のよごれが落とされていく。そうして彼の体は見違えるように綺麗になっていくのであった。

ようやく終わりか。全身がくたくたになった彼は手足を動かさないまま呆然と床に寝転ぶ。手足を投げ出してぐったりとする彼。だがそんな彼に対して少女の無慈悲な言葉がかけられた。

「えーとこの後は…脱水と乾燥…だったよね？」

「…？」

洗濯という名の大事業を行われた彼。彼はぐったりとしたまま呆然と彼女を見上げた。今この少女はなんと言ったのだろうか、その言葉を反芻するぬいぐるみポケモン。ダツスイとカンソウ…？

ポケモンである彼にとって聞いた事がない単語であった。びちよびちよになった彼に対して小梅は優しくタオルをあてがった。にこりと微笑む少女は彼の体をぎゅつと抱きかかえる。やがて彼は理解する。その意味と恐ろしさを、その身をもって理解する事になる。

「グギャアっ！」

「これで綺麗になるよね…よかったねお人形さん」

ドラム型洗濯機へと閉じ込められてしまふ彼。何が起こったかわからない彼は内心でパニックを引き起こす。一時的な『こんらん』状態へと陥る彼。その大きな体を折りたたまれるようにして入れられた真つ暗な空間。ぽつぽつと開いた穴、押してもびくともしないふた。全てが味わった事のない恐怖の対象であった。

え？

冗談でしょう？

そんな驚愕の表情をするジュペツタ。全身で嫌な予感をひしひしと感じてしまふ。まるで、ほろびのうたをアリーナ席で鑑賞させられるピッピのような心境。そうして彼にとって拷問の時間が始まった。始まってしまった。

『グギャアアアア?!?!?』

「脱水は三回：乾燥モードは3時間：…つと」

『ゴツポオ！グギイ〜っ?!』

「えへへ：お人形さんが手をふっているみたい」

恐怖からドラム洗濯機のふたにすがりつくジュペッタ。ふっているみたい、ではなく全力で千切れんばかりに手をふり乱しているのだが、どうやら蓋の向こう側が曇っている為かよく見えならしい。小梅もまた誤認したまま満面の笑みで手を振った。

ここで擁護しておきたい事は彼女がまだ小学生であったという事である。家事もろくにおこなった事のない少女が善意からおこなった行動であるのだ。彼女は紛れもなく善性の人間であり、優しさを持つ少女なのである。

まちがっても彼女自身が猟奇的な行動をしたくてこのような行動をとったわけではないのである。綺麗にしたいからといってこのような所業は絶対に行ってはいけない事も確かであるが。

人形（ぬいぐるみ）はその素材にもよるが基本は手洗いか陰干しを行うべきなのである。まちがっても浴槽にぶちこんで洗濯機で乾燥をしてはいけない。

肉体がこの上なく頑丈であり、縮小化という性質を持つポケモンだからこそ耐えられた苦行であろう。繰り返すが決して大切な物を洗濯機にぶちこんではいけないのである。それは人形でもポケモンでも生命体でも禁忌の行為なのだから。

こうして白坂小梅はこの世界において初めてポケモンを洗濯機にぶちこんだ少女となったのであった。その後洗濯機から取り出されたジュペッタは半日ほど白目をむいたまま気絶していたようである。

【白坂小梅とジュペッタ2】

『こんなブサイクな人形要らないもん!!』

それが彼の原初の記憶であった。ゴミ捨て場で目覚めた彼、ジュペッタが唯一抱いていた記憶であった。わんわんとなく少女。贈り物として購入してきた父親の困惑する顔。ただのぬいぐるみであった彼の魂を虚ろな記憶となつて駆け巡った。

そうして彼はゴミ捨て場で目を覚ます。ぬいぐるみであった彼は新たな身体、新たな魂を得て転生をしたのだ。ゴーストポケモン『ジュペッタ』として

ジュペッタとはぬいぐるみポケモンである。捨てられたぬいぐるみに怨念が宿り生まれるとされるポケモン。このゴミ捨て場にいた彼もそうして生まれた。なんらかのポケモンが人形に寄生したのか。或いは別の時空からやってきたのか。何故産まれたのかは誰にも分からない。

ただ在るのは身を焦がすような憎悪だけであった。記憶の中にある少女を思い返すジュペッタ。そうして彼はニタニタと笑いゴミ捨て場を後にする。月夜の下を這いずる1・1mのぬいぐるみ。目的地は無論、少女の家であった。

醜い

汚い

恐ろしい

捨てられた玩具が持つ負の感情。それこそがジュペッタの原動力と言つてもよい。そうして自我を得た彼らが最初に行うのは…自らを捨てた子供達への復讐であるとも言われているのだ。憎悪こそが彼らの原点であり、最大のエネルギーでもあるのだから。

『ウケケ』

にたにたと笑う彼。自身の身体を愛おしげに撫でる。血走った目玉をぎよろぎよろと動かす彼。口をあんぐりと歪ませ恐ろしい笑顔を見せた。にたにたと笑いながら真赤な瞳で空を見上げた。子供が

見たら泣き出してしまいそうな程の、恐ろしい表情と共に。

ああもう少しだ。午前2時、何もかもが寝静まる時間帯をのそのそと歩いていく。閑静な住宅街を歩く一匹の呪い。彼は二階の窓へと手をかけた。そうして彼は渾身の力を込めて窓ガラスを叩き割る。

ガラスの割れる音、それにより少女はベッドから飛び起きる。目を見開いて驚愕する少女。彼女は全身をがくがくと震わせて彼を見つめた。憎悪と恐怖をごちゃまぜにした感情。ああその表情だ。恐怖が彼の中の何かを満たしていく。充足感を感じるジュペッタ。そうして彼は少女へと迫りー

『ウケケケ、クギギイイイ』

『ああ…う、うそ…』

『グギイヒヒヒ!!』

湧き上がる少女の悲鳴

駆けつける住民の絶句

血と泥に塗れる己の身体

こうして事件は発生した。駆けつけた警察官に対して一家の人間は「大きなぬいぐるみに殺されかけた」と主張する。恐怖で震える家族に対して警察官は事情を聴き始めた。後にこの日の出来事はポケモンが広まる以前の、多くある怪奇事件の一つとして扱われる事になる。

そうして一匹のゴーストポケモンは夜闇へと消えていった。一家と一人の少女に生涯消えぬトラウマを残して。彼と小梅が会う5日前の話である。

ハッと気がつくジュペッタ。どうやら夢を見ていたらしい。脳内を巡る原初と恐ろしき拷問の記憶を振り払うように、彼は頭をぶんぶん横にふった。そうして自身がいるであろう環境を見回した。

それは少女の部屋であった。全体的にホラー基調のその部屋。壁

にはホラー映画のポスターが貼られ、天井からは二匹のゾンビが中指を立てて肩を組んでいる写真が見えた。あまりにも独特なセンスであると言わざるを得ない。

そうして彼は自身が小さなソファの上に大切に飾られている事に気がついた。時刻は深夜、くだんの少女はすーすと穏やかに寝息を立てているらしい。そんな少女を見つけた瞬間、彼の中で悍ましい程の憎悪が膨れ上がる。

「ウケケケ」

どうやらドラム式洗濯機による乾燥がよほど堪えたらしい。彼はぞつとする程の笑みを浮かべて少女のもとへとすりよった。許さない、許せない。くたびれた体に再びエナジーが充填されていく。そうして彼は自身に湧き上がる憎悪と共に少女へと近寄っていった。

「ウケケケケ」

口元のチャックに手をかける。そうして中から溢れ出た物は…地獄のような呪気であった。オカルトマニアが絶対に開けてはならないとまで主張する程の、この世の憎悪を煮詰めたような悍ましい呪いのエネルギー。

常人が見ては発狂するとまで言われる程の負のエネルギーを溢れ出しながら彼は笑った。首を捻じ曲げて悲鳴をあげるように笑った。うらみを発動させながら全身をひきずるように歩く。それはゾンビさながらの恐怖であった。

ホラー映画に耐性が無い人間が見たならば恐らく20年は引きずるであろう、そんな光景であった。

「…うう？…な、なあに…」

瞳をこすりながら覚醒する小梅。そうして寝ぼけた彼女はそのままベッドの端へとすりよる恐怖の権化を目の当たりにする。してしまう。目を見開いて驚愕する小梅。口を大きく開いたまま少女は固まった。

全身をがくがくと震わせる少女を見ながら彼はまた憎悪を膨らませる。ああどうせこの少女も同じかと、絶望を抱きながら彼はまた近寄っていく。そうして少女の顔の目前まで迫った。小梅の顔の数セ

ゴルフクラブによって抉られた顔面。飛び散る自身の目玉。言葉もろくに話せない彼は必死で少女にすがりよった。死に物狂いで手を伸ばす彼。そんな彼に対して与えられた物。それは少女からの怯える視線だけであった。

化け物と罵られた彼は

必死で身を守ろうと身体を縮こめるだけであった

ポケモンは生まれたばかりでは技をだせない。それ所か他の個体に比べて戦闘力も著しく劣るのである。戦いや進化、食物の取得などの方法を親や他の個体から教えられるからである。生後数時間程度しか経っていない彼では縮小化すら上手く出来なかったのも無理はない話であった。

その後も少女の父からバットで暴行を受ける彼。全身をこなごなに碎かれた彼は死に物狂いで逃げ出したのだ。割れた窓から窓下の川へと飛び込んでいく。激流に身を流されながら彼は人知れず涙を流した。

少女の寝室へと忍び込んだのも

少女に会いに行ったのも

全ては愛されたかっただけなのに

エネルギーが尽きかけた彼はようやくたどり着いたゴミ捨て場で休息を取る。食物も、その取り方も知らなかった彼はそのまま永眠するだけであったのだ。そう、彼はあのままゴミ捨て場で死ぬだけであったのだ。身動きすら取れなくなった彼を少女が引き取った事が運命的であったのだろう。少女の愛とドラム式洗濯機が彼の魂に再び火を灯したのである。

「ジュペ…ジュペエ…っ」

ぼろぼろと涙をこぼすジュペッタ。それがぬいぐるみとして生まれた彼の願いであったから。生まれてきてよかったと、今なら心底から思える。わんわんと涙を流しながら少女を抱きしめ返すジュペッタ。その涙をひとりの少女は受け止めた。

誰からも拒絶された恐ろしいぬいぐるみは

一人の少女から愛されるようになったのだ

手を取り合って喜び合う彼ら。彼の身体からは、柔軟剤のふんわりとした良い香りが漂うのであった。

青木慶とマンキー

野球場のように拓けた空間、その土手広場の一角に設けられたバトルフィールドには観客達があった。老人達が茶を飲んでいたり、近所の子供達が熱い眼差しでそのバトルを見守っている。プレーヤーである少女が声を張り上げた。

「ブーちゃんーちようはっー！」

青木慶の命令する声。その声に反応し彼女の相棒、マンキーは中指を立てて相手をちようはっし始めた。にやりとほくそ笑むマンキーに対して、対戦相手に在るゴローンは反応してしまう。

鼻息をあらげて突進してくるゴローン。そんな中、マンキーは冷静に攻撃を見極めて攻撃をよけていた。ぶたざるポケモンらしく軽々とした身のこなし。鼻歌まじりに攻撃をかわすマンキー。

「ブーちゃんーフィールドの端に移動してビルドアップ！」

「ゴローンー！慌てずにいわおとしだ！」

口に手を当てて大声を出す慶。そんな彼女の声にすかさず反応したマンキーは素早く移動を開始する。対戦相手である中年男性もまた指令を下す。だがすばやさが低いゴローンは敵の動きに対応する事ができないでいた。

仕方なくその場で岩を生み出してはマンキーに対して投げ始めるゴローン。しかし距離があるためか岩は一向に当たらないでいる。そんな10秒足らずの攻防の間に、マンキーはすっかり準備を整えていた。

「ブーちゃん、行けるよね！」

「ブー!!」

相棒からの言葉に力こぶで答える彼。ビルドアップにより、彼の肉体はむきむきと力が滾っているようだ。腕の筋肉がはち切れんばかりに膨らんでいる。準備は整った、そんな彼を見た慶はすかさず命令を下す。

「いくよーとどめの……インフアイトツ!!」

パァン！

弾けるように飛び出した一匹の弾丸。そうして彼はその丸い身体を全力で走らせては相手に拳を叩きつけた。ライフルのように激しい衝撃音。それと共にダメージを受け顔を歪ませるゴローン。そんな彼に対してマンキーは、激雨のように拳を浴びせ続けた。

激しい攻撃の数々。7発目の連撃と共にゴローンは倒れた。湧き上がるギャラリーの歓声。町内会の人々の声援を背に、レフェリーは大声で宣言をした。

「ゴローン戦闘不能！マンキーの勝ち！」

—————

「やったねブーちゃん！」

「ブー！」

抱き合う女性とマンキー。彼女達は汗や泥も気にせず駆け寄っては互いの健闘を称え合った。お疲れ様と彼の身体を労わる慶。そんな彼女からのいたわりに瞳を閉じて感じ入るマンキー。どうやらお互いに良い信頼関係が築けているようだ。

勝利した彼女達をもてはやす観客達。近所の男の子達が大はしやぎする中、一人の男性が彼女達へと歩み寄ってきた。作業服に身を包んだ40代程の男性。タオルを首元に押し付けながら彼は語りかけた。

「いやーまいった、慶ちゃんには敵わないなあ」

「わたし、じゃなくてブーちゃんも一緒ですよ？」

「おっとそうだった。ブーちゃんも強いなあ」

中年男性もまた、慶とマンキーの健闘を称えた。悔しそうに、けれど誇らしげな顔をする彼はカバンへと自身の相棒をもどしながら彼女と会話を続けた。

「もうこの町じゃ誰も慶ちゃんには敵わないなあ」

「えへへ、けどお姉ちゃん達はもっと強いんですねえ」

「そーういや四姉妹だったなあ。うんうん、強くて美人とは最高だ！」

男性のガハハという笑い声に苦笑する慶。ジム通いとポケモンバトルが趣味である彼女。彼女の相棒であるマンキーもまた身体を動

かすバトルが好きなのであった。なので、彼女達はこうして休日にはポケモンバトルに勤しむのであった。

談笑をする二人。そんな彼らの目前ではまた別のポケモン達がバトルを繰り広げようとしていた。短パンをはいた小僧がビードルを出す。そんな光景を横目に慶はそつとマンキーの額を撫でてあげた。

バトルを行うことはポケモン達にとって虐待ではないか、と考えられていた時期がある。激しい技の攻防、毒や麻痺といった状態異常は身体へと過酷な負担をかけるのではないかとする考え方である。現に、今でもこうして主張する人間も中には存在する。

しかし最新の研究結果により

これは否定されているのであった

ポケモン達にとってバトルとは運動なのである。犬に散歩をさせる事に近いと言えるだろう。適度な散歩は犬のストレス解消につながるし、ひいては彼らの健康の為にもなるのだ。

ポケモン達にとってバトルとは至上のコミュニケーションツールでもあるのだ。餌や住処を求めて何千年も戦ってきた彼ら。敗北、痛み、勝利、それらを通して群れの仲間とコミュニケーションを築くのだ。

他者との闘争が自身の中で経験値となって積み重なり、やがては新たな技や更なる進化へと繋がっていくのである。ポケモンは戦いの中で己を高めていると言い換えても良い。故に適度なバトルはむしろ必要である、とするのが現在の科学的な見解であった。

ポケモンにとって人間とは成長を促してくれる存在なのである。一方的に使役される隷属関係ではなく、利に則った共存関係であると言えるのだ。だからこそ人間とポケモンはそこから信頼関係を構築する事ができるのである。

無論、バトルを好まない種族や性格といったポケモンも存在する。どの程度のバトルが必要なのか、彼らが進化を望むか望まないか。そういう事は互いのパートナーとよく話し合う必要があるのである。

「とまあそんな訳でタバコ屋の婆さんがな？」

「あつごめんなさい：そろそろ事務所の方に行かなきゃ…」

苦笑する慶。近所の話題をふつてくれる男性には申し訳ないが、彼女もまたこれから仕事へと向かわなければいけないのであった。長話をさせてしまったかと苦笑いする男性。彼は謝りながらテントの方へと歩いて行つた。

「お疲れ様ブーちゃん、あとは休んでいてね」

バトルの疲労と男性の長話で眠ってしまったているマンキー。彼をせなかにおぶりながら慶は急いで帰り支度を始めた。バッグに必要なものをつめ、彼にそつとボールを押し当てる。静かに玉の中へと収まっていく彼の姿を確認した彼女は急いで346プロダクションへと向かった。

青木慶、別名ルーキートレーナーと呼ばれる彼女。彼女は今日もまたアイドル達のトレーニングをサポートするのであった。いつの日か最高のトレーナーと呼ばれることを夢見て。

第3章

遊佐こずえとヤドン

「…………ふわぁ」

「……………」

あくびをする遊佐こずえ。彼女は事務所のソファに寝そべってはじっと天井を見つめていた。その横で微動だにしないヤドン。ヤドンもまたぼかーと口を開けては共に天井を見つめていた。

大きさは1.2mとかなりの巨体である。しかしヤドン自身はまぬけポケモンと呼ばれるほど愚鈍でのろまなポケモンなのであった。そのピンク色の体につぶらな瞳をしたヤドン。ぷにっとした湿り気をおびた肌をそつと主人に撫でられる。いつもながら極上の触り心地なのであった。

「…………やーくん?」

「……………」

「……………」

「…………やぁん」

蕩けるような甘い声。というよりは気の抜けるような声をだして自身のポケモンに語りかける。革張りのソファの上で共に抱き合っただまま寝転びあう彼女達。主人の言葉に5秒ほどたっぷり時間を開けて、ヤドンは返事をした。

尻尾をゆらゆらと揺らしながら口をパクパクと開閉させているヤドン。昼間に食べたカレーライスの味でも思い出しているのだろうか。手と足をだらりと投げ出して口をパクパクもぐもぐと動かしていた。本人は何も食べていないのである。

「…………さつきねー…おもしろいゆめがみれたのー…」

「…………やぁん」

「…………それでねー…えつとねー…うーんと…」

「……………」

「…………忘れちゃったー…」

「…………やあん」

漫才でもやってるの？

そう問いかけたくなるようななんとも気の抜けたやりとり。だが本人達はいたって真面目らしい。ぽわぽわとした表情のままゆーつたりと言葉をつむぐこずえ。そんな彼女に対してヤドンはお口をパクパクもぐもぐと開閉させて答えていた。

「…………やーくん…」

「……………」

「…………それ…ちよーだい？…」

「……………」

「……………」

「…………やあん」

「…………けち…」

ヤドンが抱えていたバッグを指差すこずえ。どうやら中身のオレンの実をおやつ代わりに欲しがったらしい。しかしヤドンはたっぶり3秒ほどかけてゆつくりと返答をした。先ほどからまるで声に抑揚がないヤドンの返事。それでもこずえにはその内容が分かるらしい。

やんわりと拒否されたこずえはほおをぷくーと膨らませていじけてしまう。けれどそれもほんの数秒のことである。ソファの上でころんと寝返りをうった彼女はまたぼーと天井を見始めた。

事務所の天井に設置された大型ファンが回転をする。そのプロペラが回転をする様をじつと眺めながら一人と一匹は静かにまどろんでいた。ぎゅつとヤドンを抱きしめるこずえ。そのぷにぷにとした触感。もちもちとした感触は極上の抱き枕となって少女を癒す。

ちなみにこのヤドンは雌である。雌であるがやーくんなのである。本人に理由を聞いたところ『やーくんはやーくんだから…やーくんなのー…』との事であつたらしい。よく理由がわからない、と言つてはいけない。

ともあれ本人達の相性は抜群なのであつた。このおつとりとした雰囲気の一人与一匹はこうして仕事の終わりにだらだらとするのが

趣味なのであった。空調の効いた部屋でまったりと時を過ごす少女達。

「……やーくん……おひるねー……」

「……………」

「……………しよー……」

「……………」

「……………」

「……………やあー」

「……………」

「……………」

「……………すうー……すうー」

「……………」

ヤドンの返事がきつかけとなったのだろうか。再び眠りだすこずえ。ヤドンを抱き枕のように抱えたまま瞳をとじる。もちもちとしたお腹に顔をつけた彼女はすぐさま寝息を立て始める。

ヤドンもまた口をぽけんと開けたまま固まった。そのまま200秒近く呆然とするヤドン。そうしてゆったり…ゆつくりとまぶたを落としていく。7世代程古いパソコン並みの時間をかけてゆつくりと意識をシャットダウンさせていく。

やがて瞳を完全にとじたヤドン。彼女もまた静かに寝息を立て始めた。すーすーと昼寝を堪能する一人と一匹。そのふわふわの髪をくすぐったそうに受け止めるヤドン。なんともほのぼのとした光景がそこにはあった。

神谷奈緒と捨てられた野良ポケモン

雨が降りしきる中、それを見つけてしまった神谷奈緒。ハツとしたように傘をさしたまま彼女は固まってしまう。公園の片隅、公衆便所のすぐそばにそれはあった。大きさ数十センチ程度の茶色いダンボール。その蓋が閉じられたダンボールがごそごそと動いていたのだ。

「あれって…」

傘をさしたままつぶやく奈緒。学校帰りである彼女は制服に身を包んでいた。彼女自身もこの豪雨の中を早く帰ってしまうと急いで帰宅していた所なのである。その最中に見つけてしまったのだ、捨てられているそれを。

雨によつて濡れてしまったダンボール。ふにやふにやに閉じられたその中からは動物の怯えるような鳴き声がしていた。ガタガタと震えるその箱の中身は十中八九なんかの生物であろう。その生物は鳴き疲れたのだろうか、ガラガラと枯れた声で必死に助けを求めている。

「捨て猫かな…」

足を止めて思案する。自動販売機の軒下で戸惑うこと数分。おろおろと周囲を不安げに見つめる彼女。当然このような豪雨である。周囲には人の影すらなかった。その生物の鳴き声を聞く事ができたのも偶然そこを通りかかっていた彼女だけであるようだ。

今朝見た天気予報ではこのような雨があと数日は続くらしい。つまりあの中の生物は運を悪くするとこのまま数日間放置され続ける事になるだろう。誰に発見されることもなく、一人寂しくダンボールの中でずっと――

「あーもう！見捨てられないだろ!!」

そこまで考えてぐつと決意を固める奈緒、気がつけばそのダンボールに向けて歩いていった。このような豪雨である。そんな中動物を放置しまま放つて置く事など心優しい彼女にはできなかつたのだ。

このような時代である。能力を持ったポケモンは優遇されペット

として飼われる事も社会でだいぶ浸透してきた。しかし一方でこれまで愛玩生物として扱われてきた犬や猫といった普通の生物を捨てる事案も増えてきたのである。

血統書付きの犬や猫といった需要も今だに高い。が、能力を持たぬ雑種は冷遇されているのが現状であった。

動物の不法投棄は数年前まで大きな社会問題となっていたのだ。法改正、慈善団体によってだいぶ数は減ってきたはずなのだが、それでもやはりこのような事案は発生してしまうものなのだろう。

「……………」

「よしよし…大丈夫だから…」

しゃがみこみ穏やかに声をかける彼女。雨が降りしきる中、公園の便所に座り込む女子高生。しかし彼女は一向に気にする事はなく誠意を込めて声をかけ続けた。そっとダンボールに触れる。雨に濡れた指先からは中の生物の怯えるような挙動が感じられた。

もしも捨て猫であるならば一時的に保護をしようと決めた彼女。幸い自宅もここから五分と近くに在る。暖かい場所と食事を用意してそれから保護団体へ電話をしようと考えた彼女はそのままダンボールへと話しかけた。

依然として閉じられたダンボールはぶるぶると静かに震えている。傘をダンボールへとかけて雨に打たれないようにしてやる奈緒。そうして彼女はそっとダンボールの上部に手をかけた。

「よし良い子だ…とりあえず暖かい場所へ…ええっ!?!」

穏やかな声から一変、息を飲むような驚愕する声を出してしまう奈緒。つい、手にしていた鞆を落としてしまう。地面に座り込んでしまった彼女。奈緒はその眼前にいたポケモン、雨に打たれてぶるぶると震えているイーブイを見て呆然としてしまう。

「ね、猫じゃなくて…ポケモン…っ!?!」

目を見開いて驚愕する奈緒。そんな彼女を怯えるような眼差しでそのイーブイは見上げていた。頭部に手を当てて縮こまるように怯える彼。そんな彼らを豪雨がふりしきる音が包み込んだ。

（連れてきてしまった…）

お風呂場で佇む彼女。自身の目前で嬉しそうに瞳を閉じるイーブイを眺めてやってしまったと後悔をする。しかし仕方ない、ポケモンであるのは色々と予想外であったがあのままでは死んでいたかもしれないのだから。

黄色いひよこがマークされたエプロンを身につける彼女。そんな彼女は腕まくりをして浅く湯を入れたバスタブに浸かるイーブイに優しくシャワーをかけてあげるのであった。

震えて衰弱死しかけていたイーブイ。彼を自宅に連れ込んだ奈緒がまず行つた事は食事であった。ポケモンは頑丈な生物である。実は病気や怪我といった事で死ぬ可能性は低く、それ以上に多いのが餓死なのである。きちんとエネルギーの管理、補給さえ行えば彼らは持ち前のタフネスでみるみる回復する事ができるのだ。

以前テレビで視聴した内容を思い返した奈緒は急いで戸棚からスーパード安売りをしていたばんぐりを持ってくる。人間やポケモンのおやつとして安売りされていた食用のボングリ。青い色をしたその拳大の木の实におそろのおそろるかじりつくイーブイ。もしやもしやと遅く、けれどもしつかりと咀嚼してイーブイはそれを味わつた。そんな姿を見てようやくやくほつと一息つく奈緒なのであった。

その後彼を浴室のバスタブへと連れてきたのが15分ほど前の事である。最初こそ怯えていた彼はぬるく温められた湯につかると心地好きそうな声をだし始める。今ではバチャバチャとまるで子供のように嬉しそうにはしゃぎ始めたのであった。

よかつたと安堵する奈緒。ほつと胸に手を当ててため息をついた彼女はそのままシャンプーが収められた浴室棚を見る。三段に分けられたそれには普段から彼女が愛用していた頭皮用のシャンプーやらボディソープやらが収められていた。

ドラッグストアで購入した自身の鼻屑メーカーである新商品。そ

のボディソープに手をかけた奈緒ははつとその手を止めて思案した。「シャンプーは…人用のだとやっぱりマズイのかな？」

「ブイ？」

「ああうん！な、なんでもないぞ！」

そんな彼女の困った顔に反応をするイーブイ。どうかしたの？と言わんばかりにきよとんとした顔で見上げるその顔。その可愛らしい顔に思わずきゅんと反応をしてしまう奈緒。

可愛い

あまりにもつまらない感想を抱いてしまう奈緒。彼女は顔を赤くしたまま石鹸を探し始める。だが、それも無理はない反応であろう。可愛いものが好きな女子高生らしい反応である。ましてやイーブイはそのルックス、愛嬌から人々に絶大な支持をされる程の人気の有るポケモンなのだから。

これまでろくにポケモンに関わった事のない奈緒ですらテレビで何度もイーブイを見てきた事があるのだ。テレビで特集されるそれをああ可愛らしいなと思いつながら何度視聴した事か。しかも実物がこれほど可愛らしいとは到底思っではいなかった。高鳴る胸を抑えて必死に我慢をする奈緒。

（ただ保護しただけだ！愛着を持ったらだめだ！）

そう考える奈緒。けれどそんな覚悟も横目でちらりと見た彼の可愛らしさには敵わなかった。自身の尻尾をかみかみと甘噛みする彼のなんと可愛らしい姿か。硬い決心がぐらりと揺らいでしまう。

しかし彼女はアイドル候補生である。自身もアイドルになる事を夢見てレッスンに明け暮れる日々を送っているのだ。正直言っただけなら忙しい日々である。女子高生として学校にも通わなければならぬ以上、彼の世話ができるとは到底思えなかった。

ましてや法律の問題もある。住居内で飼うだけならば役所へ申請すればよいがもしも外へ連れ出したいとなるとトレーナー資格やら資格試験やらと様々な手続きを踏まなければいけないのだ。これもまた何年も前に法律で定められた出来事であった。シャワーヘッドを片手にため息をつく彼女。

「試験やらは勉強すれば案外簡単らしいけど…現実的じゃないよなあ」

「ブーイ！ブーイ！」

「ああもう！体にひつつくなよ、濡れちゃうだろ」

体にひつついてくるイーブイをしかる声。けれど言葉とは裏腹にその表情はにこやかであった。ほおを緩ませながら見入る彼女。その可愛らしい姿を見た彼女は抱きしめたくなる衝動に襲われてしまう。

ごくりと息をのむ彼女。その誘惑に負けてしまいそうになりながらも、彼女は懸命にこらえて石鹸による洗浄作業を終えた。泡まみれになった体をシャワーで洗い落としていく。すると雨と泥でよごれた体は見違えるように綺麗になっていく。作業を終える頃にはすっかり彼の体は清潔になっていた。

良い香りのする自身の体に興奮するイーブイ。嬉しそうに尻尾をふる彼の姿を眺めながら奈緒は複雑な表情をして考え込んだ。家族がいる、アイドルとしても女子高生としても自身は忙しい。

そんな自分ではこのポケモンを飼って幸せにしてやる事などできないだろう。ならば穏やかに、幸せに暮らせる人の所へいくべきだと。

やはりかわいそうだが保護団体に連絡しよう

それか誰か飼ってくれそうな人を探そう

そうして自身の決意を固めた彼女はそつとイーブイを引き離した。かわいそうだがここで愛着を持つのはお互いの為にならない。そうしてタオルをふいてひとまず浴槽からあがるかと考えたところである事に気がついてしまう奈緒。

「うん？なんか違和感が…」

そうして彼女はそつと彼の前足を覗き込む。ハッと息を飲む奈緒。そうして彼女は気がついてしまった。彼の前足、その指の一本が欠けている事に。

小日向美穂と白坂小梅

『幽霊なんていないよ』

それはローカルテレビ番組の収録での出来事。同じプロダクションに所属しているもののそれまで接点がなかった小日向美穂と白坂小梅。二人は地方のとある心霊場所へと収録に来ているのであった。

真夜中のトンネル。そのあまりの怖さに震えて足が進まないでいた美穂。涙を浮かべてしゃがみこむ彼女に対して小梅はこう言い切ってくれたのだ。

小梅は震える美穂の手を引いてずんずんとトンネルの中へと歩いていった。その外見に反した格好よき。思えばこれがきっかけとなったのだろう。この収録をきっかけに彼女たちはプライベートでも連絡を取り合うようになったのだ。

場所は変わる。そこは事務所のレクリエーションルームであった。事務所で申請をすれば短時間の間自由に使用できる空間。いくつかの革張りのソファが置かれており、部屋の端には大きな液晶モニターが付随されていた。

ここでは日々アイドル達が趣味や娯楽といった事を共に行う場所として活用しているのであった。この日もまた二人と一匹のポケモンはこの空間で待ち合わせをするのであった。

今日は彼女の好きなホラー映画を見ようと約束をしたのだ。正直怖い物は好きではなかった美穂。しかし娯楽として見る物だ、たまには良いだろう。そう考えた美穂はこうして休日のに最近できた友人と交友を深めるのであった。

「ぎゃあああああ!!!」

「ジュペエエエエー!?!」

小日向美穂の悲鳴が部屋中に響く。彼女は隣にいたポケモン、ジュペッタと抱き合うようにして絶叫をあげていた。ジュペッタもまた鑑賞しているホラー映画が怖くて仕方がなかったのだろう。彼は瞳

に涙を浮かべて悲鳴をあげていた。

ソファの上で抱き合う二人。そんな隣では、小梅が実に楽しそうな顔で映画を鑑賞しているのであった。柔らかいクッションを抱えて彼女はにこりと微笑んだ。

「うふふ…どっちも怖がりさん…だね」

小梅の嬉しそうな声。映画のエンドロールを横目に今もなお涙目でぶるぶると震えている美穂とジユペッタを見て彼女はくすくすと笑った。

「うう…怖すぎだよお」

「話題になったホラー映画…面白くなかった…?」

「面白かったけど怖すぎだよお!」

涙を浮かべて主張する美穂。彼女は取り出したハンカチで涙をぬぐった。まさかここまで怖いとは彼女自身思ってもみなかったのだ。彼女のすぐ隣には、ガクガクと震えるジユペッタが居た。彼もまた涙を流して美穂の洋服をぎゅつと小さく掴み震えるのであった。

「ジユペッタ君も泣いちゃってるよ?」

「ジユペエ…」

「ああほら泣かないで、良い子だねーよしよし」

優しく彼の頭を撫でてあげる美穂。彼女の柔らかい慈愛に満ちた表情、それによりジユペッタの恐怖が少しずつ和らいでいく。感謝の念を伝えてくるジユペッタに対して美穂はにこりと微笑んだ。

正直最初は恐ろしかった。ジユペッタを最初に見た時は内心でぎよつとした物だ。美穂は彼との出会いを思い返す。あのときはニタニタと笑う彼の姿が夢にでそうな程怖かった物である。

だがそれも昔の話である。今ではこのようにすっかり仲がよくなった二人。美穂はその過程を思い返してうんうんと頷く。彼の魅力に気が付いてからは引き込まれるように仲が良くなったのである。ギャップが可愛らしかったのである。

子供に怖がられると地味にシヨックを受ける姿。美味しいものが食事にでると瞳をきらきらと輝かせる所が妙に子供っぽくて可愛ら

しいのだ。まるで赤ん坊のように好奇心旺盛な所が美穂の隠れた母性を刺激したのである。

というかゴーストタイプの癖にホラー映画が苦手とは何事だろうか。恐ろしい程の隠れ属性である。誰よりも怖い見た目をしてるのに怖いものが苦手というギャップ。彼女は初めてギャップ萌えという言葉を痛感したのであった。

「でもなんでゴーストタイプなのにホラー映画がダメなんだろう？」

「おかしい…よね…ふふっ」

「うん、ジュペッタ君もゴーストタイプなのにね」

「サスペンスやスプラッター映画は好きなんだけど…」

「う、うーん…分かるような…分かりにくいような。でもジュペッタ君らしいかもね」

あははと笑いあつてお菓子に手を伸ばす。テーブルに個装されたドーナツに手をのぼしてはむと食す美穂。その美味しさに思わずほおがゆるんでしまう。そんな彼女につられて小梅とジュペッタもまたお菓子を食べ始める。3人は笑顔になって女子会を始めるのであった。

ジュペッタ曰くホラー映画は苦手との事。なんでも正体不明の物がよくわからない手法で脅かしてくるのが苦手らしい。けれどもホラー映画の中の一ジャンル、スプラッター映画やサイコ物は大好物なのであった。血や悲鳴が沸き起こる物は己の本能を刺激してくるから好きなんだとか。

ゴーストタイプとして生まれた彼であつたがその境遇はかなり特殊である。今だに他のゴーストタイプと接したこともない彼はその面では赤ん坊同然だからと言つてもよいのかもしれない。

台所の方へと向かつた彼のことを思い出してくすくすと笑つてしまふ美穂。そのギャップがまた可愛らしいな、だなんて事を思つてしまふ。彼女はお菓子をぱくりと食べながら小梅と会話を続けた。

「おかしいよね…笑っちゃうよ…えへへ」

「ゴーストタイプなのにおかしいよね」

「だよね…毎日あの子とお話ししてるのにな」

にこりと笑いながら会話をする小梅。そのサラサラとした金髪で右目を隠すという独特のファッションをした彼女。彼女はその子供のような可愛らしい顔で笑みを浮かべてー

うん？

ふと、違和感を感じる。会話の中に走ったノイズのようなものを感じてしまう美穂。認識のズレとでも言おうか。小梅と美穂の間でなにか重大な勘違いをしているような…そんな違和感が場に起きる。そんな事に気がつかず小梅は嬉しそうに会話を続けた。

「今度のお仕事は…新しいお化け屋敷に…行ってくるんだ」

「うわーすごいなあ！それってもしかしてお台場の？」

「うん、夏限定の絶叫おばけ屋敷…」

楽しそうに次の仕事の内容について話し合う二人。やはりそこは女子なのだろう。再び彼女達は楽しい会話に華を咲かせ始める。そんな彼女達のもとへ一匹のポケモンがお盆を抱えてやってきた。

「ジュペー」

トコトコとよってくるジュペッタ。可愛らしい歩き方で大事そうに何かを運んでくる彼。その小さな手で大事そうに抱えるそれはお茶であった。

きつと彼自身が淹れて来てくれたのだろう。彼が手に持っているお盆には緑茶が入ったガラスのコップが乗せられている。湯気を立てるその熱い緑茶。そうして彼は四つ分のお茶をテーブルの上に乗せはじめた。

「あははジュペッタ君ってばーお茶は四つもいらないよー」

「ふふっジュペッタはお茶目さんだね…」

笑い合う二人。この場には美穂と小梅とジュペッタしかいないのだ。きつと彼は数を数え間違えたのだろう。そう考えた美穂はくすくすと笑ってしまう。そうしてお礼を言った彼女は彼が淹れてくれたお茶に手を伸ばしー

「あの子は実体がないからお茶は飲めないよ」

手が止まった。

え？

キョトンとしてしまう美穂。そんな彼女の言葉にいつけないとばかりに手を額に当てて苦笑するジュペッタ。そんな彼の仕草にあははと笑う小梅。つられて美穂もまた引きつった笑みを浮かべる。

そうして何事なくお茶を飲み始める小梅とジュペッタ。そんな彼女達に美穂はあははと笑いながら話しかけた。

「あ、あの子だなんて…二人とも冗談がうまいなー！」

ジョーク混じりに言ってみる。この場には3人しかいないじゃない？そういう意味を込めた言葉であった。手が震えてしまう美穂。するとえ？と言わんばかりに小梅とジュペッタがこちらを向いてくるのではないか。その真剣な表情に美穂は思わずゾクリと何かを感じてしまう。ここに来てようやく、美穂は自分が感じて居た違和感を強烈に認識し始めていた。

「も、もしかして幽霊が…：…な、なんて居る訳ないよねー！あははー」

「？…：ごめんね…美穂ちゃんが何を言ってるのかよく…」

「二人がまるで幽霊がいるみたいに話すんだもん！幽霊なんていないって…あのトンネルのロケの時だって言ってたよね…？」

「トンネル…あの心霊場所のロケのこと？」

戸惑ったように答える小梅。汗が流れ始めるのを自覚する美穂。否定してほしい、そう言わんばかりに彼女は早口で言葉をつむぐ。いつの間にか手の震えは大きくなっていた。そうして彼女の言葉を聞いて絶句してしまう。

「あの場には居ないよって意味だったんだけど…：…な、何かおかしな事言ったかな？」

背筋の震えが止まらない

掛け違えた認識のズレを実感していく。まるで背筋に氷を当てられたような違和感。ここにきてようやく彼女は違和感の元を理解したのであった。ゴーストポケモン、ホラー好き。心霊場所の真偽を見抜く目。

美穂の中でバラバラだったピースが一つになっていく。もはや確信的であった。彼女は真っ青になった顔面で呆然と思索した。

(まさか…本当に幽霊が見えてー！)

頭を振って否定する

幽霊なんている訳がないと

「ゆ、幽霊なんているわけないよ!」

「幽霊ならいるよ…?」

「ど、どこにいるって…」

真っ青になった美穂。そんな彼女に対して小梅は小首を傾げながらこう答えた。

「いま美穂ちゃんの真後ろにいるよ」

高垣楓と喫茶店

それは実に美しい女性であった。店内にいる男性客は皆が視線を奪われる。からりとなつた喫茶店の玄関。そこにはまるで絵画から飛び出してきたかのごとく美しい美女がいた。彼女は嫺やかに歩く。その仕草に目が奪われてしまう彼女という存在が都内の喫茶店に潤いを与えるのだ。

ボブカットのふんわりとした髪。泣きぼくろを携えた彼女は実にセクシーであった。オッドアイというのだろうか？彼女は右目が緑色、左目が青色という実に珍しい瞳の色をしているのであった。落ちて着いた白を基調にしたワンピースを着ている彼女。

それらが彼女のミステリアスな雰囲気醸し出して居た。まるでこの世の存在でないような、ふわりと風で消えてしまいそうな。そんな儂い妖精のようなイメージを見るものへと与える。そんな彼女はそつと窓際のテーブル席に座つた。

「……………」

彼女は静かに店員を呼び止める。メニューを開きコーヒーを頼むその仕草。店員へのにこりとした微笑みはきつと世の男性を虜にしてしまうだろう。呆然として居た男性店員は彼女の注文を受けて静かにコーヒーの用意を始めた。

そうして彼女、高垣楓はほおに手を当てるのであった。瞳を静かに閉じて何かを感じ取るように思考にふける彼女。そのアンニョイな眼差し。何を考えているのだろうか。きつと、いいやこの上なく神秘的で知的なことに違いない。

彼女の邪魔をしてはいけない、そう考えた男性店員。彼は彼女の座席のすぐそばの座席の清掃を始めた。アルコール水とふきんを手に彼女のすぐそばを通りー

サンドパン、彼らの食事は三度。パン

「……………」

「……」

ふと聞こえた声に思わず反応をしよう男性店員。驚きながら彼女の方を振り返るものの、彼女は瞳を閉じて優雅にコーヒーを飲むだけであった。己は疲れているのだろうか。彼は額に手を当てて再び歩き出した。

座席の清掃を始めながら先ほどの空耳について考える。いやきつと空耳ですらなく己が生み出した幻聴なのだろう。その美しい小鳥の歌うような声で紡がれた言葉を思い出す彼。でも、まさかなあ。彼はそう考えて業務を進めていく。

よりにもよってあのような美女がくだらない親父ギャグを言うはずがないだろうに。そう考えた彼は再び忙しそうに業務に戻っていった。店内の客の注文を取り始めていく。

そんな様子を知ってか知らずか。楓は再び窓の外を眺め始めた。そうして彼女はにっこりと微笑むのであった。見るものを虜にさせるような華やかな笑顔。世の男性たちが財産を投げ打つても視聴したい、そう思わせるような魅力に溢れた美しさで彼女はそつと言葉をつむぐ。

「堂々たる……ドードー……威風堂々」

そうつぶやいた彼女。そのつぶやきは喫茶店の喧騒の中へと消えていく。日常に舞い降りた非日常的な光景。麗しい美女がしょもない親父ギャグを放つというあまりにもなギャップ。もしもこの場に彼女の担当プロデューサーがいたらきつと頭を抱えてしまうだろう、そんな光景がそこにあった。

そうしてひとしきり思考に入り浸った彼女は再び優雅にコーヒーを堪能するのであった。満足げに頷く彼女。実に魅力的な笑顔を示しながら彼女は考える。事務所に帰ったらこの大爆笑ギャグを誰かに呟こうと心に決めて。

担当である女性プロデューサーからイメージダウンだからやめろ、お願いだから絶対にやめてとまで言われているSNSへの投稿を固

く心に誓う彼女なのであった。

神谷奈緒と捨てられた野良ポケモン2

「そりゃあ違法ブリーダー絡みでしょ?」
「っ!」

思わずポテトを落としてしまう奈緒。眼前でジュースを飲んでいく加蓮を見つめたまま彼女は呆然と固まってしまふ。奈緒から一連の相談を受けた彼女は何て事はないと言わんばかりに言い切つてパクパクと再びハンバーガーを食べ始める。

都内某所のハンバーガーショップ。赤と黄色がトレンドマークのチェーン店で二人の女子高生は向かい合う。神谷奈緒と北条加蓮。二人は比較的同時期にアイドル事務所に入所したのであった。年が近いという事もあり、段々と仲が良くなつたのである。二人の会話は続いていく。

「い、違法ブリーダーって…」

「知らない? 珍しかったり人気のあるポケモンを高額で売りさばく人」

「いや知ってるけど! そ、それって違法だろ…っ!」
「違法でも儲かるならそりゃあやるでしょ」

何をいつてるんだと言わんばかりの表情をする加蓮。ざわざわと客の喧騒がやかましいはずのこの店内。奈緒はいつしか雑音も耳に入らなくなつてしまふ。ごくりと喉をならして彼女はじつと加蓮の言葉に聞き入つた。

いまだに人間に怯えるイーブイ。おそらく今は奈緒の私室で眠つている事だろう。この数日間の世話で奈緒にだけは心を開くようになったのである。けれど他の家族や近隣の住民にはとても懐かなくなつた。人間の姿を見ただけで怯えて隠れてしまふのだ。虐待、をされてきた可能性があつた。

「状況から考えてもかなり黒いと思うけどねー。普通の人間ならイーブイ捨てる人はまずいないって」
「うっ…」

「そのまま売ったら評判が悪くなる。なら売るよりも…なんて可能性もあるのかも」

そうなのである。おもちゃがついたセット「ワンダフルセット」を目前に固まってしまふ奈緒。気が滅入る話ばかりで食欲がなくなってきたしまったのだ。

それこそイーブイは超人気ポケモンである。その愛嬌、可愛らしさは絶大な人気を誇る。小柄な体は一体どれ程の女性・子供達を魅了してきたことか。また多彩な進化というのも魅力の一つであった。

ブースター

サンダース

シャワーズ

エーファイ

ブラッキー

グレイシア

現在確認されているだけで6種類も進化先が存在しているのである。しかもそのどれもが強いというのだ。豊富な技から繰り出される多彩な戦術はプロすら認める実力を持つ。バトルや世界大会でも常連しているほどの強さ。世の中にはブイズ（進化系の総称）を極めれば最強になれるだなんて言葉もあるくらいである

故に人気である。野生のイーブイがあまりに乱獲された為現在では野生イーブイの住処は保護区となっている。一時的な規制にせよ、現在一般人は保護区に近づく事も、ましてや彼らを捕獲する事もできないのである。

「だからこそおかしいんじゃない？ならやつぱり…」

「指が欠けている事か…」

「違法ブリーダーの所で産まされたイーブイ。けれど指が欠けている為これでは商品にならない。そう考えた悪人が適当な所に捨てていった」

「……っ！」

「ポケモンを殺処分なんてそっちの方がよっぽど手間がかかるもの。それなら捨てた方が楽って考え方なら一応は辻褄があうのかな？」

「……」

「……って大丈夫、奈緒？」

思わずぎゅっと膝をつかむ奈緒。見た事もない悪人に対して怒りを募らせる。生まれたばかりのイーブイを放置した人間をこれでもかと恨んだ。どうしてそんな酷いことができるのだと。涙を流しながら震えてベッドで眠っていたイーブイの事を思い出す奈緒。

かつてペット大量消費時代と呼ばれる時代があった。人々が犬や猫といったペットを求めてまるで物を消費するかのようになつた悲惨な時代である。今では信じられない事だがかつてはペットショップの中で子犬や子猫を高額で取引していたというのだ。

純血で外見の良い動物は儲かる、そう気づいた人々が次におこなつた事は大量繁殖と命の投げ売りであつたのだ。

小さなケージに閉じ込めて強制的に交尾を行わせて繁殖をさせる。そうして産み役となつた動物は死ぬまで産み続ける機械となつて繁殖を続ける。餌もろくにももらえず新たに子を産めなくなれば殺される。そんな悲惨な扱いを。

生まれた子供も同じである。彼らは生後すぐに親から引き離されてペットショップへと連れられる。大人よりも幼児の方がはるかに高く売れるからであつた。

だが商売として扱われる以上『不良品』は必ず出てくる。血統がうまく引き継げなかつた子供、病気や障害を持つて生まれた命。そうした者たちは生まれてすぐに殺処分され続けてきたのであつた。

かつてはこのようなビジネスが横行していたというのだから驚きである。ペットを金で買い食べ物を平気で捨て自然を破壊しながら人々は生活をしていた。ポケモンという存在がこれらの社会を一変させたのだ。

ポケモンという存在が世に広まつた事によりこれまでの動植物達の社会的な価値は下がり、人々から捨てられるようになった。皮肉な事はそうしてポケモンが出た事によりこれらの社会の異常性が注目され、改善されるようになったという事だろうか。

ポケモンという存在が人間達に命の価値を再認識させこれら現代社会の闇を直視させることになったのである。

閑話休題。ともあれこのような商売があり、法改正、警察や保護団体の改善によって劇的に数は減った。今では個人による動植物の金銭的売買は禁止されている。だがほんのごく一部ではポケモンの違法売買を今だに行われていたという話でもあった。

「まあ違法なブリーダーが直接捨てたかはわからないけどね」

「そ、そうだよな！」

「買ったたりトレードした人間が指が欠けている事に気がついて捨てたか…それ以外のなんらかの障害や病気を理由に捨てたか…」

「…残酷さは変わってないな…それ…」

ジュースを飲む。すっかり冷めてしまったポテトをつまみながら呆然と思考する奈緒。しわしわのポテトを見つめながら奈緒は言葉を紡いだ。

「イーブイって人気のあるポケモンなんだよな？」

「かなりね。今ならネットで引き取り手なんて幾らでも探せるのにさ」

「……」

「人間に怯える、生まれたばかりのイーブイを公衆トイレに捨てていく…それだけでどの道暗い話になるんだろうけどさ」

なんて事はないとさっぱり割り切る加蓮。そんな割り切りがどうしても出来なかった奈緒は顔を赤くして何か反論をしようとする。けれど何も言い返せない。じつと自身の膝に視線を下す奈緒。そんな彼女に対して北条加蓮は問いかけた。

「それで奈緒はどうするの？」

「え？い、一応家族は飼っても良いって言ってくれてるけど…」

「奈緒は飼いたいの？」

「か、可哀想そうだから飼ってあげたいかなあとは思ってて…」

「……」

「でもやっぱり私たちアイドルだろ？忙しいし構ってあげられないか

「らき…」

「……」

「やっぱり引き取ってくれる人を…って考えて…」

奈緒の言葉は尻窄みになっていく。目に見えて不機嫌になっていく北条加蓮に動揺しているのだ。静まり返るテーブルの雰囲気思わず尻込みしてしまう。彼女の態度に内心で不安になる奈緒。

何かまずい事を言ってしまっただろうか。自身の発言の意味を理解できないでいた奈緒。そんな彼女に対して加蓮は言い切った。顔を上げて奈緒の顔を直視しながらきっぱりと言い切った。

「それは違う、違うよ奈緒」

「え?」

「奈緒は今境遇や障害を理由に見下してるんだよ。本当に気にしてなかったらそんな事言うはずないもの」

「……っ!」

「可哀想な奴だなんて心の中で見下してるんだ、それって本当に最低な事だよ」

「さ、最低…」

動揺する奈緒。彼女の言葉がボディーブローのように奈緒の心に響いていく。自分の心の醜さを他人の言葉によって直視する。その衝撃の大きさは奈緒がこれまで経験した事もないほどのものであった。

絶句する奈緒。そんな彼女に対して北条加蓮はとどめの言葉を言い放った。

「あとアイドルを断る言い訳にしちゃ絶対だめ。私達が好きでやってる事でしょ?」

「…あつ」

衝撃だった。鈍器で頭をぶん殴られたようなショックに襲われる奈緒。呆然とした奈緒に対して彼女は尚も言葉を紡いだ。はつきりというてあげるそれこそが友情だと言わんばかりに。

レッスンでも見たことがないほどの真剣な表情をした加蓮。その大きくパツチリとした美しい瞳で、彼女は力強い眼差しと共に奈緒を

見つめた。

「悲惨な目にあっていたか、それでこの話はおしまい。あとは奈緒とその子がどうしたいかだよ」

「どうしたい…か」

「一緒に居たいの？居たくないの？」

「うう…」

その聞き方はずるい。顔を赤くして必死で考える奈緒。けれど考えるまでもなく決まって居た。ここにきてようやく彼女は、自身が背中を押して欲しかったのだと気がついたのだ。

彼女の中で初めて出会った日のことを思い出す。湯船につかり楽しそうにはしゃぐ彼の姿を。それこそが奈緒にとっては答えだった。気がつけば、ぽつりと彼女は言葉を口にしていった。

「一緒に居たい…です…」

「…うむ、正直でよろしい」

奈緒の正直な本音、その言葉に加蓮はにこりと微笑んだ。その笑顔に同性である奈緒ですら思わず見入ってしまう。弾けるような笑顔、彼女のアイドルとしての原点を見たような気持ちになってしまう。

ああやつぱり良い奴だな

これまでどことなく感じていた距離感が一気に縮んでいく。ここに来て彼女の本心、彼女と言う人間を知れたのだと思えた。胸を張って友達と呼べるような存在になれた気がする。

ここまですじうじと悩んでいた自分に対してはつきりと告げてくれた加蓮に対して奈緒は心の中で感謝をした。

「よしっ！それじゃあ行くかうか！」

「ええーい、いくつてどこに？」

「グッズを色々買わなきゃ？ほらここならショッピングモールとか近いよー」

にこりと微笑む北条加蓮。彼女の力強い手にひかれて、奈緒は苦笑してしまう。それも良いかと納得して彼女達は店を後にした。不思議と抱えていた暗い気持ちはどこかへと吹き飛んでいた。

同世代ながら彼女には教えられることばかりだと考える奈緒。彼

女がここまで熱い人間だとは思わなかった。そのギャップを知れてよかったとも思える奈緒なのであった。

神谷奈緒と捨てられた野良ポケモン3

都内某所のショッピングモール。中規の商業施設には実に多くの種類の商店が設営されていた。おしゃれな衣服が並べられたファッション店。新作のゲームが並ぶアミューズメントエリア等、実に多くの店がその施設にはあった。

そんな店が立ち並ぶ一角。1Fの中央に大きな敷地面接を持つその店『ポケモングッズ専門店』の中に奈緒はいた。袋詰めにしたポケモン用の餌、ポケモンフーズコーナーにて彼女は同僚のアイドルに電話をしていた。

スマートフォン 통화アプリを起動させながら、袋詰めにされた商品とにらめっこを続ける奈緒。彼女は通話相手、渋谷凜に対して一連の経緯を説明しているのであった。

『それで飼う事にしたの?』

「ま、まあたぶんそうなるかな…」

『ふーん、まあ良いんじゃない』

クールな外見の通りそっけなく答える凜。美しく、氷のようにクールな彼女の態度に思わずごくりと唾を飲んでしまう。相談の仕方を間違ってしまっただろうかと考える奈緒。そんな奈緒に対して彼女はスマートフォンを通して通話を続けていく。

『それでなんで私に電話してきたの?』

「うっ…まずかったかな?」

『仕事も休憩中だったから良いけどさ。私ポケモンなんて詳しくないよ』

「り、凜もポケモン飼ってるんだろ?色々教えてくれないかなって」

『え』

「…今どうやって発声したんだよ」

動揺のあまりよくわからない言葉を電話で話してしまう凜。電話の向こう側からでも混乱が奈緒へと伝わってしまう。こほんと咳払いをした彼女。そんな凜に対して奈緒は尚も話しかけた。

「それで何のポケモン飼ってるんだっけ?以前話した時はなんかごま

かされたけどさ」

『そ、そんな事よりさ。コンビニの新作スイーツの話でもしない？』
「ごまかし方下手すぎだろ」

ノーマルポケモン用と書かれたポケモンフーズ。袋詰めにされたそのパッケージを注視しながら鋭いツツコミを入れる奈緒。何かまずい事を行ってしまっただろうか。出会ったばかりでいまいち彼女との距離感が掴めないでいた奈緒は慌ててフオローした。

おし黙る凜。少しばかりの沈黙が続く。思わず手のひらに汗がかぶ奈緒。やがて凜は小さな声でぼつりぼつりとつぶやいていた。

『飼ってるっていうか…居ついているっていうか…あまり参考にならないと思うよ』

ゴニョゴニョと戸惑いながら告げる凜。クールな彼女には珍しい一面であった。最近では雑誌で取り上げられる事も増えてきた凜の新たな姿に内心で驚く奈緒。こんな一面もあったのかと彼女は感じてしまう。

凜としては一日中ぐうたらしている植物ポケモンを飼っているとあまり主張しなくなつたのである。クールなイメージを持たれているらしい自分からは、あの少しばかり能天気な植物もどきを飼っているとは中々言えなかつた。

最近できた後輩、というよりは同世代である奈緒の事を考える凜。最近出会ったばかりの奈緒に対して、彼らのよだれを集めるのが日課であるとは中々言いつらかつたのだ。年頃の少女としての複雑な心境である。

そんな複雑な心境を理解できないでいた奈緒。本当は世間が思うほど渋谷凜は冷酷でも無愛想でもないのだが、その事を今だに知る事ができないでいた奈緒は内心でため息をついた。

渋谷凜、彼女もまた同世代のアイドルという事で仲が良くなっていった女性の一人である。だが、少なくとも多少会話をする程度の仲だ。女子高生らしく会話もするし食事にも何度か行った。しかしそ

の程度の仲なのだ。

もつと仲がよくなりたいたいがその方法が分からない。どうしても彼女との距離を感じてしまう奈緒。いつの日か何でも打ち明けられる間柄になりたいなど考える。新作スイーツを二人分購入する為に行列に並びに行つてくれた北条加蓮のことを思い出しながら奈緒はそう決意した。

渋谷凜

北条加蓮

神谷奈緒

彼女たちが3人組のアイドルグループ『トライアドプリムス』を結成して超大人気アイドルとなるのはもう少しばかり先の、話である。戸惑う凜をなだめて色々と聞き出した奈緒。ありがとうと礼を伝えて奈緒は電話を切った。

「すみません店員さん！ポケモンの世話について相談しても良いですか」

奈緒は女性店員へと声をかける。真新しいエプロンに身を包んだ夫人。20代前半程度だろうか、おしゃれな衣服に身を包んだ彼女は額に可愛らしいコダツクのバンダナを巻いていた。

そんな彼女に対して奈緒は一生懸命に説明をする。イーブイを飼いはじめたから必要な物が知りたい事を。イーブイと仲が良くなるにはどうすれば良いのかという事を。

懸命に言葉を紡ぐ奈緒に対して店員は実に親切に教えてくれた。彼女はポケモンに詳しいようである。そんな女性店員の言葉を一つ一つ丁寧にメモ帳に書いていく奈緒。ああそういえば、と店員は言葉を発した。

「ボールの作成は行いましたか？」

「ボ、ボール…？」

「はい、モンスターボールの事です」

「いえ…あたしその辺りよく分からなくて…」

言いよんどんでしまう奈緒。奈緒にとってポケモンとはテレビの向こう側の存在であったのだ。学校で最低限の知識は学んだがその程度である。ここに来るまでにネットやら本やらで勉強をしたがよく分からなかったのだ。タイプはなんとか理解できたが☒とくせい☒やら☒たまごグループ☒やはちんぷんかんぷんであった。

店員による丁寧な説明が行われる。それによるとボールとはポケモンにとって家であり避難場所であるらしい。

ダメージを負ったポケモンはひんし状態となる。そうなった際は彼らは身近な窪みや空間へと身を納めるように縮小する。それを縮小化と呼ぶらしい。縮小化の際、彼らの意識はとけて消えているような状態へと陥るのだ。

例えるのなら母親の胎盤に近いだろう。個という意識が消えて全体へと同化していく現象。仏教における解脱、チャクラ思想における瞑想に近い状態とも言えるかもしれない。

だからこそ、ポケモンの捕獲には戦闘を通したボールによる捕獲が有効であるのだ。ダメージを与え彼らをボールという名の胎盤へと収める。この胎内回帰現象を通すからこそポケモンは人間になつくらしい。

ボール（胎盤）から出て初めて目撃した人間を擬似的な☒おや☒と認識し関係を築いていくのである。だからこそしばしばトレーナーを☒おや☒とする表現もある位である。

故に戦闘による捕獲、または卵から還す事が最も人間になつきやすい方法であるのだ。卵生生命体の特徴を生かした方法であると言える。意外な豆知識にへーと奈緒は思わず感心してしまう。

そのような意味では軽い洗脳と呼べるのかもしれない。無論これはきつかけに最適な現象というだけであり、その後の関係性の構築こそが最も重要である事には変わりはない。ポケモンはその気になれば人間に攻撃する事も、人間から逃げる事もできるのだから。

「つまり、ポケモンにとってボールとは家でありお母さんの子宮みたいなものなんです」

「し、子宮…」

「ええ、ちなみにこの疑似的な胎内回帰は基本的に心地良いものらしいんですが…」

「ですが…?」

「ごくたまにボールに収まる事を極端に恐れる子もいるらしいので注意してあげてくださいね」

そつと注意をする女性店員。どうやらボールは好むか恐れるかはポケモンによるらしい。睡眠を短時間の自己意識の消失(死)と認識するような物なのだろうか。

以前店員が目撃した、ボールに入りたがらないピカチュウの話聞きながら奈緒はボールの話をメモに記帳していく。多少話は脱線したがボールの重要性を理解する事ができた。なお、どうやらボールの作成はボングリを削って自分で行うしかないようだ。

「自分で作るのかあ…」

「ボール職人に頼むのが一番ですけど…物によっては中々高額な買い物ですからねえ」

「うーんじゃあ自分で作ってみようかなあ…作り方は本に載っていますよね?」

「インターネットで十分ですよ。もう少ししたら機械によって量産化されたモンスターボールというのもあるかもしれないんですが…」

困り顔をする店員。どうやら似たような質問が多いらしい。いつの日か出るかもしれない工業製品のモンスターボールというものを想像しながら、奈緒は店員に丁寧に礼を告げる。笑顔で手をふつてくれる店員を背に彼女は買い物続けた。

トイレシート、ペットブラシ、消臭剤などいくつかを購入していく奈緒。そんな彼女は両手にいっぱいレジ袋を抱えて店を後にした。両手に詰め込んだ新生活の重みを感じながら彼女は歩いて行く。そうしてビタツ!とある書店の前で立ち止まってしまった。

それは雑誌であった。青少年向けの薄い雑誌を目にして思わず固まってしまった奈緒。顔を赤くしてその雑誌に見入ってしまう。彼女の後ろを訝しげな表情をしたサラリーマンが足早に通り過ぎて行った。

「…っ…っ、これって…」

それを見つけてしまった奈緒。彼女はそわそわと周囲を見渡して
しまう。どうやら誰にもみられていないらしい。

少々のとまどいと多少のためらい。数分間考え込み、悩んだ彼女は
ぎゅっと本を掴んでしまう。そうして件の雑誌を手にして彼女は颯
爽とレジへと向かった。

そうして『月間ボーイズバイブル！クールな女性と仲良くなる10
0の方法』という本を購入した彼女は意気揚々と北条加蓮の元へと向
かうのであった。

遊佐こずえとヤドン2

遊佐こずえは雲の中にいた。見渡す限り真っ白でふわふわの空間。その手を両手を広げてふわふわと浮かんでいく。手をいっぱい広げてふわふわの空を堪能していく。

やがてピンク色の雲地帯に到達する。そこはこずえにとって天国のような場所であった。ふと手に触れてみる。その小さな手のひらを押し返すように極上の感触を提供してくる。

もちもちとした感触。ぷにぷにとした感触。それを触っているだけで自身の心が満たされていくのを感じるこずえ。幸せだと彼女は感じる。

ふと舌をだして舐めてみる。ペロペロとまるでアイスクリームを舐めるように、こずえはそのピンク色の雲を堪能していく。おいしいような、おいしくないような。自身でもよくわからぬ不思議な感覚であった。

ふわふわの雲の中に腰を下ろしたこずえ。彼女は体育すわりをしてそのピンク色の雲をじっと観察するのであった。何か大切なものであった気がする。このピンク色の雲を見つめながら思索するこずえ。彼女の中で何かが発火しそうになっていく。

ごくりと喉を鳴らすこずえ。彼女の中で欲求が膨らんでいく。そうして彼女はその可愛らしい口を大きく開けてしまった。徐々にこずえの口がそのピンク色の雲に迫っていく。

あーん

そうして彼女はそのピンク色の雲に向けて勢いよく噛み付いてしまっ——

ヤドンが悲鳴をあげた。

「……やーくん……ごめんなの……」

「……………やあん……」

浴室の中で謝るこずえ。だがヤドンは今だに悲しんでいるようだ。

心なしかやあんの声がいつもよりも気落ちしているように感じられる。

どうやら先ほどこずえが寝ぼけて噛み付いてしまった事を今だに根に持っているようだ。そのヤドンの首元には大きくはつきりとこずえの歯型が残っていた。どれだけ強く噛み付いたのだろうか、彼女の口の歯型が痛々しく残っているのであった。

お風呂場で彼女にシャワーをかけられながらしくしくと涙を流すヤドン。けれどそれも数十秒のことであった。心地よい水につかることでヤドンの中の痛みが消えて行く。どうやら機嫌を直してくれそうだった。

浴室の中で目をとろんとさせるヤドン。前足をギュツと縮めながら彼女は心地好きそうに鳴いた。そんなヤドンの後ろではスクール水着を着たこずえが石鹸の準備を始めた。誰に配慮をしているのだろうか、それは小学生が着ているような紺のスクール水着であった。

ポケモン（水タイプ）用と刻印されたボディーツープ。裏面に低刺激と書かれたそのの中身をひねり出し、やわらかいタオルへとかけていくこずえ。そうしてわしゃわしゃと泡を立て丁寧にヤドンの体を洗淨していく。

「……………やーくん…どうですかー」

「……………やあん」

「……………おかゆいところは…ありますかー」

「……………」

「……………」

「……………やあ…ん」

たちまち泡まみれになるヤドンの体。そのピンク色の体表のほとんどが真っ白でふわふわな泡で包まれていく。たちまちメリープのようなもこもこのピンク羊になってしまったヤドン。ついでに自身の体にも泡をかけて洗い始めるこずえ。二人とも今ではすっかり真っ白の泡だらけである。

だがヤドンは微動だにしない。口をポカンとあけたまましっぽをゆらゆらと動かすだけであった。揺らした尻尾がこずえの体にやさ

しくあたる。そんな仕草にくすぐったそうに反応するこずえ。

「ながすのー…」

こずえはシャワーヘッドを掴んだままバルブをひねる。勢いよく飛び出すシャワー水。それによってヤドンの体から泡が落とされていく。もちもちの肌はつやつやのもち肌へと生まれ変わったのだ。

みずタイプのポケモンはこのように日頃から水浴びをする必要がある。こうして自身の体を乾燥させないようにする事がなによりも重要なのである。トレーナーはそのような事を常に意識する必要があるのだ。

「やーくん…みずでっぼう…してー…」

彼女がヤドンに頼みごとをする。両手をあげてばんぎいの姿勢を取るこずえ。まるで長身の人間にだっこをせがむ幼児のような姿勢をしながらこずえはヤドンにお願いをした。

その言葉に20秒ほどぼんやりと固まってしまいうヤドン。ぼやーと彼女の瞳をみつめるこずえ。そうしてヤドンの口からびゅーと水が飛び出した。ヤドンの技、みずでっぼうである。

かなり弱々しく調節された水流を口から発射するヤドン。まるでシンガポールのマライオンである。そんなピンク色のマライオンによって自身の体を隅々まで洗い流してもらったこずえ。彼女はごきげんのままヤドンの手を引いて浴槽へと入っていく。

「…………ふう…」

「……………」

「……………」

「……………」

両者沈黙したままお風呂を堪能する。そのぽかぽかとした温度は二人の心と精神を癒してくれるのだ。ちゃぽちゃぽと波打つ浴槽の中でこずえは瞳を閉じて湯を堪能していく。

かなり窮屈な為だろうか、浴槽の中でヤドンにだっこされるようにして湯につかるこずえ。

「…………やーくん？……」

「……………」

「……………」

「……………やあん、やあー…」

「……………」

「……………」

「……………いま…いわれても…こまるのー」

「……………」

「……………もうー…」

尻尾をゆらゆらとゆらして彼女の顔前へとさしだすヤドン。どうやら先ほどいった「かゆいところはありますか」という言葉に今更反応を返したらしい。

十分ほど前の言葉がどうして今でてくるのか？そもそも本当にかゆいのか。常人なら色々浮かんでしまうだろう疑問もこずえは平然と受け入れる。ヤドンのトレーナーはこのようなおっとりとした性格の持ち主でなければいけないのかもしれない。

ヤドンにだっこされたまま両手でやさしくかりかりと、尻尾の先をかいてあげるこずえ。そんな彼女の刺激にヤドンはくすぐったそうに反応をする。爪の先でカリカリとされた反応が面白かったのだろうか。その後こずえは思う存分ヤドンの体をかいてあげるのであった。

第4章

【星輝子とパラスと商店街】

場所は福島県のとある商店街、休日の為か多くの人が街中を歩いて居た。手を繋ぎ楽しそうに歩いていく母娘。ゲームセンターへ向かうとする男子中学生の集団。実に多くの人々が休日を謳歌する中、彼女はそこにいた

「…ぐへへ」

ダボダボのシャツを身につけたグレーの髪をした美少女、星輝子である。彼女は本屋の表に販売されている雑誌を立ち読みしながらにへへと笑みを浮かべている。どうやらキノコが気になるようだ。雑誌『月刊キノコパラダイス』を眺めながら彼女は笑みを浮かべた。

キノコ雑誌を眺めながら危ない笑みを浮かべる中学一年生。色々な意味で危険な香りのする子供である。人々はちらりと横目で観察しながら脚早に通り過ぎていく。そんな彼女の足もとにとある一匹のポケモンがやってくる。

それはオスのパラスであった。彼はトコトコと輝子の足元までやってくると、彼女の足をえいえいと軽く小突いた。大きなハサミに驚いたのだろうか、はつと下を注視する輝子。

おそいよと言わんばかりに両手をあげて抗議する彼。そんな彼に対して輝子は申し訳なさそうに謝罪した。

「ご、ごめん…本が気になって…」

「パラ？」

「うん…ここ…ここ…シイタケ特集がすごいんだ…」

雑誌を見開いて彼に見せてあげる輝子。心なしか彼女の瞳が輝いて見える。キノコを頭につけた親友に嬉しそうに笑って見せる輝子。どうやら彼に対しては普通にコミュニケーションを取る事が出来るらしい。

だが共に暮らして数年にもなる親友はどうやらあまり興味が無いらしい。ため息をつくように口をガシガシと鳴らすと日陰の方へ歩

いて行ってしまった。そんな彼の態度に苦笑しながら輝子は手に持った雑誌を購入すべくレジへと向かった。

どうやらお互いに普通に会話ができているらしい。ポケモンが世に広まって数年経つとはいえここまで高度にコミュニケーションが取れる者は少ないだろう。双方に実力がなければできない芸当である。相当二人の相性が良かったのだろう。本当にすごいことはそれを無意識的に行なっている事だが。

ポケモンは生まれたばかりでは言語を理解できない。生後数ヶ月を通して周囲の人間やポケモンが話す言語を聞きながら、少しずつ理解を深めていくのである。この段階になるとYes, Noをボディランゲージで示す事ができるのである。一説には言語ではなくその生命の感情、喜怒哀楽を通して学んでいくのだともされているが、そこは確かではない。

第二段階の進化時にはほとんどの言語を理解する事ができるようになると言われている。大切な事は人間がポケモンを一方的に使役するような関係ではこのような親密な仲にはなれないという事である。

かつてNと呼ばれる青年はこう主張した。『彼らは人間以上に物事を理解する力がある。ポケモンをボールに閉じ込めるような人間にはそれが分からないのだ』と。

お互いが存在を主張しあい、尊敬し合う姿勢。ポケモンと人間が尊重しあう、かつてNと呼ばれた青年が理想とする光景がそこにはあるのかもしれない。

「パラ〜」

「うん？な、なんだ…親友…」

ともあれ、まだ完璧な意思疎通ができる訳ではないらしい。自身のスカートを掴んでくる彼を見ながら、輝子は考える。自身の顎に手をかけて、うーんと少しばかり思索する星輝子。指し示す爪の先を見て、漸く輝子は彼が飲み物を飲みたがっているのかと理解した。

「ああそうか…うん…私も」

「パラ！パラ！」

「親友は…どれが飲みたい…」

「パラッ！」

「し、親友は…それ…最近のお気に入りなんだな…」

水・ジュース・お茶と様々なものが立ち並ぶ自動販売機。2mばかりの高さの大型機械を眺めながらどれを飲もうかと考える輝子。だがどうやらパラスは既に決めていているものがあるようだ。

硬貨を投入して彼の要望の通りボタンを押してあげる。するとガコンという子気味良い音と共に麦茶が落ちてきた。輝子は500mの麦茶を手に取り彼にそっと手渡した。彼女達はそのまま隣接されたベンチの上で休み始める。ベンチに腰掛けゆったりとくつろぐ一人と一匹。

自身もまた購入した水を飲み始める輝子。そんな彼女の元へ一人の人間がよってきた。青い制服に身を包んだ成人男性、警察官であった。

「あのーすみません」

「な、なに…？…フヒツ!？」

警察官が苦笑しながらよってくる。自身の目の前に立ち始めた警察官を見上げて、輝子はぎよつと驚いてしまう。瞳をそらして激しく動揺してしまう彼女。まるで不審者その者である。

「少しよろしいでしょうか」

「あ、あの…何もわるいこと…してまひえん…」

涙目で答える星輝子。どうやら彼女は先日起きたトラブルを思い出しているらしい。あやうく警察沙汰となってしまうたその事件。それはいつの日か語る日がくるのかもしれない。ともあれこの時の輝子は警察に苦手意識を持っているのであった。

それはもう、メガリザードンに対峙したパラセクトに匹敵する苦手意識である。涙目でふるふるとうつつむく輝子。なんという不利対面であろうか。大型台風にビニール傘で挑むことに等しい。

パラスもまた輝子の動揺を過敏に感じたのだろうか。彼も涙目で警察官を見上げる。そんな涙目の女子中学生と虫ポケモンに対して

警察官は慌てたように答えた。

「い、いえ…：トレーナー確認がしたいだけです」

「ト…：トレーナー確認…：」

「ライセンスは持つてるかな？」

「は、はい…：だいじよぶ…：です」

動揺する輝子。彼女は手提げ鞆をこそごとと漁ると中から黒い財布を取り出した。そこから震える手つきで免許証を取り出す。C級と刻印されたそれがトレーナー認定証であった。

彼女の引きつった笑みが印刷されたライセンスカードを眺める警察官。輝子としては気が気ではなかった。早くおわってくれないだろうかと彼女は神に祈り始める。

「C級ライセンス…：手持ちはそのパスだけかな？」

「はい…：」

「うん…：確認しました。大丈夫そうだね」

にこりと微笑む警察官。それにより輝子はようやくほっと息をついた。過去に違法所持云々でもめた経験もある彼女にとっては嬉しくない時間であったのだ。安堵する親友にパスもまた嬉しそうに鳴き始める。

最近ではこのように街中をポケモンが連れて歩く為にはトレーナー資格と呼ばれるものが必要になったのである。つまり政府が発行するライセンスの事だ。このライセンスには階級が三つあり、それぞれ所持するポケモンの個体数、タイプやサイズによって規定が定められているのであった。

C級では虫・草・ノーマルタイプ

B級では水や飛行といった幅広いタイプ

A級は悪・炎・毒・竜などの危険なタイプ

このようにタイプによって取得しなければならぬ物が異なってくるのである。一般家庭で飼育するだけならば役所への申請だけで良い。しかし仕事や公共の場所で連れて歩くにはライセンスによる認可が必要である。

これは知識を持った人間でなければ犯罪や事故が起きる可能性が

あった為政府が実施した政策でもあった。これを破れば犯罪にあたり、また起こした事件・事故の規模によつてはライセンスカードが取り上げられるのである。

虫や草、ノーマルタイプは比較的危険が少ない。が、炎や毒タイプといったポケモンの種族によつては恐ろしい事態になってしまう。故に、ライセンス制度である。少なくとも自身の能力や技をコントロールできなければ街中を歩くのは大変危険な事だからだ。

試験はマークシート方式によるペーパーテスト。その後は座学を受けて定期的に講習にも参加しなければいけない。B級からはポケモンと人間双方への実務試験もあるのだ。欲しいからといっていきなりドラゴンタイプを飼い始めることができない制度となっているのである。

とはいえこの法律にも穴はある。やはりポケモンが世に出て試験的に採用した制度である為かどうしても対応しきれない部分が多々あった。その辺りは今後の法整備や専門家による会議が必要であるとも言われており、役人達が日夜議論に明け暮れるのであった。閑話休題。

ライセンスを確認し終えた警察官は輝子にそつと返した。危惧であつたことにほつと息をつく警察官。

「ごめんね、もう行つても大丈夫だからね」

「は、はい…」

声がうわずつてしまう星輝子。どうやら本人も自負するコミュ障ぶりは健在であるらしい。彼女は額に汗を流しながら早くここから離れようと心に決めた。そんな彼女の葛藤を知らずかパラスは陽気に声をあげた。

「パラー」

「うん、君も周囲に気をつけてね」

嬉しそうなパラスに反応をする警察官。存外に大人しく可愛らしい彼に対して出来心でもあったのだろうか、警察官はしゃがみこんでそつとパラスを撫でようとする。撫でようとしてしまう。

「あつ…」

「うん？…どうか…あばばっ!?!」

あつと声を出してしまう輝子。だがもう遅かった。止める暇もなく警察官はパラスの体に触れてしまう。2, 3秒のふれあい、それにより警察官は奇声をあげてぼたりと倒れ込んでしまった。顔を青くする輝子、だが既に事態は手遅れになってしまったようだ。

パラスの特性『ほうし』であった。自身の身体に触れたものへ低確率で毒、麻痺、睡眠状態のいずれかを付与するほうしを放出するという特性。一部の虫ポケモンが持つこの特性が警察官を襲ったのである。

このほうし、輝子のように日頃からなれ親しんだものには放出しないようにポケモン側もある程度はコントロールする事ができる。ポニータの炎は親しい人間に触れても熱くないという記述もあるように。親しい人間、落ち着いた環境ならばこれらは十分コントロールする事が可能なのである。

だが今回の場合は親友である輝子の動揺と見知らぬ他人に触れたという衝撃がパラスを混乱させたのだろう。つい、驚いてほうしをだしてしまったという訳である。全身をまひさせガクガクと震える警察官を見下ろして輝子は血の気が引いた真つ青な顔をしてしまう。

まひなおしを求めにスーパーへと駆け込む星輝子。そんな彼女と警察官に対して、申し訳ないというふうにはパラスが寂しく鳴いた。痺れて倒れ臥す警察官に対して彼は静かに謝罪をした。

【緒方智絵里と大切なお友達】

緒方智絵里は内気な少女である。それが彼女の周囲にいる人間の総意であった。クラスの間で静かに過ごす内気な女の子。何かを強く主張する事もない実におとなしい小学生。そんな彼女はいつだってひとりぼっちであった。

友達がいらない、という訳ではないのだろう。けれど彼女の両親はいつだって仕事の為に家を留守にしていた。まだ小学生である彼女を置いて、自宅に一人にする事が多かったのだ。親に甘えたい盛りであるはずの子供、そんな彼女はいつだって心に不安や恐怖を抱えていたのだ。

「……………」

現在、智絵里は大きな野原にいた。その一面の花畑、県内でも有数の巨大公園のとある野原に彼女はいた。どうやら四つ葉のクローバーを探しているらしい。額に汗を浮かべて四つん這いになりながら、クローバーを一生懸命に探す彼女。

「……………」

彼女は感情的な人間が苦手であった。喜怒哀楽が激しく、自分の感情を強く主張する人間が苦手であったのだ。嫌い、という訳ではない。ただ彼女は過去の経験から随分と苦い思いをしてきたのだ。失敗をしてそれを叱咤される事が、なによりも怖かったのだ。

かつて優しくかった父と母の姿を思い出す。いつだって帰るのが遅い実の家族。いつのまにか二人は随分と怒りっぽくなってしまった。幼い智絵里にとってそれがどれほどの恐怖だったか。花柄のパジャマに身を包みながら窺うようにドアの陰から眺めた光景を思い出す。

飛び交う怒声

割れる食器

泣きわめく母親

自身の中での過去を思い返す智絵里。思い出すだけで涙をこぼしそうになってしまう。手のひらでごしごしと涙をぬぐう。そうして

彼女は再び四葉のクローバを探し出すのであった。

湧き上がってきた涙を押さえ込みながら、懸命に探し出す。いつの間にか習慣になってしまったこの行為。彼女はひとりぼっちのまま野原で幸運の象徴を探すのだ。

両親に四つ葉のクローバーをあげた頃は

家族みんな仲がよかったのに：

そんな事を考えながら彼女は懸命に探していく。もしかすると、四つ葉のクローバーを見つける事で、過去の幸福にすがろうとしているのかもしれない。かつて仲が良かった家族の在り方に戻って欲しい、そう願いを込めて。

彼女はひとりぼっちであった。内気な少女である彼女のそばには誰もいなかったのだ。彼女はそうして今日もひとりでクローバーを探していく。

だが今では違う

そう、つい一ヶ月ほど前にできた友人によって

彼女の日常は変わりつつあった

「ポポっ!!」

「えっ?…:…きやつ!」

突如頭にのしかかる重み。その重みに驚きたちまち尻餅をついてしまう智絵里。彼女はどきりと土臭い野原に手をついてしまう。

何が起こったのだろうか、周囲を見回す智絵里。困惑する彼女はその重みの正体を知って笑顔になった。

「ポポくん!」

ぱああとまるで花開くように、満面の笑みを浮かべる智絵里。彼に出会った途端それまでの暗い気持ち吹き飛んでしまったようだ。笑顔になる美少女の眼前でその緑色のポケモンは何かを主張するように小さく飛び跳ねる。

それはわたくさポケモンのポポッコであった。大きさ60cm、性別は雄。小さな四つの手足に大きく垂れ下がった耳、頭につけた巨大で黄色い花はまるでタンポポの花のようである。

そんな彼はぶんぶんとおを膨らませて智絵里を見上げていた。どうやら彼は怒っているらしい。自身の眼前で飛び跳ねる彼に対して智絵里は困惑した顔で問いかける。

「ポポーっ！ポポー！」

「え、ええ…なんで怒ってるの…」

「ポポー！」

「水筒…お水を飲んでって事…？」

十数メートル先の大木、その陰に置かれた水筒を指し示す彼。どうやら水分補給をなさいと注意しているらしい。四葉のクローバー探しに夢中で休憩を取らない智絵里に怒っているのだろう。

ポポッコの気遣いを理解した彼女。その不器用な優しさに思わず胸が暖かい気持ちになる。彼の頭をなでながら彼女はやさしく答えた。

「ご、ごめんねポポくん」

「ポポー」

「ふつつありがとう…ポポくんも一緒に休もう？」

「ポポー」

「だっこかな？…うん、おいで…」

彼のもとへとしゃがみこむ智絵里。彼女は両手を差し出すとポポッコをそつと抱きかかえた。少女の胸元にぽっかりと収まる一匹のポケモン。彼女はぽかぽかと暖かい太陽の香りを抱きしめる。

重さが1.0kgとかなり軽いポポッコ。どうやら幼い智絵里でも抱える事が出来るらしい。まるでぬいぐるみを抱えるように、ポポッコを優しくだっこする。ぎゅつと彼を抱きしめる智絵里の姿のなんと可愛らしい事か。とても愛らしい光景がそこにはあった。

そうして大樹の元へと移動した彼女達。智絵里はピンク色のカバンからステンレス製の水筒とバケツを取り出した。この野原に住んでいるポポッコの事を考慮していたのだろう。少女一人で食べるには明らかに多い量のサンドウィッチがそこに収められていた。

朝から一生懸命手作りしてきたサンドウィッチ。野菜や卵、マヨネーズを加えたそれは智絵里の自信作である。彼女は嬉しそうな表

情をしながら彼にそつとバケツトの中身を差し出した。

「サンドウィッチだよ、ポポくん」

「ポポー！……ポポツ？」

「うん、いいよ。多めに作ってきたからね」

「ポポー」

嬉しそうにはしゃぐ彼。そんな彼の姿に智絵里もまた笑みをこぼす。つい一ヶ月ほど前の出会いが彼女の中の何かを変えたのかもしれない。こうして笑みを浮かべる彼女の姿は普通の少女であった。どこにでもいるような、幸福を享受するただの一人の少女であった。

ステンレスの水筒から二人分の水を用意する智絵里。その小さなカップに水を注いでいく。そうしてふたりだけの食事会の準備を始めた。可愛らしい犬がプリントされたレジャーシートの上で一人と一匹は食事を始めるのであった。

「はい、どうぞ」

「ポポ〜」

瞳を輝かせる彼。美味しそうにサンドウィッチにかぶりつく彼の姿を眺めながら智絵里は家族にもクラスの間にも内緒にしている小さな友人の事を考える。

最近のテレビでは新種の話題で持ちきりであった。信じられない位巨大な昆虫。岩のような生物が岩盤を掘り進める光景。植物を背負った亀のような生物がのっしのっしと密林をあるく様子。彼女は、先日食事をしながら一人で眺めたテレビの内容を思い返す。

続々と見つかる新種の生物達をめぐって大議論をする動物学者達。けれどその正体は依然として不明であったらしい。これまでに見つかった21種の生物達はそのどれもが地球では考えられない生物的特徴や能力をもつたのだから。

宇宙からの侵略者か

遙か古代の生物の復活か

大いに取り立てるマスコミ達。そんな情報に人々は一喜一憂し混乱していく。かと思えば、他人事のように忙しそうに、また元の日常を過ごして行くのだ。忙しない現代社会の反応らしいと言えるのか

もしれない。

こうしている今もどこかで新種の発見や研究が行われているのかもしれない。続々と何かが変わりつつある世界の変革に戸惑う人間達。一人の小学生である智絵里もまた彼の事を考える。

もしかしたら彼もその一種なのかも、そう考える智絵里。けれど彼女にとってそれは些細な出来事であった。彼の正体だなんて何者でも構わないと思っていたのだ。

自分のそばにいてくれる存在。父のように叱り、母のように慰めてくれる彼。そして何よりも喜びや悲しみを共有してくれている事への感謝。彼女にとって彼は両親のような親友のような関係だったのだ。とつても不思議で、けれども大切な存在になっていたのだから。

彼の嬉しそうな姿を眺めながら微笑む智絵里。やっぱり他の人に黙っていてよう、そう固く決意する智絵里。そんな彼女の背後でこそそこ音がした。何かか近寄ってくる音、怪訝に思った彼女は後ろを振り返る。するとそこには…よくわからない生物が居た。

「チュリ〜」

「え、ああ……ええ!？」

自身の身体をちよんちよんとつつく謎の生物。その生き物を見た智絵里は思わず驚愕してしまう。それは紛れもなく見た事もない不思議生物だったから。

ふわふわと漂うその緑色の生物。ぬいぐるみがそのまま動き出したかのような可愛らしいフォルム。まるでテルテル坊主のようなその身体、その頭からは四つの葉っぱがびよこんと飛び出していた。

ねっこポケモンのチュリネである。本来ならば頭から三つの葉が飛び出しているはずのチュリネ。どうやら特異な性質を持つらしい彼女は智絵里に対して興味を抱いたようだ。

その生物は智絵里の周囲をふよふよと回り始める。まるで好奇心旺盛な子供が観察するような、邪気のない希望に満ちた表情。心なしかそのチュリネは智絵里の目から見ても楽しそうに思えた。

「な、なにこの子!?!…ど、どういう事?！」

思わず声を荒げてしまう智絵里。彼女は呆然と固まったままその

生物を見た。少しばかり怯えてしまう。そんなチュリネはバケツトをじっと見つめ始める。サンドウィッチを美味しそうに頬張るポッコとそれをじっと見つめる不思議生物。

やがて智絵里はおずおずとチュリネに話しかける。隠れた木の陰からそつと顔を出してチュリネに穏やかに問いかけた。

「チュリ？」

「た、食べたいのかな……どうぞ？」

サンドウィッチに興味を示すそのチュリネ。そんなチュリネに対して智絵里はそつと手で示して食べても良いよと意思表示をした。そんな許可が出て嬉しかったのだろうか。チュリネは瞳をぱああと輝かせてバケツトに飛びついた。

パクリ

手がないはずなのに器用にサンドウィッチを啜えるチュリネ。そうしてチュリネはもぐもぐとサンドウィッチを咀嚼し始める。どうやら美味しいらしい。実に幸福そうな顔をしながらチュリネは嬉しそうにふわふわと飛び跳ねた。

「チュリ〜」

美味しそうになくその生物。その心からの幸福そうな表情に、智絵里の恐怖が徐々に溶けていくのを感じる。なんだか悪い子じやないみたい、そう感じた彼女はそつと二匹の元へと座り込んだ。

四つ葉のクローバーのような頭をした彼女に強い関心を抱いたのかもしれない。嬉しそうに飛び回るチュリネを彼女は興味深げに見つめた。

「誰だろう…ポポくんの家族かな？」

「ポポー！」

「チュリ〜」

「ああっ！わ、私のぶんも取らないでー！」

サンドウィッチが収められたバケツトに夢中で詰め寄る二匹のポケモン。そんな彼らに智絵里が慌てたように駆け寄った。このままではすつかりサンドウィッチを食べ切られてしまいそうである。

困ったような声を出す智絵里。そんな彼女のそばでは満面の笑み

を浮かべる二匹のポケモン達がいた。穏やかな春の日差しが漂う休日の午後。こうして二匹と一人は出会ったのである。いつまでも残り続ける大切な記憶。

ずっと抱え込んでいた智絵里の不安、そんな物はとつくにどこかへと消えてしまっていた。びくびくと怯えていた少女の中で、何かが変わりつつあるのであった。そんな少女の成長を感じさせる穏やかな春の1日。

この二匹が生涯の家族になるだなんて

この時の智絵里自身

きつと夢にも思っていなかった事だろう

【池袋晶葉とはがねタイプ】

「くわあああ…」

少女があくび交じりに伸びをする。長時間の開発業務によって凝り固まった身体がポキポキと子気味良い音をたてて鳴った。その美少女、池袋晶葉はねぼけながら瞳をこする。

新作のロボット開発がひと段落ついた彼女はそうしてようやく数日ぶりの安堵感を味わうのであった。追われていた責務から解放される心地よさ、その快感に存分にひたる彼女。

「……………少し眠るか」

彼女はその部屋を見渡した。制作途中のロボットやら鉄交じりのネジやらナットやらが大量に転がった部屋を見てため息をつく。そうして彼女はそつとガラス窓をあけてベランダへと出て行った。

ああ心地よいな

昇りゆく朝日が見える。そのままばゆいばかりのはじまりの象徴を、ベランダの端から目を細めて見つめる。さえずる小鳥、新聞配達のパイクの音、こうして社会というものはせわしなく動いて行くのだから。

晶葉は感慨にふける。幸い今日は休日だ。この後は存分に惰眠を貪れるだろう。その前にこの光景を堪能してからでも遅くはあるまいと。

ベランダで深呼吸をしながらいつも通りの光景を眺める秋葉。空を飛んで行く小鳥たち、ランニングをする中年男性。ベランダの端に転がる巨大なタマゴ。全てが彼女にとって見慣れた光景であり――

「うん？」

今何かおかしなものがなかったか

自問する晶葉、そうしてそれを見つけてしまう。5秒ほど呆然と固まる晶葉。まぶたをこしこしとこすり、もう一度それをじつと見つめる。彼女の視線の先には巨大なタマゴが静かに佇んでいる。そうして彼女はそつとため息をついた。

「だめだな、研究のしすぎでどうかしてしまったか…」

明らかに物理法則に則っていないタマゴを見つめる晶葉。彼女の優秀な頭脳は卵に関する知識を即座に算出し始める。

卵とは生殖細胞の事である。メスの未受精の卵細胞であったり受精した胚と呼ばれる物が外界へと排出された物を示す。その際にその生殖細胞は硬い外殻をまとう事で外界を遮断し洗練された環境下で育成されていく。

卵の外殻は中の生命体へより安全に発達を促すシエルターの役割を果たすのである。中にある卵黄自体が一つの巨大な細胞と言い換えても良い。

だからこそこんなものはありえない。世界最大の卵がダチヨウの卵であると言われているのだ。間違っても、こんな大きさ45cmのタマゴが、自宅のベランダにあつてたまるか。

17世紀に絶滅したエピオルニスと呼ばれる、歴史上もつとも巨大で重い鳥類ですら卵の大きさは約30cmであつたはずだ。ならばその絶滅したはずの生物よりぶつちぎって巨大なこの卵はなんなのだろうか。進化論を唱えたダーウインに中指を立てて喧嘩を売っているに等しい存在である。

そこまで考えて晶葉は、自身の思考を取りやめた。論理的にありえない以上これはただの妄想の産物である。つまりこれは何かの間違ひであるという事だ。彼女は再び大きく伸びをした。

「はあくだらない…もう寝よう…」

巨大なタマゴを疲労の末に見た幻覚であると結論づける晶葉。彼女はそのまま大きなあくびをしてベランダを出て行こうとする。たつぷりと朝の新鮮な空気を吸った彼女はそのまま目をこすりー

「ぐへえっ!?!」

タツクルをされた。背中に突き刺さる一つのタマゴ。晶葉は乙女らしからぬ声をあげて室内に倒れ込んでしまう。ボキリと、背中からしてはいけない音を立てながら晶葉は悲鳴をあげた。

「な、なんだコイツは!?!」

「……………」

「タマゴの分際で……というか本当にタマゴかこれ!？」

寝ぼけた意識が急激に覚醒していく。目の前でゴロゴロと転がる卵に激しくツツコミをいれてしまう晶葉。まるで置いて行くなといわんばかりに彼女の足にすりよってくる。

ぼかりとした暖かい温度を足先に感じる少女。生命の塊が彼女のつま先へゴツゴツと力強く体当たりをしてくるのであった。地味に痛い攻撃を繰り返される晶葉。彼女は呆然としたまま固まってしまった。

「いやいやありえない……こんな事……」

ぶつぶつと動揺したように独り言を発してしまふ晶葉。生物学は自身の専門ではないが一通りの知識はある。自身だって何十冊と生物学に関する本を読んでいたこともある。

だがどう思い返した所でこんな自意識をもっているとは思えない巨大でオレンジ色の斑点タマゴなど記憶にはなかった。地球上のどんな卵だつて、このタマゴの奇怪さに比べたら鼻で笑えてしまふレベルだろう。

タマゴを置いてけぼりにしたまま、彼女は目まぐるしく思考を繰り返すのであった。独り言をつぶやきながら晶葉は思考にふける。そんな彼女の態度を腹に据えかねたのだろうか、タマゴはごろごろと転がりながら弾みをつけて一気に飛び上がった。彼女のすべすべのお腹に向けて。

「こんな事ありえない……ならこれは夢に違いな……ぐげえっ!？」

お腹に突き刺さる一匹の弾丸。くの字に折れ曲り彼女は膝を着く。まさか産まれてすらいない存在にボディブローをかまされるとは夢にも思わなかった少女。

苦悶の声をあげながら惨めに縮こまってしまふ晶葉。そんな彼女を嘲笑うようにタマゴはごろごろと彼女の周囲を転がった。煽り立てるような、ゆったりとした動き。晶葉の中で何かがプツンとちぎれた音がした。

見たこともない存在に背中からタツクルをされた

天才ロボ少女、池袋晶葉

研究で二徹した彼女はきつと色々と限界であったのだろう。見た事もないようなはしゃぎようを見せる。マイナスとマイナスをかけあわせてプラスにでもなったのだろうか。

彼女の両親すら見た事がないほどのハイテンションでタマゴにつめよった。むんずとタマゴをつかみガシガシと中身をシェイクするように揺さぶった。まるで赤ん坊を高い高いするようにつかむ少女。実際は中身を他界世界してやろうと目論んでの事だったが。

やめろといわんばかりにふるふる震えるタマゴ。そんなタマゴに対して彼女は怒声まじりに言葉を放つ。二徹した彼女はその謎なハイテンションのまま、タマゴへとつめよった。

「なんなんだお前は!? ええい国家権力に電話してやる!」

「……っ!」

「それか朝食の目玉焼きにしてやるからな! 覚悟しておけ!!」

「……っ」

「なっ…!? お前今…私をバカにしたな!」

「……」

「…上等だ! 霊長類を舐めるなよ!!」

タマゴに盛大にがなりたてる天才少女。ともすると別の意味で危ない人間にしか思えないその光景。だがどうやら天才である彼女の脳にははつきりとあざ笑うかのようなタマゴの声が届いたようだ。

タマゴの状態からここまで明確な自意識を持つこと。タマゴの状態のまま単純ながらもコミュニケーションを取れる事がどれほど異常な事か。その事に気がつかない彼女は意気揚々とタマゴを掴んだままずんずんと歩き出すのであった。

休日など関係ない

このタマゴへ主従関係を教えてやる

そう意気込む彼女。そうして彼女は眠気覚ましにカフェインを胃に流し込むと足早に自身のラボへと向かった。そうして彼女は『全自動孵化ロボット』の制作に全力で取り組むのであった。

渋谷凜と本田未央と島村卯月

「うう〜疲れたよおー!!」

本田未央はそう言っただけで床に倒れ込んでしまう。汗まみれになりながら、床に大の字になって呼吸を荒げる彼女。どうやらよほどレッススが堪えたようだ。そんな彼女に渋谷凜が額に汗を浮かべながら声をかけた。

「未央、倒れ込むのはよくないよ」

「だって疲れたもん!」

手をばたばたともがきながら未央は悲鳴のような声をあげた。どうやらベテラントレーナーによる集中的な猛特訓がよほど厳しかったらしい。今度のライブでソロ曲を歌う彼女は特に厳しく指導をされたのであった。

シンデレラプロジェクト第1期生。ニュージエネレーションとしてグループを結成した3人。城ヶ崎美嘉とのライブデビュー、地域でのミニライブなど結成から実に様々な事があった3人。紆余曲折有りながらも今ではこうして仲良くアイドル道を邁進しているのがあった。

来たるべき地方ライブでの公演を目指して、現在の彼女たちは猛特訓の最中である。日増しに過酷になっていくレッスンに対してポジティブな未央には珍しい事に、彼女は泣き言を言うのであった。

無論それは本人のやる気がある上で、ふとした拍子に漏れ出た愚痴のような物である。その証拠に、彼女自身はレッスンにひたむきに取組んでいた。誰よりも汗をかけた彼女の疲労はとてつもなく甚大であったという事であろう。

自販機に飲み物を買った卯月の事を思い出しながら凜は自身の汗を手でぬぐう。6月下旬、今日もまた蒸し暑い1日になりそうだ。彼女はふうと深い息をつきながら未央に声をかけた。

「ほら、一緒にベンチで休もう」

「しづりん連れてってー」

「置いてくよ」

「ひどい！でもそんなクールな所が可愛いよ！」

軽口を言い合う二人。紆余曲折あったがどうやらその困難が彼女たちの絆を更に深めたらしい。雨降って地固まるとでも言うのだろうか、まるで何年も連れ添ってきたかのように仲が良い様子だ。

未央は自身のバッグを開き出す。中から一本の水筒を取り出した彼女。そんな彼女は突如、あつという声を出して固まってしまった。水筒を手に呆然と固まる未央。そんな彼女の様子に凜が訝しげに声をかけた。

「あつ…あぁー…」

「どうかしたの？」

「タオル…忘れちゃった…」

どうやらタオルを家に置いてきてしまったらしい。がっくりと肩を落とし床にうなだれてしまう未央。頭を抱える彼女の様子は実に悲壮感に溢れていた。

このような大規模レッスン時には大きなスポーツタオルを持ってくるべきというのがアイドル達の暗黙の了解であった。なのだが、どうやら彼女は洗濯をしたままそのタオルを自宅のマンションに置いてきてしまったらしい。

ため息をついた凜。そうして彼女はうなだれる未央の元へといき彼女の肩を優しく叩いた。

「仕方ないなあ…じゃあ私の予備のタオル貸してあげるよ」

「おお…なんと…慈悲深き…」

「はいはい、古い方で良いよね」

「サンキューしぶりん！愛してるよ！」

汗まみれの自身に抱きつこうとする未央を手でそつと押し返す凜。そうして未央の言葉を背に凜は大きなショルダーバッグの方へと向かった。それは女性が持つにはあまりに無骨で巨大なショルダーバッグであった。

今日はライブでの衣装合わせや同期のアイドルに借りたダンスに関する資料を詰め込んできたのである。故にいつもよりずっと荷物が多くなってしまったのだ。凜は普段はもってこないような黒くて

大きなシヨルダーバッグに手をかける。

「うわー随分大きなバッグだね。来る時大変だったんじゃない?」

「大丈夫、来る時タクシーで来たから」

「わーお、カッコ良いー!」

「今日はみくに借りたアイドル全集とかライブのDVDがあるんだよね」

「ああ資料として借りてた奴だね」

「そうそう、それが随分重くてさ」

他愛もない会話をしながらシヨルダーバッグを開け始める渋谷凜。その重みに彼女はそつと眉をひそめる。こんなにも重かっただろうか、そう思いながら彼女はそのバッグの口を勢いよく開きー

「ナゾ」

ゆっくりと

とじた

まるで秘め事を目撃してしまった家政婦のような素早い手つき。ぴしやりとジッパーでバッグのふたを完全に閉じてしまう。そうして彼女はそつと天井を仰いだ。突如天井を見上げ始めた友人の不審な行動、堪らず未央は心配して声をかける。

「あれ…どうかしたのしぶりん?」

「ううん、なんでもないよ」

「そつかーそれでタオルなんだけどさ」

「そんなことより世界経済の話でもしようよ」

「なんでさ!?!」

鋭いツツコミが入る。汗をだらだらと垂れ流す未央に冷や汗を流す凜。よくわからない混沌とした空気が流れ始める。レッスン場に佇む二人のアイドルの間にシユールな感覚が走った。

タオルを貸してくれると行った友人が貸してくれない、というか汗を拭こうとすらしらない。そんな彼女の態度を全力で不審に思う未央。

彼女は熱で火照った身体のまま凜に詰め寄った。

「ねえしぶりん、なんか様子がおかしくない？」

「べつに、なにも」

「なんかしぶりん…隠し事してるように思えるんだけど」

ジト目をする未央。友人の間で隠し事は良くない、そう言わんばかりの視線。そんな未央の視線に動じる事のない凜。彼女は足でえいえいとシヨルダーバッグをつつき、隠そうともがきながら未央に向き合った。

「そんなことないってば」

「そうかなーなんかさつきから怪しいんだよなあ」

「何も隠してなんかない「ナゾ」」

「ないナゾ!?今なんか聞こえたよ!」

可愛らしい語尾が聞こえてくる。ハッと反応をしてしまう凜。そんな彼女の背後ではシヨルダーバッグがもぞもぞと動き出していた。まるでホラー映画で異星人から肉体を食い破られた犠牲者のような動きをし始めるバッグ。

息を飲む二人。そうして凜のバッグからある一匹のポケモンが飛び出してきた。彼女の実家にいるはずの植物ポケモン、ナゾノクサが飛び出してきた。

「うええー!ポ、ポケモン!?!」

バッグから飛び跳ねるようにして出てきた一匹の草ポケモン。そんな彼女に対して驚きの声を上げてしまう未央。動転する彼女をよそに、凜は目元を抑えるようにして深いため息をついた

「別に隠す必要なんてないじゃんー☆」

あれから十分。一連の経緯を聞いた未央ははつきりとそう言い切った。ナゾノクサを自身の膝上に抱えながら彼女は凜に対して問いかけた。

未央はうりうりと子供をあやすようにしてナゾノクサを扱う。そんな未央の手つきにナゾノクサはきやつきやつと幼児のように声を

挙げながらはしやぎいでいる。楽しそうに交流する二人を凜は冷たい視線で見つめた。

「飼ってるって言ってくれば良かったのにー。うちでもポケモン飼ってるよ?」

「まあ…この間見せてもらったけど…」

「全然変な事じゃないってば」

「別に飼ってるわけじゃないし…まさか勝手についてくるだなんて…」

「こーんなに可愛いのにさー、ねーナゾっち!」

まるで赤ん坊をあやすように抱きかかえた彼女。一方凜は何とも言えないやるせない表情をしていた。勝手にバッグの中に入った事もそうだがそれに気がつかなかった自身にもやるせない思いがしていたのだ。

ナゾノクサを抱えて戯れる未央。嬉しそうにはしやぎ声をあげるナゾノクサに対して凜は複雑そうな表情をした。そんな二人のもとへ一人のアイドルがやってきた。

どうやら買い物を終えて帰ってきたらしい。ふわふわのロングヘアをした実に可愛らしい少女が彼女達の方へと歩いてきた。

「ただいまー!自動販売機が売り切れで外まで買いに行っちゃいましたー」

はあはあと息を荒げる島村卯月。ピンク色のジャージを身につけた彼女はその両手に大きなスポーツドリンクを3人分抱えてやってくる。同じニュージエネレーションのメンバーでもある彼女はそうして二人のもとへ合流するのであった。

床に座り込んで話し込んでいる二人。そんな二人のそばに一匹のポケモンがいる事に気がつく卯月。その生物を見つけると卯月はぱああと輝くような笑顔を見せた。キラキラと瞳を輝かせてそのナゾノクサに近寄る彼女。

「わあーポケモンだあー!可愛いですね!」

「ねー、しぶりんったら私たちにずっと内緒にしてたんだよー?」

「別に内緒には…ただ言う機会が無かっただけ。ちよつと苦手だしさ…」

「なんでやねん！いくらでもあったじゃんー！」

「凜ちゃん、この子達の事あんまり好きじゃないんですか？」

「……」

スポーツドリンクを手渡しながらついで言葉を発してしまう卯月。来たばかりの彼女にはどうして凜が暗い顔をしているのかよくわからなかったのだ。そんな彼女の態度に卯月が慌てたように訂正をした。

「あつご、ごめんなさい…言いづらい事なら…」

「ううん、別にいいよ」

ため息をつく凜。彼女は卯月のそばで小躍りをするその草ポケモンに視線を向ける。嬉しそうに小躍りする彼を横目に、凜は二人へと話し始めた。己が彼らを苦手とする理由をぼつりぼつりと話し始めた。

「実は……」

「……………」

「あーなるほどー…」

「うーん、それはー…あははー…」

うんうんと深く納得をする未央。一方の卯月は思わず苦笑をしてしまう。なるほど、確かに渋谷凜が抱えていた不安は複雑な問題であろう。思春期の女性としては大きな問題でもある。

彼女がいうにはナゾノクサの事が嫌いではない

ただ進化をしたら絶対に嫌いになってしまう

とのことであった。つまりー

「クサイハナになつたらやばいって事だよね」

「うん、やばいね」

うなずきあう未央と凜。凜の方は一切の感情が見出せないくらい
の真顔であった。シリアスな表情をして憂鬱そうに語りきつた凜。
どうやら語彙力が低下する位☒やばい☒問題であるらしい。

『クサイハナ』

幼体であるナゾノクサから進化したポケモン。大きさは0.8 m 体重は8.6 kgと中型サイズのポケモンである。独特の顔をしたかなり個性的な彼ら。が、なんといつてその最大の特徴は頭部の巨大な花卉であろう。ここから香る花の香りが厄介なのだ。

信じられない位

臭いのである

ポケモン界1臭い生物とも呼ばれるクサイハナ。その想像を絶する悪臭は2 km先の人間にすら余裕で届くとまで言われているのだ。コジロウとよばれる某団員はこの臭いについて「納豆とくさやと1年間履き続けた靴下の臭いをブレンドしてそこにニンニクを混ぜたような臭い」とまで表現をした。つまり常人にはとても堪え難い匂いであるという事である。

オーキド博士はこのクサイハナの臭いについては外敵から身を守るためにめしべから放たれる刺激臭であるとの説明をしている。トレーナーとの関係が良好で有り、トレーナーとポケモンの技術力が高い場合この匂いをコントロールする事も可能ではあるらしい。

とは言えそれは別の世界の話で有り、この社会においてはまだまだ研究が進んでいないのが現状であった。研究対象であるポケモンの数が膨大である以上、どうしても危険度や利益が少ないポケモンは研究が後回しになってしまっているのが現実であった。現在ではこのナゾノクサは一部の愛好家や植物関係者に好まれるだけであって一般人への人気度は依然として低いままであった。

「つまりこの子達が進化したらちよっと困っちゃうなーって事ですか？」

「うん、それを100倍位に増したら今の私の心境になるかな」

真顔で頷く凛。彼女は中学生の頃にネットで調べた事があるらしい。当時思春期真っ盛りであった頃の凛。自分にすりよってくるナゾノクサ達。その進化先を調べた当時は20分ほどパソコンの前で固まってしまったものだ。当時見つけた動画は恐るべき内容であっ

た。

目の前で進化をしたクサイハナの悪臭を真正面から嗅いでしまった青年トレーナー。その彼が白目を向いて全身から体液を垂れ流しながら激しく痙攣する動画は今だに彼女の中でのトラウマとなっていたのだ。当時の凜はパソコンの画面の前で涙目でふるふる震え続けたものだ。

こうして会話をしている今ですらいつ進化をするか分からないのである。バトルをさせていない以上、彼らが進化をする可能性は限りなく低いであろう。だからと言って彼らと率先して関わりたいとは到底思えなかった。

ダイナマイトを抱えて日常を過ごすような物である。しかもそのダイナマイトはアイドルとしての人権や乙女の沽券を容赦なくぶち壊す可能性があるのだ。凜が彼らに好感をもてないのはある種仕方のない話でもあった。

「変に愛着持つてもお互い辛いだけでしょ？」

「それはそうかもしれないけど…」

「ナゾノクサってクサイハナにしか進化しないらしいしさ…やっぱり人間になつかせないままの方が良いかなって」

悲しそうに言う凜。彼女とて彼らの事が嫌いではないのだ。ただ共に歩むには障害が大きすぎるとも感じているだけなのである。凜はタオルで汗をぬぐいながら件の生物を見下ろした。

クサイハナはそのルックスからダントツで人気が少ない。有志のトレーナーやら研究者らがバトルを行い、経験を積みさせても一向に進化しなかったのだ。なにか他の進化条件があるのか。それともクサイハナは進化をしない種族なのかそれは今でも分からなかった。

気落ちする凜、そんな彼女に対して卯月はなんとも言えない表情をした。両手をわたわたとさせて慌てる卯月。なんて言葉をかけてあげようかと戸惑っている卯月に対して、未央は明るい声をだして場を盛り上げた。

「大丈夫だよしぶりん！そんなに暗い顔しちゃダメなんだからね」

「未央…」

「諦めなければきつと第2！第3の進化だつてあるはずだよ！」

「いやそんなには進化しないでしょ」

冷静に凜が突っ込む。そんな彼女の言葉に未央はあははと苦笑した。どうやらジョークで放った言葉らしい。最新の研究ではポケモンは最大でも2回しか進化しないとされているのだ。凜にはナゾノクサに多彩な進化先があるとは到底思えなかった。

とはいえ未央の言葉はよく伝わったらしい。今悩んでも仕方ないじゃないか、との言葉は今の凜を元氣付けてくれたようだ。未央のそんなポジティブな励ましに二人はくすくすと笑い始める。

どうやら元氣が出たらしい。年頃の少女達である彼女達は再び明るい話を始めた。スポーツドリンクを片手に3人のアイドル達は会話に花を咲かせる。

「卯月はポケモンが好きなんだね」

「ほんとだねーナゾツち達もよく懐いてるよ！」

卯月の膝の上ですーすと眠り始めるナゾノクサ。バッグの中であれほど眠っていたのにまだ寝足りないらしい。よだれを垂らしながら気持ちよさそうに眠るナゾノクサの頭を優しく撫でながら卯月はにっこりと微笑んだ。

「うん！小さな頃からのお友達がいるんです」

「友達…？」

「小さな時にタマゴから孵した子がいるんだ！とっても可愛いんだよ」

「へえしまむーもポケモンを…みんな意外と飼ってるんだねー」

卯月の発言に驚くような顔をする二人。今更ながら知らない事が多いらしい。同期であるアイドル達の話題で盛り上がった彼女たちは卯月のポケモンについて関心を持ち始めた。

このおっとりとした穏やかな友人はどんなポケモンを飼っているのだろう。凜と未央は卯月に質問を投げかけた。だが卯月はくすくすと笑って焦らすように答える。どうやら内緒にしてみんなを驚かせたいらしい。

「いつから飼ってるの？」

「私が小学生の時に出会ったんだよ」

「おお！結構古いね」

「抱きしめるともふもふで可愛いんだあー」

「へえー…もふもふ？」

「話し方からすると結構大きいのかな？」

「うん、でもちよつと我儘な所もあって…でもそういう所がまた可愛くって！」

推測する凜と未央。そんな二人に対して卯月はえへへーと微笑みながら会話を続ける。卯月は楽しそうにそのポケモンについて語るのであった。

曰くもふもふで巨大

夜中はベッドで一緒に眠る

毎日のブラッシングを欠かすと怒りだす等

話をきいた限りでは随分と我儘な生物らしい。まるで箱入り娘の様に大切に扱われているようだ。けれど卯月はそんな所も気に入って居るのか、彼女は実に嬉しそうにそのポケモンとの思い出を語るのであった。

依然としてその正体が分からない凜と未央。そんな彼女達に対して、卯月は腰に手をあてて実に楽しそうにヒントを持ち出すのであった。

「ヒントはーノーマルタイプです！」

「ノーマルで…もふもふ？」

「うふふー分かるかなー分からないかなー」

「うーんやっぱり降参！答えを教えてよしまむー！」

未央はどうやらギブアップらしい。拝むようにして卯月をお願いをする未央。そんな彼女の言葉に仕方ないなあと言わんばかりに卯月はえへんとドヤ顔をした。そうして彼女はにっこりと笑みを浮かべて答えを言う。

「じゃあ正解を言っちゃいます！正解はー」

「おい、休憩は終わりだぞ！」

「ええ！べ、ベテラントレーナーさん!?」

突如レッスン部屋に入ってきた一人の指導員。どうやら休憩時間は終わりのようだ。彼女たちは慌てて立ち上がり準備をし始める。そんな彼女達をせかすようにベテラントレーナーは声を張り上げる。「早く支度をしろ！午後からは君達のライブのおさらいをするんだからな」

「ふ、二人とも！急いで支度をしましょう」

卯月が慌てたように行動をする。そんな彼女の態度に苦笑する凛と未央。どうやら時間切れらしい。聞きそびれてしまった卯月の家族について想像をしながら再び彼女達は厳しいレッスンを始める。

こうして彼女達は日々を忙しそうに過ごすのであった。全ては夢であるトップアイドルになる為に。とある蒸し暑い日の出来事であった。

【久川姉妹とカモネギ】

とある昼下がりの休日。そんな徳島県の某所、とある寂れた公園に彼女達はいた。錆びついたブランコ、水飲み場に塗装が剥がれたベンチがあるだけの簡易な空間。その場にその二人の少女は居た。お互いがそっくりの容姿をしている為、きつと双子なのだろう。

絹のようにさらりとした美しい銀色の髪、パチリと開いた大きな瞳。美しい身体をワンピースに包ませた彼女達はまるでどこかの国のお嬢様のように思える。そんな麗しい小学生である彼女達のそばには、とある一匹のポケモンがいた。

その生物は鴨によく似ていた。茶色い体、黄色い嘴に大きなヒレがついた両足。ネギによく似た植物を持つている点を除けば普遍的な野鳥そのものであった。どこにでも、とは言わないがどこかにはいそうな容姿。可愛らしい野鳥の姿がそこにはあった。

ただし80cmと

バカみたいにでかくなければ、である

人間並みに恐ろしく巨大な野鳥を間近で観察すると人とはこうまで啞然としてしまう物らしい。少なくとも久川颯は絶句していた。口をあぐりと開きその巨大生物を呆然と見つめてしまった。そんな彼女に対して双子の姉である久川凧は軽やかに答えた。

「と言う訳でつれてきました」

「いやどうい訳よ」

あまりに急すぎる言葉に久川颯は思わず突っ込んでしまう。そんな彼女に対して凧はやれやれと肩をすくめて答える。彼女達は双子であるからだろうか、そっくりの表情した彼女達は側から見るとても見分けがつかなかった。

とはいえ中身はあまりにも異なっていた。双子の姉である久川凧はあまりにマイペースであったのだ。普段からぶつとんだ行為をする彼女。でもまさか正体不明の巨大野鳥を捕まえてくるとは到底思わなかった。頭を抱えて投げ出したい気持ちをごつと抑える颯。

「な、なー？…そのおっきい野鳥って…」

「かもくんです」

「いや名前は聞いてない」

「あだ名はかーくんです」

「あだ名はもつと聞いてない」

おもわず抜群の掛け合いをしてしまう二人。だがこれが彼女達の普段通りの会話なのであった。マイペースな凧がひたすら場をかき乱しそれを収集するのが凧の仕事でもあった。

何食べたらかんなにでかくなるの？

というかそれ本当に野鳥なの？

そう問い詰めたくなる気持ちをぐっと我慢する凧。世界最大の翼開長できる鳥はワタリアホウドリである。大きな個体が翼を最大まで広げると3mものサイズになったらしい。だがあれはあくまで一般的な鳥の例である。こんなに縦にも横にもバカでかい生物では決してなかった。この生物が翼を最大まで広げたら一体どれ程大きくなるのだろうか。

下手をすれば襲われるかもしれない、そう考えて凧はごくりと唾を飲んだ。というかここまで巨大生物に近づいた事など彼女にはなかった。家族で出かけた動物園位である。まさか数メートルの距離で眺める巨大生物がここまで恐ろしいとは。凧は内心で恐怖に震える。

凧はかの生物、別の場所ではカモネギと呼ばれるポケモンの頭を撫でながら穏やかに微笑む。だが凧は口をパクパクと開けて呆然としてしまう。間違っても日本の徳島県にいてもよい生物ではないだろう。そんな生物の頭をよしよしと撫でながら凧は朗らかに答える。

「餌を与えた。懐いた。連れて来た。あーゆーおっけー?」

「ノットオーケー」

「ふう…分かって貰えて凧は嬉しいです」

「いや納得できてないからね」

にこりと微笑む姉に頭をかかえる妹。ベンチに佇む小学生美人姉妹。そんな彼女達の眼前ではカモネギが楽しそうに毛づくろいを行っていた。

地面にペタンと座ったまま自身の前羽（右手？）とくちばしで器用に毛づくろいを始めていくカモネギ。そんなカモネギを眺めながらうむと何事かよくわからぬ納得をする風。

この野鳥は人の手に負えるものではない。直感でそう理解した颯は即座に姉の説得を始める。

鳥獣保護法という物がある。小学校の図書館で見つけた時「野生に生息している」野鳥を捕まえてはいけないとの記述を、颯は本で見たことがあった。勝手に人間が野鳥を捕まえると生態系への影響や、鳥が自由に空を飛べなくなってしまう問題が起こるらしい。この野鳥のためにも、何より自身の平穩の為にも彼女は真剣に風を説得し始めた。

「なー、今すぐ元いた場所に返して来なさい」

「いやです」

「うーん即答か…」

「かーくんもはーちゃんも皆ずつと一緒です」

「なー…」

「3人でお笑いトリオを結成するんです」

「いや、お笑いなんてしないけどね」

「鳥…だけに、トリオです」

「ドヤ顔しないで、可愛いけどしないで」

姉が野鳥とお笑いトリオを

結成してこようと勧めてきます

誰かに話したら迷わず鼻で笑われるか常識を疑われる内容である。だが目の前の姉はふんすと華麗なドヤ顔を決めながらこちらを見つめて来るのであった。颯はため息をつきながらなんとかしてこの野鳥を逃がそうと固く決意する。

鳥はむやみに捕まえてはいけない生物なのだ。翼をもつ彼らは狭い鳥かごで過ごすよりもこの広い大空で羽ばたいた方が幸せに違いないのだから。颯はそれまでの叱るような言葉をやめて穏やかに説得をし始めた。

ねえ、真剣な話をしよう

穏やかな少女の言葉にぴくりと反応をする凧。どうやら雰囲気が変わったことを悟ったようだ。それまでのどこか笑いを交えた雰囲気はどこかへと消えていた。そうして凧は説得をし始める。生き物を飼うことの難しさ、生命を捕らえようとする人間のエゴについて。

凧の瞳を一身に見つめる凧。そうして凧は一生懸命に言葉を紡いだ。野鳥は大空ではばたくからこそ幸せなのだという事を理解して貰う為に。そうして彼女はベンチに腰かけたまま静かに説得を始めた。

「だいたいその…かもくんだっけ？その子も迷惑してると思うよ」

「そうですかね…」

「野鳥ってね、人間が簡単に飼っちゃいけないものなの。ちゃんとお母さんとお父さんの元で一緒に暮らした方が幸せなんだよ？」

「……」

「おうちに閉じ込めるだなんて可哀想だと思わない？…なーはそれでもかもくんを無理やり飼おうとするのかな」

「……」

「そんな事かもくんはきつと…うん、絶対に望まないよ」

「…おうちで飼うのはだめですか？」

「うん、きつとかもくんだって広いお空で暮らしたいって思うはずだよ」

「かもくんも凧と一緒に暮らしたいですよね？」

「カモ！」

「領いてるしたぶん大丈夫です」

「うそやん」

思わず普段つかわない言葉を発してしまう凧。それまでのしみじみとしたムードが一瞬で消し飛んだ。まさかこの野鳥が人間の言葉を理解して華麗に頷くなどと誰が思おうか。というかこれまでの流れからして完全に言葉を理解していることは明白であった。

まさか80cmの野鳥が華麗にボディランゲージを駆使してくる

だなんて。颯の中で常識が音を立てて崩れ去っていく。テレビのコメンテーター並みの力強い首の振り方に思わずツツコミをいれてしまう。どこのおっさんだ君は。

というかこの野鳥は本当に野鳥なのだろうか。中に誰かはいつてるんじやなかるうか。ネギをお手玉のように弾ませて器用に手遊びを始める野鳥を見つめながら颯はよくわからぬ恐怖を抱き始めた。そんな彼女の心境を知ってか知らずか、凧とかもくんは漫才の特訓を始めるのであった。

「いいですかかーくん。凧がボケたら即座に突っ込むのですよ」

「鳥にむちやぶりしないで」

「凧がツーと言ったら？」

「カー！」

「息ぴったり!？」

漫才のような掛け合い。まるで連れ添った夫婦の様に噛み合った阿吽の呼吸である。いえーいと喜びながら互いにハイタツチし合う姉と巨大野鳥をみながら颯はぞつと青い顔をする。どこの世界にネギ持った野鳥がハイタツチするというのだろうか。

見事颯の中で巨大野鳥は未確認生物にランクアップを果たす。そうして颯は凧の手をつかみ力づくで引き離そうと試みる。その柔らかくすべすべとした肌を掴みながら急いで公園から走り抜けようと試みる颯。一方凧は断固たる姿勢で徹底抗戦の構えをとった。

「そんな野鳥放って置いておうちに帰るよ！」

「嫌です！かーくんと凧はマブダチなんです」

「出会って10分も経ってないでしょうが！」

カモネギに首元に抱きつく凧。そうして彼女は一向にカモネギから離れようとしなかった。彼女は彼の首回りに手を回しながら抵抗の意思を見せる。そんな凧の腰に手を回して力づくで離そうと苦心する颯。だがびくともしなかった。

無駄に抵抗をする凧に対して颯は全力でひっぺがそうと試みた。だが、まるで絨毯にひつつく猫のように頑丈にしがみつく彼女。シャツに染み付いたカレーうどんの染みの如くしつこい凧の抵抗に颯は

全力で説得を試みた。

「なーちゃん、めっ！離れて！」

「凧とかもくんは運命の相手です。こんな程度では離れません」

「はなれなさい〜!!」

「あなたを見た時に痺れた衝撃。マジでときめく5秒前」

「Jポップか」

「お前を見た時フォーリンラブ」お前のハートにホールインワン」

「ヒップホップか」

「親に感謝」はーは悲観者」トー〇スは機関車」

「だからヒップホップか：ちよつと待って、本当に待って」

しがみついたままりリツクを奏でる双子の姉。そんな姉を全力で止める凧。溢れ出るソウルを全力で表現しようとする姉の様子に凧は思わず動揺をしてしまう。

ぜーぜーと呼吸を乱しながら地面に膝をつく凧。そんな彼女をあざ笑う様に凧はいつもの表情で自身の妹へと話しかけた。

「なんですか、今全力でリリツクを奏でようと：」

「しなくていいから！はやくその子から離れてってば！」

「いやです」

「わがまま言わないの！」

「いやです、かーくんを我が家の晩御飯にするまでは帰りません」

「カモ!」

「かーくんが一番驚いてるけど!」

「ね、かーくんは凧とお友達ですよね？」

「そのタイミングで友情を確かめるな！」

きよとんと可愛らしく小首を傾げながら問いかける凧。そんな彼女の態度に仰天するカモネギ、つつこむ凧。なんとも混沌とした空気があった。公園のベンチで会話を続ける一匹と二人。

暑い太陽の日差しに汗をかく。幸いベンチの横には立派な大樹もある為直射日光だけは避けられるようだ。その公園の園内にいるのは彼女達だけである。なんとしてもこの公園の中で話の決着をつけなければならぬだろう。彼を引き連れてご近所を練り歩くつもり

はーミクロンもない颯は懸命に対話を続けるのであった。

「野鳥って汚いんだよ？なーってばちゃんと理解してるのかな」

「カモ…」

「ばっちいばい菌とか病気とかあるかもしれないだよ？」

「かーくんにひどい事言わないでください！はーちゃんには見損ないましたよ！」

「いや、さつきカモ鍋にしようとした人に言われたくないんだけど」

シヨツクを受けた様な顔をしてうなだれるカモネギ。つくづく表現が多彩な生物である。そんなカモネギをぬいぐるみのように抱きながら凧は涙まじりに答えた。颯は色々な意味で頭を抱えてしまう。

「いったん落ち着きましょう、ピークールです」

「そうだね、一旦落ち着こう」

ふうと息をつく双子。このあたりの阿吽の呼吸はさすがは双子の姉妹である。そうして彼女たちはそつと水飲み場へ移動して水を飲み始める。手洗い場と飲水場が合わさったごく普通の蛇口。

議論で乾いた喉を潤していく。体内に満たされていく水の恵みに感謝をしながら颯はそつと天を仰いだ。そうして彼女たちは再びベンチに座り始める。器用にバルブをひねって水を飲み始める人間じみた野鳥を必死で見ないようにしながら颯はそつとつぶやいた。

「なーの気持ちわかるよ？なんとなく惹かれるものがあるっていうのも双子だからよくわかる」

「……」

「でもさ、やっぱりあの子を飼うのは難しいよ」

「……」

「餌とかさ、家族への説得とか……あと法律と常識的に」

「難しくても良いんです…凧がその分頑張ります」

「なー…」

ベンチで俯く美少女。珍しい姉の姿に颯もまたそつと息を飲んだ。どうやら随分とかもくんに惚れ込んでいるらしい。颯は理解してあげたいと思いつつ苦笑する。なんとなくそんな姿がなーちゃんらしいなど、そう感じたのだ。

「結婚後の名前も考えたんです」

「見当違いの方向に気が死ぬ程早いけど聞かせて」

「名前は久川かもくんです」

「まんまだね」

「あだなはかーくんです」

「それもまんまだね」

「ネギを持つてるから☒カモネギ☒っていうのも候補にありました」

「いや…そんなら秒で考えたような名前やめようよ」

「じゃあ☒ネギかも☒で」

「疑問形!?!しかも鳥ですらなくなつた!」

こうやって日常の中で隙あらばボケようとしてくるのも実になーらしいなど、そう感じてしまう。というかあまりにマイペースすぎないだろうか。

ペットを飼いたいと駄々をこねる双子の姉。そんな姉の態度に今日で何度目かわからぬため息を繰り返す颯。彼女は頭を抱えながら家族への説得が無理だと伝えるのであつた。

彼女達の母親、双子自身はゆーこちゃんと呼んでいる一人の女性を想像する。一家の家計を握っている彼女になんといつて説得を試みればよいのだろうか。颯は途方に暮れた。

「ゆーこちゃんを説得できる気がしないよ…」

「大丈夫です3人よればなんとかです」

「文殊の知恵ね、一番重要な所あやふやなのやめて」

「大切なのは力をあわせる事です」

「なー…」

「皆で協力すれば家族だって説得できる「カモ」です」

「最悪なタイミングで合いの手を入れられたー!?!」

結局漫才のようなノリのまま話が収束してしまつた三人。内心で震えながら帰宅する颯。猛烈なる家族会議、マイペースな風。惰眠を貪るかもくん。全てがカオスな空間での衝突の末、会議は決着を遂げる。紆余曲折とんやかんやの末に、こうしてカモネギは彼女達の家族となつたのであつた。

【島村卯月とタマゴ2】

都内某所の一軒家、島村家のとある私室にその少女は居た。ライトブルーの絨毯、おしゃやれで可愛らしい小物入れ。壁に飾られたアイドルのポスター。いかにも年頃らしい少女の部屋に彼女は居た。彼女は部屋の隅に置かれた大きなベッドの上で嬉しそうに声をあげる。「あつまた動いたー」

思わず漏れ出た歓喜の声。そうして毛布を被ったまま卯月はにっこりと微笑んだ。ベッドの中で動くそのタマゴに対して喜びを抑えきれなかったのだ。彼女はキラキラと瞳を輝かせながら再びそのタマゴを抱きかかえた。

このタマゴを拾ってから5日が経った

こつそりとタマゴを家に持ち込んだ彼女がまずおこなった事は隠し場所を作る事であった。自身の洋服がたつぷりと収納されているクローゼット。その左端にダンボールで小さな空間を作り、そこにタマゴを収納するようになったのだ。

タマゴは大人に見つかってはいけない

当時小学生であった卯月はその事を直感していた。あまりにも常識はずれの大きさであるそのタマゴ。ママやパパに見つかってはきつと面倒ごとになってしまう。この時小学生であった彼女はその事を拙いながらもよく理解していたのだ。卯月は罪悪感を感じながらもそつと隠し通す事に決めたのだ。

学校から駆け足で帰り、タマゴの無事を確かめる。それがここ数日の彼女の日課であった。そうしてタマゴがダンボールの中でじっとしている事を確認すると彼女はほつと息をつくのであった。

くじらがプリントされた可愛らしいミニタオル、花柄の毛布やらに包まれたそれは確かな生命の躍動を卯月に報せるのであった。ポカポカとした暖かみを感じる。卯月はこの暖かさが好きであった。それを抱えているだけで自身の心までぽかぽかとしてくるこの感覚が大好きであったのだ。

このタマゴは何もかも異常であった。
寂しがるのである

タマゴが卯月のそばに居るか居ないかで明らかに反応が異なるのである。彼女がいなければタマゴは微動だにしない。が、彼女がそつと近寄るだけで嬉しそうにコロコロと転がりだすのである。

卯月は一度タマゴを部屋の端に置いて呼んで見た事がある。長さにして数mはあるであろうこの距離。まさか動くはずがないだろう、そう感じながらも手を叩いてタマゴに対して呼びかける。

すると部屋の端からコロコロとそのタマゴは動き出したのだ。卯月の方に向かって転がってきたのである！この時は思わず卯月も呆然と固まってしまったものだ。自我を持って居るとしか思えないこの行動に唾然としてしまう。

こんなタマゴがあるはずがない

きつと大人なら誰もがそう感じてしまうだろう。けれど小学生であり幼い彼女はそれを受け入れてしまっていた。それは常識というものはまだ凝り固まっていないからか。それともそれだけそのタマゴが彼女にとって特別であったのか。それは誰にも分からない。ともあれ彼女が何よりもその存在を大事にしていることは確かであった。

こうして卯月がタマゴをお腹に抱いている時も、タマゴからは暖かい熱を感じる事ができた。嬉しそうに時折コンコンと音がするのは気のせいではないだろう。卯月は静かな声でそつとタマゴに呼びかけた。

「タマゴさん、お風呂の時間だよ」

「……………」

コロンと中から音がする。どうやら中の生物はお風呂が好きな様である。タマゴの外からでもわかるはしやぎ様に思わず卯月も微笑んでしまう。彼女は今だに帰宅していない両親の事を考えながらタ

マゴのお風呂の準備を行なった。

風呂といっても大した事はない。プラスチックの桶に多少のお湯を入れた程度の事である。そうしてその桶の湯に浸かれる様にタマゴを入れてあげるのだ。桶にすっぽりと収まったタマゴの表面を、卵月はタオルで優しく拭き始める。そうしてちやぶちやぶと自身の手のひらでお湯をかけてあげるのだ。

何を契機にして気が付いたのかは分からない。が、彼女はこうするとタマゴが喜ぶ事にいつからか気が付いたのである。卵の状態では湯浴みを行なっても効果もないだろうに、そのタマゴはお風呂の時間を何よりも楽しみにしていた。

少なくとも卵月にはそう感じられたのだ。もしかしたら中にいる生物は女の子なのかもしれない、卵月はそう感じながら湯浴みをさせてあげる。彼女は甲斐甲斐しく世話をやき続けた。そうして今日もまたその卵に献身的に奉仕を続けるのであった。

「タマゴさん、今日はね給食にプリンが出たんだよ！」

「……っ」

「それでね、その後給食のお代わりでねー」

嬉しそうに今日の出来事を話し始める卵月。まるで友達のように、親しげに話すのである。言葉もろくに話せないタマゴに対して話し続ける少女。嬉しくて仕方ない、そう言わんばかりに彼女は笑みを浮かべて長話を続けた。

「えへへ、いつか一緒にごはんを食べようね」

そうして彼女はタマゴの湯浴みを終わると再び抱きかかえるのであった。頭から毛布を被りそつと自身のお腹に押し上げてそつと瞳を閉じるのである。学校にいてそばにいてあげられなかった時間を埋める様に、彼女はそうしてタマゴとの絆を育むのであった。

ポケモンのタマゴを孵すには誰かがそばに居てあげなければならぬ。その事を彼女は直感で理解して居たのだろう。いやあるいはそれすらも無意識的に行なって居たのかもしれない。だって彼女にとってそのタマゴは大切なお友達なのだから。

彼女のタマゴが孵る日は近い

神谷奈緒とライセンス制度

ファンが回り、空調の音がする。その空間、346プロダクションの待合室にて神谷奈緒は頭を抱えながら問題集を眺めていた。彼女は頭をわしわしと書きながらテキストを睨みつける。

「うう…この問題…結構むずかしいな…」

開いたノートにペンを走らせる。カリカリと音を立てながら彼女は一心に問題を解いていく。そのテキストには『1週間で完全攻略！C級ライセンス取得』と書かれている。書店で購入した全200Pに及ぶ問題集には水玉模様のブックカバーがかけられていた。どうやらかなり使い込んでいるらしい。

そんな彼女のそばをとある一人の少女が通りかける。彼女は机に向かって座学を行なっている奈緒を見かけると驚いたように振り返る。そのツインテールの少女、緒方智絵里はそつと彼女に声をかけた。

「あれ…奈緒ちゃん、何やってるの…?」

「ああ…智絵里かおはよう」

「おはようございます…何か悩み事ですか?」

最近知り合った二人。今度のお祭りイベントでユニットを組む可能性があるとこの事でこの間顔合わせをしたのだ。その時から交友を少しづつ交友を深めるようになったのだ。

ちなみにユニットは星輝子と奈緒と智絵里の三人。ユニット名は「シャイニングゴッドチエリー」である。おそるべきネーミングセンスであると言える。まあそれは余談であるが。

ともあれ仲良くなった彼女達。年齢は近いが先輩と後輩という関係。敬語が時折混ざるが、彼女達自身は仲が良いようであった。そんな智絵里はそつと机に視線を向ける。そんな彼女に対して奈緒はああと説明をするのであった。

「今ライセンスの勉強をしてるんだよ」

「ライセンス…それって確か奈緒ちゃんの…」

「そうそう、イーブイと一緒に暮らし始めたからさ」

嬉しげに語る奈緒。彼女はへへっと笑いながら実に嬉しように家族の事を語った。最近ようやく両親にもなつき始めたのだと語る彼女の話に思わず智絵里も微笑んでしまう。

缶コーヒーの蓋をあける奈緒。微糖と書かれたそれを傾けながら奈緒は智絵里とライセンスの話をし始めた。初めて受験する奈緒にとってやはり不安で懸念な事項らしい。彼女はその太く特徴的な眉をひそめながら智絵里に詳しい話を聞き始めた。

「ライセンス試験難しいですよね…私もポポくとチュチュちゃんの為に頑張りました」

「チュチュちゃん…あああのふわふわ浮いてたポケモンか」

「はい、チュリネって言って草ポケモンなんです」

智絵里は自身の家族について話す。こうしている今、二匹のポケモン達の事を思い出す。中庭にある大樹の陰で昼寝をとるのが好きな彼らのことを。

智絵里もまた椅子を引き寄せ座り始める。スカートを巻き込まないように丁寧に気を使いながら座る智絵里。それはとても女性的で美しい動作であった。

「でも独学でライセンスですか？すごいですね」

「いやいや始めたばかりで…試験って難しいんだな」

「ああ…マークシート方式ですけど難しいですよ」

「でもイーブイの為だからさ、アタシも頑張ってC級取るよ！」

「えっ…イーブイなのにC級なんですか？B級じゃなくて？」

「えっ」

きよとんとする智絵里。可愛らしく首を傾げて尋ねる、そんな彼女の姿にどきりと奈緒は反応してしまう。奈緒の背中に冷や汗が流れた。奈緒は椅子に座りながら思わず智絵里の事を見つめ返してしまう。

「特C級でも良いけどあまり意味が…それならB級の方が…」

「ちよ、ちよっと待ってくれ智絵里！」

「やっぱりB級から限定解除するのが一般的で…」

「いや待ってくれ！さっきから何言ってるかさっぱりなんだけど!？」

「ライセンスのお話…ですよね？」

「うっ…ごめんあたしそういうの初めてで…」

「あっ…ごめんなさい…私も早とちりしちゃって」

智絵里が慌てて言葉を放つ。焦ったように両手をあわあわとさせる智絵里。そんな彼女からライセンス制度について詳しい説明が行われた。

ファンの音になる。空調が効いたこの部屋にいるのは二人と一つのテレビだけであった。液晶画面の中では『輿水幸子！アマゾンの奥地で絶叫バンジージャンプに挑戦！』特集が行われていた。

幸子のプロデューサーを呪い殺すような絶叫を背後に、二人のアイドルはライセンス談義を続ける。いたって平和で日常的な346プロダクションの光景がそこにはあった。

――
C級【ノーマル・草・虫】

B級【水・電気・氷・格闘・飛行・鋼・岩・霊・地面・エスパー】

A級【龍・毒・炎・悪】

ライセンスは大別して3種に分けられる。しかしそこから更に個別で2種類に分けられるのだ。『限定』と『特級』の二つがそれである。よって厳密にはライセンスには6種類存在するという事になる。

C級（限定）と特C級

B級（限定）と特B級

A級（限定）と特A級

限定と特級の違いは「飼育できるタイプの差数」にある。例えばC級（虫）と書かれたライセンスの場合は虫タイプしか公共の場に連れ出す事はできない。

しかし特級と書かれたライセンスならばその級に属する全てのタイプを飼育する事ができる。よって特C級の場合は（虫・草・ノーマル）の3種類を扱うことが可能になるのである。

無論、試験の際にも違いがある。特級と限定級の場合は試験の際の

出題傾向が異なるのだ。限定の場合は要求される知識が偏り難易度が下がる。一方特級の場合は該当範囲が広く、試験全体が難しい傾向になるのである。よって飼育するポケモンが明確に決まっている場合はそのタイプに限定した問題を受験した方が効率的なのである。

電気作業員などは電気タイプを中心に学習し、電気タイプをメインとした限定試験を受ける事が多い。そうして試験に合格すると職場などで電気タイプのポケモンに技を出させたりといった特殊な行動ができるのである。つまり職場や嗜好に特化したタイプを限定試験で受けた方がなにかと都合が良いと言える。

「なるほど…じゃあ智絵里の場合は」

「私はポポくんとチュチュちゃんがいるから…B級ライセンスの（飛行）限定を持つてるよ」

智絵里が財布から取り出した一枚のカードを見せてくれる。それは集積回路が内臓された認証ライセンスであった。このカードを指定の機械に通す事で内部メモリに記録されたポケモンと本人の情報が記録、閲覧可能になるのである。

それは黄色いプラスチックのカードであった。表面には智絵里の写真と住所、そしていくつかの項目がある。空白の欄の一つ、飛行と書かれた欄に○の記号が描かれているのが奈緒にもよくわかった。

初めて間近で見た正規ライセンスに興奮する奈緒。彼女にはクレジットカードのような、格好良い大人が持つ魅力的なアイテムに見えたのだ。おおと息を漏らしながらそのカードを見つめる奈緒。そうして彼女はあれ？と首を傾げた。

「智絵里のポケモンって草タイプだったよな」

「そうだよ？」

「どうして飛行なんだ？」

「ああ…ポポくんが草と飛行タイプなんです。B級の限定なら（草・虫・ノーマル）タイプも扱えるから…」

「えーと…上位ライセンスなら下級ライセンスのタイプも扱えるって事？」

「うん…だから取れるならB級の限定を取った方が便利かなって…」

「それがさつき言ってた限定解除か…」

「うん、まず一つのタイプを取っちゃえば他のも割と簡単に取れるから…」

上位ライセンスならば下級のライセンスを扱える。これは下級である程一般人への直接的な危険度が低いからだ。つまり社会への利益や個人の都合を考えた為、このようなライセンス方式になったのである。

つまりB級限定（電気・鋼）を所持した場合

電気と鋼、C級の全てのタイプ

A級限定（毒）ならば

毒タイプとB級&C級に該当する全てのタイプ

A級特級ならば

全てのタイプのポケモンの運用、所持が可能になるのである。

よって理想的には特A級を取るのが一番良い。が、特A級ともなると座学試験、実技試験も恐るべき難易度となる。日本においても屈指の難易度でありこのライセンスを所持している人間は大変少数である。

故に、限定解除とよばれる試験方法が人気である。これは一度どこかの限定試験を受けた後に別のタイプを受験する事ができる制度である。例えばB級（飛行）を受けた後に水や岩といった同級の異なるタイプを受験すれば、様々な面で優遇される制度である。

具体的には実務試験が免除され合格の際に必要な正答数が減少する。よって最初から特B級を受験するよりも、限定試験をうけて他のタイプを受験（限定解除）する方がより少ないリスクで合格する事ができるのである。

「つまりイーブイの場合は…」

「いつ進化をすらかわからないからB級の限定試験を受験して…そこから進化先のタイプに合わせて限定解除した方が…」

「受験料とか得だし難易度も下がるってわけか…」

机に身を投げ出してうなだれる奈緒。まさかここまで知識が不足して居たとは思わなかった。彼女は机にうなだれるようにして倒れ込んだ。

深く、長い溜息をついてしまふ奈緒。そんな彼女を智絵里は慌てて気遣った。奈緒を元氣付けるように、智絵里は明るい声を出して彼女を励ました。

「で、でもすぐに進化するってわけじゃないから…」

「そ、そうだよな！まずはC級取るのも良いよな」

「進化するまで時間もかかるだろうし」

「…ってそう言えばさ」

奈緒はふと思ひ出す。手元にある参考書をそっと閉じるとそばにいる智絵里を見上げた。智絵里もまたキョトンとした可愛らしい顔で奈緒を見つめ返した。

「イーブイってどうやって進化するんだっけ？」

「え、えーと…」

「進化条件とかネットで調べただけで山ほど情報があつてさ。情けないけど結局よく分からなかったんだ…」

「奈緒ちゃん…言いにくいんだけど…」

智絵里がくらしい顔をしながら奈緒を見る。彼女は苦笑しながらそつと奈緒の疑問に答えてあげるのであった。二人が飲んでいた缶コーヒーと缶ジュースはいつのまにか空になっていた。空き缶を両手でそつと抱えながら彼女は言った。

「イーブイって何に進化するかわからないの」

「ええ！ま、まったく分からないのか…？」

「大抵はエーフィーかブラッキーらしいんだけど…環境や習慣によって簡単に変わっちゃうらしくて…」

「えーと…ランダムなのか？」

「うーん…寒い所だとグレイシアに進化しやすいとか…？ごめんなさい、私もよく分からなくて」

申し訳なさそうに謝罪する智絵里。そんな彼女に対して奈緒は慌てたように反応を返す。学者ですら分からない知識をアイドルに尋

ねても仕方がないだろう、そう気づいた奈緒、彼女もまた苦笑しながら謝った。

イーブイはポケモン界で最も多様性に富んだ進化をする種族である。嘘か真か、Evolution『進化』の頭文字からふた文字を取って「イーブイ」と名付けられた、だなんて都市伝説もある位である。故にその生態にも謎が多かった。

多くの学者が研究を行なった結果、彼らが不安定な遺伝子を持つ事が判明した。この不安定な遺伝子こそが彼らの進化の鍵を握るとされている。つまり周囲の環境、人間の愛、鉱石の波長といったものから影響を受けるとそれに適応するかのように自身の身体を変化させる事が可能であるらしい。ゆえにイーブイは☒てきおうりよく☒に特化した生物ともいえるだろう。

とはいえ判明した事はその程度である。こうしている今もなお多くの人間が研究をして居るが、そのメカニズムは今だに明らかにはされていない。自身が共に暮らし始めたポケモンの凄さやポケモン自身が持つ特異性に改めて驚く奈緒。彼女は机につぶして疲れたようにつぶやいた。

「うう大変そうだな…」

「でもライセンスを取ったら便利だよ？一緒に旅行とかもすつごく楽しいからね」

「そうだな、智絵里みたいになれるように頑張るよ」

「わ、私みたいに…？」

「ポポッコやチュリネと仲が良いだろう？ポケモン達と一緒にいる時の智絵里ってさ、凄く良い笑顔をするから羨ましいんだ」

「そ、そうかな…うんっ、そうかも！」

「大好きなんだな、あいつらのこと」

「…うんっ！最高のお友達なんだっ」

弾けるような笑顔を見せる智絵里。まるで満開の花びらのような、見る者を幸福にさせる笑顔であった。それはかつて幼き頃の彼女が無くしてしまった心底からの笑みでもあった。かつて一人ぼっちであった彼女が持てなかつた幸福でもあったのだ。

そんな智絵里の笑顔に奈緒もまたどきりとしてしまう。同性である奈緒ですら見惚れてしまうような可愛らしい笑顔であった。かわいいなと思いつながら奈緒は顔を赤く染めてしまう。

「二人が来てからは本当に変わったんだよ…家族みんなでごはんを食べたり…家族みんなと一緒に旅行に出かけたり」

「うん？それって普通の事じゃないのか…？」

「ふふっそうだね…普通の事だよね」

「う、うん？」

「奈緒ちゃんもポケモンの事…大事にしてあげてね」

「…ああ！言われるまでもないさ、大事な家族だからな！」

奈緒もまた笑顔を見せる。萎えていた心に再び燃料が充填されていく。ライセンスを取りたいと願うのではない。絶対にとって見せるのだという気持ちが彼女の中で燃え上がっていく。

そうして奈緒はほおをぱしりと叩くと智絵里に感謝を述べた。ありがとうと伝えた彼女は再びテキストに向かい合う。大切な家族のために、一生懸命に勉強を行う奈緒。そんな彼女を智絵里は微笑ましげに見つめた。頑張って欲しい、そう願いつながら智絵里は待合室を後にする。

ファンの音になる。空調が効いたこの部屋にいるのは一人と一つのテレビだけであった。液晶画面の中では『輿水幸子！アマゾンの奥地で栄養満点の昆虫食に挑戦！』特集が行われていた。いたって平和で日常的な346プロダクションの光景がそこにはあった。

第5章

【黒埼ちとせと新しいペット】

ふと目が覚めると、隣には『ナニカ』が居た。白雪千夜は隣で眠りこけるそれを見つめてそつと息を飲んだ。昇りゆく朝日が幼い少女である彼女を照らし出す。小鳥達のさえずり、まばゆいばかりの朝日が彼女の自室を彩っていた。

寝ぼけていた頭に血液が通っていくのを感じる。自身がかけていたブランケットの端をぎゅつと握りしめながら、千夜は無言でその生物を見つめた。屋敷に備え付けられたベッドからはスプリングがすすかに軋む音がした。

それは亀のような生物であった。亀のような、と表現したのはその生物が明らかに亀では無かったからである。彼女は敬愛する主人、黒埼ちとせの元で様々な教育を受けて来た。

基本的な座学や家事全般といった事を学んだ彼女。年齢は12歳前後とかなり若いが一般知識だつて一通りにある彼女。だが彼女の中の常識と照らし合わせても頭から苗木を生やした亀がいるとは到底思えなかつたのだ。

大きさは40cm、洋服ハンガー程度の大きさだろうか。それは四本の短い足を持ち、背中には大きな茶色の甲羅を背負っていた。どうやら土で出来ているらしい、そつと手で触れて見るとわずかに湿り気を帯びているのが千夜にも分かつた。頭から生えた苗木が元氣よくぴこぴこ動き彼女の鼻腔を刺激した。

彼女の胸元によりかかるとして睡眠を取り続けるその生物。ナエトルと呼ばれる彼は気持ちよさそうにむにやむにやと口を動かしていた。そうしてその口からはでっぷりとよだれを垂らしながら彼女の衣服とシーツをこれでもかと汚し――。

「おこ」

「ナエっ!？」

殴りつける千夜。彼女は拳を握り、ゲンコツを彼の頭にむかって叩きつけた。叩き起こされたナエトルは何が起きたのかと混乱をする。ベッドの上でおろおろとする一匹のポケモン。涙目で千夜を見上げたナエトルはぎよつと悲鳴をあげた。

「動物の癖によくも…っ!」

「ナ、ナエ…」

「いいかこのお屋敷はお嬢様の物だ。このベッドもこのシーツも、お前がよだれをかけて土で汚したものは全てお嬢様の物なんだぞ」

「ナ、ナフェ…」

かの生物のほおをつかむ千夜。そうしてほおを両手でひっぱりながら説教を始める。彼女にとつてちとせお嬢様は掛け替えのない存在である。自分という存在に意義を与えてくれたこの世のなによりも大切な御方なのである。

それをこの生物に、不法侵入されたばかりかよだれと土汚れで屋敷を汚されたのだ。これには温厚な彼女と言えど怒らざるをえない。なによりも侵入を許してしまった自身が、千夜には許せなかったのだ。

警備はどうなっていたのかと、警備会社と監視機器に対して言いよりのない怒りをぶつける千夜。彼女はさつさと自身の普段着であるメイド服に着替えるとかの生物をきつと睨みつけた。彼女の鋭い眼光にひえつと怯える表情をするナエトル。千夜は衣装タンスの中にあつた予備のゴム手袋を身につけるとかの生物に対して近寄った。

どうやらさつさと屋敷から追い出してやりたいらしい。なぜヨーロッパに亀がいるのかだとか、そもそもこれは本当に亀なのかだとか。そういった疑問よりも屋敷を汚された怒りの方が大きかったらしい。

彼女はナエトルの甲羅をムギュツと掴むとそのままドアの方へと歩き出していく。じたばたともがくナエトルに対して彼女は無慈悲に言葉を告げた。

「今すぐに追い出してやる…っ！」

「ナエー…」

「そんな顔をするな。亀鍋にされないだけ有り難く…：…ん？」

ナエトルの甲羅を掴んだままふと固まる千夜。なにか違和感を感じてらしい。訳も分からない胸騒ぎを感じながらキョロキョロと彼女は周囲を見渡した。

ここはヨーロッパ某所の屋敷である。都会から外れた立地に建つその屋敷には、当然周囲にやかましい民家や商業施設などなかった。このような時間帯からゴソゴソと音がするなどこれまでの生活にはなかったのだから。彼女は不安げに独り言を呟いた。

「何か様子が…」

バリーーン！

突如、何かが割れるような音がした。陶器のような物が勢いよく割れる音。彼女はハッと息を飲む。その音の出所がちとせの部屋から出た物だと気が付いた彼女。その端正な顔立ちを青ざめて、千夜は啞然としてしまう。

まさかお嬢様の身に何かが起こったのか

そう理解した彼女は捕まえていたナエトルを部屋の隅に投げ捨てて勢いよく走り出した。自室から出てお嬢様の部屋へと向かおうとする。ナエトルのぷぎやあという悲鳴を背に彼女は全力疾走を行った。

お嬢様…

お嬢様ツ!!

鳴り止まない鼓動、うるさいくらいの心音を押しさえつけながら一人のメイドは必死で主人の部屋へと駆け付ける。あと十m…あと数メートル…。そうして全力でドアノブへと飛びつき勢いよく回し…

「お嬢様っ!!」

「うふふつくすぐったいわよ」

「ズバーッ」

膝から崩れ落ちた。

へなへな、ペタンと床へ崩れ落ちてしまう千夜。御身体の事情もある、最悪の事態すら想定していた彼女にとって今のちとせの姿は色々な意味で予想外であつたらしい。

彼女の敬愛する主人。ここヨーロッパでも有数の屋敷を持つ黒埼ちとせはそこにいた。少なくとも五体満足の状態で微笑んでおられた。床に女の子座りをしたまま呆然と自身を見上げるメイドに対して、ちとせはにこりと微笑んだ。

「あら千夜ちゃん、どうかしたの？」

コウモリと戯れる美少女がそこにはいた。流れるような金色の髪、宝石のような透き通る赤い瞳をした少女。クォーターであり吸血鬼の末裔を自称する黒埼ちとせがそこには居た。彼女はその美しい容姿で、優雅に自身の従者へと笑いかけた。

「あはは、あなたって甘えん坊なのね！」

コウモリと戯れるちとせ。そのコウモリはちとせの絹のような極上の美髪に顔をうずめては嬉しそうに鳴き声をあげていた。その様子をじっと見守る千夜。なんともカオスな状況がそこにはあった。

どうやら気がつくのと隣にその生物がいたらしい。ベッドの中で眠るその生物に、最初こそ驚いたものの接して見ると敵意がない。それどころがコミュニケーションを取ってみると嬉しそうに懐いてきたそうだ。

ちとせ曰く、体をそつと撫でてあげると、気持ちよさそうに声をあげる所が可愛いのだとか。先ほどの陶器が割れるような音、とはその生物が誤って体をぶつけてしまいつボを割ってしまった音らしい。それをきいて千夜は全身を恐怖で震わせながら全力を込めた作り笑いをした。

引きつった笑みを浮かべながらその生物を観察する千夜。なるほどコウモリとは可愛い物なのかもしれない。だが絶対にそれはコウモリではないはずだ、と彼女は固く決意する。

でかすぎるのだ

1. 2 mものコウモリがいてたまるか

その生物には目が無かった。青と紫で構成されたその体に在る物は巨大な耳と口だけであった。人間の頭部くらいなら簡単に飲み込めてしまうだろうその巨大な口からは四つの鋭い牙が生えていた。中学生程度でしかない千夜とちとせなど一瞬で食べてしまえるだろう。

人間並みに巨大なコウモリなどただのバケモノである。一昔前のホラー映画に出てきそうなその外見、よく確かめなくても恐怖であろう。小学生ならば一生のトラウマものである。千夜はいつ襲われるかと気がきではなかった。

本来ズバットとは80cm程度のサイズの毒／飛行ポケモンである。その巨大な口から発した超音波をこれまた大きな耳を使ってキャッチし獲物を捕まえるのである。だが別時空の常識から言ってもこのズバットは規格外のサイズであった。進化したゴルバットが1.6mであることを考慮しても1.2mはかなり異常なサイズであった。なによりもその性格が異常であった。

「……………」

「ズバー……」

機会を伺ってその巨大コウモリを追い払おうと考える千夜。懐に忍ばせたスタンガンをそっと握りしめ、いざとなればその身を挺してでもお嬢様を守ろうと千夜は考える。だが彼女のそんな考えを見透かすかのようにそのズバットは静かに千夜に対して威嚇をするのであった。

目のない顔で睨みつけるような視線を向けてくるズバット。その鋭い眼光に思わず恐怖する千夜。先ほどの『のんびりよだれ亀』とは比べ物にならない威圧感であった。

本来ズバットは人に慣れにくい種族である。彼らの生息地は洞窟といった暗く閉鎖的な環境であり、普段は群れで生活する種族である。間違っても初めて出会った人間に対してこれほどまでに懐き、重視するような生物ではない。ましてや嫉妬に近い感情を抱くなど……

そのメスのズバットはあらゆる意味で規格外の存在であった。

「うん？二人ともどうかしたの…？」

双方ともに睨み合う、そんな彼女達に対してちとせはそつと問い尋ねた。彼女からすれば愛する使用人と仲良くなつた動物が睨み合っている者なのだから不思議に思つたのだろう。千夜は静かにちとせへと視線を送つた。

ここはヨーロッパである。都会から外れたこの森林地帯ならば確かに珍しい動物もいるだろう。だがどう考えても、このような巨大な化け物がいるとは思えなかつた。というより思いたくなかつた。こうしている今、この瞬間に襲われてしまえば…そんな恐怖を抱えながら千夜は必死で思考を続ける。

そんな一触即発の空気の中、どこからか気の抜けたような鳴き声があった。どうやらドアの外からやってきたらしい。木製のドアを頭でおしあけながらその生物はそのもと部屋に入ってくるのであつた。その部屋へと入ってきた生物に対して二人と一匹は視線を向けた。

「ナエー…」

「なっ!？」

ナエトル、である。千歳に部屋の隅に投げられてしくしくと涙を流していた彼。そのナエトルはやんわりと遅い速度のまま彼女達がいる部屋へとやってきたらしい。まるで翁の散歩のような鈍い速度で、あくび交じりにやってくるその様。どうやら彼は~~ず~~ぶとい~~性~~格のようだ。

むにやむにやと寝ぼけながら部屋へと入ってくるオスのナエトル。そんな彼に対してちとせは黄色い声をあげた。嬉しそうな声をあげながらかの生物へと歩み寄ろうとするちとせ。

「お前…お前…っ!」

「あらー何この子!」

「ナエ〜?」

「あなた、とっても可愛いわ!」

「お、お嬢様！近づいては…」

「ふふつよーしよし良い子ね」

「ナヘエ〜」

「あはは、だっこされて変な声出てるー」

ちとせは彼に近寄るとそつと胸に抱きかかえた。彼女の柔らかな身体に包みこまれるナエトル。どうやらかなり心地が良いらしい。

ナエトルは気持ちよさそうに目を細めながら、彼女になされるがままになっていた。ほおや体をつつかれながらもナエトルはじつと動かなかつた。少女特有の甘い蜜のような香りに包まれながら、つぶれたカエルのような妙な鳴き声を出して彼女の胸元に背中を預ける。

そんな様子を見て嫉妬したのだろうか。ズバットは自分もかまえて言いたげに彼女に対して頭を擦り付けてくる。キーキーと甘えるような声を出すズバットに、ちとせはにつこりと微笑みながら優しく答えた。

「うふふ、ごめんね。あなたをおろそかにした訳じゃないわ」

「ズバーー！」

「ふふつくすぐつたいわ…あはは」

ナエトルを抱きかかえ、ズバットに甘えられながらちとせは幸せそうな声をあげた。それは僕である千夜自身あまり見たことがないような、実に楽しげな声であった。千夜は驚くとともにその動物(?)達に対して醜い嫉妬のような感情を募らせていく。

お嬢様に笑顔になってもらいたい

常日頃からそう考えていた彼女にとって、それが出来なかった悔しさはどれ程であっただろうか。そんな複雑な感情をこじらせていた千夜。一方ちとせは嬉しそうな声をあげながら独り言をつぶやいた。

「あは、かわいい！わたしのものにしていいかな」

「えっ?」

「とかいうかするね」

無慈悲な宣言が降る。嫉妬だとか憎悪だとかを募らせていた千夜にとってその言葉は残酷な死神の鎌に等しい言葉であった。100万歩譲って亀は良いにしてもその超巨大コウモリはあまりに危険で

あろう。

法と倫理さえ許せば今すぐにでもショットガンをぶちこんでやりたいと考えている千夜は必死にお嬢様を説得しようと試みる。彼女は恐る恐るといった様子で主人へと話しかけた。

「お、お言葉ですがお嬢様…そいつらは危険で…」

「お世話を よろしくね！」

従者の必死の願いなど、主人には通じなかった。ましてやこれまでそう見た事もない程の満面の笑みである。メイドである千夜には断れるはずもなかったのだ。こうして白雪千夜にとって非常に不本意な事ではあるが、一匹の亀と巨大コウモリを飼育する事になったのである。

多田李衣菜とポツチャマ

多田李衣菜は感嘆の声を漏らした。ソファの上ですやすやと眠るその生物を見て彼女は静かに瞳を輝かせた。その生物を起こさないように事務所の扉をそつと閉める。

「…おお」

思わず言葉が漏れる。そうして李衣菜は思わず周囲を見渡した。どうやらこの室内、事務所の中には誰もいないようだ。コチコチとなる壁掛け時計の音を耳にしながら李衣菜はほつと息をついた。そうして改めてその生物を見つめる。

「か、かわいい…」

それはペンギンのような生物であった。空のような透き通るブルーの身体、頭巾をかぶったような丸い頭。瞳を閉じてスースーと寝入っているそのポケモン、ポツチャマと呼ばれるペンギンポケモンであった。

ビルの上階に位置するその346プロダクション、シンデレラプロジェクトのメンバーに割り当てられたその事務所には見知らぬポケモンなど普通入らないものだ。李衣菜は思わず首をかしげる。はて、誰かポツチャマを飼っているアイドルなどいたのだろうか。

グレイシアを連れたアナスタシア

ポポッコとチュリネを大切にする智絵里

ペロリームと仲が良い諸星きらり

そうして同期のメンバーの手持ちポケモンを確認する李衣菜。だがどうにもポツチャマを引き連れたメンバーなど思い当たらなかった。では誰か他のアイドルの手持ちポケモンなのだろうか。李衣菜はそつと思考にふける。

とはいえそんな疑問など目前の可愛らしい生物の前にはちり紙に等しかった。つまり今の彼女にとってはどうでも良いという事である。李衣菜思わず生唾を飲む。そうして彼女はスマートフォンをそつとかの生物にかざした。理由は勿論、写真を撮る為である。

カメラアプリを起動させながら、被写体をカメラのレンズに収める。そうして息を飲んだまま彼女はかの生物の写真を撮った。震える指先でボタンを押していく。

パチリ

スマートフォンからカメラの音が鳴る。そうして中の記憶媒体にポツチャマの可愛い寝顔が記録されていく。その出来を確認しながら彼女はなおも写真を撮り続けた。それは午前中に取り終えたジャケット撮影の仕事に勝るとも劣らん気迫であった。

「そーと…静かに…」

「…ポ…チャア〜」

「……はあ〜〜」

カメラのレンズ越しに寝言を言うポツチャマ。すやすやと眠りながらお腹を出して眠るその生物を見つめて李衣菜はそつと目元を抑えて呟いた。もう我慢などできなかった。

「かわいい……かわいい!!!」

事務所にいるのは彼女一人だけである。そうして彼女は心からの叫びを出す。スマートフォンを握りしめながら嬉しそうに飛び跳ね、はしゃいだ。

「かわいすぎるでしょっ!!」

拳を握りぶんぶんと振り回す。そのあまりの可愛らしさに彼女自身平静を保っていられないようだ。彼女は興奮するかのように呼吸を荒げながらびよんびよんと小さく飛び跳ねた。クール属性に所属するアイドルとは到底思えない姿。可愛いキャラクターに飛び跳ねる幼女その物である。誰にも見せられないような可愛いアイドルの姿がそこにはあった。

「この愛らしさ…えへへ〜」

口元をにんまりと歪めながらポツチャマの写真を撮り続ける李衣菜。彼女はにへへとだらしなく微笑みながらせわしなく手元の指を動かして画像フォルダを潤していく。

実は彼女、可愛いポケモンが大好きなのであった。隙あらば周囲の人物に「もしも飼うならドラゴンポケモン!」と常々言っている

彼女。実は誰にも言えない秘密があった。つまり：可愛らしいポケモンに目がなかつたのである。

好きなんだ

だって女の子だもの

ポケモンが世に現れて以降、彼女は可愛いポケモンをピックアップしてはそれを眺めてにやにやとするのが裏の趣味であったりする。インターネットでキュートなポケモンを調べてはその画像を保存したり、ネットニュースで美しいポケモンをチェックするのが彼女の日課でもあった。

中でもポツチャマは「りいな調べ！いつか飼いたい可愛いポケモンランキング！」において堂々の第8位に位置するレジェンドポケモンである。

その可愛らしいルックス。宝石のような蒼く、つぶらな瞳。ぺたぺたとした肌触りの良い黄色いヒレ。全てが天使のように愛らしく美しい。水ポケモンにおいてはぶつちぎりの人気ポケモンなのである。そんなポツチャマの魅力にメロメロの李衣菜。だからこそ気がつかなかつたのだろう。彼女の背後からは一人のアイドルがやって来ていた。彼女はそつと閉じられたドアから事務所へ入る。そうして一人にやにやとスマートフォンを掲げているアイドルの背後に立つて声をかけた。

「李衣菜ちゃん何やってるのー?。」

「どわああああ!。」

背中から声をかけられて驚く多田李衣菜。思わず手にしていたスマートフォンを落とさんばかりに動転し、飛び上がってしまう。そんな彼女の背後で一人の少女、赤城みりあがきよとんとした顔で多田李衣菜を眺めていた。

赤いスカートにロングTシャツを身につけた彼女。おしやれに気を使っていない年相応といった装いの彼女。みりあは小さなポシエットを肩にかけながら李衣菜に声をかけた。

「お仕事終わったんだー…何やってたのー？」

「えっ!? べ、別に何もー…」

「うわー！後ろに誰かいる！何この子!!」

みりあはソファで眠るポツチャマに気がついたらしい。彼女は目を見開いてそのポケモンに見入った。どうやら珍しいみずタイプポケモンが気に入ったようだ。彼女はソファに駆け寄ると嬉しそうにそのポツチャマを眺めた。

「この子がかわいいー！李衣菜ちゃんのポケモン!？」

「ち、違うよ？私がそんなロツクじゃないポケモンなんて飼う訳ないし」

「ろつく…?」

「とにかく！私のじゃないから」

思わず強い口調で否定してしまう李衣菜。このように彼女自身はかわいいポケモンが好きだと言う事を周囲には秘密にしているのであった。どうやら可愛らしいポケモンは彼女の基準ではロツクではないらしい。

クールでロツクなアイドルを自称する彼女にとって愛らしいポケモンは相応しくないようだ。少なくとも彼女自身はそう考えている。ともあれ彼女はこのような事情からポケモンにも周囲のアイドル達にも正直に接することができないでいた。

スマートフォンホーム画面をイーブイの写真にしているだとか自室の壁にピカチュウがサーフィンしているポスターを飾っているだとかそんな事は絶対にバレてはいけないのである。本当は誰よりも駆け寄って抱きしめたいと考えている李衣菜。だがプライドが邪魔をして行動する事ができなかった。なんとも可愛らしい葛藤である。

そんな彼女の葛藤を他所にみりあはそのポケモンに手で触れる。あつ声を出してしまう李衣菜。そんな彼女をよそにみりあはえへへと微笑みながらポツチャマを撫で始めた。

「えへへー良い子良い子ー!」

「あつ…」

「お姉ちゃんですよ」

みりあはポツチャマをぎゅーと抱きしめる。まるでぬいぐるみを抱くように優しく温かく抱擁を行う。正直言って羨ましい光景である。その愛らしい光景に李衣菜はそつと息を飲んだ。

みりあの腕の中でなおも眠り続けるポツチャマ。両手両足を投げ出して少女に抱えられるその姿は筆舌に尽くしがたいキュートさであった。ペたんとして投げ出されたヒレがまた愛らしい。思わず写真を何十枚と撮りたくなってしまおう李衣菜。彼女は自身の欲望をぐつと我慢する。

「この子誰の子かなあ」

「さあ…誰もポツチャマは飼ってなかったはずだけどね」

「ポツチャマ?」

「その子の種族だよ。みずタイプでペンギンポケモン」

「へー!李衣菜ちゃんって詳しいんだね!!」

「くわ…っ!?ぐ、偶然知ってただけだから!別に調べてた訳じゃないからね!」

慌てたようにいいわけをする多田李衣菜。彼女はそつとスマートフォンをポケットにしまいながら焦るように言葉を紡いだ。しかしみりあは聞いてはいなかった。どうやら抱きかかえているポツチャマに夢中なようだ。しかしどうやら大きな声で騒ぎすぎたらしい。件のポケモンが静かに覚醒をした。

「ポチャア…?」

どうやら目を覚ましたらしい。ポツチャマは眠たそうに瞳をこすりながらキョロキョロと周囲を見渡した。そのしよぼしよぼとした瞳、眠たげで気だるそうな瞳はそのルックスも相まって反則的な可愛らしさを産む。

その仕草が一人のロックアイドルをメロメロさせていた所でミリアがやさしく声をかけた。彼女はポツチャマを両手で抱き抱えたままにっこりと微笑んだ。

「李衣菜ちゃんもだっこしてみる?」

「ええ!」

「はい、どーぞ。」

だっこしたポツチャマを嬉しげに掲げるみりあ。どうやらポツチャマのかわいらしさを李衣菜にも理解して貰いたかったらしい。彼女は嬉しそうに、丁寧に扱いながらポツチャマを彼女の眼前へと掲げた。

「うっ」

ポチャア？

何が起きているのかわからない。寝ぼけているポツチャマのその可愛らしい瞳に思わず心臓が高鳴ってしまう李衣菜。顔を赤く染め柄そつとポツチャマと視線を交わす李衣菜。

ちよつと位良いじゃないか

それもまたロックだよ

心の中の悪い（良い子？）な部分がそう告げる。そんな心の声に思わず反応してしまう彼女。そうして彼女はごくりと唾を飲み、そつと手を伸ばした。あと数センチ：彼女の指先が徐々に迫っていく。そうしてポツチャマに触れようか、という所で…

「ポチャア！ポツチャマツ!!」

「ぶへえっ!?!」

ビンタを

された

アイドルらしからぬ言葉を吐きながら倒れ込む李衣菜。彼女はビンタされた衝撃のまま床に身を投げ出した。李衣菜ちゃん!?!と思わず驚愕して駆け寄るみりあ。ほのぼのとしていた空気が一転して変貌した。

実はポツチャマは人に懐かない種族である。そのプライドの高さはポケモン界でも随一である。とある別時空、ヒカリという少女に連れられた個体は暴れる、生意気、わがままな性格とかなり手を焼く個体で有名でもあった。

なにせポツチャマとは進化をすると『ポツタイシ』へと成長しさらに気性が荒くなるのである。群れを作らず孤高であり続けるその姿。ましてや『エンペルト』ともなれば皇帝ポケモンとも呼ばれるように

なる。その性質、圧倒的な強さから名実ともに最強のみずタイプへとなるエリート種族なのである。

つまり何が言いたいかというと…非常に人馴れしにくい種族であるということである。ましてや初めて接する人間などこのように邪険に扱われて当然なのである。興奮のあまりこの性質を忘れてしまっていた李衣菜はその事を痛い教訓と共に思い出した。

「い…いはい…」

「あつ…逃げちゃった」

プンプンとお怒り状態のポツチャマ。彼は睡眠を邪魔されたと解釈したのだろう。そのまま気持ちの良い昼寝場所を探すために再び放浪するのであった。胸を張って堂々と部屋を後にするその姿、幼いながらも貫禄が滲み出る後ろ姿であつたらしい。

ほおにヒレ型の赤い紅葉を残しながら多田李衣菜は床に寝転がる。そのまま彼女は涙目で独り言を呟るのであった。

【黒埼ちとせと新しいペット2】

芳醇なパンの香りが室内に広がる。そのキッチンに備え付けられた巨大なオーブンの中にはふつくらと膨らんだパンがいくつも並んでいた。一人のメイドが前日から仕込んでいた自家製パンである。イタリア製のオーブンの中でそれらは美味しそうな匂いを放っていた。

どうやら上手く焼けたらしい、白雪千夜は自身が焼いたパンの出来を確認し力強く頷いた。オーブンから完成の合図であるベルの音がした。千夜は自身の手に白いミトンの手袋をつけるとゆっくりとオーブンの蓋を開けた。

「……よし」

中から現れたパンを見て満足そうに微笑む千夜。ポケモン達と暮らし始めて1年間、すっかり日課となってしまったこのパン作り。もちろん主人であるちとせの朝食の為でもあるがそれだけではない。このパンを食べる存在がこの屋敷には他にも2匹ほどいたのだ。

「ズバ〜」

1匹のポケモン、ズバットが彼女の元へとやって来る。どうやら開け放った窓から入ってきたらしい。ポケモン達が暮らすからと幾つかの部分をリフォームした黒埼屋敷、この窓もまた改装済みであった。

その巨体でも入れるようにと改装された窓の一枚から音もなく侵入してきたズバット。そのズバットに対して千夜は視線を向けると挨拶をした。朝日と風によって、木の葉が揺れる音がする。

「おはようございます」

「ズバ〜」

「パンが焼きたてですが食べますか？」

「ズバー！」

敬語を使って話しかける千夜。そんな千夜の言葉にうむとばかりにメスのズバットは頷いた。そうして彼女は焼きたてのパンに近づくと前足(?)と嘴を器用に使用してパンへとかじりついた。

モグモグ

ゴックン

一口でパンを食べ切ってしまうズバット。彼女は気に入ったのかその後2つばかり食べてはもぐもぐと咀嚼をする。きつと美味しいと思っているのだろう。けれどズバットには目がなかった。彼女自身、感情をあまり表現する性格ではなかった為、他者からすると表情がなんとも理解しづらかった。

その喜怒哀楽を完全に感じ取る事ができるのは主人であるちとせだけであつた。こうして1年間世話をするようになった千夜ですら、単調な感情がなんとなく理解できる程度であつた。

「おいしいですか？」

「〜」

「そうですか、では改めて朝食の準備を致します」

ズバットに対して敬語で接する千夜。なんともおかしな関係であつたがこれが彼女達にとっての日常であつた。一応は黒埼ちとせにとつての大切なペットである。ましてや人並み以上の知性と感情がある以上、敬語で接するのが一番無難な選択であると気がついた千夜。1年前の出会いと騒動以来そう接するようにしている。

テレビのリモコンを自分で操作して美容に関する情報番組を見るズバット。その光景を見た瞬間千夜は深く考える事をやめた。彼女は一流のメイドなのである。プロフェッショナルに溢れる彼女はそんなズバットを怒らせてはいけない存在なのだど理解したのだ。ただ単に思考を放棄しただけとも言えるが。

彼女はキッチンの外に備え付けられた業務用冷蔵庫を開けにいく。そうして中から冷蔵された巨大な豚のブロック肉を取り出した。とあるルートから定期的に購入している家畜の死体である。その豚の半身を巨大な器に入れて、そつとズバットへと差し出す。

するとズバットは音もなくその巨大肉に近寄っては嬉しそうに牙を突き立てた。ブロック肉に突き刺さる巨大な牙、その先からチューチューと死後数時間の新鮮な豚血を美味しそうに吸うのである。これが彼女の朝食であつた。

「……」

「……」

正直に言っただけでかなりグロテスクな光景である。1. 2 mもの巨大コウモリが肉に牙を立てて血を吸うのである。ズバットが肉食であるという訳ではなく、あくまで肉に通っている血を吸っているのである。

しかしその事を考慮してもなお恐ろしい光景であった。口のはしから血を垂らしながらキーキーと鳴く巨大コウモリを初見で平然と観察できる者がいればそれは中々の強者であろう。

ちなみにデザートは血液ジュースである。真赤な血液がたっぷりに入った輸血パックを開けて木のコップへと注ぐ。そうして中身をストローでチューチューと吸う味こそがズバットの何よりも好物なのである。これは裏のルートから仕入れたーいや、素材元については記載するのはやめておこう。

ともあれこうしてズバットの朝食は終えるのである。食事は1日に一度だけでよく、他にもきのみや果物といった物も食べる。とはいえ数日に一度はこうして☒ごちそう☒を食べるのが彼女達の日課となっているのであった。

「……」
「おいお前、食事だぞ」

ぐーぐーと眠りこけているナエトル。そんな彼に対して千夜はそつと呼びかける。そうして千夜の部屋の中で睡眠をとっていたナエトルはパチリと目を覚ました。

部屋の端に設けられたベビーベッドのような空間。1 m程度の木製のベッドに最高級の日本製タオルが敷き詰められたその空間。その中でむにゃむにゃと口を開閉させる彼。ナエトルは寝ぼけた瞳のまま千夜をそつと見上げた。

「ナエー」

彼は千夜の事を見つけると嬉しそうに彼女の元へと寄ってくる。

あれからかなり親密な関係になったらしい。トコトコと四つの足を一生懸命に動かして彼女の元へと近寄る彼。そうしてナエトルは嬉しそうな声をだしながら千夜の足にすりすり頭をこすりつけた。

「どうやらおはようと言っているようだ。1年も共に過ごしている二人は今ではそれなりに密な意思疎通ができるようになったらしい。彼女はわざわざしやがんでまで彼の頭をそつと撫でてあげた。」

ピヨコピヨコと動く苗木、その根本の部分を撫でられるのが彼は好きなのである。その美しい手でそつと彼を慰めてあげる千夜。口調は厳しい彼女だったがその表情はなんとも穏やかなものであった。そうして数分ほど存分にかまってあげた千夜はバケツを彼に差し出す。

焼きたてのパンがいくつも詰まっているそれ。木製の小さな籠からいくつかのパンを取り出しては彼に差し出した。これがいつもの彼の朝食なのだ。それらのパンを見つけた彼、瞳を輝かせて嬉しそうにそれに見入っていた。

「ほら、っはんだ」

「ナエトル」

「相変わらず…お前は食いしん坊ですね」

仕方なさそうに苦笑する千夜。この1年間ずつと共に過ごしてきたのだ。彼がどのような性格でどのような生物なのかも理解できるようになっていた。彼は泣き虫で甘えん坊で…そして優しい奴なのだ。意外に頼れる男らしい姿を、彼女はそつと思いつく。

過去に起きた事件を振り返る

ポケモンによる事件

巻き込まれたお嬢様の騒動

誰をも頼れなかった千夜とちとせを救ったのは紛れもなく彼らだったのだ。窮地に駆けつけてくれたズバットとナエトルの事を思い返す。あれから随分と色々な事があった。衝突も和解も実に多くの事があった。

話そうとすればきつと随分と長い話になってしまっただろう。ともあれ千夜にとつて彼は、今ではすっかりパートナーとなっていた。己

が芯から頼れる相棒になったのである。

ちなみにニツクネームはつけていない。「お前」と呼んでいるのは何故なのだろうか。もしかすると一種の愛称なのかもしれない。あるいは千夜にとっては「お前」と呼ぶ事が愛であり一種の信頼に繋がるのかもしれない。

お嬢様には敵が多い。それは様々な意味でもそうだ。自身もまた人には言えないような暗い、苦しい過去を背負ってきた女だ。千夜にとってはお嬢様こそが全てでありそれ以外は瑣末な存在であった。少なくとも以前はそうであった。

彼らと出会って以来自身の表情が劇的に柔らかくなっていく事に、千夜は気が付いていない。トコトコと走り寄って自分に甘えてくる彼の存在にいつからか敵意を抱く事も忘れてしまった事を。毎日幸せそうにむにやむにやといびきをかく彼の姿にきつと無自覚に癒されてしまったのだろう。

たまに見る夢は炎が荒れ狂う夢であった

全てが一切の慈悲なく壊れていく

大切な人が

大切な物が

すべてその炎によって消えていく夢

その時から、彼女は何かを求める事をしなくなった。夢を見ることを恐れ、何かに逃れるように職務に明け暮れるようになったのだ。そんな冷徹な彼女を変えた存在がいるとするならば、それはきつと…。

ふと彼に触れてみる。呑気な顔をしながら、美味しそうにパンにかじりつくナエトルの頭を撫でてみる。彼のあまりに能天気な、いつものらしい表情に千夜はつい笑みをこぼしてしまう。ありふれた少女のように無邪気に微笑む。メイド服を着た彼女はしゃがみこんだまま、頬に手を当てててくすくすと笑った。

「お前は…変わらないな」

「ナエー？ナエー」

「お前はいつまでたっても甘えん坊の食いしん坊だという話です」

「ナエー!!」

「ふふっ…」

そんな事ないよ、とばかりに怒るナエトル。彼のプンプンとした怒りなど長続きはしない。ナエトルはいくつかのパンを食べているうちにすっかり笑顔を取り戻してしまう。そんな彼の表情の変化について声をあげて笑ってしまう千夜。

それはかつて災害で家族も故郷も

全てを失ってしまった彼女には珍しい心底からの笑みであった。

早坂美玲と悪タイプ

夕焼けが包み込む。落ちかけた夕陽が都会の喧騒を優しく照らし出した。せわしなく帰り出すサラリーマン。遊び疲れた子供達の声、車のクラクション。それらがオレンジ色に染まっていく。

そこに少女はいた。金色の髪で片目を隠した靈感少女、白坂小梅はお風呂の脱衣所で自身の家族にドライヤーをかけていた。場所は346プロダクションの社宅、アイドル専用の女子寮である。

ここ第一女子寮では沢山のアイドル達が暮らしている。中でも1階に備え付けられた大浴場は多くのアイドル達が賞賛するほど大きく立派な湯殿があった。ポケモン達と共に疲れを癒せるようにとのコンセプトから改装されたその大浴場。一流ホテルにもひけをとらない豪華な湯殿である。

そんな大浴場を堪能した小梅と輝子。彼女達は脱衣所にてこうしてまどろむのであった。ラフな格好のままタオルで自身の髪をガシガシとふく輝子。大切な家族の体をドライヤーでとがしてあげる小梅。穏やかで日常的な光景がそこにはあった。

すっかり清潔に、ホカホカの身体になったジュペッタ。彼は嬉しそうに小梅にお礼を言った。そんなジュペッタに小梅はにこりと微笑みながら頭を撫でてあげる。

「ジュペッタ、はいお金。これでコーヒー牛乳を買っていいよ」

「ジュペー！」

「娯楽室でゆっくりしててね。そこに輝子ちゃんのparas君もいるから仲良くするんだよ?」

わかっているよ、とジュペッタは片手をあげながら嬉しそうに返事をする。そうしてジュペッタはぺたぺたと嬉しそうに足音を鳴らしながら娯楽室へとむかった。よつぽど湯浴み後のコーヒー牛乳が楽しみなのだろう。

「コーヒー牛乳…ジュペッタは渋いんだな…」

「輝子ちゃんのparasと一緒に風呂に入らないの?」

「し、親友は濡れるの嫌いなんだ…」

「霧吹きは好きなの？」

「キ、キノコはそう言うものだよ…」

バスタオルで自身の髪をふいた輝子。彼女は小梅の疑問に対して気軽に答える。どうやらそういう物らしい。今もなお娯楽室でテレビを眺めているだろう輝子のパラスの事を考えながら小梅は荷物を整理した。

さて脱衣所を出ていくか、そうしたところで二人のもとに一人のアイドルが駆けつけてくる。夕方の早い時間という事もあって脱衣所を利用していたのは小梅と輝子だけである。そんな中、二人の共通の友人である彼女がやってきたのは思わぬ幸運であると言えるだろう。

「あつシヨールコとコウメ」

「美玲ちゃん、こんばんは」

そこに入って来たのは早坂美玲であった。派手なピンク色のフードをかぶった彼女は、左目に眼帯をしていた。そのハート柄の眼帯が見るものの興味を引く。

ちなみにこの眼帯は彼女の地元、仙台の英雄『伊達政宗』を意識した物であるらしい。ともあれかなり個性的な少女であることに変わりはないだろう。そんな彼女は一匹の悪ポケモンをつれて脱衣所へと入ってきた。どうやらこれから一緒にお風呂に入るらしい。そんな彼女達へ輝子が小さく声をかけた。

「フヒツ…美玲ちゃんとヤミラミも…こんばんは」

「ヤミ！」

挨拶をする。そうしてそのヤミラミは美玲と一緒に手を繋ぎながら輝子と小梅に挨拶を返した。別の手でよつとばかりに手を掲げながらフランクにコミュニケーションをとる。

そんな仲が良い様子の美玲とヤミラミ。そんな彼女達に対して小梅もまた奇遇だねと言わんばかりに声をかける。ホラー映画をモチーフにした血だらけゾンビ柄バッグを身につけた彼女は問いかけた。

「美玲ちゃん達はこれからお風呂なの？」

「ああ。レックスんでもうクタクタなんだ」

「ヤミー」

「ヤミラミも一人で留守番してくれたからな、お風呂でちゃんと労つてやるんだ!」

嬉しそうに答える美玲。彼女はラフな格好のままその薄い胸を誇らしげに張った。へへんとばかりに楽しそうな様子の彼女。そんな美玲のとある噂についてふと思い出した輝子。輝子はそういえば、と付け足しながら美玲にそつと尋ねた。

「所で美玲ちゃん…ま、またライセンス試験おつこちたつて本当?」

「グハアっ!」

「しよ、輝子ちゃん…もう少し遠回しに言つてあげよ?」

輝子からの激しい指摘に思わずショックを受ける美玲。輝子からすれば慰めようとして放つた言葉ではあるのだがいかんせん言い方が悪かった。彼女の純真な言葉は一人の14歳を深く傷つける。

美玲はううつとばかりにたじろいだ。おろおろと視線を方々へ向けながら懸命に反論を行う彼女。ピンク色のフードが主人の動揺によつてずり落ちた。

「うう…こ、今回はたまたま運が悪かっただけで…っ!」

「それ…この間も聞いたよ?」

「う、うん…ずつとそれ言つてる」

「うう…」

涙目になる美玲。脱衣所の巨大な鏡に写った彼女は拳を握りながら悔しげに呟いていた。そんな彼女をいたわるように、ヤミラミがよしよしと彼女の背中を優しく撫でた。どうやらライセンス試験に苦戦しているようだ。A級(悪)の限定試験に落ちた彼女は深く、長いため息をついた。

—————

- ・ 公共の場所でポケモンを連れて歩く事
- ・ 自身の職業の一環としてポケモンを利用する事
- ・ ポケモンの技を公共の場で放つ事

(バトルを行ったり大会に参加する事を含む)

これらの行為にはライセンスが必要とされている。つまり、自宅で飼う分にはライセンスは必要ないのだ。職場など限られた施設や敷地の中も同様である。その場合、敷地責任者の許可でポケモンを連れなくても良いかどうかを決められている。

そもそもこの法律は「街中（公共の場）でポケモンを連れて暴れさせては被害が出てしまう」「ポケモンを窃盗や破壊などの犯罪行為に利用されてしまう」事を防止する事を目的とした物である。あくまでライセンスはポケモン管理証であり、自身のポケモンに対する保護責任を生じさせる物であるとも言えるだろう。

移動する際はボールの中に入れて職場やポケモンの一部解放地域（政府が認可した広い運動場など）ではポケモンを出して運動させてあげる、といった生活をする事も可能である。この機構によりライセンスが取れない子供やお年寄りでもポケモンとの共同生活は一応可能であると言える。

とは言え、ライセンスを未所持の状態で事件や事故を引き起こしては重大な法律違反となる。またライセンスを所持した状態であつても前科がついたりライセンスを取り上げられたりする事もある。ライセンスの未所持は自宅や一部の場所以外ではその行動に大きく制限がかかるとも言えるだろう。

よつてライセンスはトレーナーにおける超重要な関心事項なのだ。誰だつてライセンスを取つて自身の相棒と旅をしたりバトルがしたいと考えるものだ。それが美玲のような若者であれば尚更である。とはいえ14歳の少女がA級ライセンスに該当するあくタイプポケモンを飼育するという事が色々な意味で無謀であるとも言えるだろうが。

「い、何時かはとつてみせる！ウチはやればできる子なんだ！」

「でもA級つてすごく難しいよ？」

「フヒツ…ど、同世代じゃ…誰も持っていないぞ…」

「うっ…うっ…」

着替えが詰められた小さなバッグを振り回す美玲。彼女は自身を

鼓舞するかのように強い口調で宣言をした。だがそんな彼女を諫めるように小梅と輝子はツツコミを入れる。彼女達自身、B級（霊）限定と特C級を所持しているからこそその難易度はよく理解できた。

A級ライセンスから試験難易度は格段に上昇するのである。それは危険度が他のタイプに比べて格段に上昇するからである。それを危惧した政府による調整でもあるのだ。差別にもつながる為ポケモンの所持自体は可能である。

しかし然るべき資格を持った人間以外には所持するべきではないとの意見が政治家や専門家による多数派な思想でもあった。中には一定以上の人口が住む住宅地にはこの四タイプの規制を行うべきと主張する政治家までいる位である。

炎タイプは火事を引き起こし

毒タイプはテロ行為すらも可能にし

竜タイプは大災害すらも起こし得るポテンシャルを持つ

中でもあくタイプは最も恐ろしいタイプとされている。人間にとつてのおそるべき驚異であると。これは彼らが戦闘本能に特化しているからである。つまり：理性による防護壁がないのである。彼らはあらゆる面で他者よりも自身を優先するのだ。

飢える位ならば他者から食物を奪う

寢床を害するならば全力で排除する

己を害する存在はそれが社会であれ、人間であれ容赦無く攻撃を行うのだ。生物ならば誰しもがもつ我欲。これがかなり濃厚に、強烈に反映されるタイプなのである。これは一説によると『悪タイプ』が人間や生命の悪意から影響を受けた種族であるからとされている。彼らは生まれながらの戦闘種族なのである。

勇敢にして獰猛

孤高にして強靱

最強にして最凶

故に悪タイプである。こと闘争という一点においては竜タイプにも匹敵するとされているのだ。この世界において悪タイプを使いこなしている人間は少ない。ここ346プロダクションにおいても悪

タイプ使いこそいる物の、その殆どが知性に富んだ成人である。

無論、種族差や個体差は存在する。悪タイプの全てがそのような性格かと言われるとそうではないだろう。とはいえ14歳な美玲と未熟なヤミラミ。彼女達にとっては社会の偏見とA級ライセンスは大きな障害である事は確かであろう。

「やっぱり無謀だったのかな…」

「ヤミー…」

ヤミラミのことをそつと抱きしめる美玲。目前に立ちふさがる大きな壁に、つくくじけそうになってしまふ。故郷を出てきたばかりの幼い彼女。アイドルも、学業も、相棒のことも。悩みについて考えればきりがないだろう。

美玲は大切な相棒の事を思い出す。かつて共に歩むと誓った日のことを。廃工場で友情を深めあつた日々のことを。ヤミラミもまた美玲の不安を悟つたのだろうか、悲しげに表情を歪めて美玲のことをそつと抱きしめ返した。そんな二人に対して小梅ははつきりところ告げた。

「悪タイプって凄く格好良いよね」

「えっ」

「美玲ちゃんは…や、やればできる子…ヤミラミも格好良い…」

小梅と輝子からのエール。その不器用ながらも友人のことをいitわつた言葉に思わず感じ入ってしまう美玲。彼女は涙目で二人のことを見つめ返した。脱衣所のファンがカラカラと回る音がした。

「ほんとお…?」

「嘘は言わない…キノコもそう言ってる…」

「そ、そうかな?ウチでも本当に取れるかな…」

「そうだよ、美玲ちゃんなら絶対に取れるよ。だからがんばろ?」

「美玲ちゃんは天才…か、賢い…」

「…そ、そうだよな!ウチは天才なんだ!」

美玲はむんずと立ち上がる。そうして拳をかたく握り再び自身を鼓舞させる。どうやら元氣を取り戻したようだ。彼女は元氣一杯と

いった様子で再び嬉しそうに二人に誓った。

浴室用のひよこ柄のタオルを手に持った彼女は小梅と輝子をそれぞれ抱きしめた。美玲からの熱い抱擁に思わず顔を赤く染めてしまふ輝子。輝子はおずおずと抱きしめ返しながら彼女の様子を眺めた。「ありがとう二人とも！ウチはヤマミラの為にも頑張る!!」

決意を新たにする美玲。そうしてヤマミラの手を引きながら大浴場へと入っていた。ガラガラとガラスの引き戸を弾きながら楽しそうに入っていく美玲、そんな彼女の様子にヤマミラもまた嬉しそげな様子であった。

そんな彼女達を見送った小梅。小梅は彼女達が出ていったガラス戸を眺めながらポツリと呟いた。

「だ、大丈夫かな…試験に合格できるかな？」

「うん…やっぱりA級は難しいぞ…」

不安げな言葉に輝子もまた同意する。彼女を元気付けたのは良いもののやはり試験は難しい。学力で特段に劣る、とは言わないがどうしても知識不足は否めない。また実地試験も非常に高度で複雑なものとなるだろう。

C級で座学による試験しか受験していない輝子。彼女はそつとため息をついた。なんとかして美玲を悲しませない方法はないだろうか、そう悩む彼女に対して小梅があつと言葉を放った。

「誰か先輩に聞いてみるとかどうかな？」

「先輩…？」

「うん、A級を持つてる人に指導してもらおうとか」

なるほど、と輝子は頷いた。確かにそれならより効率的に動けるだろう。少なくとも同世代の自分たちがこうしているよりもずっと効率的には違いない。

輝子と小梅は脱衣所からでて娯楽室へと向かう。歩きながら先ほどの考えについて二人で話し合った。ペたペたとスリッパの音を鳴らしながら彼女達は熱心に言葉を交わす。いつのまにか、濡れていた髪はすっかり乾ききっていた。

「た、確か早苗さんと真奈美さんが持ってたはず…A級ライセンス」

「そっか、それなら…っ！」

「うん、お願いしてみたらいいかも」

片桐早苗

木場真奈美

彼女達なら人柄も良く、信頼できる人間であろう。きつと美玲のことも優しく、厳しく熱心に指導してくれるに違いない。良い意見であると小梅は小さくスキップをしながら嬉しそうに答えた。

窓の外ではすっかり日が暮れていた。仕事やレッスンの終わりのアイドル達がきつと大勢帰宅してくるであろう。時計がカチリと、大浴場のピークを迎えるであろう時刻を示した。

「なら私からお願ひしてみるね」

「や、優しいんだな小梅ちゃん」

「お友達だもの」

「じゃ、じゃあ…わ、私も一緒に…」

おずおずと言う輝子。そんな彼女の言葉に小梅は瞳を輝かせる。小梅はとても嬉しそうに輝子に向かって微笑んだ。

「ありがとう！」

「トモダチのため…一肌脱ぐよ…」

そうして彼女達は娯楽室へと向かう。自身の家族の元へと。大切な親友の元へと。きつと彼らはコーヒー牛乳を飲みながら彼女達のことを待っているに違いない。そんな中小梅と輝子はもう一人の大切な友人の事を思い出す。

今頃は海外で絶賛活躍中であろう、超人気アイドルの事を。娯楽室へのドアに手をかけながら小梅はふと輝子に尋ねた。

「所で幸子ちゃんって今何してるんだっけ？」

「た、確か中東方面へ行ってた…」

「中東…？」

「うん、『砂漠でオアシスを見つけるまで帰れま10^{テン}』をやってるはず…」

「そっかーいつも大変そうだね…」

島村卯月と神谷奈緒とノーマルポケモン

ふと空を見上げる。雲ひとつない透き通るような一面の青空がそこにはあった。今日もまた一段と暑い1日になりそうだ。そうしてベンチに腰掛ける女性、北条加蓮は再びスマートフォンへと視線を落とす。

「奈緒ってば遅いなあ……」

加蓮はそつと独り言をつぶやく。スマートフォンを操作しながらも気はそぞろな様子の彼女。346プロダクション、その中庭のベンチで彼女は一人待ち惚けをしているのであった。いくつもの木々が風によってそよいだ。

今日は友人である神谷奈緒との待ち合わせがあるのだ。時刻は午後16時、学校帰りの彼女はこうして制服に身を包んだまま友人を待つ。そうして彼女は奈緒のイーブイの事を考える。

「……」

指が欠損し、公園に捨てられていたイーブイ。もしかしたら暗い過去があったのかもしれないし、無かったのかもしれない。ともあれその話を聞いた当時は彼に対して何やら感じ入る物があった事は確かである。同情した訳ではない、だがかつて病気であった自身と重ねられる部分があったのだ。病室で嫌という程感じた、大人たちの哀れむようなあの視線を思い出し……

そんな事を考えている北条加蓮。そんな彼女すぐそば、とある茂みから突如ガサゴソという音がした。大きく揺れ動く茂み。そこから1匹のノーマルポケモンが飛び出してくる。

「ってあれ……イーブイ?」

突然現れたポケモンに驚く加蓮。その茶色い身体、もふもふの毛並みはまごうことなくイーブイであった。加蓮はおおと驚嘆する。イーブイはテレビで特集されるほどの人気ポケモンである。奈緒からその存在について何度も電話で聞かされてきた。それでも彼女がこうしてイーブイを生で見るのは初めてであったのだ。そうして加蓮はそのポケモンに静かに見入る。

それはイーブイであった。小型犬のような、ブラウンカラーの体。首輪周りには少し薄い色の毛並みがある。ふわふわとしてきつと極上の触り心地だろう。何よりもそのイーブイは頭に大きなりボンを身につけていた。おそろくメス、なのだろう。

何よりも目を引くのがその瞳である。まるで真紅の色をしたその綺麗な瞳はまるで宝石の如く美しい。引き込まれるようなワインレッド、深淵に飲まれそうになるそれはまさにルビーの如く美麗であった。

そつと手を差し出してみる。ここにイーブイがいるという事はきつと奈緒のイーブイに違いない。そう考えた加蓮はそつと手を差し出してコミュニケーションを取ろうと試みる。最近C級ライセンスを取得した奈緒曰く、今ではすっかり人と触れ合うのがすきになつたらしい。

知らない人間にも抱っこをせがむ、散歩の度に大変なんだと愚痴をこぼしていた奈緒。彼女の話から察すれば、きつとこれ位のふれあいには許容範囲だろう。

そのイーブイはキョトンとした顔で加蓮を見上げた。そのままおずおずと近づいてくる。そうしてそのイーブイはくんとくんと加蓮の手の匂いを嗅ぎ始めた。おかしい、人懐こい筈なのに多少警戒をしているようにも見える。だが加蓮はそのことに気がつかずにイーブイを抱き上げてしまった。

「奈緒がいないまま一人で来ちゃったのかな？」

「……」

「ご主人様はどこかなー…うん？」

ふと違和感を感じる加蓮。彼女は胸に抱いたままイーブイを見つめる。そのイーブイは無言のままプルプルと震え始めた。まるで怒りを溜め込むようなそんな仕草。訳がわからない加蓮はそのまま強く抱きしめ続けてしまう。そうしてイーブイはその口を大きく広げてー

「いたっ!？」

強く

噛みついた

思わず悲鳴をあげる加蓮。抱きしめた腕をいつの間にか放してしまふ。そんな腕の隙間からすると抜け出してしまったイーブイ。イーブイは自業自得だと言わんばかりにそっぽをむいた。

話に聞いていた性格とは随分と違う様子に加蓮が違和感を感じる。涙目で噛み付かれた手の甲をさすつっていると、どこからか女性の声が出た。何かを探すような問いかけの声。そうして加蓮の目の前に一人のキュートアイドルが出てくる。

その茶色、ロングのヘアをまとめた彼女。ブレザーの制服を身につけた彼女は華の17歳である。そう、最近『ニュージエネレーション』というグループとして人気が出つつあるアイドル…島村卯月がそこに現れた。

「ルビーちゃん！どこにいるの…ってああ！」
「痛あ…うん？」

そうして卯月に駆け寄りリボンを身につけたイーブイ。イーブイは飛び跳ねて卯月の胸に収まった。卯月の胸に優しく抱かれるリボン付きのイーブイ。そんな光景を、尻餅をつきながら見上げる加蓮。なにがなんだかわからない。茫然自失としている加蓮の元へ別のイーブイを抱えた女の子が現れる。神谷奈緒が彼女たちの前に出てきた。

「あれ…何やってるんだよ加蓮？」
「あれー？」

メスのイーブイを抱えた卯月
オスのイーブイを抱えた奈緒

なんとも面妖な光景がそこにはあった。卯月と奈緒もまた、自身が抱えているポケモンと同種の生物を見て口を大きくあけて驚いている。こうして三人のアイドルと2匹のイーブイは思わぬ出会いを果たしたのであった。白樺の樹、その木の葉が風によって揺れた。

「いやー奇遇だな！」

「本当に奇遇ですねー！」

中庭の大樹の下。地面に敷いたレジャーシートの上で談笑し合う奈緒と卯月。どうやらこの短時間ですっかりと意気投合したようだ。彼女達はステンレスの水筒に入れた冷たいアイステイーを飲みながら意気揚々と会話するのであった。

この346プロダクションにおいて限りなく同世代に近い二人。まさか知らぬ間に共にイーブイを育てていたとは。この思いがけない偶然に驚愕した彼女達は奇妙な縁を深めるのであった。

もともと卯月と奈緒には面識がなかった。なにより最近できたばかりの所属グループは「ニュージェネレーション」ができた後に入ってきた後輩にあたる。しかし彼女達には渋谷凜という共通の友人がいたし、なにより同じ17歳。こうして考えてみると随分と気が合う事ばかりであったのだ。

「イーブイって毛がふさふさで手入れが大変だよな」

「あっわかります！もふもふと一緒にベッドで眠ると気持ち良いんですよね！」

「卯月は抜け毛対策ってどうしてる？」

「私はイーブイ用の公認ブラシを使っていますね」

「そんなのあるのか！それってペットショップで売ってるかな」

なによりも共にイーブイを飼育する仲である。飼育時のことで大いに会話が盛り上がった。具体的には抜け毛がどうだ、散歩がどうか。このイーブイあるあるが大変に盛り上がったのだ。ところで加蓮はと言うと

「あー…これやばいかもお…」

「ブイ！」

「あはは、ブイ助のお腹がもふもふだあー…」

癒されていた

ブイ助を両手で抱えたまま抱きしめる。そのもふもふのお腹に加蓮は額をそっと押し当てる。それだけで極上の心地よさが加蓮へと襲いかかる。その極上の感触は高級羽毛ベッドにも匹敵するだろう。何よりそっとほおに手をあてるブイ助のなんとという愛らしさか。彼

のぷにゅぷにゅの肉球が加蓮のほおにあたりー

「あーこれやばい！最高…っ」

「わかります」

「わかる、それはやばい」

深く、重く頷くアイドル三人。彼女達はイーブイの毛と肉球の心地よさをよく知っていた。あれは世の女性を魅了する魔性の存在なのである。こうして北条加蓮もまたイーブイの魅力にとりつかれるのであった。

だがメスのイーブイ。ルビーはそんな一向に対して加わろうとはしなかった。1匹だけ離れた場所であくびをする。どうやらあまり人馴れしにくい性格のようだ。奈緒はそんなメスのイーブイを眺めながら卯月に話しかける。その瞳が真紅のことから「ルビー」と名付けられたメスのイーブイについて。

ちなみに奈緒のイーブイはオスである。その性別からブイ助と命名され大切に飼育されていた。余談ではあるがイーブイは80%強がオスで構成された種族である。メス、それも瞳が赤いイーブイなど色々な意味で珍しい個体であった。

「卯月のルビーは…触られるのが好きじゃないのかな…」

「ルビーちゃんは気難しくて…家族以外には身体を触らせてあげないんです…」

少し悲しげに話す卯月。彼女からすればブイ助のようにもう少しでも他人に慣れてくれれば良いと感じているのだろう。なにせ散歩に出かけても他人や他のポケモンに興味を示さないのだ。それ所か彼女は地面や泥、バトルといった「自身の身体が汚れる行為」を何よりも嫌うのだ。そういう性格なのだと言われればそうなのかもしれないが。

控えめだけれど人懐こい性格のブイ助

クールでそっけない女王様気質のルビー

同じ個体で有りながら随分と差があるものだ。本来はイーブイとは30cm程度の大きさである。しかしこの個体は性別から大きさ、瞳の色まで随分と異なっている様子であった。

「こんなに差があるもんなんだな…」

「ねー、奈緒のブイ助なんて本当に小さいよ？」

「いや多分ルビーちゃんが大きいんだと思います」

「ブイ助よりふた回りくらい大きいしな…」

大きさが58cmとかなり大きなルビー。一方ブイ助は27cmとかなり小型である。ちなみにしば犬(40cm程度)をイメージするとわかりやすいかもしれない。共に見比べてみるとどうにもオスの方が見劣りしてしまう。

そんな個体差について盛り上がる一行。二人は普段食べている餌について話し出した。一方、加蓮は膝にブイ助を抱えたまま存分に触り心地を堪能していた。えへへへとご満悦な表情でブイ助の耳をこしよこしよとくすぐっている。

「ルビーには普段何を食べさせてるんだ？」

「うちはドッグフードかなあ…」

「ド、ドッグフード!？」

「うん…ママが食べさせて以来それが癖になってるみたいで…」

苦笑する卯月。そうして彼女はそつと自身の過去について話し出す。タマゴを拾った事を。タマゴから孵したばかりの、幼かった日の事を。

卵から孵った当所、お腹が空いたのか部屋の中で暴れまわったルビー。なんとかなだめようと努力したが、当時小学生であった卯月には無茶な話でもあった。そうして一向にご飯を出さない卯月に対してルビーが烈火の如く怒り出した。

それは無茶苦茶な様相であった。ベッドを飛び回り部屋のカーテンに噛みつき、卯月のお気に入りのクマ(ぬいぐるみ)に尻尾ピンタをかまし…それはもう、かなり凄まじい光景であったらしい。

散々に暴れ回ったルビーは、その後すやすやと疲れて眠ってしまった。帰宅した母親が見た物はねむりこける茶色い生物、そしてそんな生物の側でわんわんと泣く一人娘であったのだ。どうやら暴れられた事が相当ショックだったらしい。友達になりたいという気持ち、お気に入りクマさんがめちやくちやにされた衝撃が入り混じり彼女

はパニックになっていたのだ。

卯月の母親はあらあらとばかりに早々にその光景を受け入れた。どうやら娘が野良犬を拾って来たのだと解釈したらしい。ダンボールで簡単な飼育小屋を作った彼女はそのまま泣きわめく卯月を抱きかかえてあやす。たどたどしい卯月の口調から一応の事情を察した彼女はそのまま父の帰宅を待った。そうして父親も交えた家族会議の末にようやく飼育する事が決定したのである。

ちなみにタマゴを拾って自分で還したのだと主張したが当時は受け入れてもらえなかった。どうみても卵生生物ではないし、赤ん坊にはみえなかったのだからそれも仕方がないが。

一応の事情を理解した卯月の両親。娘の必死の懇願もあり、イーブイを飼う事が決定した。バンザイをして喜ぶ卯月、だがここで問題が発生する。イーブイが何の生物か分からなかったのである。

狸の亜種だと主張する父親

海外の犬だと主張する母親

茶色い猫さんだよと譲らない娘

一家の主張は見事にバラバラに分かれるのであった。家族会議は3時間にも及んだ。仕方なく次の日に車で地域でも有数のペットショップへと向かう島村家。道中コンビニで買った首輪とペット用リードで幼女に引つ張られながらイーブイはショッピングモールへと向かった。

(ちなみにルビーはリードを死ぬほど嫌がった。散歩を拒絶する芝犬のようになりながらずるずると引きずられていったらしい)

ショッピングモールの中に設置されたペットショップの入り口をあける。客の視線や女子高生の黄色い声飛び交う中、イーブイを連れて行く。そうしてペットフードコーナーへとたどり着いた島村家。店員の推測、ペットフード試食コーナーによってこの生物が犬ではないかとの推測がたつたのである。

それ以来ルビーは高級ドッグフードを食べるようになった。きのみをたべるようになった今でも主食は高級ドッグフードである。ともあれこうして卯月家はイーブイを飼育することになったらしい。

ちなみに食べ物にはうるさいらしく、安売りしている物は決して食べないとのこと。また飲料水は海外製のミネラルウォーターを好むらしい。

スーパーで激安販売しているポケモンフーズ（一食約30円）を食べさせている奈緒としてはなんとなく距離感を感じる話題でもあった。大都会に大きな一軒家を持つ美少女と己を見比べて、ちよつとだけ壁を感じて切なくなった奈緒なのであった。

島村卯月と神谷奈緒とノーマルポケモン2

「そんな事があったのか…」

「あまりに可愛いからママも私もすっかり甘やかしすぎちゃって…」

「まあ気持ちはわかるけど…」

「日課のブラシをしなかったら頭をペシペシ叩いて来たり…構ってあげないとすねたりするんです」

「おお…う、うん…」

「でもそういう所が可愛くって」やっぱりルビーちゃんが一番キュートです！」

えへへと満面の笑みを浮かべる卯月。幸せいっぱいという表情である。まるでDVをしてくる彼氏のような…それを許してしまうダメ女のような関係に聞こえてしまうのは気のせいだろうか。奈緒は少しばかりひきつった笑みを浮かべてしまう。

安物ポケモンフーズ（一食辺り20円）とワゴンセールで激安売りしているシャンプーで嬉しそうに喜んでくれるイーブイ。そんな彼に対して贅沢をさせてあげたいと思う一方で甘やかし過ぎるのはやめておこうとも誓う奈緒。

一方加蓮は膝の上で抱えているイーブイをじっと見つめる。そうして手でやんわりと撫でながら、奈緒に対して加蓮は言う。

「奈緒、この子ちようだい」

「ダメ」

「ケチ！ツンデレ！」

「ツンデレは関係ないだろ！」

「ハッピーセット奢るからいいでしょ！」

「そんなんで釣れると思われてるのか!?!」

レジャーシートの上で軽口を言い合う二人。もうすっかり竹馬の友と行った感じである。そんな仲が良い様子の二人に思わずくすくすと笑ってしまう卯月。

卯月は女の子座りをしたまま両手でカップを抱える。そうして彼女は二人を微笑ましげに見つめた。

「二人は仲が良いんですね」

「うん、奈緒はいじられキャラのツンデレだからね」

「おい！」

「でも凜ちゃんも言っていましたよ？奈緒は可愛いって」

「んなっ…」

顔を赤く染める奈緒。そのもふもふの毛先をいじりながら凜に対して恨めしくつぶやく。けれどその表情はいかにも嬉しげであった。奈緒は他人からの称賛に弱い所があるのだ。レジャーシートの上で彼女は赤面してしまう。

顔を赤くする友人、そんな素直になれない所に可愛らしさを感じてしまう加蓮。卯月もまた奈緒の魅力に気がつき笑みを深める。そうして年頃の彼女達は渋谷凜の、ひいてはアイドルに関する話題でさらに盛り上がる。

そんな女子会で盛り上がる少女たち。彼女たちの眼前では1匹のイーブイが顔を赤く染めて恥じらいを見せるのであった。ブイ助の異常な様子にふと加蓮が声をあげる。

「あれ…」

「どうかしたのか加蓮？」

「なんかブイ助くんの様子がおかしくない？」

加蓮の言葉に反応を示す奈緒。奈緒はそつと自分の相棒に視線を向ける。するとそのイーブイが顔を赤くしてモジモジとしているではないか。それは奈緒が今まで見た事もない彼の異常な様子ではあった。

ブイ助は顔を赤くしてじっとルビーを見つめている。呼吸を荒くして体をモジモジとくねらせている彼。爪の先でレジャーシートをかりかりとひっかきながらルビーを見つめているのは一体何故なのだろうか。

病気か何かだろうか、心配げにブイ助を見つめる奈緒。そんなブイ助を眺めながら卯月は突如黄色い声をあげた。卯月は二人に対してもしかして、と前置きをしながら嬉しそうに言った。

「もしかしてっ！恋なんじゃないかな！」

「ええー」

思わず声をあげてしまう奈緒。そんな事…ありえなくはなかった。ブイ助はオスでありルビーはメスである。同じ種族の雌雄という事もありそれは決して可笑しな話ではないだろう。だが奈緒としては素直に喜べなかった。

恋かと言われればなるほど、ブイ助にはそのような兆候が見られた。顔を隠しルビーに食い入るように見つめるその視線。まるで告白できないでいる思春期のような状態。それはもう熱の籠った視線でもあった。加蓮はにやにやとしながら奈緒の肩を叩く。

「なるほど一目惚れってやつ？おませだねーブイ助くん！」

「う、うちのブイ助に限ってそんな事…」

「いやもうあれかなり見入ってない？目がとろーんとしてモジモジしてるし」

「な、なんか複雑な気分だ…」

苦い顔をする奈緒。自分の相棒が誰かに見入るといふ嫉妬のような気持ち。あるいはそれが恋ならば応援してやりたいという親心やら。彼女の中で複雑な感情が立ち込めごちゃ混ぜになってくる。子供が自立する母親のような心境に近いのかもしれない。

そんな三人のアイドルに見つめられる2匹。そんな状況の最中、ブイ助が意を決して行動を開始した。掛け声とともに勢いよくルビーに駆け寄るブイ助。奈緒はそっと息を飲む。そうしてアイドル達に見つめられながら、彼はそっとルビーのそばによる。

ブイ助が決意を固めて話しかける。キャウンという強い鳴き声。だがルビーは反応を示さなかった。雄になんて興味ないと言わんばかりのそっけない態度。そんなルビーになおもブイ助は懸命に声をかけた。

「ブ、ブイ…」

「……」

そうしてブイ助はそっと体をすりよせる。おおと息を飲む加蓮。彼の勇気ある行動に思わず固唾を飲んで見守る奈緒と卯月。自らの身体をこすりつけるようにしてブイ助は魅力的な異性へとアピール

を行なっていく。匂いをこすりつけて覚えてもらおうとしているの
だろう。そんなブイ助の告白にルビーは――

「キャウンっ!？」

「……」

噛みつきで

答えた

悲鳴をあげるブイ助。そんなブイ助に対して更に二度、強烈に噛み
付くルビー。ブイ助の首回りと尻尾に深々とルビーの牙が突き刺
さった。

明確な敵対行動であった。同じ攻撃を受けた加蓮としては彼に思
わず同情してしまう。ルビーの牙は鋭くて痛いのだ。しかも人間に
対して行なったそれではなく、明らかな本気噛みであった。

まるで一昨日きやがれと言わんばかりのルビー。どうやら彼女に
とって体が小さくおどおどとした彼の様子が気に入らなかったのだ
ろう。ルビーはふんとはかりにそっけなくブイ助を追い返す。そう
して再び午睡を貪り始めた。

ポケモン世界において大切なのは戦闘力である。つまり体が大き
く強いオスこそが魅力的なのである。群の中でも体が小さい弱者は
仲間はずれにされる。反面身体が大きな個体は持て囃される。まし
てや進化済みポケモンともなれば同種からの羨望の的なのである。

故に彼らは戦闘力を求める。より強く、より逞しく成長できるよう
に。食欲、睡眠欲、戦闘欲求は彼らの三大欲求と言われているのだ。
より良い餌場や住処を求めて何千年・何万年と歴史を積み重ねてきた
のがポケモンという種族なのだから。

ポケモンが人間を求める理由の一つがそれである。人間のそばで
指示に従えばより効率的に経験や力を得ることが出来る。彼らはそ
の事を本能で理解しているのだ。ポケモンだけで進化を行うのは稀
であり難しいが、人間のそばにいればそれもまた可能になる。

ヒトカゲよりもリザード、リザードよりもリザードンの方がモテる
環境。哀しきまでに弱肉強食なポケモン達の世界なのであった。と
もあれ、ルビーにとってブイ助は魅力的なオスには映らなかつたらし

い。生涯初の失恋にブイ助はわんわんと泣いて奈緒へと駆け寄った。奈緒もまた、何も言わずそつと彼を抱きしめてあげる。

ごめんなさい、ごめんなさいと何度も謝る卯月

奈緒の胸元でわんわんと泣きわめくブイ助

それを面白そうに眺める加蓮

こうして三人はよくわからない友情を結ぶ事になったのである。ちなみにその日以来たびたびルビーにアタックをするブイ助の姿が見られた。しかし最後には決まって返り討ちにあってしまいうらしい。

めげるなブイ助

頑張れブイ助

二宮飛鳥と美玲とクロイツ

コポコポという音が響く。事務所の誰かが持ち込んだであろうコーヒーサイフォンの音だ。待機室に置かれたその焙煎機械の中ではいくつもの豆達が踊っていた。それはまるでこの浮世における幻想のようであった。

この現代社会に踊らされているボク達もあるいは似たような物なのかもしれないな、二宮飛鳥はそう考えてふと笑った。

ブラジル産の良いコーヒー豆の香りを堪能しながら彼女は午後のもどろみを堪能する。先ほど淹れたコーヒーをマグカップへと移し替えながら彼女は席に着いた。そんな彼女に対して先にソファに就いていた先客、早坂美玲が声をかける。

「あれ、アスカ？」

「なんだい？君も飲みたいのならご自由にどうぞ」

「いや、ブラックコーヒーが好きなんじゃなかったのかなって」

「ブラックコーヒーか…懐かしい響きだね」

飛鳥はマグカップを傾ける。その中は漆黒の珈琲…ではなく茶色の液体が入っていた。ミルクをたっぷり入れたカフェオレのようなコーヒーであった。

よくわからないと言った表情をする美玲。彼女はソファの上で寝転がりながら同室で佇む飛鳥を見上げた。一方飛鳥はカップを片手に不敵な笑みを浮かべる。

「美玲、所詮それは味覚の嗜好でしかないものだよ」

「えっ」

「万物は流転するという事さ。人もセカイも忙しなく変化を求めもつのだ…味覚もまた同様に、ね」

「う、うん？」

「人は他者からの視線を気にするものだ。だが他の影響を受けてまで己の欲求を歪める事は本当に正しい事なのかな？ボクはそうは思わない」

「つまり甘いものが飲みたいんだな」

「そうとも言うし…そうとも言わない。まあ君の好きなように解釈をすると良いさ」

そう告げた飛鳥。彼女はカップを傾けてコーヒーを堪能する。湯気が立ち込める茶色いまどろみが、レッスン終わりの彼女の肉体をいたわっていく。それはまるで天使の如く優しく悪魔の如く激しい旋律であった。

まるで楽園を追われたアダムのような心境であった。禁断の果実といえど身体はそれを求めてしまう。あるいはその根源的な欲求こそが人の原罪と言えるのかもしれない、そこまで考えて飛鳥は再びふっと笑みを浮かべた。

『A級ライセンス(悪)！1ヶ月で完全攻略！』という分厚い参考書を読んでいた美玲。彼女はその分厚い冊子を睨みつけるとため息と共にテーブルにおいた。どうやら小休止するようだ。

飛鳥と美玲はテーブルの上に置かれた菓子に手をのばす。茶色いお盆の上に置かれた色とりどりのお菓子達。それらに手を伸ばす少女達。梱包紙のペリペリと破れる音が待機室に響いた。そうして盆上のお菓子達は二人と一匹の心を癒していく。

「美味しいね」

「ん…美味しいな」

「ほらクロイツ、君の分のクッキーだ。食べると良い」
「クウウン」

飛鳥が傍にいる自身の相棒へと語りかける。そうしてソファの隣で寝転んでいたルクシオは飛鳥が差し出したクッキーへとかじりついた。カリカリと食べる姿は随分と嬉しそうだ。どうやら主人に似ないで随分と素直な性格らしい。

ドイツ語で十字架を表す「クロイツ」という名前から命名されたルクシオを眺める美玲。高さ0.8mの電気ポケモン。その鋭いつめ先と長い尻尾が特徴的なでんこうポケモン。ソファの上でまるでライオンのような雄々しさを放っている。

ドイツ語で十字架を意味するその名前。正直にいつてかなり独特なネーミングセンスである。飛鳥本人は最高の名前だと思っている

らしい。罪を背負ったボクにふさわしい名前だとかなんとか。ちなみに電気関係から「サンダー」「ボルト」「トール」とかなり迷ったらしい。このラインナップを考慮すると、或いはクロイツと命名されたのはルクシオにとって幸運な事だったのかもしれない。美玲はそんな飛鳥とルクシオに話しかけた。

「ルクシオはクッキーが好きなんだな」

「ああどうやら糖分は人にもポケモンにも有益なようだね」

「そういえばうちのヤミラミもお菓子好きだったな」

「何が好きなんだい？」

「栗饅頭」

お菓子を片手に返答する美玲。そうして彼女は隣の倉庫へと遊びに行つたヤミラミのことを考える。ヤミラミは明るい所を好まないのだ。本来洞窟に住んでいる彼らにとって昼のこの時間帯は遊ぶか眠るかのどちらかの行動をするものだ。そんな美玲の考えをよそに飛鳥とルクシオはコミュニケーションをとる。

「彼はこのチューイングガムが好きだね。ほら、お食べ」

「ガウウガウ」

「多分要らないって言ってるぞ」

要らないとばかりに首をふるルクシオ。抜群の相性、とは呼べないだろう。飛鳥はすこし悲しげにため息をついた。珈琲を飲んで喉を潤す彼女。

「ふっ…人と人が分かり合えないんだ、どうして彼らとコミュニケーションが取れると思ひ込むのかな」

「いや、だいぶ分かりやすいぞ」

「だが、だからこそ結べる絆がある…ボクはそう信じている。君もそう思うだろうクロイツ？」

「ガウッ！」

飛鳥の声に応える、ルクシオ。どうやら相性はともかくかなり仲がよいらしい。というよりは飛鳥に対してルクシオが付き合っていてあるとも解釈できそうだが。ともあれ彼女がいうように絆は確かにあるようだ。

ソファの上で感嘆の声を漏らす美玲。絆があるかどうかではなく、飛鳥の厨二的な言語を理解できるルクシオに対しての感嘆の声である。よくもまああれを理解できるものだと思玲は感心をした。

クッキーをポキリとかじる。チョコチップが混じった1パック30枚入りのそれをもぐもぐと堪能していく。そうして美玲は自身のスカートにポツポツとクッキーの破片をこぼしながら独り言をつぶやいた。

「進化か…格好良いな…」

思わずポツリと呟く美玲。その視線はルクシオに向けられていた。確かコリンクから進化をしたはずだ。この一族は更にもう一段階、つまり計二回も進化をするというのだ。美玲としてはこの進化が羨ましいのであった。

彼女のそばには、相棒であるヤミラミがいる。だが、ヤミラミは進化をしない種族だ。少なくとも学者からはそう判別されている。ヤミラミの姿に不満があるわけではない。だが、一生進化をしないと云われると…やはり切ない思いはどうしても残ってしまうのであった。

可愛い進化

格好良い進化

色々種類はあれどやはり目に見える変化というものは好ましいものだ。とはいえサイズやタイプが変わるとそれだけで飼育が大変な部分も出てくるのは事実だが。そんなことを考えている美玲に対して飛鳥はこう告げた。

「進化…それは本当に必要な事かな？」

「え？」

「機が熟すれば向こうからやってくる。ボクらは焦らずそれが来るのを待てば良いのさ」

「でもヤミラミは進化をしないって…」

「外見よりも重要なのは中身さ。変わらぬものがあるように、変わるものもまた在る筈だろう？」

「うーん深いような…深くないような」

飛鳥の言葉にうーんと首をかしげる美玲。まあともあれ彼女のいうことにはなんとなく理解はできる。ようは外見の進化だけに囚われるなどという事だろう。美玲はそう納得をした。

そうしてふと机の上に放置していた参考書を眺める。A級ライセンス対策と書かれたそれを眺めながらふと美玲は思い出す。そういえば、と美玲は自身の向かい側でふっとキザな笑みを浮かべる友人に對して尋ねてみた。

「ところで飛鳥はライセンスが取れたのか？」

「うぐっ…」

「…今動揺しなかったか？」

つぶれたカエルのような声を発してしまう飛鳥。そのうめき声をかき消すように彼女は笑みを浮かべた。こほんと咳払いをする飛鳥。そうして彼女はふっとキザな笑みを浮かべながら再び答える。

「ラ、ライセンス…それは本当に必要な事かな？」

「多分必要だと思う」

「機が熟すれば向こうからやってくるものさ」

「いや、ウチはそうは思えないんだが…やっぱり飛鳥も取れてないんだな…」

コーヒーを掴んだ手が震える。そうして飛鳥は今度こそ困ったような顔をしながらそっと天井を仰いだ。それは虚ろな瞳であった。まるで宿題を忘れてしまった小学生のような…目の前で電車を逃したサラリーマンのような。そんな虚ろな表情をしてしまう。

そう彼女、二宮飛鳥はこの間めでたく7回目のライセンス試験に落第したのである。B級（電気）限定という難関試験は14歳の少女には少々荷が勝ち過ぎたらしい。少なくとも飛鳥にとってはそびえ立つ壁に等しかった。まるで資本主義と社会主義を断ち分けるベルリンの壁に等しい、そんな障害であった。

「セカイは…ボク達を拒絶するか…」

「多分政府だと思う」

「ふっ…社会体制への反抗。それもまたロックだね」

「いや、李衣菜みたいな事言って逃げるなよ」

美玲からの鋭いツツコミが入る。それを笑って受け流す飛鳥、いや笑い事ではないのだが。ともあれ彼女達はどちらもライセンス試験に合格できないでいるようであった。

11歳（小学五年生）以上で一匹まで

13歳（中学生）以上から二匹まで

15歳（高校生）以上から三匹まで

ポケモンの飼育可能数はこのようになっていた。ポケモンの飼育申請書によってポケモンの捕獲と飼育が可能になり、ライセンスの有無によって公共の場所への連れ込みや公式バトルへの参加が可能になる。だが、定められた規定以上にポケモンを捕獲、飼育することは法律で禁止されているのである。

これはポケモンの乱獲といった行為を防ぐための処置でもある。ちなみに成人時からはこのような規定はなくなり、もう少し規制はゆるくなる。

C級ライセンス：中学受験相当

B級ライセンス：高校受験相当

A級ライセンス：大学受験相当

試験のレベルをこのようにイメージすると理解しやすいかもしれない。無論、一概には言えないし一般的な学力と安易に比較できるものでもないが。ポケモンに関する知識だけでなく一般常識等も兼ねて出題されるのである。

ポケモンにバトルをさせる事には大きな責任も伴う。けが人が出た場合の救急対応、街並みへの被害、災害時のポケモンへの行動指示。これらの行為には一般常識も必要になってくるからである。

余談ではあるが飛鳥のルクシオは飼育した段階で既にルクシオであったらしい。飛鳥自身はバトルを行なったことは未だ一度もなかったりする。本人としてはもの凄くバトルには興味があるが如何せんB級（電気）限定試験がむずかしいのだから仕方がない。なにせ電気関係は人気且つ難関なタイプ試験としても有名なのだ。

Q 一般個体のエレブーは最大で何ボルトまで放出できるか答える
Q 野生のビリリダマの『じばく』を防ぐために有効な手段を以下の
選択肢から選べ

このような特殊な知識が必要になるのである。他のタイプに比べ
ても比較的困難な部類に入る試験であろう。その代わりに日常への
恩恵は大きいだろう。電気タイプとはこの都会においてハイリター
ンな存在なのである。

頭を抱えてしまう飛鳥。自身の学力が特段に劣るとも思えないが
14歳の少女にとってB級限定は少々困難すぎるのだ。そんな悩み
を抱えて言える飛鳥に対して美玲は仕方ないなとばかりに答えた。

「仕方ないなあじゃあ今度一緒に勉強するか？」
「え？」

「今度早苗さんが教えてあげようかって。多分頼めばB級ライセンス
の試験対策もやってくれるんじゃないかな」

「さ、早苗さんが…？なんでまた…」

「さあ、なんでかウチにもよく分かんないけど」

「うう…なんだか彼女の指導は厳しそうだね」

「そうかな？ウチはヤミラミの為ならなんだって頑張るぞ」

「……」

「飛鳥も一緒に勉強教えて貰ってもいいですかっさ、ウチからお
願いしてあげるから」

「ふっ座学は他人からの影響を受けないものさ、有難い申し出だが…」

「でもルクシオと一緒に旅行とか行きたいだろ？」

「……」

「…一緒に勉強するか？」

「…うん、おねがい」

コクリと頷く飛鳥。どうやら彼女もルクシオの為に努力するよう
である。甘いコーヒーを勢いよく飲み干した飛鳥。そうして彼女は
ネットで新しく参考書を探し始めた。こうして飛鳥と美玲は自身の
家族の為に一層座学に励むようになったのであった。

前川みくと和久井留美

S局第5スタジオ、ここではテレビ収録の為に人々が忙しなく動いていた。台本を片手に走り回るスタッフ、機材を抱えたディレクターが慌ただしく移動する。その近代的なビルの中では日夜を問わず様々な番組の収録が行われて居るのであった。

そんな中、一人の少女が通路を歩いていた。頭部に猫耳をつけている彼女、前川みくはテレビ局の廊下を一人で歩いていた。そんな彼女に対して声をかける一人の女性がいた。同じ346プロダクションに所属するクール系アイドル、和久井留美が彼女に声をかけた。

「おはようみくちゃん、今時間は大丈夫？」

「おはようございますにゃ」

「ちよつと一緒にお話してもどうかしら…いいえ、そこに座りなさい」
「……」

和久井留美からの厳しい言葉に前川みくは動揺してしまふ。みくは険しい顔をしながら、しぶしぶとベンチに腰掛けた。いくつかの植木に、自動販売機の向かいに設置された高級木製のベンチ。

そうして留美もまた、彼女の隣に腰掛けた。缶コーヒーを手にしたまま静かに佇む留美。重苦しい沈黙が二人の間で流れ出す。せわしなく動き出すAD達の声が遠くから響く中、留美が沈黙を破る。

「武内君に聞いたわよ、テレビ収録断ったんだって？」

「こ、断ってないにゃ！あれは企画の段階だって……」

「……」

「自分の意見を言っただけで…それで…」

「甘いわね、この業界では『企画の段階』はほぼ決定済みなのよ」

「……っ！」

「おそらく内容はそのまま、今頃はきっと他のアイドルにお話が回っているでしょうね」

「そんな…それは…」

「売り出し中の新人アイドルなんて代わりは幾らでもいる物よ」
「……っ」

苦虫を噛み潰したような顔をする前川みく。彼女は滅多に見せない苦渋の顔をしながらぎゅっと自身の衣服をつかんだ。そうして346プロでの過去の会議を思い出す。会議室に呼び出された日の事を。

自身の担当プロデューサーである武内からローカルテレビ番組の収録がある、との話を貰った前川みくと多田李衣菜。アスタリスクとして活動中の彼女達にとってまたとない話である。興奮する彼女達。そんな興奮はプロデューサーの言葉で消し飛んでしまう。

御二人には地方の牧場へ行ってもらいます

ポケモン達との触れ合いシーンを撮るつもりです

その言葉を聞いた時に思わず悲鳴をあげてしまったのだ。聞いたことのない悲鳴に動揺する二人。みくはなんとか別の方向で収録できないかと涙まじりに武内に抗議した。普段の姿から想像する事ができない程、異常に動揺する彼女の姿に武内は驚いたらしい。ポケモンと関わりたくないと言っているみくに対して武内は優しく告げた。

これは企画の段階です

要望を検討させて頂きますので気にしないでください

武内プロデューサーはそう、みくに告げると忙しそうに部屋を出ていった。きつと優しい彼はその言葉通りに考慮をしてくれるのだろう。番組スタッフに対して真摯にお願いするに違いない。ぶるぶると震えるみくに対して和久井留美は更に厳しい言葉をなげかける。

「確かに地方のテレビ番組、その十分程度のミニコーナーらしいけど…今のあなた達にとっては仕事の大小なんて関係ないわ」

「み、みくは仕事を選び好みなんてしないにや！どんな仕事でも一生懸命…っ！」

「じゃあどうして断ったのかしら」

「……」

「あなた達はコンビなのよ。なにより仕事をとってきくれたプロデューサーや李衣菜ちゃんに申し訳ないと思わないの？」

「……」

「もしもそうならプロ意識に欠けるわ、今のうちから…っ！」

「……」

「……ごめんなさい、少し言いすぎたわ」

ため息をつく留美。彼女自身は社会人としての自覚がある。その仕事の大変さも業界の辛さも理解しているつもりだ。もしも甘えているのなら正してあげなければならぬ。留美はそう考えていたのだ。みくの事を思うからこそその苦言であったのだ。しかし、どうやら逆効果であったらしい。

みくは震えていた。自身のひざをぎゅっと掴んで静かに震える彼女。彼女はスカートノ端を痛いほど握りしめながら留美の言葉に答えた。その声はかき消えてしまいそうな程震えていた。

「ポケモン……こわいんです……」

「……」

「……ごめんなさい」

「……」

「……ごめん……なさい……ごめんなさい……」

彼女は泣いていた。下を向きながら必死に何かを押し込めるように、涙をポロポロとこぼしていた。彼女の衣装が、大粒の涙で濡れていく。彼女は拳をぎゅっと握りしめる。まるで何かを必死で堪えるように。

彼女自身理解していたのだ。スタッフがどれだけ尽力しているのかを。自分達のプロデューサーがどれだけ努力しているかを。プロ意識が欠けているだなんて事は決してないのだ。だってそうである事を誰よりも望んで、夢見てきた彼女なのだから。

けれどどうしても怖かったのだ。テレビ番組の収録とは言えポケモンと接することがどれほど恐ろしい事か。昔トラウマを背負ってしまった彼女にとってどれほどの恐怖であるかは当人にしかわからない。まい。

アイドルとしての自分

トラウマを背負った自分

その二つの重みに押しつぶされそうになってしまふ。彼女は嗚咽を漏らした。貯めていた感情を吐き出すように、大声で泣き出してし

まう。施したメイクをポロポロにさせながら、彼女は涙を流した。初めて見る後輩の姿に驚く留美。けれど彼女はその驚きを押し隠した。留美はみくの背中をそつと抱いてあげた。そうして、暫く無言のまま彼女をそつと慰めてあげた。AD達の駆け足の音が、テレビ局の廊下に響いた。

「みくちゃんはポケモンが怖いよね」

「…昔…色々あって…」

「…そう」

一通り涙を流したみく。そうして彼女は留美に礼を言った。泣きはらした瞳で苦しそうに笑みを浮かべる彼女に対して留美はそつと問いかける。ポケモンに対して恐怖を抱いているという彼女に対して留美はそつと告げた。

「それはおかしな事じゃないわ」

「えっ」

「体が大きかったり怖そうだったり…誰だつて怖くて当然よ。みくちゃんみたいな人は珍しくないわ」

「……」

「……和久井さんは、みくの事否定しないの？」

「しないわ」

断言する留美。彼女自身、ポケモン騒動について振り回されてきた人間なのだ。様々な立場の人間やその主張についても彼女は理解していた。若い子供達にはわからないだろうが、当時の混乱は想像を絶するものであったのだ。

かつてポケモンを排除するべきか否かで議会が真二つに割れた事がある。何時間と続く議論。ポケモンと人間はきつと共存できると語った若い議員。そんな彼に対して別の議員が失笑混じりにこう答えたのだ。

人と人が分かりあえないのにか

この2000年間人類は殺し合いしかしてないじゃないか

こう返答された時、その議員は言い返す事ができなかつた。今でも

なお議論される有名なエピソードである。結局世界は、国はポケモンの存在を認めて共存する姿勢をとった。しかしそれは自発的に、ではなく仕方なくである。

留美は購入していた缶コーヒーを握りしめながらみくに対して告げた。彼女の瞳を見つめながら懸命に言葉を紡いだ。この後輩にどうか伝わってほしい、そう願いを込めながら。

「ポケモンと人間は共存できるだなんて軽々しく言えないし…言っただけいけない事なのよ」

「……」

「でももうそんな段階は通り過ぎた…私たちは嫌でも彼らに関わっていかねばいけないの……芸能界で活躍したいなら尚更ね」

「…適度に関わっていかなきゃだめって事?」

「あるいは、良いポケモンも悪いポケモンもいる。その事を理解しなさいって事かもしれないわね」

ポケモンの事を嫌ってもよい。けれどアイドルとして仕事をしたいなら受け入れるしかない。そう遠回しに告げてくる留美。そんな留美の厳しいながらも明確な言葉にそつと感銘をうけるみく。そうしてみくは重々しく頷いた。

先輩としての言葉に感謝するみく。そんな彼女に対して留美は照れ臭そうに微笑んだ。すこし語りすぎたかもしれない。そう感じた彼女はそつと謝罪した。

「偉そうに説教してごめんなさいね」

「ううん、…ここまで言ってくれる人いなかったから…」

「…そう…もう時間だからいくわね」

留美はそういって立ち上がる。購入していたコーヒーはすっかりぬるくなってしまうていた。彼女はみくの事を気遣いながら次の現場へと移動する為に立ちあがった。

なおもベンチに座ったまま暗い顔をするみく。そんな彼女に対して留美はそつと告げた。大丈夫と、彼女を安心させるように穏やかな声で告げた。

「大丈夫よ」

「えっ」

「貴方とも仲良くできるポケモンがきつと居る筈よ」

「……」

「いつか信頼できるパートナーが見つければ…きつと分かるわ」

そう告げた留美。彼女は背中を向けて歩き出す。かつかつとハイヒールの音を鳴らしながら歩いていく。その足取りは力強く、確かなものだった。みくはそつと彼女の背中を見つめ続けた。いつの日かくるのだろうか。

ポケモンと仲良くできる日が

彼女が真に頼れるパートナーが

きつとそれは…そんな日々が…。彼女はベンチから立ち上がりながら考える。次はボールカレッジの時間だ。もう移動しなければならぬ。そう考えた彼女はベンチから立ち上がってポツリとつぶやいた。

「そんなの絶対に無理にゃ…」

瞳をぬぐい彼女は歩き出す。もう彼女の瞳は乾いていた。自身のハンカチで涙をすっかり拭い去った彼女は再び作り笑いをしながらテレビ局のスタッフに朗らかならに挨拶を交わした。自身のスカートを涙で濡らしたまま。

第6章 前川みくとパートナー 的場梨沙と結城晴とメタグロス

「あれ？こんなところで晴は何してるの？」

「ん…ああ梨沙か」

ベンチでたそがれる少女がいた。彼女はパーカと白いキャップをかぶっており、一見するとまるで少年のようでもあった。オレンジ色の髪をさらさらと風になびかせては空を見上げてたそがれる彼女。しかしその端正な顔つき、女性特有の柔らかい肌をもった彼女はまぎれもなく美少女なのであった。

そんな彼女に別の少女が声をかける。的場梨沙はそうして結城晴に声をかけると彼女のそばへと近寄った。おしやれなポシエツトを身につけた彼女はいかにもギャルのような華やかな衣服を身につけていた。

「いやこれからバイトしようかなって」

「ああバイト…バイト!?!」

晴からの返答に思わずぎよつと悲鳴をあげる梨沙。そうして彼女は晴へと詰め寄った。顔を付き合わせて彼女に強い口調で話仕掛ける梨沙。そんな梨沙の言葉に思わず晴はのけぞってしまう。

「な、なんだよ…」

「アイドルがバイトなんて禁止でしょうが！バレたら大変な目に遭うわよー」

「…ああそういう意味じゃなくってさ」

「ええ？じゃあどういう…」

「これだよ、これ」

「…ボール？」

「この中に入ってるポケモンの世話を頼まれたんだ」

「…ああそういう事」

手に持った球体の何かを梨沙に見せつける晴。晴のその小さな右手には金属製のボールが収まっていた。鈍い銀色をしたそれは綺麗

に、美しく整備されていた。

人の顔が映り込むほどよく磨製されたそれはステンレス製ののだろうか？高級感漂う特性のモンスターボールであった。この中にとあるアイドルのポケモンが収められて居るのである。

「金属製…随分特殊なボールね」

「ああ心さんお手製らしいぞ」

「心さんって…あの佐藤心？」

「うん、テレビのロケ収録に行くからってお願いされた」

「ふーん…変なやつじゃないでしょうね？」

「安心しろ、おつきくてかっこ良いぞ」

「全然安心できないんだけど!？」

じりじりとあとずさる梨沙。どうやら中のポケモンに不安を抱いて居るらしい。彼女はじりじりと観葉植物のコーナーまで後ずさった。そうして影から伺うようにして晴に顔を向ける。

「そんなに距離を取るなよ」

「変なやつはキライなのよ！ヘドロみたいなやつとかおつきな蛇とか」

「ベトベターとハブネークのことかな…」

「あの人ってセンスが独特だし心配んだけど」

「それ本人の前で言うなよ…ともかく気にするなって。ほら出すぞ！」

そうして晴はそつとボールを投げ捨てた。勢いよくボールを空へと放り投げる晴。心なしか嬉しそうな表情だ。そのまま晴は楽しそうに大声をあげた。

「よーし出てこいメタグロス!!」

ズウシイイン

彼女が放った金属製のボール。そのボールの中から巨大な鉄の怪物が現れた。鋼タイプのでつあしポケモン、メタグロスである。高さ1.6m、重さ550kgの大型ポケモンである。その異様な姿に思わず絶句する。

的場梨沙はそつと息を飲んだ

それはまぎれもなく化け物であった

大きな金属製のボディ、鋭い巨大な爪はまぎれもなく強者の風格が漂っていた。600族という選ばれし種族のみが手にすることのできる境地。その威圧、その佇まいはその場にいるだけでピリピリとしたプレッシャーを与える。

ポケモン界において最も強力な種族とされている鋼ポケモンである。その技の汎用性の高さ、強力な攻撃の数々は他のポケモンを圧倒する。メタグロスの知性は他のポケモンと比較にならぬほど優れて居るときく。一説にはスーパーコンピューター並みの頭脳を有しているとまで言われて居るのだ。あらゆる意味でハイスペックなメタグロス達はその存在で多くのポケモン達を蹂躪してきたのだ。

そのメタグロスは光り輝く銀色の身体をしていた。頭部にはほかのメタグロスには見られない特別な黄色いX型のパーツが埋められて居る。俗に言う色違いであった。生まれて初めて目にする色違い個体に二人は大きな歓声をあげた。

「おおお!!」

「おおお!カ、カツコ良いわねこいつ!」

「い、色違い!すっげーレアだ!!」

「ほんと…色違いって本当にいるのね…」

「……」

アイドル達の黄色い声援に対して黙り続けるメタグロス。メタグロスにも口はあるはずなのだが一向に言葉を発しはしなかった。どうやらかなり無口な性格らしい。いぶし銀というやつなのだろうか。

一通り体を撫で回しその硬い肉体を堪能する晴。そんな様子を目にしながらおずおずとメタグロスの額を撫でてあげる梨沙。どうやら恐怖は吹き飛んだようだ。彼女の目線から言ってもかなり『イケている』ポケモンだったらしい。梨沙はふと晴に対して問いかけた。

「ところでバイトって何するの?」

「あーそれは…」

「なによ、早く言いなさいよ」

「洗淨だな」

「え？」

「ほらブラシ持てよ」

「えっちょっ！」

晴の投げたブラシを思わず受け止めてしまう梨沙。そんな話は聞いていない、そう怒り始める梨沙に対して晴は軽やかに返答をした。水道のバルブをひねりバケツに水を入れ始める晴。

そのプラスチック製のバケツになみなみと水を注いだ晴。彼女は重たそうにバケツを抱えながらメタグロスのそばへと歩いていく。

「えーと金属用洗剤で磨いた後にコーティング剤をつと…」

「ア、・アタシまだやるなんて言ってないわよ！」

「いいじゃんかバイト代は山分けするぞ」

「お金なんて普通に稼いでるし！パパからお小遣いも貰ってるもん！」

「あと手伝ってくれるとオレが嬉しい」

「うぐっ…」

「オレを助けると思ってたさ、頼むよ梨沙」

「わ、わかったわよ…」

無自覚に口説き言葉を放つ晴。その口調、その仕草、天性の女らしの才能があるとしか思えない行動であった。敏腕ホステスばりのその口説き文句に思わず頷いてしまう梨沙。

きっと生まれる性別を間違えたのね、梨沙はそうつぶやいたため息をついた。この友人に関してには悪意がないから反応しようがないのだ。仕方ないとばかりに彼女達はメタグロスの洗浄を始める。

ゴシゴシと身体をブラシでこすっていく。時折バケツから水をかけては洗剤を振りまいていく。そうして泡だてながら再びブラシを利用していくのである。

地面に寝そべるメタグロス。そんなメタグロスのとある一本の爪にまたがりながら梨沙はたわしで身体をこすってあげる。ゴシゴシと音を立てながら彼女は晴に対して声をかけた。

「ところでこいつの名前ってなんなの？」

「名前はタンタンらしいぞ」

「はあ？」

思わず手を止めてしまう梨沙。そんな梨沙には構わずに晴はバケツに洗剤をかけながら陽気に答えた。かつこ良いポケモンに触れられて嬉しくて仕方ないのだろう。晴はなんとも楽しげな様子であった。

鼻歌を歌いながら嬉しそうに洗浄を続ける友人に対して梨沙はなおつぶやいた。

「あの人のネーミングセンスはおかしい」

「それ本人の前では言うなよ？」

「でもこんなごついのにタンタンって…」

「ちなみにあだ名は鉄アレイらしい」

「ええ…」

まんまな命名センスに思わずドン引きしてしまう。メタングとメタングが二体かけ合わさったような形をして居ることからタンタンと命名したらしい。だからなんだという話だが。

休日是一緒に出かけたりと仲が良い様子の佐藤心とメタグロス。写真をSNSやブログにあげたりしているらしく、かなり溺愛しているようだ。ちなみに洗浄については一週間に一回欠かさず行っているらしい。

ロケ先の現場の環境のせいでも一緒に行けなかったとの事。夕方まで相棒を頼むぜ☆と言ってじきじきに心からポケモンを託された晴としては彼女のポケモン愛は本物であると感じていた。まあネーミングセンスは壊滅的だが。

「鉄アレイは失礼だよな」

「バ、バツカみたい…」

「タンタン・テツア・レイだな」

「プツあはは！わ、笑わせないでよ!!」

「ごしごしと洗いながら梨沙は言う。笑い声をあげてしまい思わず体がずり落ちてしまいそうになってしまう。そのメタグロスの大きな爪にしがみつきながらようやく体を洗い終わる梨沙。

これであと半分か。梨沙としてはその肉体の大きさとポテン

シャルに思わずため息をつきたくなってしまった。まるでドラゴン並みの威圧感である。自身がまたがっている相手がどれほど恐ろしい存在か理解していない梨沙。

かつてそのあまりのバトルの強さから「鋼の暴虐」とまで呼ばれたメタグロスである。その気になれば3分でビルを平らにできると知ったら彼女達はどのような顔をするだろうか。そうとも知らずに彼女達はゴシゴシとなおも一生懸命にメタグロスの体を磨き続けた。そうして1時間ほど経った。

彼女達の甲斐もあつてか、今ではすっかりと綺麗な状態になったその鋼ポケモン。銀色の肉体がまばゆく太陽に照らされて居る。ピカピカの状態がとても美しい。ひと段落ついた彼女達はようやくほつと息をつく。

メタグロスもまた自身の肉体の状態に満足しているらしい。メタグロスは無言のまま彼女達に対して手を振り上げて礼を言った。

「こんなんで気持ち良いのかしら…」

「いやでも目元とか笑ってないか？」

「あっほんとね、ちよつと気持ちよきそうにしてる」

メタグロスの様子を観察する梨沙と晴。そうして彼女達は顔を近づけてはまぶさに観察をし始めた。美少女二人に超至近距離から見つめられるメタグロス。しかし彼はなおも無言のまま微動だにしないかった。

表情を一切変えないメタグロスを見続けながら梨沙がふと気が付けた。そういえば、と彼女は晴に対して確認をとった。

「で？バイト代っていくらなの」

「500円」

「は？」

「だから、500円だってば」

晴の言葉に呆然としてしまう。ブラシを抱えたままプルプルと震え始める梨沙。そんな梨沙に対して大丈夫かと声をかけると彼女は――

「安すぎるわ!!バツツツカじゃないの!!」

「な、なんだよいきなり大声で！」

「美少女アイドルこき使ってワンコインか！時間返せバカ!!」

「でもジュース買えるぞ？」

「ジュースに釣られるなアイドル!!」

大声をあげて抗議する梨沙。その後も色々と面倒な揉め事があつた二人。けれどもなんだかんだいって仲が良いらしい。その後も梨沙はぶつくさと文句を言いながらも最後まで真面目に洗浄作業を手伝ってくれる的場梨沙なのであつた。

アナスタシアと氷ポケモン3

「おフロ気持ち、良かったですネ！」

「キュウ！」

アナスタシアは浴衣にそでを通した。その白い陶磁のような極上の肌を桜色にほんのりと染めあげながら、彼女は湯浴み後の余韻にひたる。はふうと息を吐きながらそつと窓外の夜景に目を向けた。

窓の外から見えるのはいつもの光景であった。背の高いビル、自販機とコンビニに囲まれたコンクリートジャングルを見るとなぜだか切ない気持ちになってしまいうアナスタシア。故郷を出てから随分と時間が経ってしまったものだ。ふと思い出の光景を振り返ってセンチメンタルな気分になってしまいう彼女。

346プロダクション寮の廊下を歩く一人と一匹。ポテポテとスリッパの音を鳴らしながらアナスタシアは自身のポケモンに対して話しかけた。彼女の隣を歩くオスのグレイシア、ロシア語で妖精という意味を持つフェアーヤは嬉しそうに鳴き声をあげた。そんな彼女に対してアナスタシアもまたにこりと笑顔になる。

どれだけ故郷を離れようとも

自身の隣には彼がいる

それがどれほど心強いことか。そのありがたみに感謝しながらアナスタシアはそつと自室のドアを開けた。いくつかの棚、木製家具に囲まれたひどく慎ましやかな私室であった。棚の上には美波と旅行に出かけた時に購入した小さな指人形が綺麗に置かれていた。

そうして手荷物をおいた彼女。アナスタシアは部屋の中央にこしかけた。カーペットの上に腰を下ろす。そうして彼女は両手をいっぱい広げて彼に語りかけた。

「おいで、フェアーヤ！」

「キュア！」

女の子座りをしたアナスタシア。彼女は自身の膝をポンポンと叩きながら嬉しそうに彼を誘った。そのほんのりと桜色に火照った顔でやんわりと微笑む彼女のなんと魅力的なことか。どことなく扇情

的な香りすら漂わせながら彼女は微笑んだ。

彼女が叩いたその膝下にグレイシアそつと滑り込む。そのままむちむちとした極上の肌に自身の体を寝そべらせながら彼はのどかに瞳をとじた。そうしてアナスタシアは自身の家族に対してマツサージを行った。

むにむにと彼の柔らかな体に指を這わせながら、誠意を込めてマツサージを行う。力を込めて、ぎゅっぎゅっつと親指を押し込みながら彼女は丹念にそれを行っていく。バトルを行ってくれた彼に対して彼女はねぎらいの言葉をかけた。

「フェーヤ、今日はお疲れ様、です。負けちゃった、けど頑張ってた」

「キユウウ…」

「バトル…やっぱり、難しいですね」

「……」

マツサージをおこないながらため息をつくアナスタシア。どうやらバトルで思い悩んでいることがあるようだ。彼女は家族の体をいたわりながら今日のバトルの事を思いかえす。

ルーキートレーナーが指示するマンキーとの一戦。彼女が指揮するマンキーは巧みにその体を弾ませながら重い拳を繰り出して行くのだ。クロスチョップの強靱な一撃、地球投げの衝撃的な威力を思い出す。

ルーキートレーナーの手によってよく鍛えられたのだろう。鍛錬の証が他人であるアナスタシアにもよくわかった。それと同時に己のバトルセンスのなさにも、気がついてしまう。こればかりは知識だけではどうしようもない。

バトルというものにはセンスが必要となる。敵の攻撃の性質を瞬時に見極め、避けるのか、防御するのか選択するのだ。そうして数多ある技の中から最適なものを選び、それを放つ。

どこへ

どのように

どうやって

戦うポケモンに変わりその事をトレーナーが考えなければならぬ。一流同士の戦いなどゼロコンマに匹敵するとまで言われるバトルの早さに、夢中で追いついていかなければならないのだ。

当然トレーナーにだって多大なる責任と疲労が付きまとう。決してゲームのように四つの技を選択して終わりというものではないのだ。トレーナーの義務とは指揮と、そこにいきつくまでの育成にあるのだから。

346プロダクションに設置されたバトルフィールドに巨大なヒビすら入れたマンキーの攻撃を思い出して身震いするアナスタシア。一矢報いようと試みたもののどうにもうまくいかなかった。通算12戦8敗という黒星を付けられてしまった彼女達はうなだれてしまふ。

タイプ相性の問題もある。負けても仕方がない事だと思うのだが、フェアヤが納得しないのだ。どうやら対抗意識を燃やしているらしい。アナスタシアは思わずため息をついてしまふ。彼は☒ひかえめ☒な性格に見えて意外と負けず嫌いなのだ。

「フェアヤ、どうしても勝ちたい、ですか？」

「……」

「私、傷つくの嫌です。バトルは苦手です」

「……」

「それでも、どうしてもバトル、やりますか？」

アナスタシアの告白が続く。彼女のあまりにも正直な、けれども愛に満ちた言葉。けれどフェアヤは彼女の言葉に反応を示さなかった。ふいとそっぽをむいたまましっぽで彼女の体を柔らかく叩いた。

どうやら理屈ではないらしい。負けっぱなしは嫌だというそれはポケモンの本能、あるいは男の子としてのプライドというやつなのかもしれない。アナスタシアはため息をつきながら彼のマッサージを続けた。

家族の困ったところに苦笑しながら、フェアヤのお腹を二、三度さすってあげるアナスタシアなのであった。苦手だけれども仕方ない、家族がそれを望んでいるのなら付き合っただけでいい。彼に

対して罪悪感と、ちよつぴりの誇らしさを感じながらアナスタシアはマツサージを続けてあげた。

実は彼女は知らない。その敗北はタイプ相性だけでなくグレイシアが物理攻撃主体で行なっていたからだという事を。もしもグレイシアが特殊攻撃に特化した訓練を行えば、とても強力なファイターになれるという事を。

みくとパートナー

どうしてこうなったのだろう

森林の中を駆けて行く。彼女は死に物狂いで樹林の中を駆けていった。それは必死の逃走であった。感じた事がないほどの恐怖と混乱、それでも前川みくは走り続けた。

「……はあ………っ!!」

脳が酸素を求める。ハッハッと荒く浅い呼吸をくり返し続けた。身体中に傷をおった彼女。ボロボロになりながら彼女は死にももの狂いで足を動かし続けた。あのポケモンから逃れる為に。

辞めてしまいたい

諦めてしまいたい

そう思いながらもみくは死ぬ気で駆け抜けた。そうして大きな草むらに無我夢中で体を突っ込ませる。今もなお自身を追い続けているあのポケモンから逃れようとみくはもがいて――

「……あ」

転んでしまった。

二度、勢いよくゴロゴロと地面を転がった。ざっくりと割れた太ももからおびただしい血を流しながらようやくやく止まる。そうして彼女の背後で草がかすれる音がした。

彼女の背後から

激昂したリングマが現れた。

『ヒメグマちゃんの可愛いー写真が撮りたい訳よ、分かる? みくちやんみたいなキュートなアイドルならそりゃあ視聴者も大満足だしさ、分かるよね?』

サングラスをかけたテレビディレクターの言葉に苦い顔をする武内。そんな彼をよそにそのディレクターはご満悦の表情を浮かべ、自身の企画について話し続けた。どうやらとあるキャンプ場にて、アイドルによるポケモンのレポート映像を撮りたいらしい。

キャンプ地に住み着いたヒメグマの群れ。そんなヒメグマ達に餌

を与えて懐かせる事で彼らをゲットしようじゃないか、という企画のようだ。この企画に抜擢されたのが前川みくであった。ティーンエイジ向けの雑誌を見てみくの事を気に入ったディレクター。その彼からぜひ自身の番組で彼女を使いたいとのオファーが346プロに来たらしい。

『ヒメグマを捕まえるというのは…』

『もちろんフリだよ？あとは逃すなり誰かが持ち帰るなりすれば良いじゃない』

『……』

渋い顔をする武内。そんな彼の様子に気がつかずにディレクターは言葉を重ねて行く。驕りか高ぶりか、ともあれ彼は武内とみくの苦い顔に気がつこうともせずになおも持論を語り続けた。

前川みくはポケモンと接するのが苦手である。そう伝えられていた武内はなんとかして彼を説得しようとして試みる。重い口を開いて彼の持論を遮ろうとしてーそしてみくに止められた。

自分が引き受けますと、みくは力強く主張した。驚く武内の隣でみくは作り笑いを浮かべた。彼女はポケモンが怖かった。それでも距離を置いて眺める位ならばできるようになった。軽く手で触れる程度ならば…たぶん、我慢をすればなんとかできるだろうと。

みくは仕事を引き受けた。それはきつと苦しい顔をしている武内にそれ以上苦勞をかけたくなかったのだろう。あるいは先日の留美の言葉を思い出したのだろうか。ともあれみくはこの話に了承した。頷いてしまったのであった。

ロケは順調に行われた。朝方に東京を出発したスタッフ一行。ロケバスにゆられながら彼らは山梨県のとあるキャンプ地に到着をする。巨大な敷地面積を持つ有数の観光地。『郷津辺の森キャンプ場』という場所であった。

山梨県の南東に位置するこのキャンプ場。その最大の特徴は隣接した湖と大きな富士山が一望できる絶好のロケーションであった。なかでもポケモンの出現以降はひこうタイプ、みずやじめんタイプと

いった都会では見られない様々なポケモンが見られると評判なのであった。

観光客で賑わうキャンプ場、そこには確かにヒメグマの群れがいた。この豊かな土地に、ふとした時に現れるようになったアイドルポケモン。数匹程度で様子をみにきては人間たちがお菓子を食べる光景を物欲しそうに観察してくるらしい。

ヒメグマは確かに可愛らしい生物である。しかしその愛らしさ、希少性から国が指定する狩猟規制生物に認定されていた。個人が勝手に狩猟してはならない規定となっており、キャンプ場も利用客に対してそのように指示していた。このキャンプ場においてはヒメグマに10m以上近づくことを禁止しており、スタッフ達も客に対して細かく指導をしているのであった。

ヒメグマを怒らせてはいけない

どうか遠くから見守るだけにして下さいと

危ないから遠くから撮影してほしいと主張するキャンプスタッフ。そんなスタッフに対してディレクターが抗議をした。俺たちはもつと直接的な絵が欲しいのだと主張するディレクター。

当然、キャンプ場のスタッフ達は猛反対をした。お客様にも遠くからそつと見守るだけにして貰っているのだと。絶対にヒメグマに手を出してはならないと忠告をする一同。それでもディレクター達はキャンプ場のオーナーには既に同意を貰ったからとなかば強引に撮影を始めてしまう。

そうして撮影班はヒメグマを餌でおびき寄せキャンプ住民とふれあう場面を撮影しようとして試みてしまった。

餌につられてよってきたヒメグマを捕まえる撮影スタッフ。ジタバタと腕の中でもがくヒメグマ。そんな怯えるヒメグマ達に対して観光客とスタッフ達が嬉しそうにデジタル機器を構えた。SNSにアップでもするのだろうか。彼らはポケモンの恐ろしさをまるで理解してはいなかったのだ。

スマートフォンのはしゃッター音

観光客の黄色い声援

大きくていかつい撮影機材

きつとそれらがきつかけとなったのだろう

初めて目にする物ばかりであったヒメグマは
混乱をしてわんわんと泣き始めたのであった

見慣れぬ機械文明に驚いた一匹のヒメグマが悲鳴をあげた。キャンプ地に響き渡る泣き声。そんな鳴き声に動揺してしまうキャンプ場の人間達。なんとか泣きやませようともがいている間に複数のポケモン達がやってきてしまう。

そうしてヒメグマの親たちが来てしまった。

怒り狂ったリングマの集団である

リングマとはノーマルポケモンである。木登りが得意でその前足で器用にきのみを採取する。なかでも鼻がきき地面にうまつたきのみすらも掘り起こして食べてしまうらしい。そんな彼らはノーマルポケモンの中でも危険外来生物に指定されていた。その縄張り意識と戦闘力はポケモン界でも屈指の生物であるとされている。

そんなリングマ達に動揺をしたのか。キャンプに来ていた観光客が慌ててポケモンに攻撃を命じてしまう。一匹のポケモンが放った10まんボルトがその場にいたリングマ達におそいかかる。その場にいたヒメグマもろとも、電光は彼らを焼き払った。

そうして暴虐は始まった

人間達からの明確な敵対行動

リングマの群れは怒り狂ったのだ

2mという強大な身体をもつ生物。何よりもそのリングマ達は激昂していた。自身の子供がいじめられたと勘違いしたリングマは牙をむきながら威嚇し始めたのだ。そうしてその母グマは喉を最大まで震わせてー

「グウアアアアアアアアアアアア!!!」

人間への復讐を始めた。

みくと。パートナー2

リングマの咆哮が轟き渡る。それはおぞましいほどの恐怖であった。全身がゾワリと総毛立つ。みくは無我夢中で逃げ出した。キャンプ場から離れようと死に物狂いで逃走するみくを追いかける一匹のリングマ。

どうやら事件当時にそばにいた人間に対して復讐をはじめたらしい。確かにその時撮影の為にヒメグマの最も近くにいたのはみくである。けれどもこれはあんまりではないか。

キャンプ場は悲惨な事態になっていた。暴れ出すリングマの集団になすすべもない人間達。リングマのひっかく攻撃をうけて腹からおびたらしい血を流す人間。こわいかおや咆哮によつて絶望しパニックを引き起こす子供達。きりさく攻撃によつてエンジンが破壊され爆発していく車達。

メラメラと火が燃え上がる。きつと車のガソリンに引火したのだろう。キャンプ場の中で巨大な火事が発生した。キャンプ場に常駐していたスタッフたちも自身のポケモンで応戦しようとするが芳しくないようだ。

血だらけで倒れ臥す撮影スタッフ。リングマの暴力的な攻撃によつてボロボロになった車やキャンプ用具。恐怖で悲鳴をあげながらにげまどうキャンプ客。キャンプ場はいまや地獄のような光景となっていた。

「うう…」

生涯最大の恐怖と絶望を味わいながら涙をこぼすみく。そのまま彼女は夢中で足をかけた。スタッフから離れるべきではない。そんな正論は恐怖と混乱を引き起こした人間には無意味である。ましてや彼女に取つては二度目の災害である。かつて自身の目の前で引き起こされたポケモンによる無情な暴力。

かつてのトラウマを思い出したみくは悲鳴をあげながら夢中で駆け出してしまったのだ。そのまま彼女は逃れようともがくうちに、森のふかくの方まできて逃げてしまったのだ。

そこは深い森林であった。人間が普段立ち入らないような木々が生い茂る場所であった。太いカシの幹に手をつきながらみくは過呼吸を抑えようと努力する。キャンプ場から離れたこの場所では最早助けを呼ぶこともできない。

撮影のためにと貴重品をバッグの中に置いてきてしまったみく。当然スマートフォンといった連絡手段もキャンプ場に置いてきてしまった。彼女は着の身着のままの状態で夢中で逃げてきたのだ。そんな彼女に対して一匹のリングマは岩をなげつけてきた。

みくの体を狙ったその一撃。その恐ろしいまでの速度と威力にぞっと顔を青ざめる。もしも岩に当たってしまったては体がぐちゃぐちゃになってしまいうだろう。その恐ろしい前足で器用に岩や木を引き抜くりングマ。そのまま手にした凶器をこれでもかと彼女の方へと投げつけてくる。

みくの足に巨大な木片がぶつかかった。勢いそのままに地面へと転がってしまうみく。そうしてリングマは静かに彼女に近寄った。彼女を追い詰めるようにのしのしと歩みを進めてくる。それはまるで死神の鎌のような恐怖であった。

「ああ……あ」

みくは尻餅をついたままリングマをそつと見上げた。恐ろしいほどの怒りと殺意にみちた表情。みくは呆然とそのポケモンを見つめるのであった。

人は本当に恐怖すると思いをやめてしまうものらしい。彼女はただ呆然とそれを見つめた。血管をブチ切らんばかりに怒髪するリングマはそのまま彼女に近寄った。きつとスタッフの内臓を引き裂いた時についたのだろう。そのリングマの前足からはぼたぼたと鮮血が垂れていた。

死

考えた事すらなかったそれを実感するみく。生涯味わったことのない恐怖。いいや違う、生涯で二度目の恐怖であった。みつともなく涙をながす少女。みくは思わずぎゅつと硬く瞳をつぶった。

助けてと、小さくつぶやいた。そんな彼女の声に見向きもしないリ

ングマ。そうしてリングマはその片腕を突き刺そうと振り上げる。
そんな彼女達の間にもー

「ピィィィィィ!!!」

キャタピーが

飛び出してきた

みくと。パートナー3

それはあまりに無謀な光景であった。

最恐のノーマルタイプに挑む

最弱のむしタイプ

敵うはずなどなかった。倒せる可能性など欠片も、在り得るはずがなかった。強者には敵わない。弱者は怯えるしかない。そんなこと人間もポケモンも、誰だつて生まれながらに知っていることだ。

だが

それでも

そのキヤタピーは立ちふさがった。緑色の小さな幼虫はたった一人の少女の前に立ち上がったのだ。それが住処を荒された怒りか、それとも少女を救うための愛念に満ちた行動か。その理由まではわからない。確かなことは、その小さな体を精一杯に震わせる彼は勇氣に満ちた一匹のオスだという事だけだろう。

呆然とするみく。そんな少女をよそにそのキヤタピーはリングマに向かって攻撃を始めた。自身の身体を大きく伸ばしながら、大樹の上で精一杯に威嚇を開始するキヤタピー。

「ピイイイ!!ピイイー!!」

「……」

「ピーー!!」

キヤタピーは頭をゆらし、口から勢いよく何かを吐いた。糸をはく攻撃、である。その白い幼虫糸をリングマの足に絡みつかせていく。リングマの足にぶあつい絹のような糸が絡まっていった。

音を立てながら巻きついて行くその糸。キヤタピーの撚糸の煩わしさにリングマは思わず苦い顔をする。リングマはグルルと喉をならすと勢いよくその糸を破り裂いた。

その機を逃すキヤタピーではない。そのまま彼は□たいあたり□を敢行した。笑ってしまうような体格差、それでも彼は必死にその身体をぶつけてリングマに対抗しようともがいた。彼の必死の抵抗をみつめるみく。彼女は心臓が止まりそうになる程驚いていた。

キヤタピーに向かって、駆け抜けた

地面に転がったキヤタピーのもとへ滑り込む。そのままみくは彼を抱きかかえる。無我夢中で彼の身体を強く抱きしめる。そのまま彼女は亀のように丸まって防御姿勢をとった。

無謀な行動。それでもみくは彼を見捨てる事などできなかつた。体が自然と動いてしまっていた。そうしてみくは涙をぼろぼろとこぼしながらキヤタピーを抱きしめた。そんな彼女の背中にリングマは三度目のアームハンマーを振り下ろそうとし――

「ドゥブル！フラッシュ!!」

一人のアイドルの声があった。そうしてまばゆいばかりの閃光が一面に広がる。リングマの真正面で展開されるフラッシュ。たまらずリングマは視力を奪われてしまう。尻餅をついたリングマはそのままクラクラと意識をふらつかせた。

ほんのわずかに生じた隙、高森藍子はみくのもとへと駆け寄った。彼女はみくの安否を確認するとそのままドゥブルの背に彼女達をのせた。藍子の指示に対して力強く頷くドゥブル。ドゥブルは自身のスケッチブックをめくり新たな技を繰り出そうとした。

そうしてフラッシュの影響で視力を奪われたリングマに対してドゥブルが更なる追撃をかける。リングマの周囲に対してあまいかおりを放ち嗅覚すらも抜け目なく奪ったのだ。そのままドゥブルと藍子はみく達を抱きかかえるとスタコラと逃げて行った。鮮やかな逃走であった。

「危なかった…し、死んじゃうかと思った…」

キャンプ場の元へとたどり着く藍子一行。彼女はそのままスマートフォンでスタッフとプロデューサー、地元の救急車に連絡を取り終えると息をついた。そのまま彼女は自身の肩を抱きながら静かに震えた。

これは明白な災害であった。もしかしなくても死人がでたかもし

れない。彼女はそのことの重さに、友人が死にかけた事実には恐怖した。偶々近くで別の口ケを撮影していた幸運に、みくの様子を見に来ようと来た己の直感に心から感謝する藍子。

そうして彼女は地面に横たわった友人に対して声をかける。みくは全身蒼白の状態で瞳を閉じていた。ふとももの出血が激しい。藍子は自身のハンカチを傷口に押し当てながら必死に語りかけた。

「みくちゃん！大丈夫!? しっかりして!」

「…み…あ…」

「み、みくちゃん!」

そのままふらりと倒れこむみく。彼女はそのまま静かに気を失った。血だらけで泥だらけの身体をした彼女に対して必死に呼びかける藍子。そんな彼女達の元へ救急隊の人間が駆け寄った。どうやら通報が間に合ったらしい。

その後担架に運ばれたみく。そのまま彼女は救急車へと運ばれて行った。その胸にキヤタピーをしっかりと抱きかかえたまま。

【ギフテッドとポケモン】

双葉杏はギフテッドである

少なくとも周囲の人間はそう感じていた

ギフテッドとは先天的に高度な知的能力を持つ人間の事である。英才児、秀才児とも混同されるがこれは誤った認識である。彼ら、彼女らは一般人とは根本的に異なった存在なのだから。

勉強においては一を知り方を理解する

運動においては常識外の身体能力を誇り

芸術においては至高なる傑作を生み出す

まさに、ギフテッド(祝福)される人間なのだ。他人とは思考も、成長も能力も全てが異なっている。彼らは生まれながらに神に愛されし存在なのである。そんな一人のギフテッドはここ、北海道において空を見上げていた。

それは幼い少女であった。身長は140cm未満、体重は30kgとかなり幼い印象を与える。15歳という年齢にはあまりにふさわしくない身長と体重。自身の髪をツインテールにまとめた彼女はダボダボのTシャツを身につけていた。「働いたら負け」と書かれたTシャツを身につけた彼女は自宅のベランダから北海道の空を見上げた。そうして深々とため息をはいた。

「働きたくないなあ…」

一人の少女が呟いた。そうして彼女、双葉杏は再び空を見上げる。彼女は現在15歳、高校に入学したばかりであった。華も恥じらう乙女な彼女。しかし残念なことに彼女は生粋のインドア派少女であった。

怠惰にかけては右に出るものはいないとまで親族に言われる程のなまけぶり。なにせこの大自然王国、北海道においても彼女はアウトドアな物事に一切興味を示さなかったのだ。なにせ彼女の休日の過ごし方といったら自堕落だなんてものではなかった。

朝はぐうたらと寝過ごし

昼以降はネットと昼寝に費やし

夜はネットとオンラインゲームに勤しみ

そうして朝までネットにかじりつくという生活。そのあまりにも怠惰な生活ぶりに実家の親族は皆呆れ返っていた。では学業の成績はどうかというと……これが驚くほどに良好なのである。

国語 85点

数学 95点

英語 87点

世界史 62点

先月のテストなど何一つ不足のない、まっとうな点数であった。唯一世界史の点数が低いのは担当の教師の不備の為、平均点が58点とかなり下がったから。しかしそれですら彼女は平均点を取り続けた。

小学生の頃からずっとそうであった。たとえテストの難易度がどれだけ難しかろうが、易しかろうが平均点以上を常に獲得し続ける杏。故に周囲の人間は怒るに怒れなかったのだ。たとえ授業に遅刻しようが居眠りをしようが彼女は必ず良好な成績を取るのだから。

「……」

そんな彼女は現在パソコンを操作していた。カタカタとキーボードを叩いてはマウスを操作する。その海外製のデスクトップ型パソコン、黒いボディに高画質な液晶ガラスが備わったそれには杏のお気に入りのゲームがたんまりと詰め込められている。

「……」

無機質な瞳のまま

淡々とパソコンをいじる杏

調べているのはポケモンのことであった。数年前から出現するようになってきた種族。火を吹き出し水を生み出し電気を操る種族である。この信じがたい生物について杏はいち早く目をつけて観察していたのであった。

当時は地球最後の日だの人類滅亡だのと騒がれていた。が、今ではこうしてすっかり順応して居る人類なのであった。

「……」

そんな彼女は現在一途にパソコンを操作していた。無言のまま

ウェブサイトにアクセスしては情報を検索し、それを自身の脳内へと収めていく。

彼女はこのポケモンという存在に一目散に目をつけていた。なにせポケモン黎明期の頃からネットにかじりついてその一部始終を目撃してきたのだ。他人よりもポケモンに関する情報には詳しいという自負がある。

キヤタピー

コラツタ

世界で最初に発見されたポケモンはこの二種である。前者に関しては中国の森林で発見された巨大な未知の昆虫。後者はアマゾンで発見された珍しいネズミの一種と解釈された。

つまり：ただの生物の一種と見なされたのだ。彼らが進化して未知の生物へと変化した等という現地民の言葉など都市伝説だと嗤われたものである。

最初こそよくできたガセネタだといって鼻で笑っていた。相手にすらしなかったがその情報が実態を帯びてくると杏の目の色が変わった。そこからは驚くほど熱心に情報を収集し始めた。

—————

双葉杏はギフトッドである

が、少なくとも本人はそう認識してはいなかった。

確かに自分は他人よりも数学が得意であった。が、それだけである。比類した身体能力も芸術性も持ってはいなかった。天才児だと呼ばれようが彼女はそんなことはないと言って否定した。

皮肉なことである、彼女の異常性に

本人自身が気がついていないのだから

本人は気がついていない。彼女が無意識的に異能を使用している事について。遅刻をしようが居眠りをしようが、必ず平均点を取り続ける事の異常さを。

教師が黒板にかくチョークの筆圧の微差

授業の際に放つ口調の抑揚の変化

テスト時における生徒の筆音のリズム

それらの情報だけでテストの出題範囲を、ひいてはテストの平均点を把握している人間など彼女だけだということ。これは彼女が小学生の頃から無意識に磨き続けた技術であった。

鬼才者は世の中生きづらい

というか都会にいけとか言われる

幼いころよりそれを理解していた彼女。彼女がその気になれば義務教育のテストなど満点を叩き出せただろう。けれどそれではないのである。

そうなれば偏差値の高い学校へいけと言われるに違いない。それでは通学時間が多くなってしまふ。そうなってしまえばゲームやネットができないではないか！

実に彼女らしい三段論法である。飴と怠惰をこよなく愛する双葉杏。故に彼女は普通で在ることを選んだ。周囲を分析し平均点を取り続ける道を選んだのだ。

全ては未来のぐうたらライフ

略して「ぐうたらライフ」の為に！

彼女はギフトテッドである

『分析能力』と『演算能力』にたけた人間である

『スカイツリーのてっぺんからリンゴを落とすと落下直前の速度はいくらになりますか？（スカイツリーは634 m。重力加速度は9，8とする）』

という問題に3秒で暗算して答える高校生などそうはいないだろう。ダンスの振り付けを動画で見ただけで完璧に覚える高校生もそうはいない。ましてや周囲の人間の仕草やら息遣いから分析し、相手が何を求めているのかを手取るように理解できる事もまた。場の空気を読む能力にかけて彼女は尋常でないほど長けていた。

それらはまぎれもなく特異能力なのだから。ちなみにこれらの能力は後にアイドルになってから大いに発揮されることを彼女はまだ知らない。

閑話休題

何が言いたいかというと彼女は比類無き能力をもったギフトエツドであり、そしてなによりもニート志望という事である。つまり…ポケモンを利用して楽して金儲けできるんじゃないやね?という事である。

ポケモンによつて必ず社会が変わる

それに伴い収入構造も必ず変化する

最初期のポケモンの出現から2週間。世間がポケモンの存在を都市伝説やら珍しい外来生物程度にしか考えていなかった時に、すでに杏はそこまで結論づけていた。その無駄に優れた分析能力を余す所なく用いてポケモンに対して理解を深め続けた。

杏の望みはただ一つ

ポケモンを利用して楽をしたいという事である

ポケモンを利用してお金を稼ぐ。あるいは電気やら水やらを生み出してもらって田舎で隠居生活もよいかかもしれない。夢のぐうたらライフへの想像は広がるばかりである。

まだ見ぬ隠居生活について想像しては

にへへと笑みを浮かべる美少女みたいな美少女がそこにはいた

池袋晶葉と電気タイプ同好会

「でんきタイプ同好会…?」

「ああそうだとも」

珈琲をすすする。本場ブラジル産地の上質な豆を焙煎した一級品。その上品な口当たりには思考を傾けることなく二宮飛鳥は訝しげな声をだした。そんな彼女に対して池袋晶葉はカップを傾けながら気軽に返答をした。

晶葉の為に増設されたこの研究室兼待機室に二人のアイドルは茶卓を囲んでいた。晶葉はふところから白いファイルを取り出し、中から一枚の書類を差し出す。

どうやら同好会の規約書らしい。つらつらと書かれた幾つかの項目。その表紙の一番上、タイトルには「電気タイプ同好会」と書かれている。随分と本格的なものらしい。思わず飛鳥はその出来栄えに見入ってしまう。

「まあ同好会といっても素人のお遊びさ。電気タイプ同士気軽に集まってバトルなり会話なりをしましょうというだけだ」

「それはつまり…」

「我々電気タイプのポケモンを持つ人間同士、交友を深めようではないかという話だ」

「ふむ…つまりボクのルクシオと」

「私のコイルのことだな」

ふと部屋の隅に視線を向ける飛鳥。そこには自身の家族で在るクロイツ…大型犬のような立派な体躯をしたルクシオがいた。彼は嬉しそうにとりよりのポケモン、コイルと戯れている。

コイル

電気・鋼タイプである磁石ポケモン。それは随分と異様な生物であった。鋼色をした一つの大きな球体、その中央には目玉のような物がポツンとあった。その隣からは二つのU型磁石、そうして頭部からは一つのネジが生えていた。

生物…というよりは無機物である。まるで生き物らしさを感じな

いそのデザインは初めて目にするものにとつては驚愕であろう。まるで宇宙からやってきた生物のような：ゲームに出てくるヘンテナ敵のような外見をしていた。

「飛鳥も知つての通り。今の社会において電気タイプは最も重用されているタイプのポケモンだ」

「日常で使う電力のことかい？」

「その通り。世界では電気タイプによるポケカ発電がメジャーになりつつある」

クツキーに手をだす晶葉。その甘い砂糖菓子の香りと味に舌鼓を打つ彼女。テーブルの上に手を伸ばし彼女は再び珈琲に視線を向けた。

ポケカ発電とは読んで字のごとくである。つまり電気ポケモンによる発電方式のことである。従来の日本においては化石燃料を燃やした火力発電が主流であった。が、現在では違う。

発電所において飼育している電気ポケモンによる放電。その電気エネルギーを利用して直接燃料供給を行うという画期的な方式である。現在では北海道・関東・奈良・北九州の四つで行われており日々我々の電力を担っているのである。

ちなみに電気ポケモンは従業員扱いとしている。彼らにはきちんと休日や給料の現物支給が為されており、決して不当労働をさせている訳ではない。ポケモンからストライキされないように配慮し、また従来の火力発電や自然エネルギーを利用した発電方法も並行して行われている。つまりエネルギー供給を完全に依存するのではなく様々な道を模索しているというわけである。

近年、とある国では巨大な水槽を建造しそこにシビシラスを投入する方法が確立した。シビシラスとは幼体の電気ポケモンである。増えやすく、飼育しやすい。また個体だけでは弱い、何十匹何百匹と連なった時には雷にも匹敵するほどの電力を発するとの点からよりクリーンで扱いやすい発電方式として注目されているらしい。とまあこのように電気ポケモンの需要は大きい。

が、故に

だからこそ

「電気タイプのライセンス試験は難しい。そこが一般家庭に広がりづらい理由だな」

「……」

苦い顔をする飛鳥。彼女自身ライセンスが取れていない身としては耳が痛い話だからである。彼女は自身の感情を隠すために再びコーヒークップを傾けた。どうやら随分と冷めてしまったようだ。

VII R I

電気回路における電流と電圧の関係を表したオームの法則などは中学生の理科学で扱う分野である。だがそれ以外に専門的な知識や複雑な公式やらが山のように出てくるのである。それに加えてポケモンに関する知識も加わってくる。

電力計算

電圧計算

電流損失

電圧降下

許容電流計算

これらの計算式が必要になる。またポケモンの第一進化と第二進化時における総蓄電量の差異に着目した計算やら状態異常時における安全な放電方法など。覚えなければならぬことは多々あるのである。

Q 『技十万ボルトにおける正式な放電量と電圧について答えろ』

Q 『帯電特性を持つポケモンを以下の中から選べ』

Q 『高圧地中電線路を管路式で施設した場合における注意点について以下の中から正しくないものはどれか選べ』

このような問題が出題されるのだ。ポケモンと同時に電気に関する複雑な知識が必要になるのである。このように難しいのは電気タイプの日常における影響力があまりに大きいからだとか、電気タイプが多いと家電の利用に影響がでるからだとか様々である。あるいは電気会社の陰謀だなんて噂まである位だ。

ともあれこのようにB級においてぶつちぎりで難しいのが電気ラ

イセンスである。他にも家電やテレビに影響が出る事を恐れたり、感電する事自体を恐れたりといった人間も多い。故に電気タイプはその人気に反して実際に飼育しているトレーナーの数は少ないとされているのである。

「まあ事情はわかったよ。つまり少ないトレーナー同士親交を深めた
いというわけだろう」

「まあそんなところだ」

「理屈はわかったよ、ボクも賛成だ。…ところで
「うん？」

「だ、大丈夫なのかい？」

「何がだ」

「いやさつきから、コイルにボディーブローされているんだが…」

「ああ慣れているから大丈夫だ」

「いやな慣れ方だなあ…」

「まあ愛情表現みたいなものだ」

「絶対におかしいと思う」

晶葉のお腹をグリグリと刺激するコイル。コイルは執拗に晶葉の内臓めがけてボディーブローを与えていた。U型磁石の先端を押し付けるという痛々しい行動に対して飛鳥は顔を歪めた。

「卵から孵した大切な相棒…だからな」

「相棒が執拗に君のお腹をえぐってきているんだが」

「まあコイルはちよつと変わり者だからな」

「見ればわかるよ」

「育て方間違えたかな…一応電気椅子でご飯をあげているんだが。それともカーバツテリーを最大電力で目玉にぶつこんだのがまずかったのかな？」

「動物と飼い主は似るって本当なんだね。発想が奇抜すぎるよ」

「そう褒めるなよ」

「褒めてないよ」

「ところでルクシオには何の餌をあげているのか教えてくれないか。ハイオクか？アルカリ電池か？」

「その二択はおかしくないかい？」

「最近は関東電力産の電気を頭のネジから直接摂取するのがマイブームらしくてな」

「もう突っ込まないぞ」

「突っ込むのはコンセントだけだからなあっはっは!!」

「…」

晶葉は笑っていた。椅子にこしかけたまま彼女は言う。きつと徹夜の開発か、それとも3時間前に行なった雑誌のインタビューか。あるいはその両方が彼女へ謎のハイテンション現象を引き起こしたのだろう。

あははと死んだ魚のような目をしながら彼女は狂ったように笑っていた。光沢を失った瞳。俗に言うヤンデレ目のまま彼女は飛鳥に對して笑いかけた。

「コンセントに突っ込んで勝手にご飯を食べるから電気代がやばいとか」

「……」

「家電製品やロボットに嫉妬を抱いて私が寝ている間にめちやくちやに壊してしまうとかそんなことはないぞ。不満なんて欠片もないからな」

「……」

「何度も捨てようとしたけどいつの間にか戻ってきてしまうからとつくの昔に諦めたとかも思っていない…思っていないぞ…」

「呪いの装備かな？」

「はあ…まあ正直今はもう慣れたよ。あれから他の研究にも色々役に立ってくれたしな」

疲れたような瞳をする秋葉。どうやら色々あったが今では納得して暮らしているらしい。コイルを飼育するという苦勞をよく理解できないうい飛鳥。だがまあ触らぬ神にんとやらとも言う。彼女は気づかぬふりをした。

ふと時計に視線を移す。秋葉のぐへえっという声をよそに部屋の隅に設けられた壁掛け時計を飛鳥は見上げた。いつのまにか長針は随分と遠い位置を示していた。どうやら長居しすぎていたようだ。

いつのまにかすやすやと寝息を立てている自身の家族の姿を確認した飛鳥。彼女はコーヒーをぐいと飲み干し帰り支度を始めた。かちやりとカップを元の位置に戻しながら彼女はそういえばと晶葉に問いかけた。

「今もボディーブローされてるけど良いのかい？」

「ボディーブローに関しては卵の時からされてたからな」

「そういう嘘は良いから……ところで晶葉、さつき貰った文書なんだが」「なんだ？」

「この……端に小さく書かれた規約文はなんだい？」

「うぐっ……」

「今時そんなこと言う奴まだいたのか……」

飛鳥はため息をつく。そうして先ほど手渡された同好会における同意書、その一文に目を落とした。そこには『会員同士は可能な限り協力しあうことを規約とする』と書かれていた。

年齢が近いとはいえ接点もあまりなかった飛鳥と晶葉。どうにも違和感のような物を感じていたがその正体はどうにもこれらしい。飛鳥は再び大きなため息をついた。

「それでこれはどういう意味なんだい？」

「別に普通の規約文だろ？……どうかしたのか？」

「視線をそらしながら言わないでくれ」

「べ、別にルクシオを研究したいとか自分のロボット研究に貢献したいとか思っていないんだからな……」

「……」

「研究する間にコイルを預かって貰うと嬉しいとかそんな事は微塵も考えてないんだからな……っ！」

「帰るよクロイツ。今日の晩御飯はロールキャベツだ」

「待ってくれ飛鳥！いや待っててください飛鳥様！」

「急に敬語になるなよ。不安になるじゃないか」

「なにも変なことはしない！コイルに誓っても良い！」

「だから不安なんだよ」

飛鳥の腰にしがみついた晶葉。逃がさないと言わんばかりに晶葉は彼女の腰を強靱にホルドロックする。そんな晶葉の態度に飛鳥は苦い顔をする。どうにも晶葉らしくもない行為である。それはきつと徹夜の研究が原因であろう。

「コイルは磁石ポケモンなんだぞ！ロボやら精密機械に影響が出たら困るだろ!!」

「ついに出たな本音が」

「同世代の友人には電気資格を持っている人間がいないんだ！いざという時に電気ライセンスもってる人間でないと融通がきかない場面もあるから…」

「はあ…悪いけどボクもライセンスはまだ未所持だよ」

「なっ…!?!」

腰から崩れ落ちる晶葉。ここにきてようやく彼女たちは自分たちのすれ違いに気がつき始める。まさかライセンスを持っていなかったとは。晶葉はショックを受けたような顔をして固まってしまう。それは知的な彼女には珍しい唖然とした顔であったという。

「悪いけど君の力には…」

「じゃ、じゃあ試験勉強の面倒を見てやろう！私が直々に教えてやる」
「…」

「みっちりコツを教える！必ず合格させてやるから！」

飛鳥は思考する。随分とおかしな話になってしまったが悪い話ではなさそうだ。そうして彼女は自身の股間に顔を埋めて懇願して同世代にむけて大きなため息をついた。

指導を乞う立場である以上大きな態度もとれないだろう。こうして飛鳥と晶葉は奇妙な縁を結ぶのであった。電気ポケモンが結んだ儂くも美しい友情である。

結局この日以降、晶葉の指導のもと熱心な勉強会が行われるようになった。それはもう熱心に丁寧に行われる指導であったらしい。あるいはこのまま行けば、飛鳥がライセンス試験を取得できる日は近い

の
か
も
し
れ
な
い
。

エピソードグ 前川みく

「科学の力ってすげーにや…」

「医学の力なんじゃないかな…たぶん…」

346プロダクション、寮の自室の前でつぶやく前川みく。そんな彼女の隣で高森藍子が苦笑をした。藍子は大きなボストンバッグを抱えていた。

あの事件（事故？）から二日がたった。警察の事情聴取やら救急治療やらであたふたとしていたものだが、こうして終わってみると随分とあつという間の出来事だった。無事に完治した前川みくはほっと溜息をついた。

傷ひとつない自身の身体を見下ろすみく。藍子もつてきてくれた替えの衣服に身を包んだ彼女は数日ぶりに寮の自室へと帰宅したのだ。無事に帰ってこれ良かったと、改めて彼女は安堵するのであった。

何よりも大きかったのは医学の発展であろう。近年では「ポケモンによる治療」「きのみによる医学的効能」の二点から医学業界では大きな発展を遂げていた。

いやしのはどう

自身の体力の量に応じて対象を癒す、回復技である。このわざはピッピ、プリンといったポケモン、ヤドンやサーナイト、チリーンといった一部のエスパークタイプだけが扱える特別な技である。だが回復させる医療系ポケモンとしてなによりも有名なのはこの二種であろう。

ラッキー

タブンネ

ポケモンの出現騒動以降、医療機関においてその恩恵を最も与えたのはこの二種であると言われている。いやしのはどう、いやしのすず、アロマセラピー、いやしのこころといった様々な技を駆使する彼ら、彼女らは数多の場面において重宝された。

重症で運ばれた患者に対して癒しの波動をかける事で危篤状態か

ら救い、改善を促す。内臓や精神に不安を抱える患者に対しては「うたう」や「いやしのすず」を利用する事で穏やかな気分させ患者の精神を安定させる。

現在の日本において患者の死亡率は劇的に改善された。前川みく達もまた運ばれたと同時に最大の治療を受けたのだ。結果、こうして元気に過ごす事ができているのであった。

本来ラツキーやタブンネは個体数が少なく、逃げ足が早いことから別世界においても希少な生物であるとされている。それが今では地方の大規模病院には必ずと言っていいほど飼育されるようになったのは様々な要因がある。とある人間が全力で広めたからであるのだが、それはまた別のお話である。

ちなみに耳の触覚で患者の体調、心音、精神状況や抱えている不安まで見抜いてしまうタブンネはそのルックスも相まって爆発的に人氣が高まったらしい。

自身を献身的に看病してくれたタブンネを思い出す前川みく。

ちよちよこと看護師の後をおうラツキー。患者を勇気付け、子供達を笑顔にさせていたタブンネの後背を思い出す。みくはすっかりと完治して傷跡ひとつない自身の体を見下ろした。

自分を傷つけたのはポケモン

自分を癒したのもポケモン

そうして今自分が抱えているのも……

「みくちゃんもキャタピーも元気になってよかったね」

「うん…色々ありがとにや藍子ちゃん」

藍子に対して感謝の言葉を述べるみく。あれから念のためにと二日間だけ入院したみく。その世話を献身的に行ってくれたのはこの高森藍子だったのだ。困った時はお互い様だよ、そう告げて彼女のそばにいてくれた藍子。みくは彼女に心から感謝した。

「藍子チャン…本当にありがとにや…」

「もう、お友達同士で言いっこはなしだよ。それに助けてくれたのはドールだからね」

「うん…ドールにもお礼を言っておいてほしいにや」

ロケバスの中においてきたバッグから匂いを辿ってきたというドーブルの功績に感謝するみく。もしもドーブルがいなかったら自分はこのにいなかったかもしれない。そう考えてみくはぞわりと背筋を震わせた。

スケッチブックを持った犬だかタヌキだかよく分からないポケモンに対して心中で手を合わせて拝むみく。そんな彼女に対して藍子は心配げな顔をしながら問いかけた。

「でも本当に良いの？キヤタピーは今日か明日くらいにはボールから出てくるらしいけど…」

「う、うん…」

「みくちゃんはポケモンを飼育した事がないんだよね？私がお世話して野生に返しても良いんですけど…」

「大丈夫、みくがお世話してあげるにや」

瀕死状態から脱却したキヤタピー。だがまだ完治したとはいえない状態らしい。ポケモンドクターの言葉では完全に完治するまでは1週間程度かかるらしい。それだけあのリングマとは力量差があったという事だろう。ポケモンは丈夫である。滅多な事では死亡しない彼らにも例外はある。

あまりにも力量差がある時

きちんと回復しないまま何度も瀕死状態になった時

この二つの時に、ポケモンの肉体は耐えきれずに死亡してしまうらしい。特に歴然とした力量差がある状態でのバトルは非常に危険であるとされている。かの別世界においてもトーナメントやリーグ戦といった公式試合にはかならずレフェリーがつくものだ。あれはポケモンの限界を見極めて決して死なないようにプロが監修し判別している意味合いがあるようだ。

ともあれ、あのキャンプ場の周辺に住んでいたキヤタピーである。彼の住処はリングマによってボロボロに荒らされ彼自身も傷ついてしまった以上、少なくともキャンプ場周辺が再び整備されるまでは人間が面倒を見た方がよいと医者が語ったのだ。

キヤタピーは完治するまでは

別の住処を見つかるまではみくが世話をする

それがみくの出した決心であった。ふとキャタピーが収められたボールを見下ろす。緊急時の措置として入れられたボールの中にはきつと彼がすやすやと眠っている事だろう。

藍子はふうと息をはいた。重い荷物であるボストンバッグを部屋の片隅に置きながら藍子はみくの方を振り向いた。

「ちやんときのみは食べなきやダメだよ。1日3回だからね」

「分かっているにや。キャタピーのぶんでしょ？」

「違うよ、みくちゃんもだよ。オレンの実は人間にも効果があるからね」

ボストンバッグから荷物を取り出しながら藍子は言う。入院時に使用していた衣服、雑貨。「むしタイプ用」と書かれた飼育本、真空パックに包まれたいくつかのきのみを取り出しながら彼女は言った。

きのみは人間にも効果がある。オレン、クラブ、モモンの実といったきのみ類はいまでは多くの場所で愛用されていた。特に回復に特化したオレンのみ、オボンのみの効能は凄まじく、傷ついた人間の持病や術後の回復に絶大な効果をあげるらしい。

具体的にはナイフで肉を引き裂かれても、オボンのみを正しく処方すれば傷跡すら残さず完治することも可能らしい。今だに大学医が日夜研究を続けているらしいが…ともあれ一般人にも広く、活用されている事は確かである。

きのみや薬についてきちんと飲みなさいねと何度も行った彼女。そうして彼女は次の仕事へと向かうためにみくの部屋をでた。

そんな藍子の言葉に苦笑しながらうなづくみく。そんな彼女達のそばでなにかが開く音がした。カチリと何かが開閉する動作音。そうしてカバンの中からひとつのボールが飛び出してきた。

カチャツ

プシュー

「んやん」

思わず小さな悲鳴をあげてしまう。みくは振り向いた。

身体の小さなキヤタピー。どうやら重症だった部分はすでに治つたらしい。少しおぼつかない足取りではあるが、彼は元気になっているようだ。

夏の照日に映えるような若葉色の彼は興味深げにみくの部屋を見回した。キヨロキヨロと周囲を伺う彼にとつて人間の部屋というものは初めてなのだろう。

そうして彼はみくを見つけた。そのクリクリとした瞳で彼女を見上げる視線の無垢な事。彼はその触覚をびよこびよこ動かしながらみくのそばにトコトコと近寄った。みくはおずおずと彼に挨拶を投げかける。

「こ、こんにちは…です」
「？」

「怪我は大丈夫？じゃなくって！ええーと、うーんと…うにゃああ!!」
ガシガシと頭をかき出す少女。ここまで考えていたことだなんて吹き飛んでしまった。そんな少女の様子にキヤタピーは困ったような顔をしていた。頭に疑問符を浮かべながら彼はそつとみくの事を見つめる。こほんと咳払いをするみく。そうして彼女ははつきりと彼に告げた。

「助けてくれてありがとう、君のおかげで助かりました」
「……」

「良ければみくとお友達になってくれませんか？」

「ピーー」

みくの言葉に

キヤタピーは笑顔で頷いた

みくはそつと息をつく。そうして彼女は右腕をそつと彼に差し出した。おずおずと差し出されたその右腕にキヤタピーは戸惑う。ふよふよと尻尾と身体をくゆらせる彼。

そうしてキヤタピーは納得をした。彼は自身の尻尾をそつと彼女の手に重ねる。キヤタピーの柔らかい尻尾の先端が少女のそれに重なった。どうしてだろうか、彼のそれは意外にもほんのりと暖かい。

そつとそれを撫でてみると…彼はくすぐったそうに尻尾を揺らし始めた。

一人のアイドルと

一匹のポケモンは

しつぽと右手で固い握手を交わしたのであった。ほんのりとした温かみを感じるみる。この日みくに、初めてのポケモンの友人ができた。

第7章

櫻井桃華

櫻井桃華は神戸出身の富豪である。俗にいうお金持ちであった。大きな屋敷、広い庭、だなんていかにも陳腐な表現であるが事実その通りであった。そんな豪勢な屋敷に住まう彼女はふんわりと飾られた最高級のベッドへと飛び込んだ。彼女の小さな体がベッドへと収まるスイス製のアンティークベッドのスプリングからやんわりときしむ音がした。

「……はぁ」

どうやらピアノの稽古がよほど堪えたようだ。ベッドに沈み込みながら教師である女性の厳しい言葉を思い返す桃華。そうして彼女はじたばたと足をもがきながら枕へと顔をうずめた。

彼女は実に多くの習い事をしていった。座学やピアノ、ヴァイオリンといった音楽のみならず茶道や生け花といった教養まで幅広く習っていたのであった。無論、これらは財閥の娘として恥じぬようにと両親から強制された習い事であった。

「疲れましたわ……」

ため息をこぼす桃華。そんな彼女のそばでござござと音がした。どうやら同居人が様子を見にきたらしい。そのノーマルタイプはトテトと歩きながらそつと彼女の様子を伺った。

胴長な身体

茶色い毛並み

ぴよこんとたつた二つの耳

そうしてその生物は大丈夫？とでも言いたげにそつと彼女のそばに近寄った。そうして自身の頭をござござと彼女の顔面へと押し付けた。

そのふわふわな毛並みに桃華の体がすっぽりと覆われる。独特のこそばゆい感覚に思わず苦笑してしまう桃華。そうして彼女は無意識のままそつとそのオオタチの体を抱きしめた。

自身が精一杯腕を伸ばしてもまるで届かないその大きな身体。1. 8 mもの巨大なそのもふもふの身体はまるで巨大なぬいぐるみそのものである。彼女はこのオオタチの体を抱きしめることが好きであった。

父に五年前買ってもらった巨大なテディベアよりもはるかに上質でもふもふとしたこの感触が、なによりも好きであったのだ。

「ありがとう…」

「キユウ」

気にしないで、とばかりにしつぽをふるオオタチ。そんな仕草を眺めながら桃華は笑みを浮かべた。この無垢なる友人はいつだって彼女を元氣付けてくれるのだ。彼女はこの時間がなによりも好きであったのだ。

「……」

そつと抱きしめる

抱きしめたその感触の先から

ふんわりと暖かい陽だまりの香りがした。

そうして一人と一匹はベッドの上に寝転ぶ。ぎゅつとオオタチを抱きしめる桃華。その姿はどこにでもいる普通の少女そのものであった。やすらかに眠る彼女の夢のなかにはきつと退屈な家庭教師の姿などいないのだろうか。

前川みくと役所申請

「次の方どうぞー」

「あつはーい!」

女性役員の呼びかけに応じる前川みく。そうして役所内に設立されたプラスチック製の長椅子から立ち上がると彼女はデスクの元へと歩いていった。

都内にしては随分と広い空間であった。硬いコンクリートで覆われたビルの2Fに設けられたその空間。「携帯獣関連」と書かれた案内板のもとには十数名の職員が忙しそうに仕事を行っていた。

カタカタと険しい目つきでパソコンをいじるメガネの男性を尻目にみくは受付デスクへと近寄った。そんなみくに対して声をかける20代後半の優しい瞳をした女性職員が声をかけた。

「本日はどのようなご用件でしょうか?」

「あの…この子の飼育申請がしたいんですけど…」

そういつて彼女は胸に抱きかかえたキヤタピーを役員へと見せる。彼女の胸元ではスースーと寝息を立てながら静かに眠るキヤタピーがいた。どうやらお昼寝の最中のようだ。

女性役員はにこりと微笑むとみくに一枚の用紙をさし出した。そのA4サイズの容姿の上部には黒文字で「携帯獣飼育申請用紙」とプリントされている。みくはそつと受け取ると文面を確認した。

四角く記された枠内には記入者が書き込むべき欄には太い黒枠があった。予想よりもずつとわかりやすい文面だ、とみくは心中でほつとため息をついた。

「住所と飼育者氏名と…意外と普通なんですね…」

「記入すべき点で注意するところはポケモンの所かな。種族は間違えないでね」

「えーと…キヤタピーと…」

「その子のボールは持っていますか?」

「は、はい!この茶色いボールです」

「ならそのボールの下部にシールを貼ると良いかも。個体識別番号は

飼育者がわかる場所に貼っておいてね」

茶色いボールを差し出したみくに対して職員は優しく答える。そういつて彼女はみくに対してネームプレートと何枚かのシールを差し出した。そのシールには12桁の数字が乗っていた。

19—28—0×7△—3729

みくはシールの表面をそつとながら感触にひたる。なんだか複雑な心境である。自身の眼前ですやすやと眠る彼を番号で表現させられる、というのは彼女にとっては複雑な感情であったのだ。人間を個体番号（マイナンバー）で識別するマイナンバー制度に反対をした人間はきつとこんな気持ちだったのかもしれない。彼女はそつとその数字の重みに震えた。

個体識別番号とは国に申請されたポケモン全てに与えられる番号である。これは12桁から構成されており2桁は申請年数、別の2桁では捕獲場所を表しているらしい。これらはシールとプレートといったものに刻印されておりポケモンの首輪や足周りに身につけたり飼育者がいつでも報告できるように管理しなければいけないのだ。

この番号でポケモンは管理をされる。役所ではこの用紙の提出を市民に義務付けていた。旅行や引っ越しといった際には改めて別の申請が必要になるらしい。事故や災害時に円滑に管理できるためのもの、とされていたが本来の意図は違う。

犯罪の抑止のためである

もしもポケモンが何らかの事故や事件を起こした際はその個体識別番号からすぐに飼育者の住所が特定され重い罰が下されるのだ。ポケモンの罪は飼育者の罪である。一般的な犯罪と同列に扱うわけでもないがその事件事故の程度がよほど悪ければ前科だつてついでにしまうらしい。

つまり個人識別番号と個体識別番号、人間とポケモンの双方を数字によつて管理、把握することで日々の犯罪への抑止を行なっているのである。

随分と歪な部分がある制度だが仕方ない。その罪を重くすること、で気軽にポケモンを扱うことがないようにとセーフティをかけたの

が過去の日本であったのだ。ポケモンはあまりに強力で恐ろしい力をもった存在だ、だからこそ数字によって管理すべきであるとの意見が根強く残っているのであった。

ちなみにこのような理由からあくタイプや炎タイプは依然として人気が少ないノーマルタイプが市民からの人気が高いのであった。強すぎるポケモンは暴走してしまうことを考えると扱いやすいC級を飼育する人間が増えるのはもったもなこともあったからだ。

閑話休題

みくはふと周囲を見渡した。思えば随分と社会も様変わりしたものだ。十年も前など役所には年寄りや数名の社会人くらいしかいなかったときく。それがいまでは電子案内板の前で老人をおんぶしているカイリキー、女老人のひざもとで鼻歌を歌っているコラツタ。幼い子供と手遊びをしているサーナイトなど。じつに多様で不思議な光景があるのだから。そうしていまでは自分がこうして…

そんな光景をながめていたみくに対して、職員は声をかける。それに慌ててみくはふたたび書類を描き始めた。今はともかくこの書類を書き上げることだ。彼女は再び書類に対して視線を落とした。

みくは与えられた用紙に項目を書き込んで行く。その白く艶のある顔でじつと真剣に用紙を覗き込む彼女は眼鏡をかけていた。その生真面目な様子はまるで優等生な委員長のようにであった。そんな彼女に対して職員は注意を呼びかける。

「あとは誓約書を書き込む事と…それと申請用の写真はあるかな？」

「あつはい、履歴書のサイズと同じで良いですよね？」

そういつて自身の写真を差し出したみく。そんな彼女に対して受付台の向こうから女性職員が苦笑で答えた。職員は申し訳なさそうに奥からサンプルの写真をとりだす。

「ポケモンの方の、写真ですよ」

「え？ポ、ポケモンにも写真があるんですか？」

「半年前から制度が変わりまして…ポケモンの全体像も書類に記載することになったの」

「ごめんなさいね、とばかりにあやまる職員。そうして彼女は写真を

用意していないなら奥の撮影機器を使って写真を撮って欲しいとみに頼んだ。職員が指をさした先にはこじんまりとしたフェンスに覆われた小さな空間があった。

「ポケモンの写真かあ…意外だったにや…」

「え？」

「い、いえなんでも！じゃあいつてきます」

思わず語尾が出てしまうみく。これも職業病の一種だろうか。そうして彼女はキヤタピーを抱えたまま写真撮影のために例のスペースへと移動を開始した。慌てて駆け去って行くみくに対して職員は訝しげな表情をしたまま。

ちなみに写真を撮影する段階になってもキヤタピーは起きなかつた。みくの再三の呼びかけにも応じず寝息をたてたまま気持ちよさそうに眠るキヤタピー。結局みくが申請した用紙には丸まったまま瞳を閉じるキヤタピーの写真が使われることになったらしい。

【姫川友紀とサンド】

一匹のサンドが観客席に座っていた。そのちいさな体をちよことんと丸めながら硬いプラスチック製の座椅子に座る彼。野球を観戦しに来た周囲の人間達は行儀よく座る彼のことを興味深げに観察していた。二つ隣にすわる眼鏡をかけたTシャツの青年などカメラを片手にまじまじと観察していた。どうやらサンドを見るのは初めてのようであった。

汐留グラウンド野球スタジアム、ここでは休日にも関わらず実に多くの人間達で賑わっていた。キャッツVSアングラーズ。この試合は数日前から多くのファン達が待ち望んでいた大人気マッチでもあったのだ。ここにいるサンドもまた、自身の主人に連れられてこの野球スタジアムへと観戦しにきたのである。

サンド、じめんタイプのネズミポケモン。その小さな手足にちよこと飛び出た尻尾がトレードマークの愛らしいポケモンである。小さなアルマジロを想像するとわかりやすいかもしれない。小さな、と言っても体長は55cm程度もあるが。

そんな彼はジュースを飲んでいた。飼い主が買い与えたのだろうか。映画館で販売しているような巨大な紙で作られたコップ、その中身を甘い炭酸飲料で満たしたそれをコクコクと美味しそうに飲んでいた。

足をぶらぶらと揺らしながら両手でジュースを抱え込み飲み続ける彼の姿は大変愛らしかった。前方の席に座っていた女子大生が黄色い声をあげながらスマートフォンで彼の写真をとっている。そんな彼のもとへ一人の美女が現れた。20代前半の、黒髪をした実に可愛らしい女性であった。

「やーごめんごめんお待たせー！」

ユニフォームとオレンジ色のキャップをかぶった彼女はにっこりと笑いながらサンドの隣へと腰掛けた。姫川友紀、である。腰にメガホンを付け、首元には赤いストライプの入ったスポーツタオルを身につけている彼女はにっこり微笑みながら大好きな野球観戦の準備

をし始めた。

手に持っていた購入したばかりのビールを大事そうに抱えながら、そわそわとし始める彼女。野球観戦は彼女にとつて最大最高の娯楽であったのだ。それはもう猫におけるまたたび、ニャースにとつての小判、ピカチュウにおけるケチャップのような存在である。つまりは、欠かすことのできない存在であった。

そんな彼女の様子にあきれ気味のサンド。彼はため息をつきながら再びコココクとジュースを飲み始めた。彼女とは長い付き合いである。彼女の野球観戦と飲酒が趣味というおっさんのような嗜好にはもう慣れてしまった。

姫川友紀が嬉しそうにカバンから帽子を取り出す。それは彼女がこの世のなによりも鼻屑にしている野球球団、キャッツの公式会社が販売している「キャッツ応援キャップ!」であった。アルファベットの「C」に二本のツノが生えたような特殊なロゴをしたその子供用キャップ。それを彼女は嬉しそうにとなりに腰掛けているサンドの頭へと被せた。

「今日はねー大好きな佐々木が出るんだ!あとはね、最近だと五十嵐なんかも注目だね!」

「…キューン」

「えへへー楽しみだなー!あつこの帽子はこの間買つてね!それで…」

にへへと嬉しそうに笑いながら今日のキャッツの見所について語り出す友紀に対して無表情をつらぬくサンド。気分は少女に着せ替えをさせられるお人形である。そうしてブスーつとジト目をするサンドの頭にはキャップが、首元には子供用のメガホンが取り付けられた。

帽子やらなんやら、野球観戦グッズで身を固められたサンド。そんな彼の姿に姫川は嬉しそうに話しかけた。自身の家族も野球好きに染まってきて嬉し、と言わんばかりの様子である。じつはその家族はあまり野球観戦が好きでない、とは気が付いていない様子であった。悲しい事実である。

「かわいいよパンちゃん！今日もいっぱい応援しようね」

「…キユー」

「声が小さいぞー！ほら一緒にー！」

フレーフレー

頑張れキャッツ！

フレーフレー

負けるなキャッツ！

自前の応援歌を大声で叫び出す彼女。まだ試合が始まる40分も前である。周囲に座る少年少女たちにくすくすと笑われる彼女。それでも彼女はふふんと嬉しそうにスタジアムに向かって笑みを浮かべた。

彼女はまつすぐな人間であった。好きなことには一直線という彼女の気質をサンドは大いに気に入っていた。まあ飲酒と野球観戦についてはほどほどにして欲しいというのが正直なところであったが。

二日前ベッドの下でへそをだしながらいびきをかいていた彼女のだらしない姿を思い出しながらサンドはふりふりと小さくメガホンをつる。しつぽもまた手の動きにつられてかふりふりと小さく、小気味よくふれていた。

試合が始まる。その日の試合は今シーズン始まって以来の大盛り上がりの試合模様であった。打って打たれて、守って打たれる。そんな大接戦の試合であった。キャッツの選手陣もまた大いに奮闘しその姿にファン達は魅せられていく。まさに熱狂といった様子であった。

始まって30分間、友紀は自身の膝元にサンドを座らせるというおきまりの観戦スタイルを守っていた。が、いつの間にか熱狂してしまっていたらしい。時には大声をだし、時には応援バルーンを飛ばす彼女。

メガホンを振り回し怒声をとばすおっさん、スポーツタオルを精一杯振り回す少年に混じって誰よりも大きな声を出す彼女。いつのまにか自身の膝に座らせていたサンドを跳ね飛ばしてぴよんぴよんと

飛び跳ねながら歓声をあげていた。

「うおおおおお!!いいよおおお!!!打てええー田口!!!」

「…キュー」

黒髪が特徴的な美人である姫川友紀。黙っていないなくても美人であるがもう少しおしとやかになればもつと男にモテるだろうに、と思っ
てしまうサンド。彼は彼女が置いたバッグの隣で自身の体を「丸め」
ながら考える。

尻尾と手足を収納したこのスタイルはやはり落ちつくらしい。サンドというものの種族ゆえに、だろうか。凸凹の少ない、実に見事な
まるまり方であった。のちに346プロダクションのポケモンコー
チに絶賛される彼のまるまりは一人の女の野球観戦による弊害だと
知るものは誰もいない。少なくとも今の所は。

そうして試合が終わるまでの数時間、彼は丸まりながらすやすやと
睡眠を取り始めた。いつのまにか大歓声の中、眠れるようになってし
まった自身の適応力にあきれながら彼はやすらかに夢を見始める。

三人のアイドルとイーブイカフェ

「楽しみだねー！」

少女、赤城みりあはウキウキとした様子を隠しきれないでいた。今にもスキップをしかねんばかりの彼女は智絵里の手を取りながら心からの笑みを浮かべていた。渋谷のざわざわとした街並みの中を歩いていく彼女達。歩行禁止を示すLED式の赤い歩行信号をまだかと言わんばかりに急かしたてて見つめるみりあ。

そんな少女を微笑ましげに見つめる別の少女、隣を歩いていたかな子は彼女に話しかける。ピンク色のポーチを肩、ゆったりとした胸元にクロスするように下げた彼女はスマートフォンで時折地図を確かめつつ言葉を発した。

「みりあちゃんとっても楽しみにしてたもんね」

「うん♪だってあのポケモンカフェに行けるんでしょ！」

「予約が取れてよかったよー」

「昨日なんか楽しすぎて眠れなかったもん☆」

そう言ってみりあはえへへと笑みを浮かべて強く智絵里の手を握りしめた。どうやら気持ちが先走ってしまっているようだ。心なしかスキップのように足取りが軽くなってしまうている。

そんなみりあの様子に思わず笑みを浮かべてしまうかな子と智絵里。年下の無垢な反応に魅入ってしまう。智絵里は彼女の手を強く握りしめ返した。目的地まであと少しとはいえここは大会場渋谷である。はぐれてしまつては一大事だ。

そうして智絵里はお姉さんとしてふさわしい姿を彼女に見せようと心に誓う。まあそんな智絵里もまた、まだ見ぬポケモンカフェが近いせいだろうか。普段よりもずっとそわそわとした様子を隠しきれないでいたのだが。ピョコピョコと小さく跳ねる足取りに、本人もまた気がついていない様子であった。

そうして彼女達は目的地であるビルの下へとたどり着いた。コンクリートで作られた五階建ての近代的なビル。壁面には幾本ものツタが絡まっていた。そんなビルの入り口そばには一枚の立て看板が

建てられていた。その看板には黄色いチョコレートで「イーブイカフェ」と書かれてあった。デフォルメされたイーブイの姿を尻目に彼女達はビルの三階へと登っていった。

「うわー!!」

「わあ」

「す、すごいね…」

少女達は皆一様に瞳を輝かせ黄色い声をあげた。その部屋には大量のノーマルポケモン、沢山のイーブイ達がいた。何十人も年若い少女達が楽しみにイーブイ達と戯れている様子は男性にとってはまるで理想郷のようであろう。

ビルの1フロアを使ったその空間の中、冷暖房を完備したその近代的な空間の中には多くのしんかポケモンが生活をしているのであった。入り口でお金を払いながら智絵里は彼らの生態をまじまじと観察する。

丸皿で水をペロペロと舐めるイーブイ

窓際で丸まり欠伸をする日向ぼっこイーブイ

客に投げられたボールを嬉々として追い求めるわんぱくイーブイ
実に多くのイーブイ達がおもいおもいに生活するその様子。まさにもふもふ天国である。イーブイのつぶらな瞳と肉球を堪能する。O
Lがとろけるような声をあげた。

イーブイカフェ、それは最近メディアで取り上げられ始めた新形態のカフェであった。もともとはカフェを経営していた人間が自宅であったいたポケモンをカフェの場へ解放したのが始まりであったようであった。お客の一人がSNSで投稿した一枚の写真に都内の女性陣が食いつき、そこから爆発的に人気を催したカフェテリアなのである。

今では猫カフェやふくろうカフェと同様にポケモンカフェとして多くの人間達を通う人気スポットになったのである。飲食店にポケモンが混じることによる衛生的な観点、危険なのではないかと言った指摘など、問題点こそあるもののこれらは多くの人間達に愛されつつ

あるのであった。現代の癒しスポットと言えるだろう。

瞳を爛々と輝かせるみりあ。彼女はぴよんぴよんと小さく飛び跳ねながら今にも駆け出してしまいそうな勢いだ。店員からのアルコール配合式ウェットティッシュを受け取りながら説明を受けたみりあ。そうしてみりあは部屋の一角でテレビを夢中で見つめるイーブイの元へと駆け寄った。

そんなみりあの様子を眺めながらかな子は隣にいた智絵里に話しかける。女子座りをしながらかな子はおっとりとした表情をした。コーヒをテーブルに置きながら智絵里はかな子を見つめ返した。

「智絵里ちゃんみてみてー」可愛いよー」

「ぶふっー」

思わず吹き出してしまう智絵里。女の子座りをしたかな子は一匹のイーブイの両手を掴んだままそのイーブイを膝の上にたたせた。彼女の膝の上でおなかを見せたまま万歳をするノーマルポケモン。

まったりと昼寝を楽しんでいたイーブイは睡眠を邪魔されて機嫌を悪くしたようだ。かわいらしい耳をぺたんと閉じながらジト目しつつばんざいをするイーブイに満面の笑みを浮かべるかな子の姿のギャップといたら。思わず智絵里はアハハとお腹を抑えながら大きく笑い声をあげてしまう。

「むう…そんなに笑わなくても…」

思っていた反応と異なる反応を返されてむくれてしまうかな子。そんな彼女の様子に再び智絵里は笑ってしまう。瞳に涙をうかべながら謝る彼女。そうして彼女達は再びイーブイを触り、堪能し始めた。

二人のアイドル達の柔らかい手のひらによって刺激を与えられたイーブイは気持ちよさそうに鳴き声を上げ始める。そうしてイーブイの毛の感触を確かめながら智絵里はその感触に浸る。

三びきのイーブイに全身をもふもふと侵略されている赤城みりあを見ながら取り留めもない事をつらつらと考えた。穏やかで優しい休日だなど。

【姫川友紀と朝の目覚め】

ふと目がさめる。どうやらまた、らしい。カチカチとなり続ける時計の音を聴きながら眠りから覚醒していく。寝ぼけながら自身の体を力強く抱きしめる姫川友紀のことを見上げながらサンドは深いため息をついた。

年相応の胸元にぎゅーと抱きしめられたまま天井を見上げる。衣服を乱し、布団を蹴飛ばしてしまったのだろう。量販店で購入した柔らかな布団はベッドの片隅にぐちゃぐちゃに寄せられていた。ヘソをだしたままムニヤムニヤと夢を見る彼女は実に愛らしかった。

ベッドの中でサンドを抱きしめる美女。それはまるでぬいぐるみを抱きしめる少女のように愛らしかった。それと同時に彼女のはだけた生肌が、艶かしい色気を醸し出す。

すぐそばで友紀の穏やかな吐息と寝息を感じるサンド。青少年ならば辛抱たまらんであろうこの状況もポケモンである彼にはあまり意味がない。ましてや、生後数年も経っていない彼にとっては石鹼の香りのするほんのりと柔らかな女性の胸元など呼吸の妨げにくらいにしか思えなかった。

彼はモソモソと身をよじる。小さな手足をジタバタともかくその様はまるで母親の抱っこから逃れようとする幼稚園児そのものだ。そのまま友紀の羽交い締めのような拘束を抜け出すとようやくとといった様子で一心地ついた。

すると自身の体からぬくもりが消えたことを感じたのだろうか。友紀はそれまでの穏やかな眠りから一転して悲しそうな吐息を出し始める。

「……………」

「……………」

「うう…いやだよ…れない…で」

驚きながら彼女を見つめる。サンドは慌てた様子で自身の尻尾を彼女の手のひらにそつと忍ばせた。硬い外皮で包まれた尻尾が彼女の手の中にすっぽりと収まる。眠りながらその感触を感じたのだら

う。泣いてしまいそうだった友紀の顔に再び笑みが点り始める。

ベッドの中でサンドの尻尾の先に頬ずりをしながら彼女は再び笑みを浮かべ始めた。身をよじった事で彼女のベッドからかすかに軋む音がする。ギシギシという音を聞きながらサンドは彼女のそばにぺたんと尻餅をついた。

「えへ…」

「キュー」

「いあらし…や…き…」

どうやら満足したらしい。彼女は再び何事もなかったかのようにすーすーと眠り始めた。穏やかに眠ってつぶやく言葉が野球選手である「五十嵐」と「佐々木」であるところがいかにも彼女らしい。

姫川友紀は

寂しがりやである

彼女を知る者からすると意外な事実かもしれない。友紀は明るく、一生懸命でどんな事にでも笑って向かっていける強さをもった少女だと周囲の人物には思われているらしい。けれどそれは彼女の根っこの部分ではないのだろうと、サンドは心で直感していた。

故郷を出てからしばらく経つが、彼女はいまだにこうして故郷の事や自身の家族について寝言を発するのだ。無理もない。彼女はまだ20歳なのだから。誰かに甘えたくなくなってしまふものなのだろう。だからこそこうして毎日抱き枕になっているのだが…。そうしてサンドはリモコンを操作して今日の天気を眺め始めた。

『それでは本日のニュースです。ここ夕日ヶ浜では子供達が元気にー』

美しい女性アナウンサーが現地の様子と共にニュースを伝える。そんな見慣れた光景を眺めながらサンドはつらつらと考え事をした。音量を下げながらぼんやりとテレビを眺める。自身の尻尾の先に友紀のよだれがかかるのを感じながらサンドはキューと小さく鳴いた。

彼女は応援という言葉をよく使う

それはきつと誰かを応援したいという気持ちだ

けれどそれは本当は…

それ以上に誰かに応援してもらいたいという

彼女の気持ちの現れなのかもしれない

そうして彼はベッドの片隅からペットボトルを器用に取り出した。

【富士山の恵み】とパッケージに書かれたそれを両手で抱きかかえながら彼女の起床の用意をするサンド。 轟肩チームであるキャッツの試合の明朝、それは彼女が8割9分で二日酔いを抱える日でもあるのだから。

【川島瑞樹と地方テレビ局】

とある日の昼下がり、彼女は某テレビ局にいた。大阪に設置されたそのテレビ局の第3スタジオ、その中には妙齢の美女がいた。よく手入れされたその長い髪をさりりとなびかせながら彼女はつぶやく。

「なあにこの生物?」

彼女、川島瑞樹は手に持った書類を眺めながら独り言を放った。テレビ局の化粧室のデスクに座ったまま呆然とその生物に見入る彼女。どうやら次のニュースの際に読み上げる原稿であるらしい。

瑞樹は自身の衣装をいじる手を止めて思わずその書類に食い入るように見入ってしまう。業務用のパイプ椅子に腰掛けながらなる瑞樹、そんな彼女に対してテレビ局の女性ADが声をかけた。

「珍しいですよー新種の生物らしいですよ」

「いや…珍しいっていうか…これは…」

「すごい生物ですよね!」

「いや…本当にこんな生物いるのかしら?」

むむむ、とばかりにジト目をしながらその書類に掲示された写真を見つめる瑞樹。そこには随分と珍妙な姿をした生物がいた。

鳥の一種であろうか。ふさふさとした羽毛や翼のようなものをもっている事からかろうじて飛行生物であることはわかる。一見するとフクロウ、と呼べなくもないのかもしれない。が、眼球は橙色をしておりその周囲に黒い縁取りをされたかのようなこんな鳥は少なくとも彼女は見たことがなかった。

ぽっくりと膨らんだお腹、突き出た嘴などはまだ愛嬌を感じさせる。目玉の上からぴよんと突き出た黒い触覚のようなものもまだ可愛いと言えなくもないだろう。

だがこれは

どう見ても

「一本足…よね?」

「ですよね…」

某地方局のキャスターとその地方局に努める彼女達は思わず苦笑

する。概要を見ただけではよくできたフェイクニュースとしか思えないだろう。事実この時点での瑞樹はこの珍妙な生物をネッシーやらビッグフットの類と認識していた。よくある未確認生物というやつだ。

どう見ても一本足、である

それだけならまだ遺伝子の変異だとかなんだとか理由もこじつけられそうだ。とはいえそれ以外の風貌やらなんやらがあまりに珍妙であった。これではできの悪いぬいぐるみだと言われた方がまだ納得できそうだ。携帯で撮影した荒い画素の写真もまた彼女のこうした判断を後押ししてしまったのだ。

別世界においてホーホーと呼ばれるこの生物。どうやら川島瑞樹の琴線にはふれなかったようだ。彼女はため息をつくとき女性ADの入れてくれたコーヒを一口飲んだ。

テレビ局に備え付けされたコーヒメーカー製の安物である。その味の不味さに思わず苦顔する瑞樹。いやこれはおそらく淹れた人間の技術によるものだろう。年が近く嗜好も似通っていた事からふとしたことをきっかけに仲良くなったこの女性AD、そんな彼女の家事スキルの低さは瑞樹もよく知っているのだから。

「撮影した人間の映像を流すってうちの上司は言っていましたよ」

「まーたあの人は…どうせちゃんと言っけも取ってないんですよ？」

「でも今度こそ本物だと言ってましたもん！もしもこの生物が本当にいたらうちの番組の大手柄ですよー」

興奮する女性AD。彼女は手に持った雑誌を握りしめ熱い眼差しで瑞樹を見つめるのであった。なんでも田舎に現れたこの生物を一人の人間が自身のハンディカメラで撮影したとの事であった。無論、大都会であるこの大阪ではこのような生物が目撃されたとの事実はなかった。少なくともこの時点では、まだ。

もしも発見できたら世紀の大発見である、とばかりにはしゃぐ彼女。メガネを曇らせながら瑞樹に攻め寄らんばかりに詰め寄る女性AD。そんな女性ADに対して瑞樹は芳しくない反応で返答した。

「はいはい、本当に居たらね」

「川島さん…その顔は信じてませんね？」

「あのね…子供以上にでかくて一本足で立つおばけフクロウなんている訳ないじゃない…」

瑞樹は写真を指差しながら女性ADに答える。確かにずんぶりとした胴体に眼球の周囲のクマなどまるで時計の矢印のように鋭い。：つまりまるでこの世のものとは思えない風貌をしていたのだ。瑞樹がこう答えるのも無理はないだろう。

ちなみにホーホーは別世界においては時を告げる神獣として有名である。毎日、毎秒きまつたりズムで首をかしげたり羽繕いといった行動をとるらしい。その行動には一秒たりともズレがないというのだから驚きである。彼らの体内時計はこの世のあらゆる時計よりも正確であるだろうとの言葉は、かの有名なオーキド博士の主張である。

古代人は時計の代わりにこの生物を用いたり、神託を告げる生命として崇めていたらしい。シンオウ地方においては時を告げる天の使い、知恵の神様とする地域まであるというのだからこの生物がいかに稀少で有益な生物なのかもわかるだろう。

だが勿論そんなことはこの世界の人間はまだ知らない

ましてやポケモンがようやく数種類現れた程度の

まだこの時点では

クールな顔でコーヒーを飲み続ける川島瑞樹。そんな彼女に対して女性ADは声をかけた。それならば、と。

「瑞樹さんはこんな生物が存在しないって言いたいですね」

「当たり前でしょ」

「じゃあ本当にいたら女子高生の格好して駅前歩いてください」

「いや、どういう理屈？」

「いいじゃないですかー！きつと世の男性はメロメロですよ」

「流石にそんな格好恥ずかしいわよ…」

「瑞樹さんは美人だからきつとどんな格好しても似合いますよ？」

「はいはいお世辞は良いからもう行くわよ」

そう言つて女性A Dを部屋から出そうとする瑞樹。この後は衣装合わせをし、また昼のワイドショーへと出演する予定なのである。こんな未確認生物の話に花を咲かせている時間などないのだから。ブーブーと文句を垂れる女性A Dの背を押しながら瑞樹もまたせわしなく自身の準備を進め始めた。

この5年後に、まさか制服以上に派手で露出が多い格好をする事になろうとは彼女は思うまい。ましてやその事を知るのはまだ当分先の事である。あと実はホーホーは実在する二本足の生物であるという衝撃の事実を知るのも当分先の事である。

【星輝子と台風】

「し、親友…明日は台風があるけど大丈夫か？」

パラッ?と可愛らしく鳴くその生物。パラスはキョトンとした顔をしながら小さな首をかしげるとつぶらな瞳で星輝子を見つめ返した。どうやら台風というものをよく理解できていないらしい。

その純粹でつぶらな瞳はまるで幼児を彷彿とさせる。眩しいばかりの太陽の下で星輝子は強く頷いた。学校帰りのこの時間、この小さな親友と会うことはこの時期の輝子にとってはもはや日課となっていたのだ。

地方の住宅地から遠く離れたこの森林公園。福島県でも有数の巨大公園には広大な自然が栄えていた。馴染みのない人間は大きな山をイメージするとわかりやすいかもしれない。その山の麓に設置されたこの公園は地元の一部の人間しか寄り付かない場所でもあったのだ。

森林公園に設置された木陰のベンチ。そんなベンチの上でチューチューとペットボトルを傾けながら自販機水を楽しむパラスに対して輝子はあたふたと慌てながら言葉を紡いだ。

「テレビでやってたんだ、明日はおーがた台風があるって「?」」

「え、えーと…台風っていうのはおつきくて怖くて…」

「パラ?」

「う、うーんすごく強い災害で…」

必死に言葉をつむごうとする輝子。とはいえ彼女自身もまだ小学校低学年。お世辞にも語彙力が充実しているとはいえないだろう。言えば言うほど本来の台風というもののイメージから遠ざかってしまふのを感じてしまう。

それでも台風、である

街中にある看板やら傘やらが吹き飛ばされてしまうあの衝撃はこの幼く小さな親友にはあまりに過酷であろう。いや、そうでなくともどこか抜けているところがあるこの親友である。『お外に風が吹いて

いて楽しそう!』とばかりにトコトコと外を歩いて台風に吹き飛ばされる未来がありありと見えてしまう星輝子。

そんな星輝子の心配をよそに目の前で飛翔する蝶々に視線を奪われるパラス。あまりにも危機感がなさすぎやしないだろうか。自身の膝の上で楽しそうに手を振り上げる彼に対してどういえばこの災害の恐ろしさが伝わるだろうか。小学2年生の輝子はその小さな手で腕組みをしながら必死に考えた。そうして彼女は一つのワードをひねり出す。

「親友…聞いてくれ台風は恐ろしいんだぞ」

「パラパラ?」

「この間本屋のおばあちゃんが犬をつれてきただろ?あれよりおつきくて怖いんだ」

「パラっ!」

「ううん、あんなものじゃない。あのワンちゃんが100匹以上襲いかかってくるようなものなんだ」

「パ…パラ…っ…」

ガクガクと震えるパラス。どうやらこの一大事の危機が伝わったらしい。彼は膝の上でプルプルと震え始めた。彼女はこの親友が時たま犬にいじめられていることを知っていたのだ。公園に遊びにきた犬に追いかけて回され号泣していたあの姿を今でも思い出せる。

世間話に夢中になっていた本屋のおばさんはきつと自身のゴールデンレトリバーが未確認生物を追いかけて回し虐待していたなどは露にも思っていないだろう。

自身のスカートに潜り込んでプルプルと震えるパラス。そんなパラスに対して輝子は彼に声をかけた。

「さ、作戦会議をしよう」

「?」

「親友のお家から…や、役に立ちそうなものを持ってきてくれないか?」

「…パラッ!」

勢いよく手を掲げるパラス。どうやら元気が出たらしい。

ぴよんと勢いよくベンチから飛び降りた彼はトコトコと自身の住処へと向かっていった。住処の周囲にお宝を隠しているのだろう。輝子は彼の後ろ姿を視線で追いながら思考にふけった。

台風は危険だからできることをしてから帰ろう

せめて親友の自宅を可能な限り守ってやらなきゃな、と

そう考えたが故の輝子の提案である。彼のすみかである小さな洞穴、子供がようやく通れるような石と土で出来た小さなその住処を板なりテープなりで補強すれば大丈夫ではなからうか、という少しばかり安易な発想が根底にあった。

微笑ましげに見つめる星輝子。

ふふんとばかりに彼女にしては珍しいドヤ顔であった。

きちんと防災ができる自分ではできるお姉さんだな、とこの時の輝子はそう思っていたのだ。

—————

「…あつ…だめだこれ…」

思わず出てしまった断念の言葉。星輝子は自身の見通しが甘かったと天を仰いだ。そんな彼女の眼下では。パラスがつぶらな瞳で輝子を見上げた。『あたまが痛いのか？大丈夫…？』とでも言わんばかりの純粹な表情をする親友。

そんな親友の頭をそつと撫でる星輝子。そうして彼女は改めて彼が集めてきた役に立つものを眺めた。小物が数点ほど土の上にパラパラと転がっていた。

透き通るようなビー玉

土汚れが付着したBB弾3個

片手で握れる程度の木の棒

驚くべきチョイスとセンスである。防災に役立つものと言ってこれをもってくるセンスはどこぞの双子アイドルを彷彿とさせる。BB弾でどうやって台風を防ぐのかと小一時間ほど問い詰めたくなってしまう。

まるで小学生男子が選びましたとばかりのその小物群はまぎれもなくオトコの子のそれであった。この中では特にビー玉が彼にとつてもお気に入りらしい。

見て見ると言わんばかりに両手でビー玉を掲げて星輝子にすりよつてくるその姿。まるで幼児がママに甘えるような、幼稚園児が親戚のお兄さんにコミュニケーションを取ろうとするような、そんななんともいえない愛らしさを感じさせる。

星輝子はそつとあることを考えた。それは以前から考えてはいたことであつた。とは言えその行動を実行に移すには、それはあまりにリスクであつた。

とはいえ考えてみればこんな倫理観が幼稚園児並の彼を外に置いておくことの方がよほどリスクのある行動なのかもしれない。未確認生物として国家に捕獲されてしまう危険性を考えれば、家族を説得することなど遥かに容易いのだろう。…きつと

そこまで考えた星輝子は深呼吸をし、ぐつと硬く拳を握つた。

「う、うちに来るか親友？」

モンスターボールとアイドル

事務所へと来たさくらが一番に目撃したものは興奮した様子で語り続ける友人、大石泉の姿であった。スマートフォンを握りしめなやらの熱い言葉で事務所の職員に話し込んでいた。自他共に認めるクール属性な彼女には珍しい言動である。

「イズミンどうかしたの？」

そう挨拶を交わすさくら。そんなさくらの言葉にありがたいとばかりに職員は苦笑をしながら離れて言った。どうやら仕事があったのだが中々会話が途切れないので困っていたようだ。

一方の泉、彼女は嬉しいな表情でおはようとさくらに返事した。ほんのりと顔を高揚させたその顔はなんだか随分と満足げであった。こんなに嬉しいな彼女を見るのは随分と久しぶりであった。

自身の通学カバンを事務所のソファの傍に下ろすさくら。そのままさくらは嬉しいな様子だが何かあったのか？と泉に問いかけた。問いかけて、しまった。すると泉はよくぞ聞いてくれたと言わんばかりの表情をしてさくらにつめよった。

泉が見せつけてくるそれ、スマートフォンの画面にはとあるネットニュースが表示されていた。ぶさいくな猫のストラップが取り付けられたそのスマートフォン画面には携帯獣捕獲器とあった。

あつこれ話があるの凄く長くなるパターンをやつだ

さくらがそう自覚したのはそれから20分後のことである。

—————

世界初の工業製品「モンスターボール」の発売

現在は職人によって手作業で製造されている携帯獣捕獲機、通称モンスターボール。これらはポケモンたちへの捕獲器であり、彼らの家ともなる大切なものである。今回は記者である私が、この企業へと取材をした際の記事をネットニュースとしてまとめたいと思う。

本来はぼんぐりとよばれるきのみを加工し、中にキャプチャーネットと呼ばれる特殊な網状のシートを設置する。このシートは粘着性

があり、ポケモンを捕獲する為の特殊な役割を果たすのだ。とはいえこれまでのモンスターボールは捕獲率が低く、また職人の技術や加工木の状態によって効率が左右されてしまうのが問題視されていた。そこで「シルフスターライト社」が開発したのが上記の写真に掲載されている工業用モンスターボールである。これは巨大マシンを利用してつくる世界初の工業的携帯獣捕獲機なのである。

開発名称はプロトボール。写真の通りこれらはぼんぐりを加工したのではなく金属を素体に球型に加工をしたものである。

プロトボールα

プロトボールβ

プロトボールγ

それぞれがステンレス、チタン、特殊カーボンでできており、製造コストはランクが上位の物ほど高くなるようだ。中でも目を引くのは中の機械機構である。球体中心部に据えられたスイッチングを起動させることで中の機械マニピレータが作動する。

これにより電気信号が発せられ人間が中のポケモンの状態を把握することが可能となる。電気信号は携帯通信信号へと変換され、持ち主のデジタルデバイスへと送信されるのである。

企業担当者はこれらの生体情報はスマートフォンアプリを通じて持ち主が閲覧できると主張している。現在は某アプリ開発企業と業務提携を組み開発事業を立ち上げているとの事である。著者である私もニュースレポーターとして現在開発中のこちらのアプリをお試しで活用させていただいた。(画像は私が飼育しているラッタをキャプチャーした状態の物である)

可愛らしいイーブイのユーザーインターフェースを通じてアイコンをタップして行くと自分が登録したポケモンの情報の閲覧。および周囲のポケモントレーナーとの情報共有やSNS共有機能までついているというのだから驚きである。

また球体内部に埋められたICチップから特殊な電気信号が解読、発信させられることで中のポケモン達へ電磁波を浴びせる事ができるらしい。この技術を応用させる事で、従来は傷ついたポケモンを回

復させるのに数日かかっていたところをわずか数時間で回復させることに成功したと企業は主張している。

この技術がさらに発展すれば、やがては街中でポケットモンスターセンターのような回復専門店も沢山設置されることも夢ではないかもしれない。

キャプチャーネットも大きく改善されている。ポケモンを捕獲する際は第三世代CPUによってポケモンの状態を0.08秒で認識し、球体内部に捕獲のためのロック機構が動作するのである。これにより捕獲率は劇的に改善されたようだ。

つまりこの工業製品によって「ポケモンの捕獲率の向上」「ポケモンの回復速度上昇」という二つの機能を我々人間が持てるようになったということである。

ちなみの中に備え付けられたバッテリーにより連続18時間駆動が可能。充電はそれぞれUSB type Bかワイヤレス充電によって――

――

「うーん……よくわかんない！」

「はあ……つまりボールがもつと便利になるって事だよ」

「おお！わかりやすい！」

うなだれるさくらに対して泉は呆れ顔で答える。どうやらさくらにはこの世紀の大発明の価値がわからなかったらしい。泉はそつとため息をついた。彼女など昨日自宅でこのニュースを見たときは飛び上がらんばかりに喜んだというのに。

これこそが科学の発展である、テクノロジーを愛する泉にとっては最高のニュースであったのだ。やっぱりがくのちからってすげー！という事なのである。

特に捕獲したポケモンの生態情報と球体から発せられるGPS信号によって「ポケモンの生態情報とその分布図」がネットのクラウドサーバーへと送信される機構などは衝撃を受けたものだ。これによりいまだ謎が多く滞っているポケモン研究が世界中で情報共有されることでその速度は加速度的に改善されることだろう。

とはいえそのことをこの友人に伝えてもその衝撃の10分の1も伝わらないであろうが。泉は自身のカバンからペットボトルを取り出した。「富士山の恵み」を静かに飲み始める友人に、さくらはそつと声をかけた。

「ちなみに値段っていくらなの？」

「15万6000円」

「え？」

「こんなハイテクノロジーがそんな値段で手に入るんだもの、安いわよね！」

につこりと笑みを浮かべる泉。どうやらニューウェーブ内でここまで価値観に差異があるとは思ってもみなかった。さくらは内心でカルチャーショックをうけてしまう。15万円、である。スマートフォンだつて購入できてしまうだろう値段である。とは言え確かにこのハイテクノロジーには価値に見合った価格設定なのかもしれないが。

もちろんこの値段も今後は変動していくだろう。

それこそ数十年も経てば、値段もぐつとリーズナブルになるに違いない。

いつの日かは、こどものお小遣いで購入できる日がくるのかも

別世界において、物理法則を無視してぶつとんだ機能が大量に盛り込まれたモンスターボールが売られているとこの世界の住人が知ったらどう思うだろうか。駄菓子隣の隣で子供達の手によって買い込まれているとしたら彼女たちはどのような顔をするだろうか。ましてやそれらが数百円〜数千円単位で売られているとしたら。

『そんな値段があつたら海外旅行か新しいスマホ買うべきじゃない？』

そう思ったものの口には出せなかったさくらなのであつた。

第8章

【久川颯とカモネギ】

「どうしてこうなった…」

颯はそつと布団の前で黄昏れた。それから起きた事はなんだかあつという間の出来事であつた。公園で謎の野鳥に出くわした久川颯と久川凧。二人は激論の末この野鳥を家へと連れ帰ることにしたのであつた。

いや颯自身は今でも大反対である。それでもこの野鳥、カモネギと命名されたこの生物を自宅へと連れ帰つたのは自身では凧の説得が非常に困難であつたからだ。連れ帰ってくれなければ大声で叫んで裸になるぞ、とまで言われては同じ顔をしている双子の妹としても同意せざるをえない。

まあどうせ家族が反対するだろう

そう颯は思っていたのだが…

「どうしてこうなった」

もう一度つぶやく。あれから半日がたった。自身を養ってくれているゆうこちゃんの元へこの謎生物を見せたところ、なんとあつけなく飼育許可を出したのである。これは久川家史に残る驚嘆すべき出来事であつた。

清潔好きなこの女性のことだから野生に返してこい位は普通に言つてくると思つていたのだが…この半日で随分と彼女の価値観が変わつてたような気がする。彼女はこの日は自宅でテレビを見ていただけの筈なのだが。一体お昼のワイドショーの何が彼女を変えたのだろうか。

時は、もどる。現在久川颯は凧と一緒に自室にいた。就寝の準備の真最中であつた。薄いピンク色の壁紙が貼られたその少女チックな部屋は颯と凧が二人で暮らしている共同部屋なのであつた。

ホームセンターで購入した学習机はいかにも対象的であつた。颯

の机の上が整然とされた状態であるのに対して風の方は混沌とした状況であった。机の上にはくたびれた週刊少年漫画、BB弾、バツキリマンシールなどが載っていた。この惨状だけ覗いてみればいかにも小学生男子のようであった。

そんな部屋の空間でカモネギはくつろいでいた。両足をべったりと投げ出して風と一緒に漫画を読んでいた。声をだして笑い声をあげる風とカモカモと笑い声をあげる生物という非日常的な光景がそこにはあった。というかネギを床に叩きつけないでほしい。

「はあ…なんかもう疲れちゃった」

「おや…はーちゃんはもう寝るのですか?」

「だってもうこんな時間だよ?明日から学校始まるじゃん」

「そうですか、はーちゃんの学校は大変なんですね」

「なーも一緒に学校でしょうが」

風のジョークに疲れた声で答える颯。颯はいそいそとベッドへ向かう。そんな颯に対して風はちよつとまっつてくださいと声をかけた。振り返る颯に対して彼女は軽やかに告げた。

「今日は床で一緒に寝ましょう」

「え…ええ!?!」

「ベッドで一緒に寝るには狭すぎるでしょう」

「いやいや、いつも二人で一緒に寝てるでしょ」

「違いますよ。カモくんも一緒に、です」

そう言つてカモネギのお腹にだきつく風。彼女はその小さな身体でむぎゅーと強くカモネギにしがみついた。そんな姿に颯は否定の言葉も忘れて思わず姉を見入ってしまう。こうして見るとやはり風は整った顔をしているのだな、だなんて事をつらつらと考えてしまふ。

その行為はまるでデディーベアに抱きつく少女のように愛らしかった。パジャマを着たその彼女はぺたんと尻餅をついていた。その端正な瞳と美しいキューティクルを持ったロングヘアをぐりぐりと押し付けながら風は自身の妹を見上げた。

「だめ…ですか?」

「…今日だけだよ」

つい、負けてしまう。この姉の可愛らしい声と仕草についかなずいてしまう颯なのであった。そのままなし崩し的に就寝準備を始める双子。彼女達はベッドから寝具を取り出し床へと広げるのであった。

部屋を覆うように広がる寝具。これだけでいつもと違う感覚を覚えてしまう颯。そんな中風は自身のペットに対して問いかけた。指を立てて注意をするかのように風は呼びかける。

「良いですかカモくん、はーちゃんのお情けで一緒に眠れる事になりました。よく感謝して寝ましようね」

「カモ！」

「具体的には1日3回、はーちゃんをあがめるダンスをしましょう」

「しないで良いから」

「カモカモ」

「かもかも♪」

「今しないで良いから、お願いだから二人とも踊るのをやめて」

両手とネギをふりあげリズムをとるカモネギ。腰を降り奇妙でパラチツクなダンスをする風。そんな彼女達に対して颯はため息をつきながらいそいそと就寝準備を始めた。そうしてできあがる即席ベッドならぬ即席布団、そんな寝具の上にぴよいとばかりに風は飛び乗った。

「おお…凄いです。風ははーちゃんの家事テクニクに感謝します」

「いやいやそんな…まあ褒めてくれるのはうれしいけどね」

「では三人で『河』の字になって寝ましようね」

「どう寝る気なのそれ…『川』の字ね、はいはい」

そう言って彼女達は床に寝転んだ。中央にカモネギ、その隣に寄り添うように久川姉妹が寝転んだ。床の上で川の字のように寄り添う二人と一匹。こんな形で天井を見上げるのは二人にとっては随分と久々のことなのであった。

一方のカモネギは初めての環境ですこし戸惑っているようであった。事実、このカモネギにとって民家の中に入るのは初めての出来事なのであった。自身が生まれ育った「12番道路」。その近くにあっ

た「シオンタウン」という場所は老人ばかりだったし住民だってそんなに多くは暮らしてなどいなかった。

カモネギにとって人間とは遠巻きに眺めるだけの存在だったのだから無理もない。ここにきて少しばかり緊張してしまうカモネギ。そんな彼に対して凧はそつと声をかけた。

「大丈夫ですよカモくん」

「？」

「私たちはお友達です。お友達はぎゅーつと抱きしめあうものなんです」

そういつて凧はカモネギのお腹に手を回した。もぎゅもぎゅと感触を確かめるように、強く抱きしめる凧。どうやらそんな彼女のあどけない様子にカモネギもほだされたようだ。彼もまた、緊張をゆるめほんの少しばかりの警戒心をといたようだ。トクトクと呼吸を合わせる彼女達、そんな仕草に少しばかり嫉妬心を抱く凧。

凧もまたカモネギの胴体にそつと腕を回した。むむ…これは…。その感触は想像していた以上に極上のものであった。もふもふの羽毛からは暖かな陽だまりの香りがしていた。そつとバレないように匂いを嗅いでみる。顔をおしつけその極上の感覚にそつと溺れて見る凧なのであった。

ああこれは良いのかも

そつと落ち行く意識。眠り落ちる寸前で凧は姉の声を聞いた。

「これが本当の羽毛布団というやつですね」

ひよつとしてこのギャグが言いたいが為だけにこんな事をしたのだろうか。眠り落ちる寸前で凧はそう感じるのであった。

神谷奈緒と冬將軍

そこは随分と異質な地下空間であった。神谷奈緒はごくりと唾を飲みながらその地下空間を見下ろした。地下階段の下からはひんやりとした冷気が漏れ出ていた。どうやらイーブイはそこへと逃げ込んでしまったようだ。神谷奈緒は宿題を詰め込んだスクールバッグを片手に立ち尽くした。

それは脱兎のごとくと言って差し支えないダッシュであった。その足の速さに正直唾然としてしまった奈緒。気がつけばイーブイははるか彼方へと走り去ってしまった。慌てて追いかけた先がここだったのである。

346プロダクションの一角、倉庫と化していた北方第3ビル。神谷奈緒は現在その地下にいた。自身の家族でもあるイーブイがこの地下へと駆け出して逃げてしまったのだ。慌てて追いかけてきたものの、たどり着いてみればこのような場所だったという訳である。

奈緒はぎゅっと自身のブラウスの端を掴みながら階下を睨みつけた。正直言って怖い、といふかなんだこの空間はと彼女は思っていたのだ。346プロダクションはアイドル事務所であった筈だ。だといふのに今自身が降っているこの地下空間はまるでホラー映画さながらである。かつかつと響き渡る音はまるで地下牢獄への入り口だ

暗い照明

薄汚れた階段

ところ所に染み付いた何かしらの液体

正直言ってお化け屋敷のようである。小学生低学年位なら怖くて進めないのではなからうか、と奈緒は直感で感じていた。

「おーいブイ助！へ…返事してくれー…」

涙声で問いかける。真冬のような冷気が彼女を襲う。春先である現在では考えられない温度である。季節外れの寒さに思わずガチガチと体を震わせながら、奈緒は勇気を振り絞って階下を降りていく。

カツカツ

カツカツ

音が響き渡る。地下へと降りていくたびに照明が暗くなっていく。今では数十センチ先の足元すら見えなくなってしまう。スマートフォンライトを点灯させながら必死に辿るもののいまだにゴールは目視できない。指先を必死でこすりながらはあと息をふきかける奈緒。そうして彼女はようやく目標地点へとたどり着いた。

「な、なんだここ…：ドア？」

それは重厚な鉄扉であった。まるで囚人を閉じ込める扉のような威圧感ある存在であった。厚さだけでも10cmはあるのではなからうか、工場にあるような冷凍保管室をイメージすると良いのかもしれない。

そんな扉の中央付近には何かしらのプレートがかかっていた。しかし白い氷柱や霜やらがびっしりと生えて降りとても中の文字が見えなかった。ここにくるまでにブイ助の姿は見えなかった。ということはこの中か、あるいはこの中の住民に何かをされて…

ドアの取っ手を掴もうとした瞬間、ドアそのものが突然開きだした。

「あの、どうかしましたか？」

「うわあああああああ?!?!」

ドアの向こうからひよいと一人の少女が顔をだした。そうしてアナスタシアは自身の目前で腰をぬかして床に倒れ込んだ奈緒を心配そうに見つめた。

「ようこそ、アイシクルガーデンへ」

「アイシクル…？」

「こおりタイプの憩いの場、です」

首をかしげて問いかける奈緒。先ほどアナスタシアから手渡された防寒用の衣服に身を包んだようだ、モコモコの毛皮がついた厚手のコートに耳あてが完備された防寒帽子を身につけた彼女。ウシヤンカと呼ばれるロシア製のそれは流石の防寒性を兼ね備えていた。温度に余裕ができたことで彼女は改めてその空間を見渡した。

それはまるで氷の楽園であった。氷でできた彫刻に霜の生えた天

井。見渡す限りが氷雪色の装飾でできていた。そつと手袋の上から床に触れてみる。キンキンと底冷えした冷気が奈緒の指先へと伝わった。

まるで冷凍庫の中にいるみたいだ

凍りつくような意識の中そんなことを考えてしまう奈緒。自身は行った経験もないがきつとここは北海道よりも寒いに違いない。きつとロシアやカナダといったそれこそ極寒の地域に近い環境なのだろう。奈緒は電子温度計が示す氷点下の気温を見つめながらそう確信した。

しかしこおりポケモン達はこの環境が好みらしい。彼らは見たこともないほど生き生きとしていた。肌や瞳はツヤツヤと輝いていたし、彼らの生態は随分と活動的にも見える。

木製のベンチには大量の雪が降り積もっていた。どうやらこの空間の家具は全て氷か、それに耐えうるような物でできているらしい。そんな空間の中には実に多くの氷タイプのポケモンたちがいた。

ふわふわと漂いながらエアコンの風に吹かれるバニブツチ。どうやら冷たい風が心地良いようだ。対して三匹程度が固まってお昼寝をするユキワラシ。まるで雪傘のような何かをかぶった黒い生物はスースーと規則的にお腹を膨らませて午睡に励んでいるようであった。

雪でできた遊具ではしやぎながら遊んでいるウリムーとグレイシアを眺めながらアナスタシアは奈緒にこの空間の説明をした。ここはこおりタイプ用の慰安施設らしい。というよりは待機所といったほうが近いのかもしれない。どうやら職員やアイドルの手持ちポケモン用に開放しているレクリエーション施設のようなものらしい。

氷タイプは不遇の存在である

まず彼らは高い気温の場所では生活ができない。できたとしても著しく生活能力が低下してしまうのである。彼らの主な住処は北海道や東北といった豪雪地帯であることもこの一つの証であると言えるだろう。故に、氷タイプは都会では非常にマイナーな存在なので

あつた。

飼育するのにかかるコストが高いのである。それは年間を通して常に寒い温度を維持しなければならず冷房コストがこの上なくかかるからであつた。また種族によつてはつららや上質な氷を用意する必要があり、専用の家具も必要になつてくるのである。

真夏においては役立たず

真冬においては天下無双

このビーキーさこそがこおりタイプの最大の特徴なのである。真冬においては名実ともに最強のタイプ種族ともなる彼らは一部のマニアと豪雪地帯やロシア出身のトレーナーにこよなく愛されている。

そもそも氷タイプとはあまりにも尖つた存在なのである。全種族の内最も個体数が少なく、生存可能地域は限られる。一般人が扱うには物理に弱く、攻撃手段に乏しい彼ら。しかしカンナやヤナギ、スズナやハチクといったエキスパートが扱えば一変して氷とは最靱の矛となり得る、テクニカルなタイプ種族なのである。

話はそれだが上記のような理由から346プロダクションでは地方出身者のトレーナーに対して飼育場所を提供しているのであつた。

その一つがここ、アイシクルガーデンである。アナスタシアを含めてこおりタイプのポケモントレーナーはここで自身のポケモンを住まわせる事ができるのである。これによりアイドルや職員たちは光熱費等を気にせず職業に専念できるとの事ですこぶる評判が良いらしい。ブイ助を抱っこしながらアナスタシアは嬉しそうな笑みを浮かべた。

神谷奈緒と冬將軍2

こおりタイプ慰安施設の中にその二人の少女はいた。彼女達は互いに寄り添うように霜の生えたベンチに腰掛ける。はぁーと蒸気のような息をもらしながら彼女達は会話に談笑を続けていた。そんな中奈緒はアナスタシアにこう問いかけた。

「こおりタイプの魅力って何なのかな」

「魅力…ですか？」

ホットココアを堪能しながら話に華をさかせる少女二人。年齢が近いということも有り、何よりもお互いにイーブイ種を育てているという事から話題が尽きることはなかった。奈緒は防寒用のストールをもぎゆもぎゆと抱きしめながら問いかけた。

「いやさ、こおりタイプって街中であんまり見た事ないからさ…」

「うーん、たしかにそうです、ね。」

「こおりってバトル大会でも全然見ないしなあ…」

はあと白い息をはく奈緒。ベンチは凍りついておりどうにも居心地がわるかった。もじもじとスカートの位置を直し続ける奈緒。いつの日か自身のパートナーもグレイシアに進化する可能性がある以上やはりどうしたって興味は湧いてきてしまう。

こおりタイプはドラゴンタイプに対して最大限の効力を発揮する。が、しかしそもそもこの世界においてはそのドラゴンタイプを所持している人間が少ない為こおりタイプに対する需要が少ないのもまた現実であった。

いまだバトルといった大会は日常的に行われているわけではなく、それで生計を立てているプロトレーナーの存在もない以上は仕方のないことなのかもしれない。

そんな奈緒に対してアナスタシアは苦笑で答えた。彼女はうーん、と頬に手をかけながらゆったりと考え込んだ。彼女たちの眼前ではグレイシアとイーブイが互いにおにごっこをして楽しんでいる。キャツキャとはしゃぐ彼らの声を聞きながらアナスタシアは陽気に答えた。

「でもこおりタイプ…一番可愛いですよ？」

「そ、そうかな？」

「ハイ、例えば…ユキハミとか…ウリムーとかとつても素敵です」

はあと悦の入った息をこぼすアナスタシア。ほおを紅潮させながら彼女は指先でユキハミを示した。彼女の指先では二匹のユキハミがはむはむと氷山にかじりついて食事を堪能している。もきゅもきゅという音を立てながら食事をする姿は確かに可愛いと言えないこともないのかもしれない。

アナスタシアの意外なセンスに少し戸惑いながらも同意をする奈緒。確かにポケモンというものは可愛い。一緒に暮らし始めてそれを実感するようになった奈緒。彼女はスマートフォンをかざす。あとで加蓮と凛に写真を送ってやろう、そう思いながら。

「奈緒のイーブイがグレイシアになったらきつとトテモ素敵です」

「…うん、そうかも」

「一緒にお出かけ、しまししょうね」

につこりと微笑むアナスタシア。氷雪の舞う中で見るそれはあまりにも幻想的で美しかった。雪だるまを催したランプによってぼんやりと照らされる彼女の笑顔を、奈緒もまた微笑のまま見つめ続けた。

ブイ助がグレイシアに成長した時のことを想像する。そうして彼女は改めてグレイシアを見つめてみた。やはりグレイシアは美しいものだ、と彼女は確信する。蒼肌が雪景色の中を漂う一筆の美を生み出していた。

そのスマートな体躯、妖精のように儂い存在は誰の目から見てもきつと魅力的なのであろう。雪の降る中佇むその姿は額縁に収めてしまいたくなるほどに実に幻想的な姿であった。

タイプ改定

ジタバタともかく少女がいた。年齢は14歳前後といった所だろうか。妙齡の美女、というよりは花のように愛らしい少女という言葉がふさわしいだろう。頭にお団子をまいた茶色い髪をもつ少女、棟方愛海は事務所の廊下でジタバタと手足を動かしていた。

そんな彼女の胴体を掴む一人の男性。まるで米俵でも抱えるようにして、彼女を逃さないように掴む彼は彼女のプロデューサーであった。どうやら説教の最中に逃げ出してしまったようだ。眉を潜めて説教を再開する男性に対して愛海はつぶらな瞳で疑問をなげかけた。「どうしてお胸を求めてはいけないの？求める事が罪ならどうして人は生まれてきたのかな」

その言葉にハツと息を飲んで驚嘆するプロデューサー。彼女、棟方愛海の視線はまっすぐであった。キラキラと純粹で邪気のない綺麗な瞳。プロデューサーは企画書を握りしめたまま呆然と立ち尽くしてしまった。

愛海はきつと誰よりも純粹なのだろう。彼女はそのまま自身の上司である男性プロデューサーを射抜くような視線で見つめる――

「おいこら」

「いった!?アイドルの頭を叩かないでよ!」

「叩かれるような事をする方が悪いだろ」

叩かれた。ポカリと小気味の良い音が事務所の廊下に響き渡る。うごごとアイドルらしからぬ声をだしながら床にうづくまる愛海に對して30台後半である男性プロデューサーはため息をついた。

「あれほど共演者の胸を揉むのはやめろと言っただろ」

「も、揉んでないよ?」

「俺の目を見て言え」

「ただマツサージしてあげただけだよ!」

「それを揉むというんだ」

言い訳を重ねる愛海に対してプロデューサーは呆れ顔で返した。そうして愛海の手を引き事務所の裏スペースへと連れ込む。あまり

表立って声をあらげるところを誰かに見られるのはよくないだろう、との男性プロデューサーの配慮であったのだが14歳である愛海は気がつかない。

まるで散歩を嫌がる柴犬のような顔をしながら引つ張られるアイドルの姿がそこにはあった。彼女はなされるがままに彼に連れて行かれる。

「よりにもよって765プロの三浦さんの胸を…あのときは心臓が止まるかと思っただぞ」

「うっ…それは本当にごめんなさい…」

思わず謝罪をする愛海。どうやら本当に反省をしているようだ。彼女はうな垂れるようにして下を向いた。指を力なくわきわきと動かしながら彼女は反省の言葉を述べた。

「グラマラスなお山が…母性が私を惑わせたんだ…」

「ぼ、母性か…」

「うん…すごかったよ…母性…」

手をわきわきとさせながらうなだれる愛海。彼女自身、反省をしていたのだ。三浦あずさ自身も笑って許してくれたとは言え理性を保てなかった己の甘さがなによりも許せなかったのだ。

登頂はお互いの同意あつてこそ

そんな信条を持つ愛海にとつてはその出来事は明確な失敗であったのだ。否、恐るべきはこのハンター自身をも狂わせる魔性の乳をもった三浦あずさという存在そのものなのかもしれない。愛海はその夢のような過去を振り返る。

彼女の乳を揉んだ感触は今でも思い出せる。ブラウスの谷間から漂う芳醇な香りは、香水とほのかな石鹸の甘みがしていた。己の鼻腔をくすぐる妖艶な香りが脳細胞を破壊していくのを感じてしまう。気がつけば己の手が動いてしまっていた。気がつけば止められなかった。そうして愛海の双腕はあずさのお山へと触れてしまう。それは天国のように甘美な衝撃であった。

それは驚愕の柔質であった。指先を優しく押し返すその弾力は14歳の少女の理性と羞恥心を暴風のように破壊しつくした。ほんの

りと固いしこりのようなものを感じる、おそらくはブラジャーであろう。長年の経験と天性の嗅覚から彼女のバストが91のFカップであることを見抜いた愛海はそのまま巨乳の海へと溺れていく。

指の動きが止められない、女性の驚きと嬌声の声もまた彼女の行為を加速度的に推し進めてしまった。何よりも掌に伝わるしつとりとしたお山の感触が彼女を狂わせた。それはまるでマシユマロのように柔らかで暴力的なまでの弾力を兼ね備えていた。

ああ

これこそが

己が生まれてきた意味なのかもしれない

彼女は十四年というあまりにも長いこれまでの苦節の日々を思い返していた。幼稚園の先生の胸を揉み本気で泣かれた日を、欲求を収める対象もおらず泣く泣く父親の雄っぱいをもみしだくしかなかった苦難の時代を。千川ちひろの胸を揉もうとして本気で後悔した時に流した涙の味を。

愛海はこの三十秒で宇宙の広大さを悟った

…のかもしれない。

素晴らしいお山の定義とは、バランスであると愛海は常日頃から主張していた。極上の柔質、人肌の温かさ、ほのかの生命の吐息。全てが兼ね備わってこそ最高のお山であると言えるのである。成長期のお山も熟成されたお山もそこに違いはないのであって――

「やめないか」

「むぎい…い、いはい…」

「またトリップしてたぞ…頼むから人前でその顔はやめてくれ」

愛海のほおを軽くつねるプロデューサー。どうやらとてつもない顔をしていたらしい。にへへと笑みをうかべてよだれを垂らすアイドルは確かによくないものなのかもしれない。

いひやいいひやいと呟く愛海の頬からそつと手を話す。プロデューサーは彼女にハンカチを渡しながら問いかけた。

「愛海、この後説明会があるから第3会議室へこいよ」

「え？説明会？」

「職員の人が詳しいことを説明してくれるからな。持ち物は筆記用具と手帳な」

「なにかあったつけ…といふかなんの説明会なの？」

「5日ほど前にも言っただろ、タイプ改定があるかもしれないから備えとけって」

「タイプ改定…」

可愛らしく小首を傾げて問いかける愛海。本人も無自覚であるのだが愛海のこういった仕草はじつに女性的であった。こういった仕草をもっと押し出していけばきつと女性ファンだつてもっと増えるだろうに、そう思わずにはいられないプロデューサーなのであった。

事務所の廊下に設置された長ベンチに腰掛ける愛海に対して資料を手渡しながら彼は答えた。

「お前もポケモン飼ってるだろ。ピイのタイプはちゃんと覚えてるか？」

「ノーマルでしょ？それがどうしたの」

「説明は後な、とりあえず今はそつちに向かいなさい」

「えっ、ちよつと…っ？」

背中をぐいぐいと押される愛海。プロデューサーの強引な行動に少し動揺しているようであった。そのまま戸惑いつつも目的の場所へと向かうのであった。

タイプ改定2

——このような事から以前から一部のノーマルタイプには他タイプのポケモンには見られない特異的な性質があると見識者達の間では注目されておりました。悪タイプや格闘タイプに強烈な耐性を持つ性質。なによりも最大の特徴としてはドラゴンタイプの無効化があげられるでしょう。

強力なドラゴンタイプの技を無力化し、触れるだけでドラゴンタイプの身体能力を著しく低下させるという性質です。

これまではこの性質はポケモン自身が持つ「とくせい」の一種として扱われてきました。しかし、それでは一部のポケモンが二種類のとくせいを持つこととなり長らく提唱されてきた「個体特性理論」、つまりポケモンは一個体につき一つのとくせいを有するという理論に反する為ながら疑問視されてきました。

詳細はお配りするレポートを読んでいただくとして、改めて申し上げますとこれらの特徴は一部のポケモン達のみが有する「新たなタイプ；フェアリー」という事で学術機関から正式に発表がありました。それが1週間前のことです。

こちらの正式発表に伴って新たなガイドラインの改定、ならびにライセンスの新事項が設けられましたのでご留意くださいますようお願いいたします。

なお、このフェアリータイプはBライセンスとなり、取得移行期間は今後二年間となっております。それまではこれまで通りのノーマルタイプとして公共機関では扱われますので一般申請のみで構いません。しかし、一部の場所では行動に制限もかかることが予想されるため、二年以内にはこちらのライセンスを取得するようにお願いいたします。

今回の改定にともなって該当するフェアリータイプのポケモン所持者には引き続きガイダンス、および研修会への参加を呼びかけておりますのでぜひご参加ください。当職員、ならびに関係者の方々には今回のガイドラインの改定に伴って必要が速やかに該当機関からの

正式申請等、手続きを進めていただきたいと思います。

職員による長いガイドダンスが終わる。お願いしますと告げた彼女は忙しそうに機材の撤収に取り掛かった。パソコンを操作しプロジェクターの線を抜き始める彼女を尻目に愛海はくわあと隠すようにあくびをした。

手帳をしまう。意外にも美しい字体で書かれたそれは愛海自身の家庭での育ちを表しているのかもしれない。こう見えても彼女は私立の女子校に通っている裕福な育ちなのである。

この空間にいるのは二人のアイドルだけであった。今回のガイドライン改定には多くの職員、ならびに一部のアイドル達が該当するようであるがどうやら他の少女たちに限ってはすでに説明を受けた後らしい。

諸星きらり

佐久間まゆ

すでにガイドダンスを受講し終えたというアイドル達の名前を意外そうにつぶやいて繰り返す。年齢も離れている為親しい面識もないが彼女たちも「フェアリー仲間」であるらしい。意外といえばこの空間にいるもう一人の少女である。愛海はそつと同じ空間にいるその少女に視線を向けた。

大きな業務用デスクに縮こまるようにして座る彼女。彼女は愛らしいユニコーンが書かれたファンシーなペン入れにペンをしまいながらいそいそと帰り支度を始めていた。ふと、目があう。するとその彼女は小さく声をあげた。

「あつ…」

「こ、こんにちは？」

「ど…どうも…」

つたない挨拶を交わす。どうやらこの森久保乃々という少女は中々内気な少女であるらしい。彼女は動揺するかのように視線をそらすとそわそわと身じろぎをした。

その少女は小さかった。身長149cm, 体重38kgというあま

りにも小柄な体。彼女からは儂げで幻想的な雰囲気が漂っている。触れては消えてしまいそうな…まさしく森に住まう妖精といった印象を受ける。

むくむくと好奇心がわく愛海。愛海はそつとそばに近寄ると彼女に声をかけた。どうやら同世代という事で興味が湧いたようである。

「乃々ちゃんもポケモン飼ってるんだね、私もなんだー」

「あの…はい…」

「うちの場合は家族が飼ってるってだけなんだけどね。あつ一緒におやつ食べる？」

「は、はい…？」

「はい、このクッキーあげる」

「あつ…どうも…」

伸ばされた手について応じてしまう乃々。そうして彼女は袋からクッキーを取り出すと両手でカリカリもぐもぐと小さく食べ始めた。視線をおどらせながら愛らしい小ぶりな口を懸命にうごかしながらその様子。

まるでハムスターが餌を他人に取られないように警戒するような行動。いやそうではない、単純になんというか…すごーくー

(可愛い…！)

愛らしい小動物

彼女という存在を端的に表すところなるのではないか。あるいは森に潜む妖精といった雰囲気であった。ふわふわのスカートにシンプルな藍色のカーディガンを身につけた彼女。髪には小さな花を催した髪飾りをつけておりそれがまた彼女の純朴な愛らしさを強調していた。

もぐもぐと口を動かしこちらを上目遣いで見つめる仕草はたまらなく愛らしかった。愛海は自身のよくわからない心のセンサーがピンピンに反応するのを感じる。彼女はそつと乃々の隣の席へと移動し即座に行動を開始した。

「ねーねー連絡先交換しよ！SNSやってる？」

「ひゃいー…い、いきなり近いんですけど…」

「ほらうちのピイの写真見ない？可愛いよー」

「あっ…可愛い…」

乃々の隣に腰掛ける愛海。そうして彼女は乃々に密着するようにぎゅっと距離を押しつめた。そんな強引な愛海の様子に思わず動揺してしまう乃々。しかし、それもつかの間である。ぎゅっと硬く緊張した乃々の嗅覚をくすぐるように、愛海の髪先から漂うシトラスの香りが彼女の態度を和らげた。そのまま彼女たちは一台のスマートフォンを肩をよせあつて見つめ続けた。

恐るべき手腕、である

行けると判断した直感にしたがい強引にパーソナルスペースを詰め寄る手腕。愛らしい動物の画像を見せ体験を共有し、ながれでそのまま連絡先を交換する手口。女性を安心させるかのようにほんのりと五感を刺激する巧妙さ。

愛海の計画性と無自覚の天然成分が組み合わさった結果である。これまでこの手口で何人ものアイドル達の連絡先を交換してきたというのだから驚きである。無論、愛海自身の根底から滲み出る善人さも影響しているのだろうか。

この出来事をきっかけに愛海と乃々はお互いに交友を結ぶことになったらしい。恥ずかしそうに自身の名前を呼ぶ乃々は大変に可愛らしかったとの言葉は愛海自身の発言である。

プロデューサーとゴーストタイプ

「名刺だけでも受け取って貰えませんか？」

「興味ありませんので」

そう言つて彼女は本に視線を落とす。美しい黒髪をした彼女、鷺沢文香はその端正な顔立ちを前髪ですっぽりと隠しながら再び読書を始めた。ペラペラと古びた本のページをめくる音だけが、小さな書店に響いた。

都内某所、そこはいかにもこじんまりとした古本屋であつた。

そんな彼女の目前で男は気難しい顔をする。その男は大きかった。身長185cmを優に越すのではないかと思われる程の身長を持つ彼は、黒いビジネススーツを身につけながら無言のまま佇んだ。どうやらスカウトはうまく言っていないらしい。武内はそつと自身の首に手を押し当てる。

この日が5度目のスカウトであつた。1度目は気づかれず、2度目は本を読んだまま無視をされ続けた。4度目にして彼女が、親族が経営しているこの書店でアルバイトをしている事を突き止めたのだ。

なんとか名刺だけでも彼女に受け取ってもらおうと、と3時間ほど書店の前で立ち続けた結果警察に補導された彼。そうして今日、ようやく面と向かつて話ができる状態になつたらしい。文香はそつとため息をつきながら彼に向かつて話しかけた。

「申し訳ありませんが貴方は不審すぎます」

「……………」

「書店に招き入れたのは」

バンツ!!

「なっ!?!」

突如起きた破裂音。その音に驚きたまらずどきりと動揺してしまふ武内。そんな彼をあざ笑うかのように一匹のポケモンがクスクスと笑いだした。

「ゴ、ゴーストタイプ…ですか…」

「ああその子はこの書店に住み着いた子でして…」

「住み着く…ゴーストタイプが人間の住居に、ですか…？」

「人を驚かせるのが好きな子なんです」

なんて事はないと言わんばかりに告げる文香。そんな彼女とは対照的に武内は内心の動揺を隠しきれないでいた。今の時刻は午後15時、まだまだ太陽が照り付けると季節と時間である。まちがってもゴーストタイプに遭遇するような時間ではない。

そのポケモン、ムウマは文香に寄っていくと彼女の髪に擦り寄るではないか。自身の体を擦り付けながら嬉しそうに鳴き声をあげるムウマ。そんな彼女に対して一切動じない文香はなおも本を読み続けていた。

「その…随分と人に慣れているのですね」

「そうでしょうか？じゃれているだけでしよう」

「それでも素晴らしい事です。ここまではつきりと目視できて、人に親しいゴーストというものは大変珍しいと思います。」

ゴーストタイプとは極めて希少なタイプである。17種類発見されているタイプにおいて最も個体数が少ないタイプとされている。発見例もまた驚くほど少ないのである。

ゴーストタイプを目視するには霊的な素質が必要であるとされている。霊的感受性、シックスセンス、魂の感応度が必要とされており、才能がなければそもそも発見することが非常に困難であるのだ。

ちなみに感受性の高い、素質あるトレーナーによって捕獲されたポケモンは他人の手によって目視できる可能性が非常に高まる。が、その理由までは未だに発見されておらず、例えばその場合であっても全く霊的感受性が高くないものは全く視認する事ができないのである。

一般的に男性よりも女性のほうがこの霊的感受性が高いとされている。現に並行世界においてゴーストタイプ専門のジムリーダーとして選出されている優秀なトレーナーのほとんどは女性であり、例外としてはジョウト地方のマツバ位であろう。

『野生のゴーストタイプを昼間に確認する事は極めて困難である。また、住宅地や人気が多い場所においても同様である。これは彼らの生態に起因するものであり、ゴーストタイプの希少性に通ずるものでも

ある。』

——○×年発行携帯獣学研究レポートより一部抜粋——

彼らは才能がない人間には姿すら表さない。墓地や廃墟、奥深い森林地帯などでひっそりと暮らす生物なのである。現在発見されているゴーストタイプは全部で14種類のみであり、現在でも多くの学者や見識者たちが探し求めている。

ゴーストタイプはそのあまりの異質さから多くの噂話が一人歩きしている状態なのである。幽霊を見た、UFOを見たという感覚で多くの目撃例があるものの、実際にであい捕獲した人間は驚くほど少ないのである。

『切り株に扮したお化けを見た！子供の泣き声みたいな音を立てながらこちらを睨んでいたのよ！きつとあれは死んだ子供の魂が…』

『ふわふわとした紫色の風船のようなポケモンがいた。誰かの子供があの世へと引きずられていくのをボクはこの目で見た』

このようにゴーストポケモンを見た、という目撃例自体はあれど、それを実際に捕まえたわけでも写真に収めたわけでもないことから正式に学会に登録されていないゴーストタイプも多い。ゴーストタイプは非常に危険であるといった無知からくる偏見も多く、また事実未判明な部分も多いのが現状である。

テレビではゴーストタイプに会いおうと廃墟を探索する番組まであるほどである。つまりゴーストタイプとは

見つけることが出来ず

捕まえる事はもつと出来ず

しつける事はもつと出来ず

というあまりにも異質なタイプなのである。白坂小梅がジユペッタと出会えた事や早坂美玲がヤミラミと出会えた事は非常に希少な出会いであり、驚くほど幸運な出来事でもあったのだ。ちなみに現在ジユペッタを従えている人間はこの世界においては12人しかいない。

プロデューサーとゴーストタイプⅡ

「いかがでしょうか。アイドルに…なっただけじゃありませんか？」
「…」

1時間にも及ぶ長時間の業務的説明。その説明を終えると武内は手元のファイルから346プロダクションの資料を取り出しながらそつと彼女のほうを眺めた。

鷺沢文香はそつと押し黙ったまま手元の書類を眺めていた。彼女自身の目元はその長く美しい黒髪によって見えなかった。が、その髪の間隙からうかがえる顔からもその端正な顔立ちが見て取れた。

やはり美しい。アイドルとしての魅力は顔だけだ、などとは言えないがルックスの良さもまた、欠かす事のできない重要な要素である事もまた確かだ。そのまま彼女の顔をそつと眺める。文香はコーヒークップのふちをそつと手で撫でながら言葉を紡いだ。

「お話は分かりました。あなたが真剣に私の事を考えてくれた事もわかります」

「で、でしたら…」

「ですがやっぱり…ごめんなさい。お断りさせていただきます」

その返答に思わず動転してしまう武内。一方、文香自身もまた気落ちした様子であった。彼女の目は実に悲しげであった。

二人の男女の間で静寂がこだまする。顔を俯かせたまま、視線をテーブルへと向けたまま彼女はぼそぼそとしゃべる始めた。

「たくさんのアイドル志望の女性達と比較して私の容姿が特別優れているとは思えません。私自身内気で…だからきつと難しいと思います」

「…」

「アイドルだなんて成功するともわからない…不安定な職業です。私はその不安定な職業に人生を投げ出すような真似はしたくありません」

そういうと彼女はそつと息をついた。彼女自身の発言に武内もまた沈黙してしまう。二人は書店の裏部屋で押し黙ったように固まっ

てしまう。

アイドルという職業は夢のある職業ではない。その夢を何万人という若く美しい女性達が目指し、そしてその大多数があきらめていくのだろう。武内自身そうした女性たちを嫌というほど見てきた。だからこそその発言の重みを理解してしまう。

しかしだからこそ

武内はそつと彼女に告げた。

「あなたは今楽しいですか」

「…はい？」

「あなたの人生は充実していますか」

「……」

「私は…アイドルとは夢をつなぐ仕事だと思っています。」

「夢を…つなぐ？」

「人々にこうありたいと願い、そのように努力する。観客と共に一時の夢と感動を共有する存在だと」

「…：興味深い考え方ですね」

「本来そのアイドルに興味があればつながらなかつた縁がアイドルによってつながっていく。そうしてその輪が広がっていく。だからこそ同じ時代に同じ場所にいられるからこそ夢が見られるのだと。…きつとそこがこの職業の一番の魅力なんだと私は思います」

「鷺沢さん、あなたは美しいです。読書に夢中になってほほえむあなたに…夢を見させる才能というものを感じました。だから…私はあなたの才能を沢山の人に見てもらいたいです」

「あつ…あの…ち、近いです」

武内の熱い言葉に思わず思わず顔をそむけてしまう鷺沢文香。しかしその頬はほんのりと紅く昂揚していた。異性からの真正面からのアプローチ、ともすれば告白ともとられかねないほど熱い言葉に思わずどきりと鼓動を感じてしまう文香。

動揺を隠すかのように彼女はそつとコーヒーカップを口元へと運ぶ。そんな彼女に対して武内はそつと言葉を重ねた。

「また来てもよいですか？」

「は、はい？」

「また…今度はDVDも持ってきます、あなたに理解して貰えるまで何度でも来てみます」

「…わ、わかりました。お待ちして…ます」

感じた事のない鼓動の速さをごまかすように彼女はそつと返答をした。この男が来てからというものこんな事ばかりだ。体験したことのない事ばかり、それまでの人生にはこんな人はいなかったのだから。

彼女は指先で自身の髪先をそそくさといじる。うつむいたまま目の前に人にばれないようにそつと独り言をつぶやいてしまう。

「もしもアイドルになれなかったら…」

「その時は私が責任を取ります」

その言葉に文香はハツとしてしまう。驚いたまま見つめた彼の表情は…これまで見たことのないほど真剣な顔をしていた。その時に文香はそつと感じてしまう。ああこの人にならきつと信じられると。不確定な未来が少しだけ明るく感じられる。

この人が隣にいてくれるならきつとそんな道も楽しいのかもしれないと

文香の雰囲気が変わる。それまでの陰鬱な、暗い雰囲気がほんの少しだけ変わってゆく。そんな変化を察したのかムウマはふよふよと楽し気に彼女の頭上を飛び始めた。

「次に来るときはこの子にお土産をお願いします」

「それは…困りました。何を贈れば良いのかさっぱりです」

ゴーストタイプを相手に真剣に贈り物に悩み始める男性を眺めて文香はくすりとほほ笑んだ。新ためて武内という男性の馬鹿正直なまでの誠実さに思わず声をあげて笑ってしまう。

そんな彼女の笑みにつられて武内もまたそつと笑みを浮かべる。どうやらここでもまた縁が生まれたらしい。二人の頭上ではムウマが実に嬉し気な表情で二人の間をぶかぶかと浮かぶのであった。

【ガーデイと少年】

「お姉さんそっち…ああもつとこつちー！」

「わかったから頭上で叫ばないで…ああ二日酔いに響く…」

頭上で響く子供の声に思わず苦い顔をしてしまう片桐早苗。彼女は警察官である。日夜市民の安全と生活を守るのが彼女の仕事だ、だからといって迷い猫探しまでする必要はあるのだろうか、と思わず考えてしまう。

自宅の猫が逃げ出したから探すのを手伝ってほしいと言ってきた少年の言葉に安請け合いしてしまった事を思わず後悔する。どうやら彼の家の猫はかなりの逃げ上手らしい。家の周囲、付近の公園、土手の川岸など大きな範囲を随分と搜索してきたがどうにも見当たらなかった。

「こんどはあつちー！」

「はいはいわかったわよ」

早苗の手を引いて先導をする少年。少年自身はまだ小学生低学年である、自宅の猫の心配をする子供の手を振り払うことはどうにも躊躇われるのであった。だからこそこうして探してもいるがやはり見つからない。

早苗と少年は2か所目となる神社に到着すると再び猫探しを開始した。照り付けるような煩わしい太陽を思わずにらみつける早苗。

手で団扇を作りぱたぱたと煽りながら、早苗は四つん這いになり猫探しを再開する。なんとか猫はいないものかと搜索するものものどうにも成果が見られない。

「うちのミャーコは体は三毛柄なんだけどしっぽが真っ白でね！普段はとっても良い子なんだ…ほんとうだよ？」

「それじゃあきつと寂しがってるわね」

「ミャーコ…見つかるかなあ…」

「きつと大丈夫よ…」

顔を地面にこすりつけながら公園に設置された倉庫の地下を覗こうとする少年。早苗もまた自身の制服が汚れるのもまた気にせず

に地面に四つん這いになると鳥居付近の草むらへと顔を突っ込んだ。

ガサガサ

ガサガサ

「ほんとに見つかんないわねー…うん？」

ふと、白い何かを見つけた早苗。これはひゅつとすると…もしかするかもしれない。早苗は四つん這いのままその何かへとにじり寄っていく。草むらを必死に両手でおしのけながら彼女はそつと息を押し殺した。

それは白くふさふさとした体毛で覆われていた。早苗自身の見立が正しければそれは間違いなく動物のしっぽであった。そつと呼吸を押し殺し…えいや！と彼女はそのしっぽへととびかかった。

「ガウっ!？」

「ハッハー！捕まえたわよー！」

「お姉ちゃん…それなあに？」

「何って…あれ？」

思わず首をかしげてしまう早苗。そんな早苗の眼前ではしっぽをつかまれたガーデイが必死に逃れようともがいていた。

—————

「ガウガウ！ガウ！」

「ごめんごめん…痛くして悪かったって」

こちらに向かって恨めしそうに吠えてくる子犬に向かってつい謝罪してしまう早苗。そんな早苗のひぎ元では件の少年がその子犬の背中を樂しそうに撫でていた。

身長65cm程度のその子犬は随分と派手な柄をしていた。胸元と頭頂部にはしっぽと同じく真っ白でふわふわとした体毛があり、その周囲には燃え上がるようなオレンジ色の毛がもっさりと生えている。

「むむう…この子首輪してないわね。」

「じゃあこの子も迷子なの？」

背中と足の縞模様を眺めながらつぶやく早苗。彼女はその子犬のおなかにそつと手をいれ抱きかかえ、首元を確かめた。確かにそのガーデイは首輪などしていなかった。

『フタバタウン』のすぐ近く『201番道路』から門【ゲートホール】を通じて転移してからまだ30分とたっていないのだ。当然彼は野生のポケモンである。そうとは知らずに早苗と少年はこの子犬を迷子犬として扱うのであった。

今の時代、田舎ならまだしも都会では野犬というものを見かけることはほとんどないのだからそれも無理はない。

「そうね首輪してないしなあ」

「首輪してないとどうなっちゃうの？」

「保健所いきかな。飼い主が見つからなかったら…」

「ガウ!？」

早苗の言葉にショックを受けたような顔をするガーディ。その言葉を聞いた少年もまたひどい話だと憤慨をする。

「まあこの子のことはおいておいてひとまず君の猫を…んー?」

「きみもミャーコを探すの手伝ってくれるの?」

「ガウ!」

「いやいやそんな…ほんとに?」

早苗の官給制服をひっぱるガーディ。どうやら俺に任せろと言っているようだ。彼はガウと短く吠えたと少年の衣服のにおいをかぎ始めた。20秒ほどじつくりとにおいをかぐと彼はどこかへと猛然と走っていった。

ガーディという生物は並行世界においては警察をはじめとした治安維持組織に欠かすことのできない存在である。嗅覚に優れ、主人に忠実なポケモンである。オーキド博士が編集を行ったポケモン図鑑にも「どんな相手にも勇敢に立ち向かう頼もしい性格」であるとの記述がある。

つまり彼ら種族にとってこのような探し物は…

「いやいやそんな…警察犬じゃないんだから無理よ」

「ガウ」

「ミャーコー!」

「いや早っ!嘘でしょう!？」

ガーディが小さな猫を口にくわえてこちらへと走ってくる。その

様子をただ茫然と眺める事しかできない早苗。そんな彼女の様子を
しり目に少年はその迷いネコを抱きしめて迎いいれる。

満面の笑みを浮かべて感謝の言葉を述べながらガーデイの体を撫
でてあげる少年、その少年の手つきにガーデイ自身もまた嬉しそうに
しっぽを振った。

「ガウガウ♪」

えへん

役に立ったぞほめてくれ

そういわんばかりにガーデイはしっぽを振りながら早苗への足元
へと寄っていく。彼はそつと自身の体を彼女のふくらはぎへと押し
付けながらしっぽをふりふりと左右にリズムカルに振る。

早苗はそつと彼の頭に手をかける。その毛並みはまるで太陽のよ
うに暖かく、陽だまりのように優しい香りがした。

星輝子とキヤタピー

346プロダクションにはアイドル達が集う様々な場所がある。中でも1Fの端のほうにあるこの休息所は人が少ない事から穴場の人気スポットなのであった。チラチラと光る自販機、木製のベンチとテーブルが並んだその場所に彼女たちはいた。時刻は12時過ぎだろうか。ちらりと横目で見ると中庭で職員達や何人かのアイドル達がい思い思いに日光を楽しんでいる様子が見てとれた。

木製テーブルの表面をなぜながら星輝子は忙しい様子でその来客を眺める。そもそもあまり接点がない知り合いである、どう対処したらよいものだろうか。そんな来客である彼女、前川みくは頭を下げてお願いをしていた。

「この子の飼育の方法教えてほしいにや」

「い、いきなりすぎないかな…」

両手をすり合わせてお願いをしてくる前川みく。そんな彼女に対して困ったような表情を浮かべているのは星輝子である。彼女は自動販売機で購入した麦茶へと口をつけながらみくを見る。どうやら彼女が懐から出したぼんぐり製のモンスターボールにはキヤタピーが入っているらしい。

正直意外である。日ごろから猫好きを公言していた彼女がどうして虫ポケモンを飼育するようになったのだろうか。いや、それよりも急に自分のところへきて飼育方法を教えてほしい等といわれても困ってしまう。

「な、なんで自分なんだ…ですか？」

「輝子ちゃんとは一歳違いだし…それに虫タイプって飼育してる子少ないし…」

「あ、ああ…確かにそうかも」

「こういう本を読んで勉強もしているんだけど難しいにや…」

パツといわれても虫タイプを飼育している346プロダクションのアイドルといわれても思いつくアイドルは少ない。というよりも、これはともすれば自分のアイドルそのものに対する友人の少なさに

由来するものなのかもしれないが。思わず自嘲するように暗い表情を浮かべてしまった輝子に対してみくは自身の鞆から一冊の本を取り出す。

「どうやらポケモンの飼育に関する専門書であるらしい。彼女から受け取った書物をパラパラとめくった輝子は疑問符を浮かべながらそのかわいらしい顔を小首にかしげてしまう。

「こ、これは厳密にはキャタピー向けじゃない…です」

「え？虫タイプ向けの解説本じゃないの？」

「虫タイプは三種類あるから…これは毒虫系統の専門書…です」

「ど、毒？」

「うん…虫タイプにも種類があつて…普通のと、毒虫群と甲殻群に分かれてるから」

そう言つてその解説書のとある一ページを指し示す輝子。虫タイプには幾つかの種類があり、簡素に行つてしまえば毒を持つか持たないか。硬い外皮の有無等で分類できるらしい。

スピアーやスコルピ・ペンドラーといった毒タイプを複合するポケモン。あるいは毒針やどくどくといった技や生態的特徴から毒を扱うポケモンのことである。他の虫ポケモンとは異なる分類の仕方をされており、実際に飼育する際は毒に対するの知識や毒状態になった際の対処法などの講習を受ける必要が生じる。

一方甲殻群はヘラクレスやカイロス・フォレストといった硬い外皮を持つポケモンである。虫ポケモンの中では一線を画す強靭さと堅牢さを持ち、バトルにおいて至上の強さを発揮する分類でもある。

ちなみに余談ではあるが、毒や麻痺といった状態異常を引き起こす可能性があるポケモンを街中で連れていく場合はそのトレーナーに對して毒直しといった対状態異常に対する薬品・物品等の所持が義務付けられている。輝子自身も各状態異常に対する万能型治療スプレー（なんでも直し）をバッグの中に入れてるらしい。

「た、確かにやたら難しい用語とかあつたにや」

「キヤタピーなら初心者向けだから…こういうのでいいと思う…ます」

自身のスマートフォンをみくへとかざす輝子。どうやら電子マーケットでおすすめの電子書籍を提示してくれたらしい。彼女がかざした画面には「初心者向けのおすすめポケモン30!」というタイトルが並んでいた。

キヤタピーは全国各地の森林地帯に住んでおり、警戒心も薄く初心者でも捕獲しやすい。また最終進化までの必要経験値も少ない事から短パン小僧をはじめとした子供たちに人気の高いポケモンでもある。

事実、この世界においてもその捕獲難易度の低さと育成の容易さからこぞって飼育された種族の一つでもあるのである。

「キヤタピーは成長が早いし捕まえやすいから子供に人気…」

「へー意外…でもないのかなあ?」

「バタフリーになると格好良くて綺麗…千葉県にあるバタフリーの巣は観光名所…」

「わっ!なにこれ綺麗にやー!」

スマホを眺めて感嘆の声をあげるみく。バタフリーは飛び立つときに独特の鱗粉を放ち、それが光に反射して実に美しい光景となるのである。それがバタフリー達による交尾の時期ともなれば数多くのバタフリー達が飛び立つ姿は圧巻である。

「みくさんは…虫タイプの特徴ってわかる?」

「えーと…街より森に多く住んでるとか?大量に居るとか…?」

「うん、繁殖性と成長性…らしいです」

虫タイプの最大の特徴は繁殖能力と成長性の速さにある。一匹いればその周囲には同種族の群れが存在する。その一定範囲をコロニー(巣)として生態系を構築していくのが虫タイプである。

また、他のポケモンが一段階進化するまで数年かかる所、虫タイプは半年足らずで進化することも少なくない。その異常なまでの成長

速度からバトルトレーナーを目指す人種にとっては最初の一匹として選ぶことも多い。

「そんなに成長速度が早いんだ…」

「うん、特にキャタピーが最終進化した姿は綺麗だから…子供とかブリーダーにも結構人気なんだ…飼育に関してだけ…私よりもネットにあるこのサイト見るといいかも」

そういつて再び自身のスマートフォンをかざす星輝子。そんな彼女のスマートフォンをテーブルから身を乗り出すようにしてのぞく。むむむと目を細めてみると、そこにはとあるサイトがあった。

そつとスマートフォン画面をフリックしてみると上から下まで随分と長い記載がこれでもかと並んでいるではないか。ネットには明るくないがこれは随分と手が込んでいるのではなからうか。

「K・S博士のポケモン図鑑…?なにこれ」

「いつの間にか存在している老舗のポケモン研究wiki…らしいです」

彼女自身も小首をかしげながら返答を行う。どうやら輝子自身もこのサイトの運営者（編集者）について詳細を知らないらしい。それはこのポケモン黎明時代にひつそりと建設されたwikiであった。

ポケモンの簡単な生体情報

技やタイプのご概念

進化の系列

ポケモンとの意思疎通に関する論述

ポケモンに関する簡素な特徴が並んでいる。それらは編集不可能なメインデータとして記述されており、各種リンクには一般人も記述可能なデータリストが存在している。そこでそれぞれの地方出身者が観測したポケモンの生体情報を打ち込むことで、データベースへと反映され、メイン情報へと書き加えられる。

つまり、現在どの地方にどのポケモンがいるのかが把握できるようになっているのである。これらはオリジナル世界におけるポケモン図鑑の概念に近い。

それらは元の世界においてはアカデミー等で習う程度のごく簡単な情報網であった。が、ポケモンという異種生命体が突如現れたこの世界の住民にとっては大きな希望となった。一時は彼らに対して各国軍隊が攻撃を仕掛ける可能性すらあったのだというのだから大変なものである。

とある大災害の結果、2世界間の時空の壁が一部崩壊しオリジナル世界のポケモン達が流出してしまったという非常事態。そんな災害に顔を青ざめた彼女達が苦心の結果完成させた物であった。異界の友人たちに送るせめてもの選別として女史が丹精込めて制作した情報コンテンツでもある。だが、まあ彼女の苦労話を語るのは後の機会としよう。

そんなプロトレーナーでもある彼女が苦心して作製した制作物を眺めるアイドル二人。中でもみくはふむふむと食い入るように熱心に画面を見つめていた。

「キャタピー…いもむしポケモン。足の先は吸盤となっており木登りをしてはつばを食べる。触覚からは匂いが出て鳥ポケモンを追い払おうと…あ、ピーちゃん！だめにゃ！」

突如みくの悲鳴があがる。その声の先へと視線を向けると…そこには件のキャタピーがいるではないか。モニョモニョと自身の身体をくねらせながら壁を上り、あつという間に天井付近へと上つてしまいうキャタピー。どうやらいつの間主人のモンスターボールから出てしまっていたようだ。

「うん…こうしてみるとやっぱりキャタピーも可愛いな」

天井の下で慌てふためくみくを眺めながらつぶやく輝子。輝子にとっての一番は親友をはじめとしたキノコ系ポケモンであるが…やはり虫や草ポケモンは可愛らしいものである。

彼女は天井の下まで行くと自身のポケットから何かを取り出す。彼女の手のひらにはサイコロ状の形をしたものがのっていた。ほんのりと漂う植物のフレーバーに、キャタピーはうれしそうな声をあげて反応を示した。

「虫タイプ用のおすすめポロックだぞ…あげる」

「ピー♪」

「わ、わっ…急に落ちちゃ危ないにや…」

天井からぼトンと落ちるキヤタピーを抱きかかえるみる。彼女の腕の中に綺麗に収まったキヤタピーは嬉しそうな笑みを浮かべてポロツクへと顔を寄せた。どうやらこのおやつの香りがお気に召したようだ。

輝子の手のひらに乗ったポロツクをクンクンと嗅いだキヤタピーはそのままモクモクとおやつを口へと収めていく。そのまま一生懸命にもくもくと食事を続ける様はまるでハムスターのようで実に愛らしい。

「こうしてみると虫タイプも可愛い…のにな…」

「輝子ちゃんの子も虫タイプなんだよね」

「うん…親友は草と虫の複合だから…日中はお昼寝が多い。今もそこの中庭で日向ぼっこしてる」

「うん、あの子もなんかかわいい…かも」

「草タイプは水と日光浴だけで生活もできるし虫タイプは植物を食べるのが多いから飼育で人気…になってもいいんだけどなあ」

「虫は不人気なの？」

「うん、飼育ランキングでも下のほう」

そういつつため息をつく輝子。輝子の周りには親友のことを可愛がってくれるアイドルも多いが、中には職員を始め普通の人々からは妙な偏見を受けることも少なくない。また、虫タイプというくくりの中にはかわいいアイドル系ポケモンが少ないのもあげられるだろう。

テレビや雑誌で呼ばれるのはピカチュウやイーブイといったビジュアル面で優れたアイドルポケモン達ばかりだ。悲しいことに親友であるparasがテレビ映えした事はない。ファンであるという少女に見せたところ悲鳴をあげるようにして逃げられたのは今でもちよっぴりトラウマである。

背後で楽しそうに上がるリア充達の声にため息をつく星輝子。そんな彼女に対してみくは彼女に伝えた。

「なら私たちで同好会でもつくったらどうかにや」

「え？」

「ほら、グループとかサークル？ってやつ。仲良しな子はみんな作ってるし」

「で、でもみくさんと私…あ、あんまり仲良く」

「ならこれから仲良くなればいいにや！はい、みくのコードあげるね」
「あつ…う、うん……にへへ」

みくのスマートフォンに表示されるQRコードを見て慌てて自身のスマートフォンにSNSアプリを立ち上げる輝子。どうやら彼女の数少ない友人欄に、また一つ増えたらしい。そのSNSを見て思わず顔をにやけさせてしまう星輝子。大切そうに、彼女はそつと端末の画面を手でなげた。

（親友を可愛いって言うてくれたの…三人目だな）

虫タイプとは不遇の存在である。元の世界のバトルにおいて種族値の関係から厚遇されることはなく、この世界においてはその外見から冷遇される存在である。しかし人と世界が変われば、或いは彼らのような存在も受け入れられていくのかもしれない。

堀裕子とポケモンハント

暑い日差しが照りつける。穏やかな春は通り過ぎ、初夏のように熱い日光下を歩きながら自身の身体から滴り落ちる汗をタオルで拭いて去る神谷奈緒。周囲にひろがる野山の美景などもはや眼中に入らない。足取り重く、綺麗に整備された山道を歩いていく。

ここは街中からほど近く、都会の喧騒から離れられる観光場所として有名な山である。ガイドブックにも載るような有名な場所であり、休日もなれば多くの登山客がこの山へと上りにくる。平日でもありメインルートから外れた別ルートを上っているせいだろうか。今奈緒たちの周囲にいる登山客の姿はまばらであり、ここ20分ほどは一人も見かけなかった。

ここに来るまで電車で50分、背後に詰めたリュックサックの重みに耐えるように彼女ははずしと足取り重く歩いていく。そんな彼女に対して前方数mほど先に歩いていた堀裕子は意気揚々と声を弾ませながら問いかけた。

「大丈夫ですかー奈緒ちゃん！」

「だ、大丈夫じゃない……」

「まだまだ行きますよ！ゆっくりしてたらあの子を見つけられないですもん♪」

「あっ！一人で行くな危ないだろ……っ！」

いかにも楽し気な様子で山頂へと歩んでいく裕子。そんな彼女とは対照的に苦し気に表情をゆがませながらもなんとかついていこうとする奈緒。裕子はポケモンをまだ捕まえたことがない。

手ぶらのままポケモンを捕獲しようとする彼女が心配なあまりついてきたのだが……少し早計だったのかもしれない。彼女はほんのちよつとだけ心中で後悔する。年齢も近く、スケジュールがあいているアイドル候補生など奈緒位しか近くにいなかったのかもしれないのだが。

そんな彼女たちの前方に、ほんのすこしだけ開けた空間が現れた。山中においてある登山客用の休憩所だろうか。奈緒はそっとほつと

息をつき、倒れこむようにしてその休憩所に備え付けられたベンチへと向かった。

「ひ、一休み…」

彼女はそつとベンチに座り込む。どうやら随分と年季の入った休憩所らしい。壁には所々ペンキの禿げた塗装部分があるし、水道の蛇口部分は赤茶色にさび付いていた。歩道は整備されている事から登山客の正規ルートであることは確からしいが。

視線の先で周囲のしげみをごそごとあさっている裕子に視線を落しながら奈緒はそつと水筒を取り出して口に含む。ごくごくと喉を鳴らしながら口に含む水のなんとうまいことか。彼女は安心したようにそつとため息をついた。

「ポケモンを見つけるっていうけど…手がかりがこれだけじゃな…」

スマートフォンを眺める奈緒。画面に映っているのは彼女が作製したというところあるポケモンのスケッチであった。堀裕子が地方のローカルテレビのロケでこの付近を訪れた際に見かけたというポケモンらしい。裕子と奈緒はそんな件のポケモンを捕獲しようとする人里離れた山道にまできたのだが…改めてその姿を見ると…どうにも珍妙な姿をしていた。

狐のようにすすけた茶色。人型をしており手や足は三本指、鋭いかぎ爪がついている。太い尻尾とピンと突き出た耳が特徴的な…な、なんなのだろうかこれは。

裕子が自身のスマートフォンで慌てて撮影したという写真はピントがぶれぶれでとても見れたものではなく、また彼女自身が描いたというイラストはどうにも奇妙で的を射ない。

いくらポケモン黎明期、数週間に一度のペースで新種が発見されるような時代とはいえ本当にこんなポケモンがいるのだろうか。いや、いたとして本当にこんな姿をしたポケモンを捕まえたいのだろうか。なまじ人型の姿をしている分、少し不気味さすら感じてしまう。

「なあー裕子ー本当にこんなやつ見たのか？」

「見ましたよー。エスパーユッコの琴線にビビッと来たんです！サイキック琴線です」

「サイキックってなんだよ」

「このあたりにいるのは間違いないです！…たぶん」
「いるのかいないのかどっちなんだ…」

どうやら裕子は相当例のポケモンを気に入っているらしい。wikiやらサイトやらを眺めてもまったく同例の観測情報がない以上は本当に新種の可能性もある。彼女曰くサイキック一目ぼれ、らしいが…タイプも何もわからないポケモンを捕まえたいだなんてもの好きにもほどがある。

水筒を傾けながら太陽を恨めしそうに見上げる奈緒。そんな中、突如響く悲鳴に対してぎよつとした彼女は思わず水筒を落としてしまう。どうやら裕子の悲鳴らしい。裕子は茂みから逃げるように奈緒のもとへと走り寄ってきた。

「裕子大丈夫か!？」

「ポ、ポポポケ…ッ!？」

「分かったから私の傍にいろ！よし…頼んだぞブイ助!」

自身の腰に取り付けたモンスターボールを手に取り、声高に叫ぶ奈緒。そんな彼女の呼び声に応じて勇ましく鳴き声をあげるイーブイ。イーブイは牙を剥きだして威嚇をしながら油断なく目の敵をにらみつけていた。

(やっばこれ…テンションあがるなー!)

ピリピリと神経にめぐる感覚に思わず背筋を震わせる奈緒。内心では満更でもない様子だ。RPGゲームでいう所の「魔獣使い」或いは「ビーストテイマー」辺りの職業を思い出す。このようにして配下の魔物に指示を出して戦っていくというのは一人のゲーマーとしては気分が高揚してしまうのも無理はない。

まあ眼下のイーブイは魔獣と呼ぶにはあまりに愛らしすぎたが。いけないいけない、集中しろ奈緒。彼女は自身の頬をはたいて気合を入れなおす。

ポケモンバトルを行うのはポケモン達自身である。とはいえ、

フィールド内にいる以上、トレーナーもまた危険を負うのは当然の節理である。ポケモンが繰り出す攻撃の余波だけでケガをしたなんて例は挙げればきりが無い。

「ブイ助ー・鳴き声だー!」

「ブイー!」

「っ!?!」

突如鳴り響く金切り声。反射的に思わず固まってしまっただけを奈緒は両手で耳を抑えながら観察をする。鳴き声はその場にいる全ての存在の攻撃力を下げるデバフ攻撃である。耳を抑える事を忘れてふらふらとめまいを起こしている堀裕子は奈緒に対してなんとか告げる。

「な、奈緒ちゃん…アプリを…」

「っ!?!」

裕子の助言に対してうなずく奈緒。彼女は急いで自身のリュックからスマートフォンを取り出すとインストール済みのアプリケーションを起動させる。そうして奈緒はスマートフォンのカメラを目前の紫色のポケモンに向けてシャッターを切った。

「アナライズッ!!」

カシャツ

バトルフィールドにそぐわぬシャッター音が響き渡る。どうやら無事に動作できたようだ。カメラによって撮影された映像データはネットワークへと接続され、クラウド上に保存された凶鑑情報へとアクセスされる。

ちなみにアナライズと叫ぶ必要はどこにもない。曰くゲームのようでテンションがあがるからとは彼女の言葉である。数秒の後、AIによって判断された情報が、目前のポケモンの種族をはじき出した。

『ドクケイル　どくがポケモン。危険を感じると猛毒の鱗粉をまきちらす。触覚のリーダーでエサを探す』

「さ、最終進化!?!いや、そうじゃなくなっただけタイプ相性…でもなくなっただけ使技は…!?!あーもう体当たり!!」

「ブイブイー！」

「~~~~シィッ！」

全力で疾走し身体をドクケイルへと自身の身体をぶつけるイーブイ。それと同じようにドクケイルもまたかがみ合わせのよう同じ行動を取る。二体のポケモンによる体当たりによって鈍い打撃音がフィールドへと響き渡る。

当たり所が悪かったのだろうか、地面に転げるように堕ちてよろけてしまうイーブイ。そんなイーブイに対してドクケイルは容赦なく牙を？く。

「なっ!？」

「こ、これってかぜおこ…きやあ！」

動揺する奈緒に悲鳴をあげる裕子。ドクケイルが自身の羽をこれでもかと羽ばたかせることによつて周囲に巻き起こる猛風。それはまぎれもなく飛行タイプの必殺技『かぜおこし』であった。石が、砂塵のつぶてが、周囲に存在する全てのものへと降り注ぐ。体重の軽いイーブイはあつというまに吹き飛ばされて背後にあつた大樹へと打ち付けられてしまった。

猛風によつて自身の身体すらも浮かび上がってしまったしもういなる突風に奈緒はぎよつとしてしまう。飛びついて浮かび上がらないように、自身の身体を抱きかかえてくれる裕子に感謝しながら奈緒もまた力強く彼女の身体を抱きしめた。

「こうなつたら奥の手を…」

「奥の手…なにかあるのか！」

「なんとかします！私のサイキックパワーで!!」

「なんとかなるはずないだろ!？」

「むむむ~~~~ムンツ！き、サイキック…なんとかなれー!!」

「ふざけてないで…なんとかなつた!?!？」

スプーンを片手に大声でサイキックパワーを念じる裕子に対して大声で突っ込みをいれる。しかし、なんとということだろうか。彼女がスプーンをドクケイルに向けると突如ドクケイルが苦しむように身

をよじりだしたのである。

裕子自身もまさか効くとは思わっていなかったのだろう。というより本人が一番驚いていた。この機を逃してはならない。唾然としていた奈緒はハツとしたように自身の相棒に向けて大声で指示を下した。

「ブイ助！じたばた!!!」

「ギャウ!？」

奈緒の声に即座に反応するイーブイ。吹き荒れる猛風の中、突っ走る一匹の猛獣。彼は勢いよく飛び上がりドクケイルの身体へとしがみつくと、荒々しく反撃を行った。右足を、左足を相手の頭部に打ち付ける。まるで鉄板がひしゃげてしまうような鈍い音が響き渡る。

そうして残った両足でドクケイルの腹部をこれでもかと乱打する。不規則に、縦横無尽に繰り広げられる猛攻に思わずうめき声をあげてしまう虫タイプ。

じたばた

自身の残りHPが少ない時ほど威力が高くなる必殺技である。バトルの経験からイーブイがじたばたを覚えているとの事を知った奈緒は積極的に取り入れるようにしたのである。彼女たちが持つ文字通り必殺の一撃である。地面へと倒れこむようにして墮ちていったドクケイルに対して「電光石火」を放ち、とどめを指すことも忘れない。

ドクケイルが消えていく。どうやら瀕死状態となったことで縮小化がはじまったようだ。まるでテレビゲームのエネミーのように光の粒子とともに姿を消していくドクケイル。ぽわぽわと美しい光をまき散らしながらそっと消えていくのを彼女たちは静かに見守っていた。

(こういう所までゲームみたいなんだよな…なんか複雑な気分だ)

先ほどまで戦っていた相手がまるで煙のように消えていくという

不可思議現象。奈緒としてはゲームの中なのか現実の世界が入り混じったような気分させられる。おかげで罪悪感も少なくて助かるが。これまで延々とレベリングの為に狩られ続けたスライムの気分はこのようなものだったのかもしれない。

とはいえ、これは現実である。一歩間違えば大けがをしてやられたのはこちらかもしれないのだ。あの虫毒ポケモンもきつと今頃縮小化してどこかで羽を休めているだけなのだ。妙な感傷などは捨ててしまったほうがお互いのためだろう。

「ご、ごめんなさい…私のせいで」

「いいって…ブイ助にもいい経験になっただろうし…」

「でもブイ助君もこんな傷だらけで…き、傷薬を…」

「いや、木の実があるからそれでいいよ。それよりも、一度街まで戻らないか？」

「…そうですよね。無理したらだめですよね」

「こんどはもつと準備して…それとバトルに強い人も呼ぼう」

「は、はい！えーと帰り道は…あつちからの方が近い…いや、やっぱりこつちの方かな…」

『ギョングユウ…?』

「ほーらブイ助たっぷりあるから沢山食べて…うん？」

ベンチに腰をおろしてブイ助を膝へと抱きかかえる奈緒。そうして彼女はリュックから体力回復の木の実を取り出しながらそつとイーブイへと差し出す。もくもくムシャムシャとおいしそうに食べるイーブイに頬をゆるめながらふと気配を感じてしまう奈緒。あれ、と違和感を覚えた奈緒は裕子へと視線を向ける。

小首をかしげながら地図を見つめる裕子。ムムムと困り顔で地図を眺める彼女の背後では…何かがあった。まるで浮遊霊のように裕子の背後でゆらゆらと浮かぶソレ。彼女がうがーと叫びながら頭をぼりぼりとかくととその動作をまねるように背後のなにかもポリポリと頭をかきだした。

「あれ？うしろ…」

「うん、うしろがどうかしましたか？」

「い、今たしかに…あれー?」

ふつと裕子が背後を振り返る、するとその瞬間にそれまで居た何かがすつとその姿を消した。まぶたをぐしぐしとこすつて見つめる奈緒。だがもう、あの妙な存在はいない。何かの見間違い…なのだろうか。

「じゃあ! さっそく街まで帰りましょー!」

「……」

「もうノリ悪いですねー。元気に帰るまでが遠足です! 奈緒ちゃんもブイ助君もほら! えいえいオー!」

「…オー!」

「ブイ!」

『ギュンギョウ♪』

「お、おい今なにか声が…っておい裕子!」

ずんずんと進んでいく裕子とブイ助の後を追う奈緒。そんな彼女の背後では件のポケモンが姿を透明化しつつ、ゆらゆらふんわりと宙をただよいながら後をつけていく。

ケーシー

幼体でありながら非常に強力なサイキック能力を操るエスパーポケモン。その余りに強力な超能力の反動から、一日に18時間近い睡眠を取って脳と身体を休ませなければ反動に耐えられないとまで言われるらしい。眠ったままでも自衛のために常に読心術とテレポートを多用しており、悪しき心を持つ存在は相まみえることすら不可能と言われている。野生で出会うことは奇跡とまで言われるほどの実に稀少なポケモンなのである。

強い精神力を宿したトレーナーでなければ彼らを扱うことは愚か、そばにいる事すら出来ないとまで言われる最強のエスパータイプでもある。そんな強力な存在である彼がどうして彼女たちのそばにいるのか。あるいは彼ははこのトレーナーが自身にふさわしいのかを見極めている最中…なのかもしれない。

(ギョングョング)

「いった!? 今小石かなにか頭に投げませんでしたか!?!」

「そんなことしてな…っとうわあ! 上から毛虫が!?!」

「ぎゃああああ! こっち来ないでください!?!?!」

いいや、ただ単に人間をからかって遊んでいるだけ…なのかも。

最終話（前）

照りつける太陽の下、佐々木千枝はそつとベンチに腰をおろした。楽し気に遊ぶ子供たちとポケモンの声が公園に木霊する。そのまま見上げるように自身の眼前にそびえたつ新東京ドームを眺める。この日本においては有数の全天候型多目的スタジアムである。敷地面積4600㎡にも及ぶ巨大なスタジアムである。

昨日千枝はあそこでライブを行ったのだ。全てのアイドル達が憧れる夢の舞台、たった一夜限りの夢のような時間。昨夜の感動に、千枝自身思わず震えてしまう。ここまで来るのに長かった。自分は本当にトップアイドルとしてライブを行ったのだ、と漸くその実感が沸いてくる。

「終わったんだ…昨日日本にあそこで…」

自分は本当にアイドルになれたのだ

彼女は言いようもない感動に打ち震える。

「えへへ…やったよみんな…プロデューサー…」

そつと自身の肩にかけたカバンからスマートフォンを取り出す。その端末の画面には大切なお友達と自身が敬愛するプロデューサーの写真が移っている。共に喜び合った共と、熱く抱きしめられたプロデューサーの事を思い出して彼女は思わず顔を赤くし…

「こんにちは」

「はわわー…、こんにちは!？」

声を。かけられる。慌てて携帯をしまい、声の主に対して反応を返す千枝。動揺したのも束の間。彼女はそつと息をのんだ。そこにいたのは想像以上の美女だったからだ。シルクのように流れる金色の長髪に、透き通るような美しい瞳をした彼女。黒いドレスをまとうており、それがまたなんとも彼女の色気をかもしだしていた。

外国人…なのだろうか。彼女の相貌は実に日本人離れしている。彼女は小さく微笑みながらそつと彼女のそばへと近づいて、ベンチへと腰を下ろした。照り返すような夏の日差しが、彼女達を照らし出す。木漏れ日の中佇むその女性はとても美しかった。

「顔が紅いけど大丈夫かしら？」

「だ、大丈夫です！ちよつと熱いからです！」

「そう、確かにこっちの夏は蒸し暑いわね…それに都会の空気って物にはやっぱり慣れそうもないわ」

そういつて胸元を仰ぐシロナ。なんだかいけないものを見ているようだ。顔を赤くして思わず彼女から目をそむけてしまう千枝。おかしい、先程からどうにも変だ。先ほどから妙な感覚を覚えてしまう千枝。千枝はそつと隣に腰掛ける美女に問いかけた。

「お姉さん…日本語お上手なんですわね」

「ええ日本語をとつても勉強したから…」

「へー外国人さんなのに…凄いですね！」

「まさかこの世界のマイナー言語だと知った時は愕然としたわ…」

「え？」

「ふふっなんでもないわ、こっちの話よ」

そういつてニコニコと微笑む彼女。どうにも会話に違和感を覚えてしまう。けれどまあ外国人特有の会話や対人の距離感という奴だろうか。千枝は疑問に思いながらも

それからも会話が続く。いつの間にやら、彼女自身も気が付かぬまま随分と話し込んでしまった。シロナは話しやすく、温かみのある人物であった。学校のこと、アイドルのこと、友人のこと。ついこの間あつた些細な出来事を話すと彼女はなんとも嬉しそうに相槌をうちながら聞いてくれた。それが千枝にとってなんとも嬉しかったのだ。

だが、おかしい。どうにも…居心地が良すぎるのだ。彼女との会話に心を弾ませてしまう自分自身にそつと驚く千枝。初対面のはずなのに、まるで以前どこかで会ったことでもあるかのようなこの感覚。千枝は思い切つて彼女に問いかけてみた。

「あの…お姉さんどこかで会ったことありますか？」

「んーさあどうだったかしらね」

にこりと微笑む彼女。不思議な事に、彼女とは初めてあつた気がしない。人見知りしがちな彼女にとっては珍しく、家族にも似た安心感さえ抱いていた。初対面の相手にここまでの感情を抱くというのは

大変に珍しい出来ごとだ。

ふと、気が付く。ここまで来て彼女の名前すら知らないことに。自己紹介すらしていなかったことに気が付いた千枝は慌てたように答えた。

「あ、えーと私…」

「佐々木千枝…ちゃんよね、昨日ライブ会場で見たわ」

「見てくれたんですか!」

「ええとつても輝いてて…今でも思い出せるくらい眩しかった」

そういつて目を細めるシロナ。噓せ返るようなアスファルトの熱気の先に、彼女たちが昨夜いた新東京ドームがそびえたっている。まるで遠いどこかへと想いを馳せるような彼女の表情に千枝はつい小首を傾げてしまう。

「あの…お姉さんのお名前は…」

「シロナよ」

「シロ…ナ?」

口に出して、つぶやいてみる。なぜだろう。耳に届いたその名は実に懐かしい響きを伴っていた。まるでかけていた何かが戻るように、千枝の心が暖かなモノで満たされていく。

「ねえ、千枝…一つ聞いてもいいかしら」

「な、なんですか…?」

「千枝は毎日が楽しいかしら…アイドルをしていて良かったってそう思える?」

「…はい、とつても!」

「そう…ならよかったわ」

そういつて彼女は満足そうに顔をほころばせた。それは会話して以来初めて見る顔だった。心の底から良かったのだと、そう想えるような満面の笑み。まるで母のように慈愛に満ちており、旅立ちを祝う友のように屈託のない表情であった。

思わず、その美しさに見とれてしまう。同性である千枝自身も見惚れてしまうような、素敵な顔であった。そつと風に揺れる金色の髪が彼女の心をくすぐっていく。その心地に酔いしれるような穏やかな

瞬間であった。そつとシロナは手を差し出した。彼女へと差し出す贈り物、その掌の上には丸みを帯びたとある物が乗っており…

「はい、あの時に忘れていったものよ」

「え？こ、これって…」

「フレンドボール…こつちの世界だと素材がなくてまだ造れないはずだから…世界に一つの一品ものね」

シロナから手渡されるボール。そのボールは緑色に縁どられ各種に鮮やかな装飾が施されていた。所々いびつな形をしており、これを造った人間はよほど技術的に未熟だったのだろう。けれどそれは暖かった。なぜだかひどく懐かしい香りさえした。

そつと手で握りしめてみる。まるでガラス細工に触れるような慎重さだ。おずおずとしたその手つきの先からは木々独特の穏やかな温かみが存在した。その存在感に、千枝はそつと息を呑んだ。

「それじゃ名残惜しいけどそろそろ帰るわね」

「あ、あの…もうちよつとお話を…」

「やめておく、あんまり長居して神様を怒らせても仕方ないしね」

「あの…っ！」

ここで彼女と分けられるともう会えないような。そんな予感がした。思わずベンチから立ち上がって彼女を追いかける千枝。そんな彼女に対してキョトンとした顔で見つめ返してしまふシロナ。

どうしよう、何を言うべきだろうか。ほんの少しの間放心してしまふ。千枝はぎゅつと自身の胸元を掴みながら問いかけた。まるで何かに怯えるような小さな…それでいてほんの少しだけ芯の強さを感じさせる声色で、問いかけた。

「また…貴方と会えますか？」

そう言われた彼女は驚いたような表情をしてしまふ。目を見開いて、その言葉に動揺してしまふ。けれどそれもほんの束の間の出来事であった。今にも泣き出しそうな千枝に対してそつと微笑みながら、彼女は優し気に言葉を返した。

「ええ、またきつと会いましょう…約束よ」

最終話 (後)

それは随分と無機質な空間であった。某所に建設された小さなマンション。その305号室と記載されたその空間にはベッドと簡素な机しか置いてなかった。とても人が住んでいるとは思えない無機質で空虚な空間。そんな空間の中に彼女はいた。

こちらの世界で購入したタッチパネル式の電子端末(スマートフォンのようなものらしい)から電子音が鳴り響く。どうやら共に来た仲間からの連絡らしい。シロナはその画面を確認するとそつと溜息をつきながら電話に出た。

『もしもし、シロナさんですか?』

『ダイゴ君…また悪い知らせかしら』

『いえいえまさか、朗報ですよ。例の…最後の穴は完全にふさぎ終わりました』

『…っ！そう、サイキッカー達がついに…』

『これでもう僕たちの世界からポケモンや人が流出していくことはありません』

『ああ良かった…本当に良かったわ…』

電話の向こうから響く自身の後輩、ダイゴからの言葉に耳を傾けるシロナ。どうやら彼らの方もうまく行ったらしい。彼の言葉にシロナ自身も言葉を弾ませながら返答をする。

椅子にもたれ掛かって自動販売機から購入した紅茶の缶を傾げる。だめだ、どうにもこの世界の飲食物はシロナ達の口には合わない。人工甘味料やら着色料やらは人工物臭く、全てがオーガニック製品で製造された故郷の味にはとても合わない。

「さつき同行したエリートトレーナーの一人から連絡もあったわ。数時間前にも一人シンオウ地方の男性を確保したから…うん、あと数人探せば仕事は終了ね」

『そうですか…長かったですね…』

「ええ本当に…」

ポケナビに表示されたリストをなぞりながら答える。そのリスト

には：人物の顔と名前、職業や行方不明になった状況が事細かに記載されていた。彼女たちの世界でも神隠しと言って話題になった行方不明者リストである。ずらりと並んだ彼ら彼女らを救うために一体どれほどの時間を費やしてきた事だろうか。

ここまで来るのに本当に長かった。想えばシロナにとっては随分と不思議な日々であった。想えばあの日、カンナギタウンに神隠しとして迷い込んだ佐々木千枝を救出した事から何かが変わったのだろう。彼女が私達の世界に迷い込んだ時から不思議な縁が結ばれたに違いない。

時の回廊から彼女を見送った日から度々千枝の事は思い出していた。元気に暮らしているのだろうか、心配には思ったものなにせ文字通り住む世界が違うのだ。もう死ぬまで会うこともないだろうとは覚悟していたが：まさか数年後にこうして彼女のいる場所へと自分も行くことになるとは夢にも思わなかった。

始まりにあつたのは混沌のうねり。星も、宇宙すらもない永遠の闇の中でそれは産まれた。はるか昔、混沌より生まれ出でたかの存在は自身をアルセウスと定義した。

アルセウスは願う

光あれ、と

光の中から、その創造神は二体の半身を産み落した。余りにも巨大で、膨大なエネルギーの塊。そのうちの一体は時を支配するようになり、もう一体は空間を司るようになった。

時の神 デイアルガ

空間の神 パルキア

更にアルセウスは願う

心あれ、と

そうして三体の心が産まれた。その心はそれぞれ感情を、意思を、知識を司るようになった。そうして幾つもの世界が創造された。我らが母アルセウスはその中に惑星を造り、更にその中に生命を産み落した。産み落された生命にはたくましく育つようにと「ある遺伝子」

を組み込まれた。そうしてポケモン（彼ら）が産まれた。

そうして母アルセウスはそれを見終えると再び次元の壁を踏み越えて別の次元へと旅立った。世界から世界への移動、並行世界への干渉である。とある世界では世に秩序と安寧を示し、とある世界では進化した超文明に滅亡をもたらした。そしてまた別の世界では：まだ四足でしか歩けなかった猿という種族にまた別の遺伝子をもたらし進化を促したという。そうして母はあらゆる次元で「神」となり、あらゆる伝承と逸話で語られるようになった：らしい。

真相は誰にも分からない、けれど確かなことはある。それは私たち知性体、否全ての生命の陰には創造神アルセウスの手が及んでいるという事である。

本来世界というものは壁によって隔たれている。とても分厚く、目に見えぬ障壁。シロナ達が住む世界、シンデレラ達が住む世界。それらはとても近く、決して交わらない筈だった。

それがほんの少しの行き違いによってほんの少しだけの穴があいた。そうしてその穴に、佐々木千枝が迷い込んだ。あの日、幼かった千枝をシロナ自身が確保できた事はきつと幸運だったのだろう。千枝を保護して一年間シロナは寝食を共にしてきたのだ。千枝自身は世界を渡る際にその記憶を消されてしまったが…

そうしてその後、あの災害が起こった。

後に起こった事件、犯罪者集団首領「アカギ」の手によるこの事件は、後に大災害として語られる。時の神と時空の神を呼び出してこの世界を破滅させ、新たな世界を創造しようとした愚かな男。彼の手によって安寧を脅かされた二柱は怒り、文字通り神の手による天罰が彼らへと下ったのだ。

神と神による激突。アカギと2柱によって引き起こされた時空震が空間にねじれを起こし：時空と次元の狭間に12個の綻びを生んだ。その綻びは大きな点となり、やがてはそれが巨大な穴となった。

人も、物も：そして多くのポケモンも飲み込む大きな穴へと。そうして私たちの世界とこの世界がつながった。不安定ながら、繋がりを保持ってしまった。シロナたちが気が付いた時には既に数え切れぬほ

どのポケモンたちが流出してしまっていたのだ。

『今でもぞつとしますよ。次元の壁の損傷に気が付くのがあと少し遅ければ…』

「ロケット団の元秘密基地：サファリパーク：シンジ胡：そしてシロガネ山。様々な地方から多様な穴が広がったものね：そのせいがこの世界でもやけに多種多様なポケモンが移住しちゃったし」

『ええですが：穴は完全に塞ぎました。もう被害が出る事はありません』

「そう：ね。今度こそ本当にお別れかしら」

『：良かったんですか？』

「え？」

『ポケモン達を回収してこなくて：もう完全に根付いちやいましたけど』

「仕方ないでしょう：何十万単位のポケモンの回収と関わった人間の記憶改竄だなんて：とても現実的じゃないわ」

『……』

「後のことはこっちの世界の住人に任せましょうよ」

電話の向こう側で沈黙を続けるダイゴ。どうやら彼は私たちの判断に満足がいていないようだ。無理もない、この世界の歴史を知ったときはシロナ自身も絶句したものだ。およそこの2000年間は同胞たちによる戦争ばかりしているというのだから恐ろしい。

シロナたちが住む場所は平穏な場所である。少なくとも人を明確に傷つける武器や古代兵器の類は遙か昔の盟約より破棄されて久しい。元より創造神アルセウスの庇護のもと言葉も文化も宗教も統一して既に数千年と経っているのだ。国という物を捨て地方と呼び名を変え、私たちは過激な技術進歩ではなく神の庇護のものと安寧を選んだのである。

そんな人間達からすれば文化や宗教の違いだけで人を傷つけあえるこの世界が酷く歪で醜いものに思えてしまうのだ。ましてや肌の色の違いだけで人を差別するなど狂気の沙汰である。

この世界では当初：ポケモンへの兵器の使用や彼らの軍事利用が

目前まで行われそうになったのだ。あと一步、シロナたちが来るのが遅ければポケモンと人間とを巻き込んだ世界戦争だつて起きかねなかったかもしれない。

世界各国の首脳への極秘会談、各メディアへの裏からの干渉、犯罪組織へのけん制と撲滅活動。それらと並行して行ってきたのが漂流者の保護、そしてポケモンと人間との調和活動である。一步間違えれば大惨事につながるようなこれだけの綱渡りを行ってきたのだ。各地方の四天王やチャンピオンクラスの協力がなければと思うと…今でもゾツとするような話だ。

「ポケモンの戦争利用、虐待、歪な進歩。どれも気にしてもしようがないわ。そうならないように陰で支えてきたんじゃない」

『……』

「もう少し人を信じてみなさい。人もポケモンも、いつまでも守られなきゃならない程弱い存在ではないわ」

『…シロナさんには叶わないな』

「ふふつだつて貴方より先輩なもの」

電話越しに聞こえる彼の溜息。そんな溜息にシロナはクスクスと微笑みながら答えた。どうやら随分と時間がたっていたらしい。いつのまにか手元にあつた缶コーヒーから湯気は消えていた。

そつと机に立てかけた写真たてを眺める。それは元の場所から持ってきた唯一のものである。写真の中には笑顔でシロナと共に写真に写っている千枝の姿があり…

『それじゃ…また漂流者を探しに行きますね』

「私もネットサイトの更新だけしてから行くわ」

『ああ例のサイトの…K・Sってのは安直だったんじゃないですかね』

「…私は気に入っているからいいの！」

そういつて電話を切ったシロナ。ダイゴからの言葉が恥ずかしかったのか少し頬が紅くなっている。まあアルファベットのの方はともかく博士というのは少し気恥ずかしいものだ。

K・S博士

意味はカンナギタウンのシロナ博士、である。考古学者としてタマ

ムシ大学を始めとした数々の研究機関で講義も行っている彼女ではあるものの、やはり先生、と博士、では違うものだ。彼女らプロトリーナーにとって博士とは天上の存在であり憧れを抱く存在なのだ。

異世界で一度くらい名乗って見たかったという子供のような願望であつたのだ。まあ事実この世界にとつてはポケモンの概念を定義した超重要人物となつているのだから、ある意味では彼女も本望なのかもしれない。

「ポケットに入るからポケットモンスター…か」

こうしてみると何とも感慨深いものだ。ポケットには夢が詰まっているというが…それと同じくらい大切なものが詰まっているに違いない。きつとこれを名付けた人はそんな大切な何かを、未来を担う子供たちに抱いてほしくてそう名付けたのかもしれない。

勢いよく背伸びをするシロナ。さあこの世界に留まるのもあと僅かだ。そうして立ち上がった彼女の背中には未来への希望が伴っている。そんな彼女のポケットには一つのフレンドボールが入っていた。かつて大切な友人と再会を誓い合ったその友情の欠片。そのフレンドボールには幼いころに千枝が描いたサインと刻印が入っていた。